



第2卸商業団地造成工事に伴う
袋尻遺跡群発掘調査報告書

1998年3月

松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団



袋房1号横穴墓 出土人骨



袋尻3号横穴墓 1号人骨



袋尻3号横穴墓 赤色顔料付着須恵器



袋尻4号墳 土器棺 I



袋尻4号墳 土器棺 II

例　　言

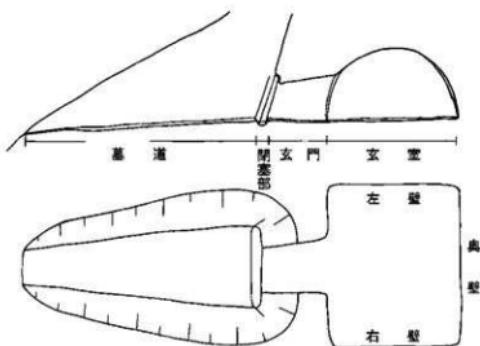
- 1、 本書は平成 7 年度から 8 年度にかけて財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した第二卸商業団地造成工事に伴う袋尻遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2、 本発掘調査は松江市開発推進部地域開発課から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
- 3、 調査組織は下記のとおりである。
依頼者　松江市開発推進部地域開発課
上体者　松江市教育委員会
事務局
(平成 7 年度)　諫訪秀富(教育長)　伊藤博之(生涯学習部長)　中林 俊(文化課長・平成 7 年 6 月まで)　柳原知朗(文化課長・平成 7 年 7 月から)　岡崎雄二郎(文化係長)
(平成 8 年度)　諫訪秀富(教育長・平成 8 年 4 月まで)　原 敏(教育長・平成 8 年 5 月から)　石田 博(教育次長)　松本修司(生涯学習課長)　岡崎雄二郎(文化財室長)　中尾秀信(文化財係長)
(平成 9 年度)　原 敏(教育長)　田中寿美夫(教育次長)　谷 正次(生涯学習課長)　岡崎 雄二郎(文化財室長)　中尾秀信(文化財係長)　飯塚康行(主事)

実施者　　財団法人　松江市教育文化振興事業団　埋蔵文化財課
大塚雄史(理事長)　佐藤千代光(事務局長・平成 8 年 3 月まで)
板垣信治(事務局長・平成 8 年 4 月から)　瀬古涼子(調査係長)
(平成 7 年度)【現地調査】
金山正樹(調査担当者)　曾田辰雄(調査員)
(平成 8 年度)【現地調査】
金山正樹(調査担当者)　落合昭久(調査員)　石川 崇(調査員)
曾田辰雄(調査員)　門脇千穂(調査補助員)　宮本亜希子(調査補助員)
北島和子(調査補助員)
(平成 9 年度)【報告書作成】
曾田辰雄(作成担当者)　落合昭久(作成者)　石川 崇(作成者)
宮本亜希子(作成補助員)　花田陽子(遺物整理員)　大塚敬子(遺物整理員)

- 4、 調査の実施については次の方々の指導と協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略、順不同)
渡部貞幸(松江市文化財審議委員考古学担当)、西尾克己(島根県教育庁文化財課文化財係長)、
広江耕史(島根県教育委員会文化課 文化財保護主事)、岩橋孝典(同上事)、村上 勇(広島県立美術館主任学芸員)、松井 章(奈良文化財研究所)、中村唯史、大谷晃二(島根県立八雲立つ風土記の丘資料館主任)
- 5、 井上貴央氏(鳥取大学医学部教授)、影岡優子氏(鳥取大学医学部第2解剖研究室助手)には

横穴墓出土の人骨の取りあげ及び測定をお願いして、貴重な測定結果と考察をいただき、付編として掲載した。

6. 本書の作成については以下の者が携わった。
(実測) 金山、江川幸子、落合、石川、宮本、花田、曾田
(浮写) 金山、落合、石川、昌子寛光、古藤博昭、宮本、門脇、藤崎和子、青山悦朗、花田、曾田
(拓本) 宮本、門脇、荻野哲二
7. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、牛嶋茂、楠本真紀子両氏の指導を得て、石川、曾田が行った。
8. 出土遺物は松江市教育委員会生涯学習課文化財室で保管している。
9. 本書の編集は金山、落合、石川と協議のうえ曾田が行った。
10. 横穴墓の部分名称は以下の図に沿って呼称した。



目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	(曾田)	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	(曾田)	3
第Ⅲ章 遺跡の概要	(曾田)	5
1. 袋尻1号墳	(金山、曾田)	6
2. 袋尻2号墳	(金山、曾田)	10
3. 袋尻3号墳	(金山、曾田)	16
4. 袋尻4号墳	(落合)	19
5. 袋尻5号墳	(金山、曾田)	27
6. 袋尻6号墳	(金山、曾田)	29
7. 袋尻7号墳	(曾田)	34
8. 袋尻8号墳	(石川)	39
9. 袋尻A遺跡	(曾田)	47
10. 袋尻B遺跡	(金山、曾田)	54
11. 袋尻C遺跡	(曾田)	67
12. 袋尻D遺跡	(金山、曾田)	69
13. 袋尻E遺跡	(金山、曾田)	78
14. 袋尻F遺跡	(落合)	83
15. 袋尻G遺跡	(金山、曾田)	88
16. 袋尻H遺跡	(金山、曾田)	90
17. 袋尻I遺跡	(曾田)	98
18. 袋尻古墓群	(石川)	102
19. 袋尻横穴墓群		116
① 1号横穴墓	(曾田)	116
② 2号横穴墓	(落合)	128
③ 3号横穴墓	(落合)	140
④ 考察	(曾田)	149
第Ⅳ章 小結	(曾田)	150

付編　袋尻横穴墓群から検出された人骨について 163

鳥取大学医学部解剖学第二講座 影岡優子・井上貴央

挿図目次

第1図	鳥取県地図	1
第2図	袋尻遺跡群位置図	1
第3図	袋尻遺跡群と周辺の遺跡	3
第4図	遺跡配置図	5
第5図	袋尻1号墳調査前地形測量図	6
第6図	袋尻1号墳調査成果図	7
第7図	袋尻1号墳主体部実測図	8
第8図	袋尻1号墳土層堆積状況	9
第9図	袋尻1号墳出土遺物実測図	9
第10図	袋尻2号墳調査前地形測量図	10
第11図	袋尻2号墳調査成果図	11
第12図	袋尻2号墳主体部実測図	12
第13図	SK-01実測図	13
第14図	墳裾南側遺構実測図	13
第15図	袋尻2号墳土層堆積状況	14
第16図	袋尻2号墳出土上遺物実測図(1)	15
第17図	袋尻2号墳出土上遺物実測図(2)	15
第18図	袋尻3号墳調査前地形測量図	16
第19図	袋尻3号墳調査成果図	17
第20図	袋尻3号墳主体部実測図	18
第21図	袋尻3号墳出土上遺物実測図	18
第22図	袋尻4号墳調査前地形測量図	19
第23図	袋尻4号墳調査成果図	20
第24図	袋尻4号墳墳丘土層断面図	21
第25図	袋尻4号墳主体部実測図	22
第26図	袋尻4号墳上器棺I実測図(1)	23
第27図	袋尻4号墳上器棺I実測図(2)	24
第28図	鉄剣実測図	24
第29図	袋尻4号墳土器棺II実測図(1)	25
第30図	袋尻4号墳土器棺II実測図(2)	26
第31図	SK-01,SK-02実測図	26
第32図	袋尻5号墳調査前地形測量図	27
第33図	袋尻5号墳調査成果図	27
第34図	袋尻5号墳主体部実測図	28
第35図	袋尻5号墳土層堆積状況	28
第36図	袋尻5号墳出土遺物実測図	28
第37図	袋尻6号墳調査前地形測量図	30

第38図	袋尻 6 号墳調査成果図	31
第39図	袋尻 6 号墳主体部実測図	32
第40図	SK-02, SK-03実測図	32
第41図	袋尻 6 号墳土層堆積状況	33
第42図	袋尻 6 号墳出土遺物実測図	33
第43図	袋尻 7 号墳調査前地形測量図	34
第44図	袋尻 7 号墳調査成果図	35
第45図	袋尻 7 号墳第 1 主体部実測図	36
第46図	袋尻 7 号墳第 2 主体部実測図	37
第47図	袋尻 7 号墳出土遺物実測図	37
第48図	袋尻 7 号墳土層堆積状況	38
第49図	袋尻 8 号墳調査前地形測量図	39
第50図	袋尻 8 号墳土層堆積状況	40
第51図	袋尻 8 号墳調査成果図	41
第52図	上体部実測図	42
第53図	1 号土器検出状況	43
第54図	2・3 号土器検出状況	43
第55図	袋尻 8 号墳出土遺物実測図（1 号土器）	44
第56図	袋尻 8 号墳出土遺物実測図（2・3 号土器）	45
第57図	袋尻 A 遺跡調査前地形測量図	48
第58図	袋尻 A 遺跡調査成果図	49
第59図	袋尻 A 遺跡土層堆積状況	50
第60図	袋尻 A 遺跡 SB-01 実測図	51
第61図	袋尻 A 遺跡出土遺物実測図（1）	52
第62図	袋尻 A 遺跡出土遺物実測図（2）	53
第63図	袋尻 A 遺跡出土遺物実測図（3）	53
第64図	袋尻 A 遺跡出土遺物実測図（4）	53
第65図	袋尻 B 遺跡調査前地形測量図	55
第66図	袋尻 B 遺跡調査成果図	56
第67図	SI-01 実測図	57
第68図	SI-02 実測図	57
第69図	SI-01 出土遺物実測図	58
第70図	SI-02 出土遺物実測図	58
第71図	SI-04 出土遺物実測図	58
第72図	SI-03～06 実測図	59
第73図	SI-07 実測図	60
第74図	SI-07 出土遺物実測図	60

第75図	SK-01.SD-01～03実測図	61
第76図	SK-02.03実測図	62
第77図	SD-02出土遺物実測図	62
第78図	袋尻B遺跡出土遺物実測図（1）	63
第79図	袋尻B遺跡出土遺物実測図（2）	64
第80図	袋尻C遺跡調査前地形測量図	67
第81図	袋尻C遺跡調査成果図	67
第82図	袋尻C遺跡土層堆積状況	68
第83図	袋尻C遺跡出土遺物実測図	68
第84図	袋尻D遺跡調査前地形測量図	69
第85図	袋尻D遺跡調査成果図	70
第86図	袋尻D遺跡上層堆積状況	71
第87図	SX-01実測図	72
第88図	SX-01出土遺物実測図	73
第89図	SX-02実測図	74
第90図	SX-02出土遺物実測図	75
第91図	袋尻D遺跡出土遺物実測図（1）	76
第92図	袋尻D遺跡出土遺物実測図（2）	77
第93図	袋尻E遺跡調査前地形測量図	79
第94図	袋尻E遺跡調査成果図	80
第95図	SI-01実測図	81
第96図	袋尻E遺跡出土遺物実測図	81
第97図	SD-01.SK-03実測図	82
第98図	袋尻E遺跡土層堆積状況	82
第99図	袋尻F遺跡調査前地形測量図	84
第100図	袋尻F遺跡上層堆積状況	85
第101図	袋尻F遺跡出土遺物実測図（1）	86
第102図	袋尻F遺跡出土遺物実測図（2）	87
第103図	袋尻G遺跡調査前地形測量図	88
第104図	袋尻G遺跡調査成果図及び土層堆積状況	89
第105図	袋尻G遺跡出土遺物実測図	89
第106図	袋尻H遺跡調査前地形測量図	90
第107図	袋尻H遺跡調査成果図	91
第108図	袋尻H遺跡土層堆積状況	92
第109図	SK-01実測図	93
第110図	袋尻H遺跡出土遺物実測図（1）	94
第111図	袋尻H遺跡出土遺物実測図（2）	95

第112図	袋尻H遺跡出土遺物実測図（3）	96
第113図	袋尻H遺跡出土遺物実測図（4）	97
第114図	袋尻I遺跡調査前地形測量図及び調査区設定図	98
第115図	袋尻I遺跡調査成果図	99
第116図	袋尻I遺跡土層堆積状況	100
第117図	袋尻I遺跡SD-01、SD-02実測図	100
第118図	袋尻I遺跡出土遺物実測図（1）	101
第119図	袋尻I遺跡出土遺物実測図（2）	101
第120図	袋尻古墓群調査前地形測量図	102
第121図	調査前五輪塔散乱状況	103
第122図	袋尻古墓群調査成果図	105
第123図	SX-01実測図	106
第124図	SX-02実測図	106
第125図	袋尻古墓群頂上部遺構配図	107
第126図	土壤実測図	108
第127図	1号小横穴実測図	110
第128図	2号小横穴実測図	110
第129図	袋尻古墓群出土遺物実測図	111
第130図	五輪塔実測図（空風輪1）	112
第131図	五輪塔実測図（空風輪2）	113
第132図	五輪塔実測図（火輪・水輪・地輪）	114
第133図	袋尻横穴墓群調査前地形測量図及び配図	117
第134図	1号横穴墓実測図	119
第135図	1号横穴墓遺物出土状況実測図	120
第136図	1号横穴墓出土人骨実測図	121
第137図	1号横穴墓墓道出土遺物実測図（1）	123
第138図	1号横穴墓墓道出土遺物実測図（2）	124
第139図	1号横穴墓墓道出土遺物実測図（3）	124
第140図	1号横穴墓玄室内出土遺物実測図（1）	125
第141図	1号横穴墓玄室内出土遺物実測図（2）	126
第142図	2号横穴墓実測図	129
第143図	2号横穴墓遺物出土状況実測図	131
第144図	2号横穴墓墓道出土遺物実測図	133
第145図	2号横穴墓玄室内出土遺物実測図（1）	135
第146図	2号横穴墓玄室内出土遺物実測図（2）	136
第147図	2号横穴墓玄室内出土遺物実測図（3）	147
第148図	2号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図（1）	148
第149図	2号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図（2）	149

第150図	3号横穴墓実測図	141
第151図	3号横穴墓玄室内遺物出土状況実測図	144
第152図	3号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)	146
第153図	3号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)	147
第154図	3号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図	148
第155図	3号横穴墓周辺出土遺物実測図	148
第156図	袋屍1・3号横穴墓玄室内石棺及びノミ痕拓影	148

図版目次

図版1	石棺検出状況(1) 石棺検出状況(2) 石棺検出状況(3)	図版10	4号墳調査前全景(南より) 4号墳調査後全景(南より) 4号墳主体部検出状況(西より)
図版2	石棺蓋石除去後 主体部完掘状況 上層堆積状況	図版11	4号墳主体部検出状況(北東より) 4号墳上器棺Ⅰ大壺内鉄劍出土状況 4号墳土器棺Ⅰ検出状況
図版3	SD-01完掘状況 SD-02完掘状況 1号墳完掘状況(南から)	図版12	4号墳土器棺Ⅱ検出状況 4号墳土壤(SK-01)検出状況 4号墳土壤(SK-02)検出状況
図版4	2号墳調査前全景 表土除去後 主体部検出状況	図版13	5号墳調査前全景 主体部検出状況 上体部完掘状況
図版5	主体部上層堆積状況 主体部完掘状況 周溝完掘状況	図版14	6号墳調査前全景 表土除去後 主体部検出状況
図版6	SD-01,SK-02,03完掘状況 SD-02完掘状況 SK-01完掘状況	図版15	主体部完掘状況 SD-01完掘状況 SK-01完掘状況
図版7	SK-02遺物出土状況 SK-02完掘状況 2号墳調査後全景	図版16	SK-02完掘状況 SK-03完掘状況 調査後全景
図版8	3号墳調査前 主体部検出状況 上体部土層堆積状況	図版17	7号墳調査前全景 表土除去後 第1主体部完掘状況
図版9	主体部完掘状況 北側墳丘土層堆積状況 3号墳調査後全景	図版18	第1上体部土層堆積状況 上層堆積状況 第2主体部完掘状況

図版19	主体部土層堆積状況 主体部完掘状況	図版32	SK-01完掘状況 SK-02土層堆積状況
図版20	1号土器検出状況 2号・3号土器検出状況	図版33	SK-03土層堆積状況 SK-03完掘状況
図版21	A遺跡 SB-01完掘状況 土層堆積状況 調査後全景	図版34	F遺跡調査前全景 土層堆積状況（南壁） 調査後全景
図版22	B遺跡 SI-01完掘状況 土壤内土層堆積状況 SI-02完掘状況	図版35	G遺跡調査前全景 土層堆積状況（北壁） 調査後全景
図版23	SI-03完掘状況 SI-04完掘状況 SI-04中央ピット内遺物出土状況	図版36	H遺跡黒色粘質土検出状況 土層堆積状況
図版24	SI-05完掘状況 SI-06完掘状況 SI-07完掘状況	図版37	完掘状況 D遺跡調査前全景 SD-01検出状況
図版25	SD-01完掘状況 SD-02完掘状況 SD-03完掘状況	図版38	SD-01完掘状況 SD-02検出状況 SD-02完掘状況 調査後全景
図版26	SK-01完掘状況 SK-02完掘状況 SK-03完掘状況	図版39	SK-02検出状況 古墳群五輪塔散乱状況（調査前） 古墳群五輪塔散乱状況（調査前）
図版27	C遺跡調査前全景 土層堆積状況（南側） 調査後全景	図版40	SX-01検出状況 SK-10検出状況
図版28	D遺跡調査前全景 土層堆積状況 SX-01遺物出土状況	図版41	古錢出土状況（SX-01） 土師質土器出土状況（SX-01） 土師質土器出土状況（中腹部）
図版29	SX-01土層堆積状況 SX-01完掘状況 SX-02検出状況	図版42	五輪塔配置図（SX-02） 五輪塔配置図（SX-02）
図版30	SX-02遺物出土状況 SX-02完掘状況 調査後全景	図版43	頂上部土壤群完掘状況 SK-12検出状況
図版31	E遺跡調査前全景 SI-01完掘状況 SK-01土層堆積状況	図版44	1号小横穴完掘状況 2号小横穴完掘状況
		図版45	調査後（西側より） 調査後（南側より）

- 図版46 1号横穴墓土層堆積状況（墓道）
墓道遺物出土状況
墓道遺物出土状況（近景）
- 図版47 閉塞石検出状況
石棺検出状況（1）
石棺検出状況（2）
- 図版48 石棺内人骨出土状況
- 図版49 石棺床石檢出状況
石棺除去後
1号横穴墓（東より）
- 図版50 2号横穴墓墓道完掘状況
2号横穴墓 閉塞部～玄室
閉塞部（掘り込み跡）
- 図版51 墓道 左側壁小横穴
墓道 遺物出土状況
玄室内遺物出土状況
- 図版52 玄室内須恵器床、遺物出土状況
玄室内大刀出土状況
玄室内右壁の奥隅横穴（1）
- 図版53 玄室内右壁玄関側隣横穴（2）
玄室内右壁中頃横穴（3）
玄室内右壁中頃横穴（3）出土遺物
- 図版54 3号横穴墓墓道完掘状況
3号横穴墓閉塞部
閉塞部（上から）
- 図版55 3号横穴墓墓道土層断面
3号横穴墓検出状況（閉塞部付近）
3号横穴墓ノミ痕（玄門）
- 図版56 3号横穴墓 玄門～玄室
3号横穴墓 玄室内
- 図版57 3号横穴墓玄室内須恵器床
3号横穴墓 2号人骨頭蓋骨
- 図版58 袋尻1・2・3号墳出土遺物
- 図版59 袋尻4・5・6・7号墳出土遺物
- 図版60 袋尻8号墳・袋尻A遺跡出土遺物
- 図版61 袋尻A遺跡出土遺物
- 図版62 袋尻A遺跡・袋尻B遺跡（SI-01,02,04）遺物
- 図版63 袋尻B遺跡出土遺物
- 図版64 袋尻B遺跡出土遺物
- 図版65 袋尻D・E・F遺跡出土遺物
- 図版66 袋尻C・D遺跡出土遺物
- 図版67 袋尻F・G・H遺跡出土遺物
- 図版68 袋尻H遺跡出土遺物
- 図版69 袋尻H・I遺跡出土遺物
- 図版70 袋尻占墓群出土遺物
- 図版71 袋尻1号横穴墓墓道出土遺物（1）
- 図版72 袋尻1号横穴墓墓道出土遺物（2）
- 図版73 袋尻1号横穴墓玄室内出土遺物
- 図版74 袋尻2号横穴墓墓道出土遺物
- 図版75 袋尻2号横穴墓玄室内出土遺物（1）
- 図版76 袋尻2号横穴墓玄室内出土遺物（2）
- 図版77 袋尻2号横穴墓玄室内出土遺物（3）
- 図版78 袋尻3号横穴墓出土遺物（1）
- 図版79 袋尻3号横穴墓出土遺物（2）

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成3年度、当時の松江市経済部商工業団地事務所において「第2御商業団地」を造成する計画が策定された。その予定地を乃白町地内の山林に決定し、翌平成4年1月24日付け商団第78号で、松江市教育委員会に付近の埋蔵文化財の有無についての調査依頼書が提出された。

開発予定地域内は大半が未踏査であったが、全長約20mの前方後方墳に6m前後の小形古墳2基を伴う「大久保古墳群」や、近接する大久保池の周辺で弥生土器が採取された「大久保遺跡」があった。また近隣には田和山古墳群や友田遺跡群等弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が集中しており、新たな遺跡が発見される可能性は極めて大きかった。

そこで、平成4年4月から5月にかけて松江市教育委員会で分布調査を実施したところ、方墳1基・横穴墓1箇所（2穴開口）・遺物散布地1か所のほか、尾根上が平坦で調査を要すると思われる場所4か所を発見したが、樹木が密生し踏査不可能な場所も多くあった。

この結果について、平成4年6月3日付け、教文第148号で島根県教育委員会に報告し、今後の取り扱いについて協議を行った結果、試掘調査によって遺跡数、範囲を明確にする必要があるとの回答を受け（平成4年6月8日付、島教文143号）、分布調査の回答と併せて商工業団地事務所宛にその旨を通知した（平成4年7月3日付、教文第216号、大久保古墳群及び方墳1基は現状保存、散布地は要発掘調査、尾根上平坦地及び横穴群は要試掘調査または要発掘調査）。

試掘調査については、横穴群及び尾根状平坦地4箇所を対象として平成4年12月～平成5年1月にかけて実施した。特に横穴群については、事前に電気探査を行い、反応の見られた4箇所及び開口していた2穴を中心にトレンチを設定した。その結果、尾根上平坦地の4箇所では遺跡は発見されなかつたが横穴群では10基の存在が確認され、さらに広範囲な広がりが推測された。また、この時点で横穴群は「菅沢谷横穴群」と命名し、商工業団地事務所宛に試掘調査の結果を報告するとともに（平成5年2月8日付、教文第723号）、さらに広範囲な電気調査を実施し、全面発掘調査が必要である旨を回答した。この第2次電気探査は平成5年3月に実施し、その結果最大27～28穴の横穴墓の存在する可能性が指摘された。



第1図 島根県地図



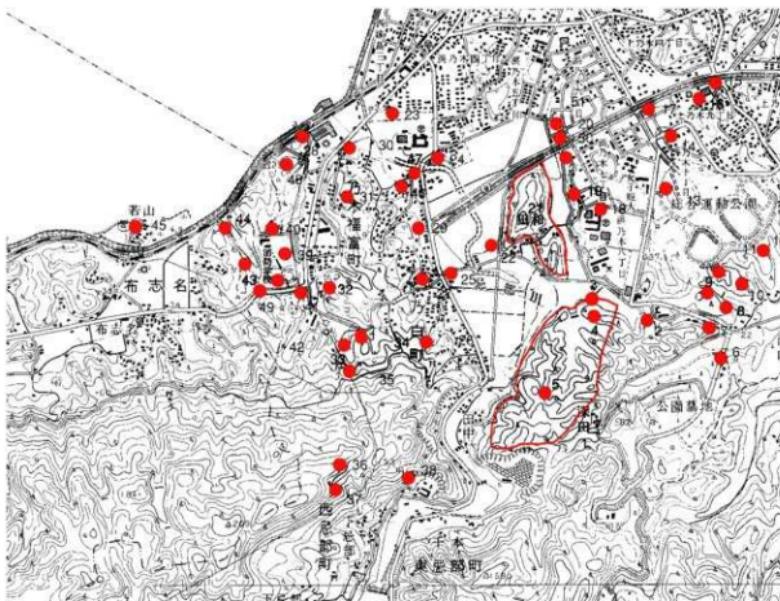
第2図 袋尻遺跡群位置図

松江市教育委員会では平成5年4月26日から平成6年1月31日にかけて、菅沢谷横穴群の発掘調査を実施し（平成5年7月1日から財団法人松江市教育文化振興事業団に調査を移管）、その結果6世紀後半から7世紀にかけての横穴墓12穴が発見された。

平成6年度、造成工事がいよいよ開始されることになり予定地内の伐採が実施されたので、再度の分布調査（平成6年12～平成7年1月）と試掘調査（平成7年2月～6月）を実施した結果、新たに古墳11基、散布地11箇所、横穴群1箇所、古墓群1箇所の合計24箇所が発見され、区域内全域に遺跡が分布していることが判明した。そこで経済振興課（旧：商工業団地事務所、平成8年度から企業団地建設課）と協議を行い、「袋戻遺跡群発掘調査」と呼称して平成7～8年にかけて発掘調査を実施することとなった。調査は平成7年4月～平成9年12月までのおよそ20ヶ月を要して実施した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

袋尻遺跡群（1）は松江市南方の平成町（乃白町）に所在する。遺跡は主に菅沢池と大久保池の周辺の丘陵に存在する。遺跡群中、最高所に位置する1号墳は標高97mの丘陵上にあり、北東には茶臼山、北西には宍道湖を一望することができる。袋尻遺跡群の周辺には数多くの遺跡が存在している。



第3図 袋尻遺跡群と周辺の遺跡

1. 袋尻遺跡群
2. 大久保谷遺跡
3. 大久保遺跡
4. 大久保古墳群
5. 菅沢谷横穴群
6. 小倉見谷横穴群
7. 勝負谷古墳群
8. 深田遺跡
9. 渋ヶ谷遺跡
10. 勝負谷古墳
11. 勝負谷遺跡
12. 神田遺跡
13. 運動公園内古墳群
14. 長砂古墳群
15. 下沢遺跡
16. 乃木二子塚遺跡
17. 二子塚古墳
18. 奥山遺跡
19. 後友田古墳群
20. 友田遺跡
21. 田和山古墳群
22. 葉師前遺跡
23. 欠田遺跡
24. 福富Ⅱ遺跡
25. 乃白遺跡
26. 乃白權現遺跡
27. 松本修法壇跡
28. 乃白玉作跡
29. 福富Ⅰ遺跡
30. 神立遺跡
31. 那田遺跡
32. 松本古墳群
33. 松本横穴群
34. 弥陀原横穴群
35. 岩屋口古墳
36. 中垣古墳
37. 下銀治古墳
38. 清水尻遺跡
39. 大角山古墳群
40. 大角山遺跡
41. すべりざこ古墳群
42. 布志名才の神遺跡
43. 布志名大谷Ⅰ遺跡
44. 布志名大谷Ⅱ遺跡
45. 布志名焼窯跡群
46. 尾形古墳群
47. 蓮華垣遺跡
48. 二名留古墳群
49. 足立窪跡
50. 南友田遺跡
51. 向原古墳群

旧石器・縄文時代の遺跡では、廻田遺跡（31）、福富Ⅰ遺跡（29）などで旧石器時代のナイフ型石器や尖頭器が出土している。また、松本古墳群（32）・福富Ⅰ遺跡では縄文時代の落とし穴状土壙や後期～晚期の土器・石器が出土しており、今後更に旧石器時代や縄文時代の遺跡が発見される可能性がある。

弥生時代の遺跡としては、前期から後期にかけて欠出遺跡（23）がある。中期から後期にかけては、墳丘墓・土壙墓が築造された友田遺跡（20）が、また、後期の堅穴住居が検出された廻田遺跡が知られている。その中でも友田遺跡では、四隅突出型墳丘墓を含む墳丘墓6基と土壙墓26基が検出され、墳丘墓は弥生墳丘墓としては県内でも最古期の部類に入るものである。

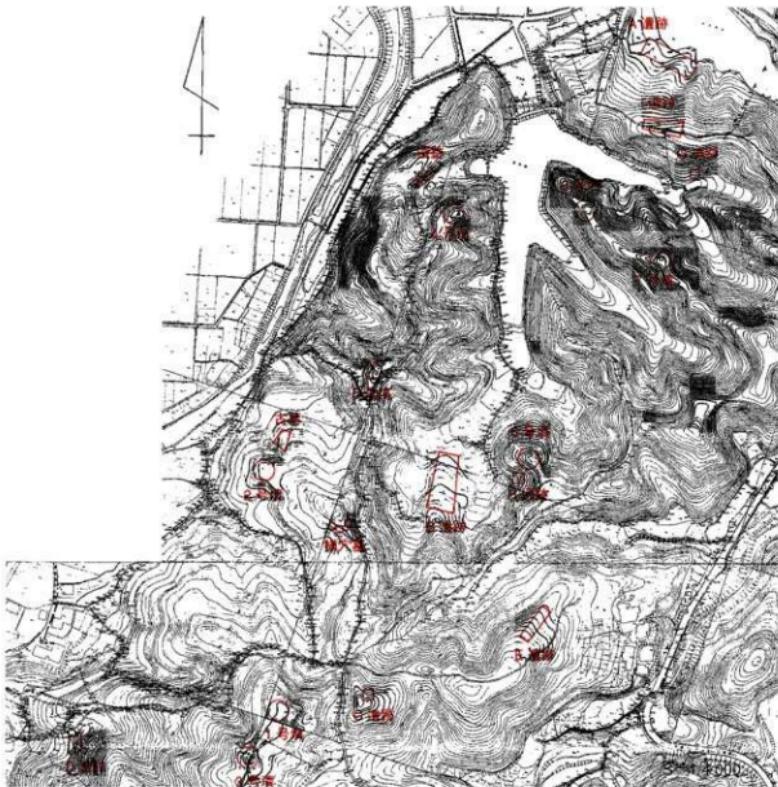
古墳時代の遺跡としては、古墳や横穴墓の他に玉作遺跡や製鉄関連遺跡などが知られているが、集落跡等の遺跡は未だ知られていない。このうち、古墳では大角山1号墳や長砂古墳群（14）などの中期古墳が知られ、後期には田和山1号墳（21）や岩屋山古墳（35）などの古墳が知られているが、その他では多くが屋形1号墳（46）などの小規模古墳や横穴墓である。横穴墓は菅沢谷横穴群（5）、弥陀原横穴群（34）、松本横穴墓群（33）、奥山遺跡（18）などが知られている。玉作遺跡としては福富Ⅰ遺跡、大角山遺跡が知られており、古墳時代中期に短期間生産されている。製鉄関連遺跡としては、製鉄樹連用の炭窯と言われる横口付炭窯跡が県内で初めて発見された布志名大谷Ⅱ遺跡（44）がある。

奈良時代の地誌である『出雲國風土記』には、この付近には「通道」が通っていたと記載されているが、松本古墳群や才の神遺跡（42）では古代道と思われる遺構が検出されており、この地域が古くから交通の要衝の地であったことが窺われる。

第Ⅲ章 遺跡の概要

現地調査は平成7年度と平成8年度の2ヶ年にかけて行った。24箇所の調査区を対象として発掘調査に臨み、その内平成7年度には7箇所（古墳2基、散布地5箇所）の調査を行い、平成8年度に17箇所（古墳9基、散布地6箇所、横穴墓1穴、古墓群1箇所）の調査を行った。

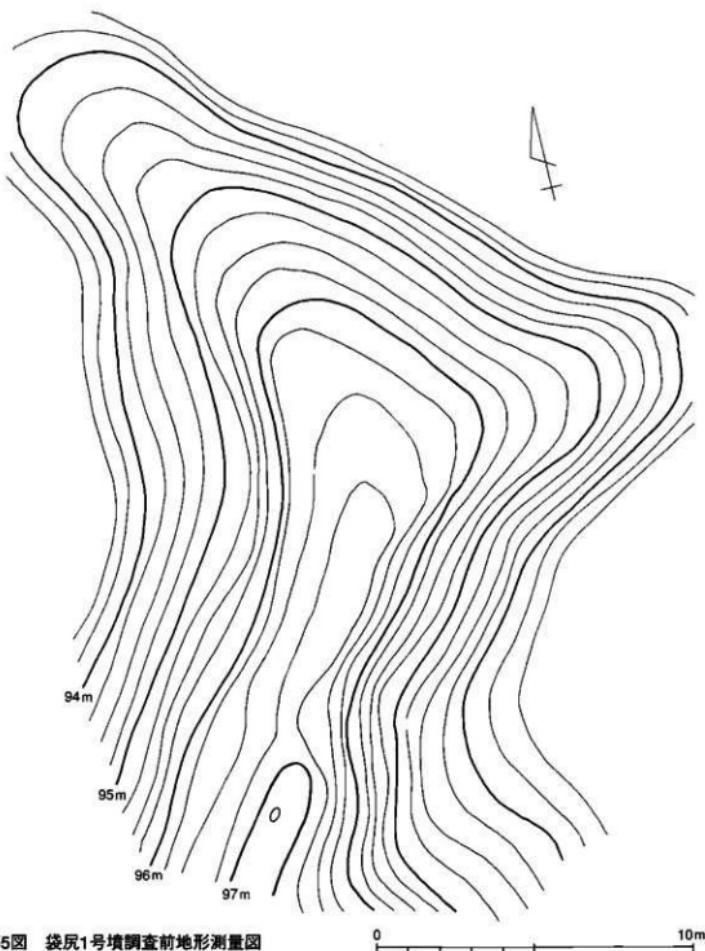
調査の結果、合計24箇所の調査区のうち4箇所の調査区では遺物・遺構ともに確認されなかった。また、横穴墓に近接する散布地からは別の横穴墓が2穴発見された。そこで、既に確認されていた横穴墓と合わせて横穴墓群として取り扱うこととした。したがって、遺跡として本報告書で報告するものは古墳8基、散布地9箇所、横穴墓群1箇所、古墓群1箇所の合計19箇所である。（第4図参照）



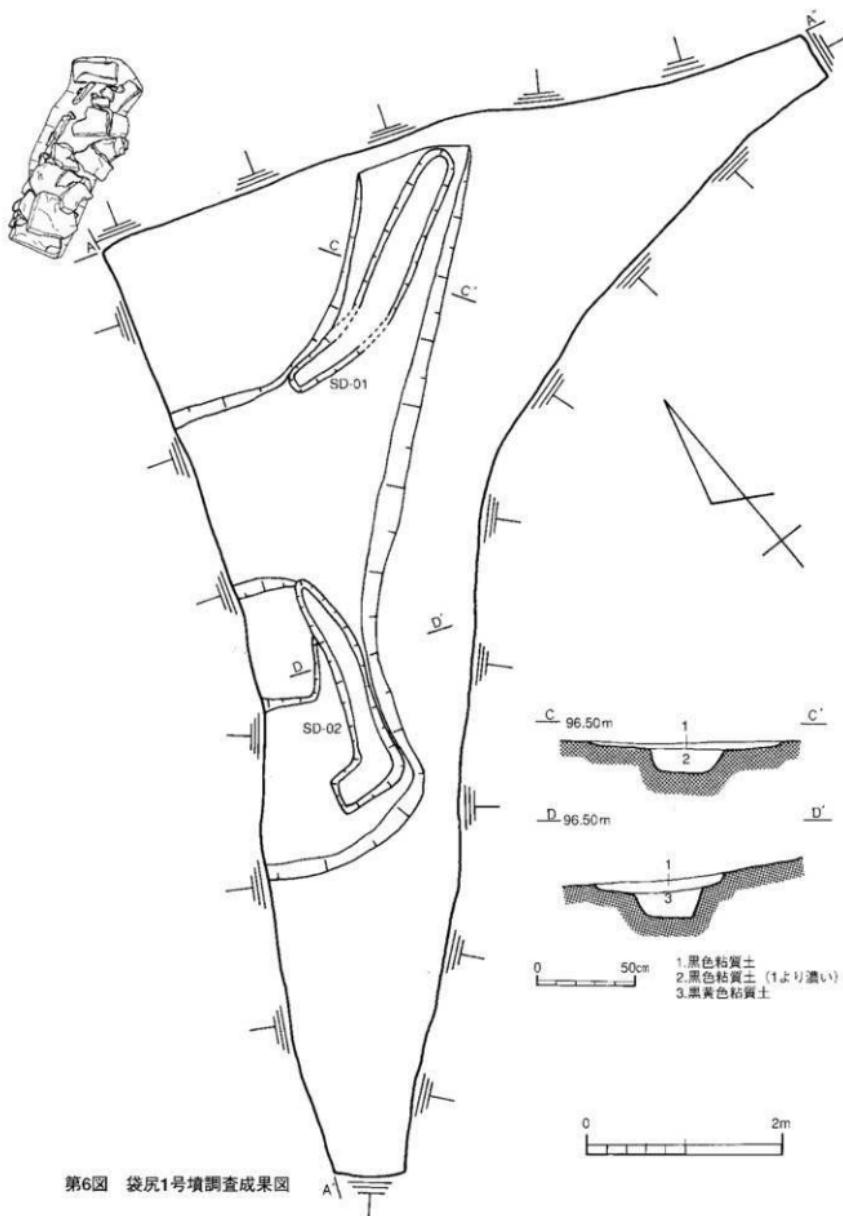
第4図 遺跡配置図

1. 袋尻1号墳

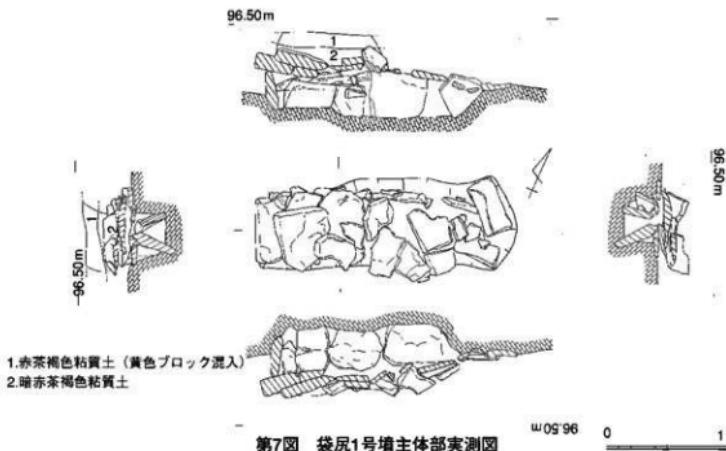
袋尻1号墳は、本遺跡群南側、標高約97mの調査区内最高所の南北方向に走る丘陵に位置する。墳丘は大半が削平を受けており、墳頂部には石棺と思われる石材が露出していた。墳形は不明で、残存している墳丘に土層観察用の畔を設定し、調査を実施した。(第5図)



第5図 袋尻1号墳調査前地形測量図



第6図 袋尻1号墳調査成果図



第7図 袋戸1号墳主体部実測図

墳丘（第6・8図）

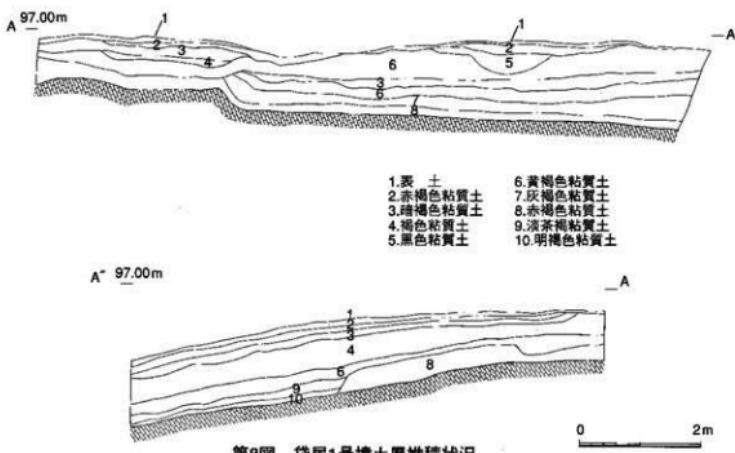
墳丘は、削平を受けており、築造当初の墳丘構造を留めていない。残丘盛土は厚さ最大16cmを測る赤褐色粘質土である。地山と土質・上色が似ていることから、周辺の地山を削って盛土として利用したと考えられる。残丘盛土が少ないのは、本墳が標高97mと高く、高所に位置するため、流土してしまったためと思われる。旧表土は、厚さ約18cmを測る。

溝状遺構（SD-01,02）と思われるものが2条確認された。SD-01は削平を受けていたため、本墳南側において約6m検出されたのみである。規模は幅90cm、深さ10~15cmを測り、黒色粘質土の堆積が見られた。堆積土中からは須恵器片が一片出土した。SD-02は幅60cm、深さ10~15cmを測り、黒褐色粘質土の堆積が見られ、土師器細片が出土た。

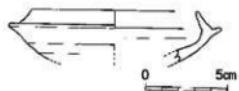
主 体 部（第7図）

墳頂部は既に擾乱されており、標高96.3mの高さに石棺らしき石材が一部露出していた。全体を確認するために周辺を精査していくと、内法長165cm、内法幅40cmの石棺が検出された。主軸をN-63°-Eにとり、地山下30cm掘込んでいる。石棺は南西方向の小口に板石状の自然石を1枚並べて立てており、北東の小口は確認できなかった。側石には一辺40cmの石を最低3枚並べて立てている。蓋石は最大で50cmの石を少なくとも二段に積み重ねていると推測される。石材は安山岩であった。棺内に遺物は検出されなかった。

被葬者は地山上に埋葬されたものと考えられる。



第8図 袋戸1号墳土層堆積状況



第9図 袋戸1号墳出土遺物実測図

須恵器

1は、立ち上がりが内傾気味にのびる須恵器の环身で、復元口径10.2cmを測る。内外面には回転ナデが見られる。出雲5期（註）に相当すると考えられる。

（註）須恵器の年代については以下大谷編年によるものとする。

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』1994年

2. 袋尻2号墳

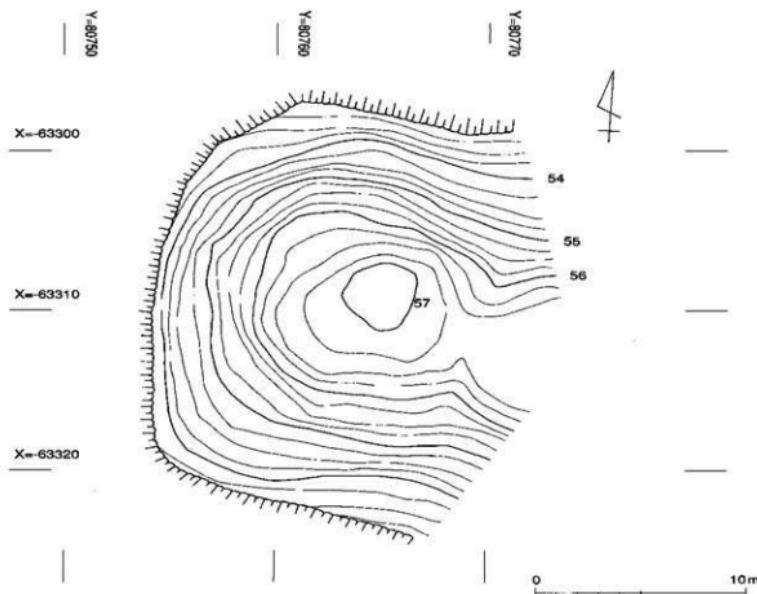
袋尻2号墳は本遺跡群西側、標高53~57mの西向きの尾根筋上に位置し、調査前の地形測量において一辺14mの方墳と推定された。

墳丘 (第11図)

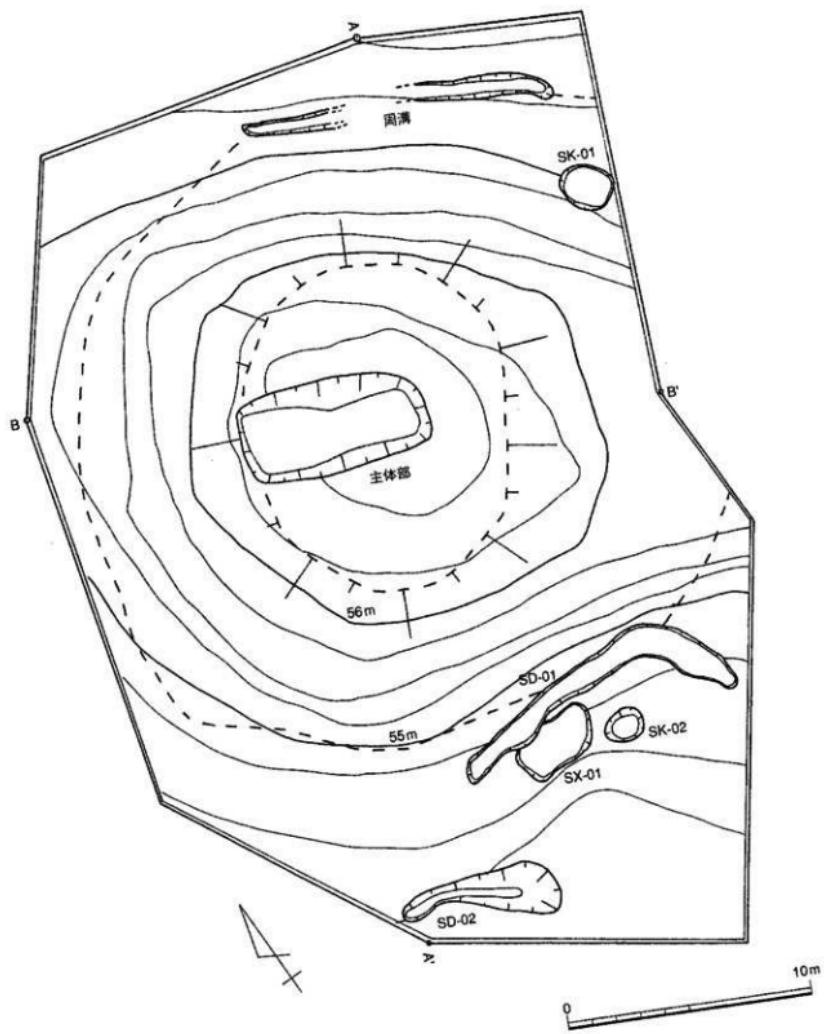
墳丘は南北長14mを測り、東西方向の墳裾範囲は不明であった。築成方法はH表土が確認されなかったこと及び盛土がブロックを多量に含んでいることから、地山面まで掘削してそこから盛土をして墳丘を形成したものと考えられる。

主体部 (第12図)

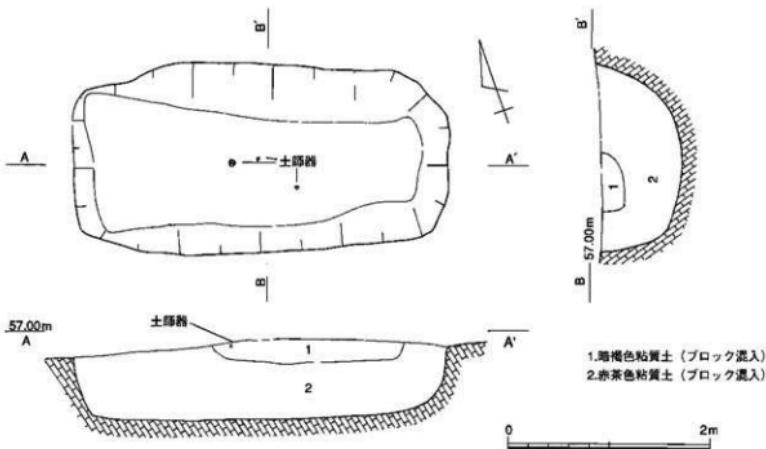
墳頂中心部において表土を除去したところ、東西長1.82m、南北長最大85cmを測るやや不整形な椿円形の平面プランが検出され、黒褐色粘質土（ブロック混入）が堆積していた。これは木棺の腐朽による落ち込み土と思われ、遺物として低脚壺の脚部等が出土している。



第10図 袋尻2号墳調査前地形測量図



第11図 袋尻2号墳調査成果図



第12図 袋戻2号墳主体部実測図

主体部の掘り方は地山面において検出された。規模は東西長3.72m、南北長1.92m、深さ49cmで長方形を呈し、内部には盛土と同じ赤茶褐色粘質土が堆積していた。底面はほぼ水平であり、埋葬方法は木棺直葬によるものと思われる。

遺構について

本墳東側において土坑（SK-01）が、南側において墓壙（SX-01）、土坑（SK-02）、溝状遺構（SD-01,02）がそれぞれ検出された。

SK-01

SK-01は長径176cm、短径101cm、深さ27cmを測る。北側においてSD-01を切りあっており、遺物として中世（12世紀）頃の土師質の壺が4点、水晶が1点それぞれ出土している。水晶は断面が六角形で両端は欠損している。墓壙内には黒茶褐色粘質土及び黒色粘質土が堆積していた。埋葬方法は木棺によるものと推測する。

SK-01

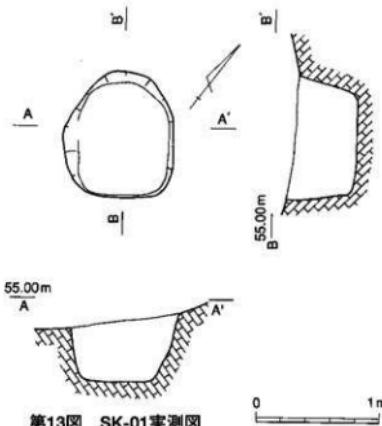
SK-01は長径105cm、短径87cm、深さ50cmを測る。地山面に掘込まれており、土坑内には黒褐色粘質土（炭混入）が堆積していた。遺物は出土しなかった。

SK-02

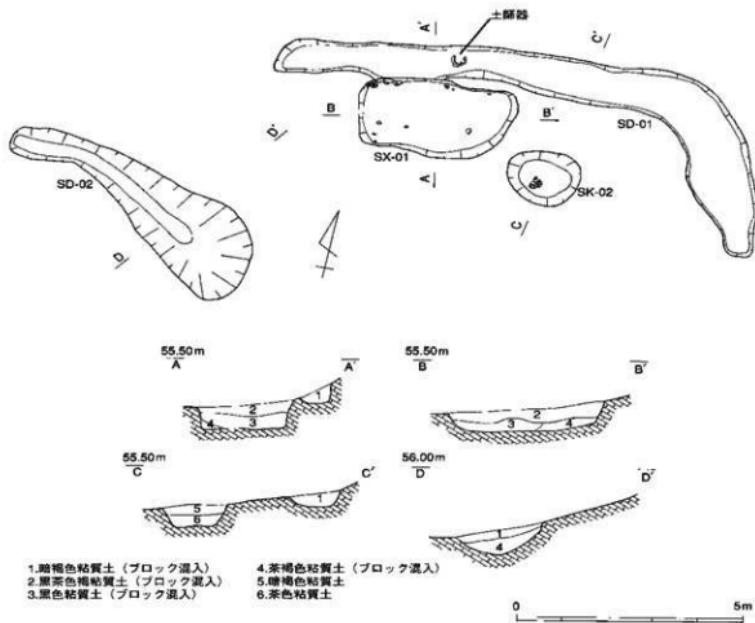
SK-02は長径80cm、短径70cm、深さ27cmを測る。盛土面に掘込まれており、土坑内には暗褐色粘質土及び茶色粘質土（ブロック混入）が堆積していた。遺物として土師器壺片が出土している。

SD-01

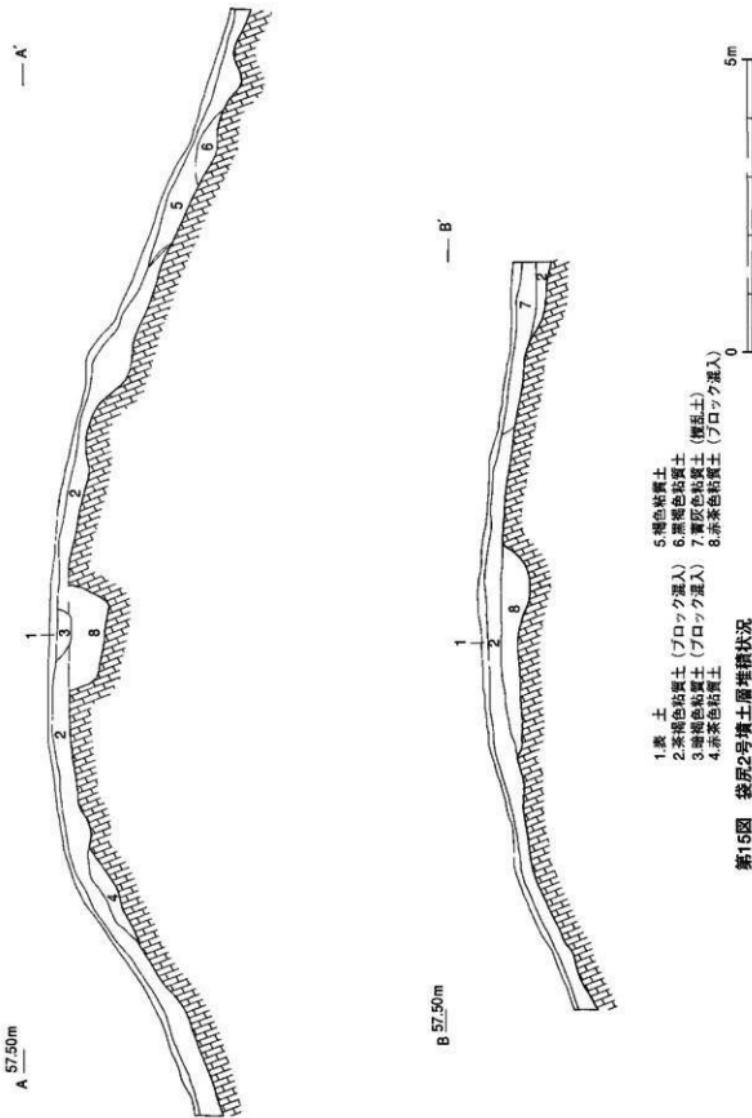
SD-01は東西長4.9m、南北長2.1m、幅64cm、深さ7cmを測る。暗褐色粘質土（ブロック少量混入）が堆積しており、遺物として土師器壺片が出土している。



第13図 SK-01実測図



第14図 墓据南側造構実測図



SD-02

SD-02は長さ3.1m、最大幅1.15m、深さ28cmを測る。暗褐色粘質土（ブロック少量混入）が堆積していた。遺物は出土しなかった。

出土遺物について（第16図・17図）

1は盛土内より出土した複合口縁をもつ甕である。端部は平面面をもつ。

2は土体内部より出土した低脚環である。脚部は「ハ」の字状に開く。

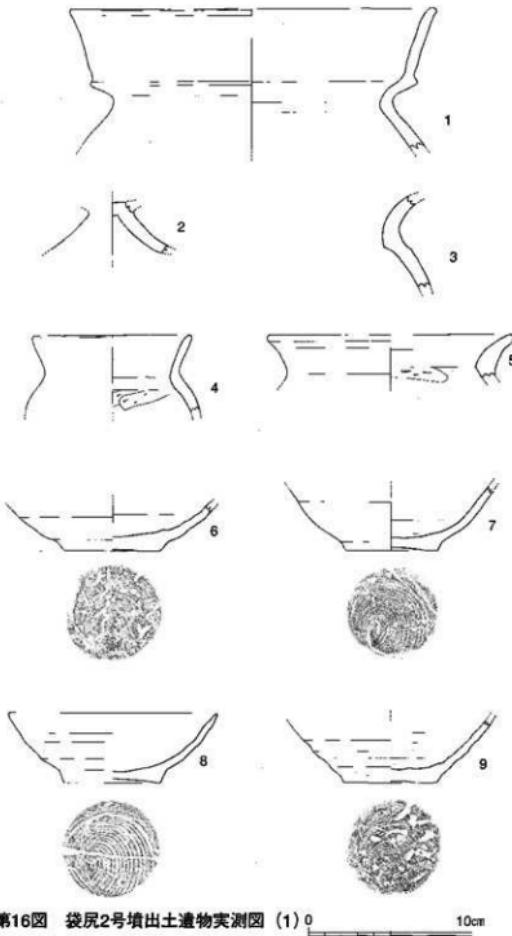
3はSD-01より出土した甕である。肩部にわずかに鈍い稜をもっている。

4はSD-01より出土した小型甕である。単純口縁で内面にヘラ削りを施している。

5はSK-02より出土した外反する単純口縁をもつ甕である。内面はヘラ削りを施している。

6~9はSX-01より出土した土師質の甕である。底径はほとんど同じ大きさで回転糸切り痕が認められる。形態から12~13世紀頃のものと思われる。

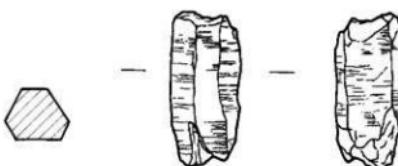
17図の水晶はSX-01より出土したものである。両端を欠損している。



第16図 袋戻2号墳出土遺物実測図 (1)

0

10cm



第17図 袋戻2号墳出土遺物実測図 (2)

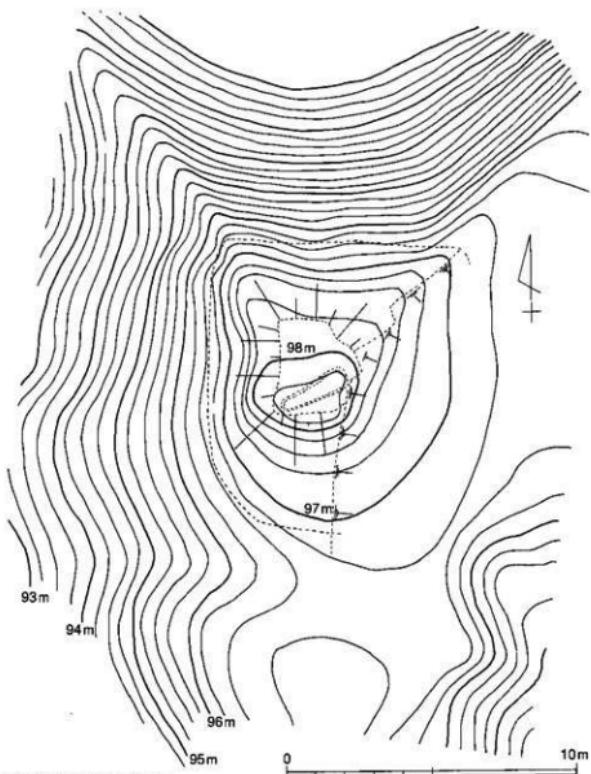
(S=1:1)

3. 袋尻3号墳

1号墳が所在する丘陵状の北方約60m、標高約97mの地点で工事中に新たに発見された古墳で、平成7年度において当初計画に追加して調査を行った。墳丘の東側半分は重機によって既に削平されていたが、一边約10m、比高約2mを測る方墳と考えられた。調査は残存する西側墳丘に土層観察用の畔を設定して地山まで掘り下げた。

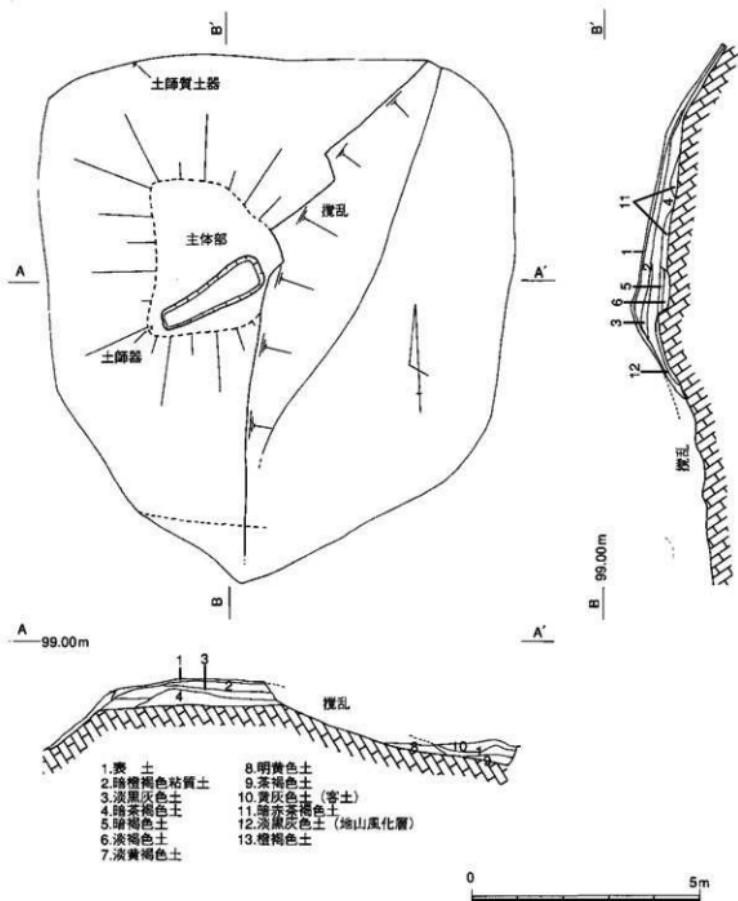
墳丘 (第19図)

調査の結果、築造当初は南北10m、最大盛土高60cm、墳裾からの比高2mを測る方墳であることが判明した。墳裾では周溝が検出されなかったために東西方向の規模は不明である。

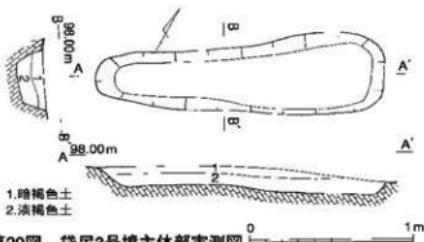


第18図 袋尻3号墳調査前地形実測図

墳丘の築造方法としては、自然地形を利用して墳裾部分では周溝を設けずに最小限の地山整形を施すのみで墳丘基盤を造り、その後わずかな盛土を施して墳頂部を整形する。墳頂部の地山面は南側から北に向かって標高が下がる状況が見られ、墳頂部も北に向かって傾斜しているが、北側部分では盛土の流出が顕著に見られることから、築造当初は基盤の高低差を解消するように北側部分により厚く堆積していたことが推定される。



第19図 袋尻3号墳調査成果図



第20図 袋戻3号墳主体部実測図

墳丘からの出土遺物としては、墳頂部表土直下から土師器の片が出土した。また、北側墳裾では表土下から土師質土器の皿が出土した。しかし後世のものと考えられ、本墳に直接関連するものではないと思われる。

主体部について（第20図）

墳丘中心部分を表土から約40cm掘り下げた段階で、長さ2.5m、幅0.4m～0.8m、深さ15～25cmを測る長方形の土壤プランが検出された。墓壇底は北東方向へ向けてレベルがさがる状況が見られるが、墓壇幅を観察すると北東部が幅広に掘込まれているため、頭位は北東方向であったと推定される。

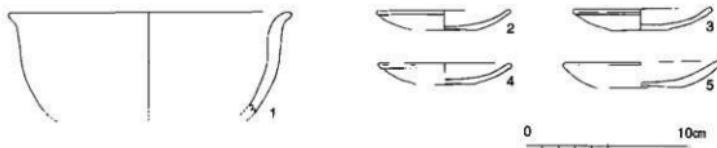
墓壇中から出土遺物は出土しなかったが、墳頂部の表土下で検出された土師器片の出土地点がこの墓壇の南西端部に位置するため、この墓壇に関連する供斎土器であった可能性が考えられる。

特徴的な点としては、墓壇の南側側辺は地山面から掘込まれているのに対し、北側側辺は第11層の、盛土上から掘込まれている点である。これは前述した墳丘基盤（地山）の傾斜に起因するものであると考えられる。また墓壇の主軸は、墳丘の南北軸がN3°-Eであるのに対し、約60°東方に振って、N-64°-Eとなり、相違点が見られる。この点についても地形の制約を受けた可能性が考えられる。

出土遺物（第21図）

1は墳頂部の表土下で検出された小形丸底鉢である。口径は推定で17.0cmを測る。体部と口縁部の境のくびれではなく、口縁端部は外方に折り曲げられる。内面はヘラ削り後、ナデの調整が見られる。古墳時代中期末頃のものと考えられる。

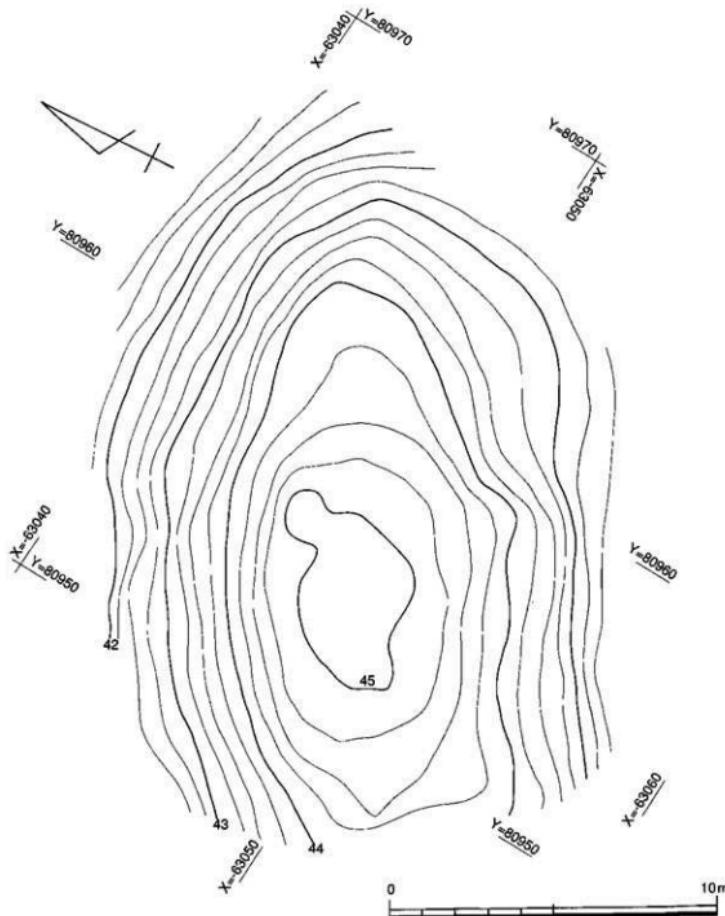
2～5は北側墳裾表土下から出土した土師質土器である。2～4は、口径がほぼ同じで、各々口縁端部はまるくおさめ、一条の沈線を施している。底部は回転糸切り痕である。5は、口径がやや大きく、器壁は厚い。口縁端部は平坦になっている。底部は回転糸切り痕である。土師質土器は後世のものであり、直接本墳に関係するものではないと考えられる。



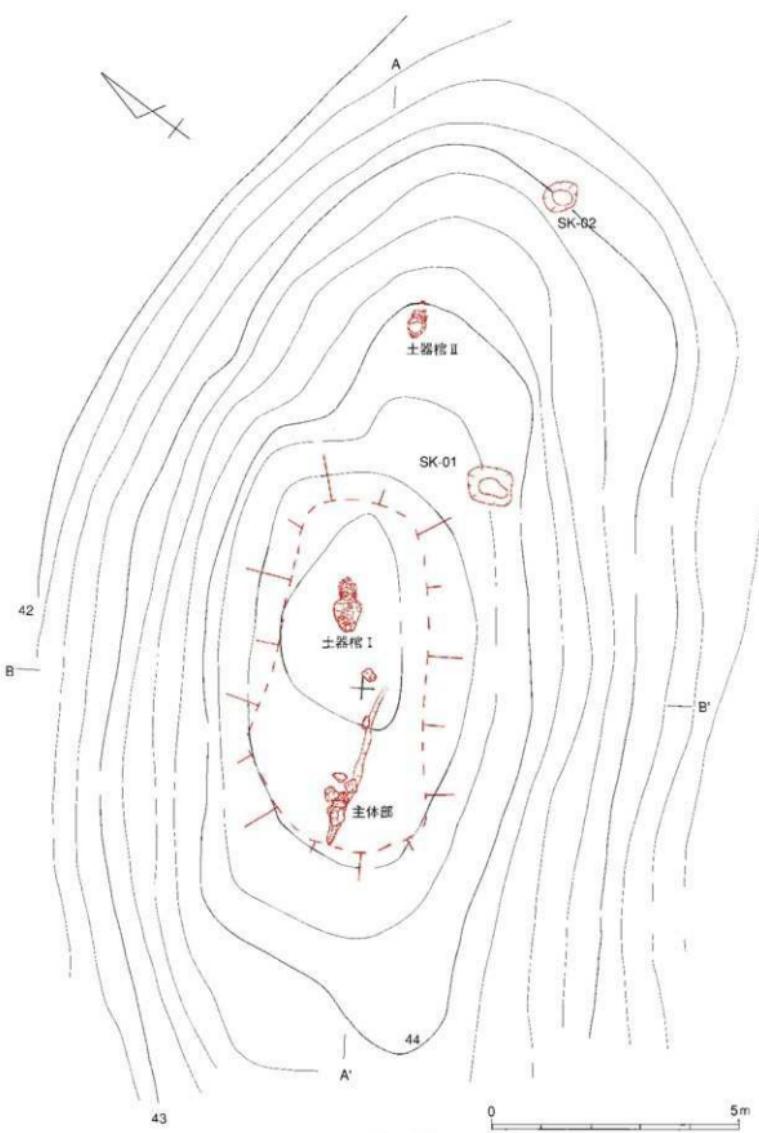
第21図 袋戻3号墳出土遺物実測図

4. 袋尻4号墳

袋尻4号墳は本遺跡群北側、背沢池西側の南北に続く尾根の最北端部に位置する。標高は43~45mである。この4号墳の北には周知の遺跡として野向古墳の存在が知られている。また、今回の調査により北西に下遺跡、背沢池を挟んで東には7号墳、8号墳が確認されている。この古墳の調査は平成7年度の分布調査でその存在が知られ、袋尻4号墳と命名し調査をおこなったものである。



第22図 袋尻4号墳調査前地形測量図



第23図 袋尻4号墳調査成果図

遺構の概要

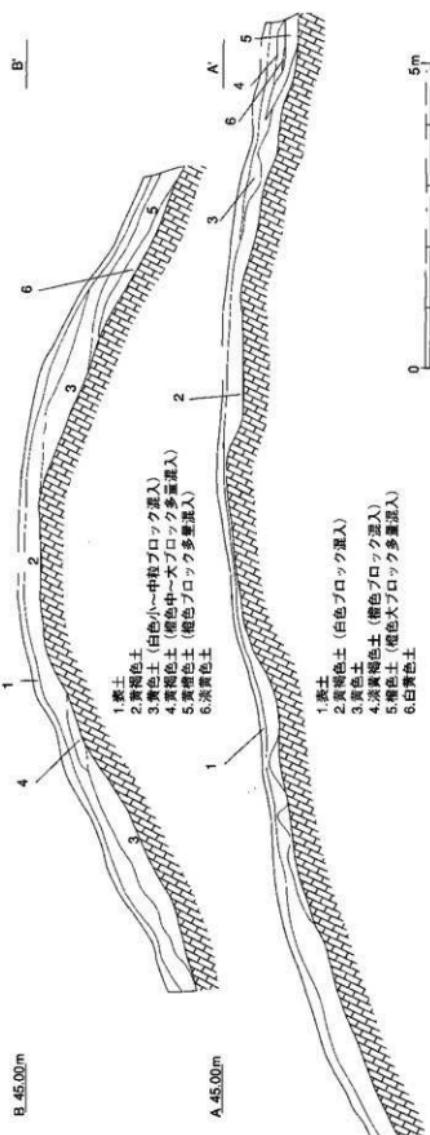
調査の結果、主体部と土器棺2棺、土壙2基を検出した。土器棺については墳頂部で検出されたものを土器棺Ⅰ、これより東側の斜面上で検出されたものを土器棺Ⅱと呼称することにした。

墳丘（第23、24図）

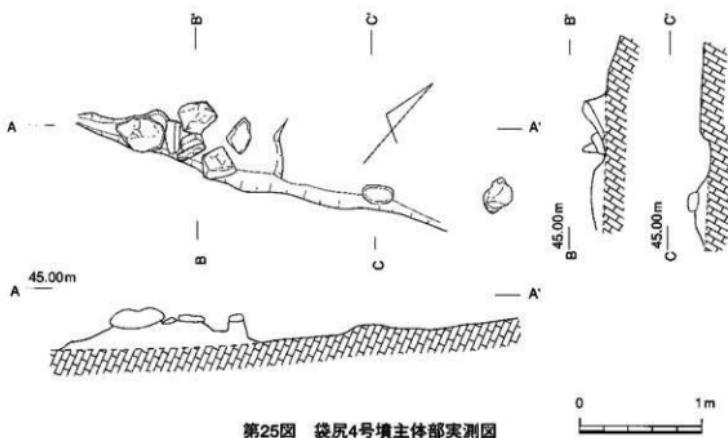
墳丘は旧表土は見られず、地山を切削加工した後若干の盛土して築造されたものと考えられる。周溝は見られず墳裾も確認することができなかつたため、明確な規模については不明である。墳頂の平坦面はいびつな長方形を呈し、北東に7.5m、北西に2.5~3.5mを測る範囲である。墳形は地山整形ラインから判断して方墳であった可能性が高い。

主体部（第25図）

標高43~45mの墳頂部の最高地や西より、自然石を使用した埋葬施設を検出した。主軸方位はN-67°-Eを測る。この主体部は、風雨などによる墳頂部の流出または人为的な攪乱などによるものか残存状態が非常に悪く、規模の確定は不可能であった。主体部西側で検出した石材については、主体部に付随するものと思われるが主体部築造時の状態で今までモッタリしている信憑性は低いものと考えられる。これらのことからこの主体部の埋葬形態など詳細な事柄を確認することはできなかつた。なお、主体部内の土層は黄色土の單一土層で、遺物は出土していない。



第24図 袋冠4号墳墳丘土層断面図



第25図 袋尻4号墳主体部実測図

上器棺（第26、29図）

上器棺I（第26図）

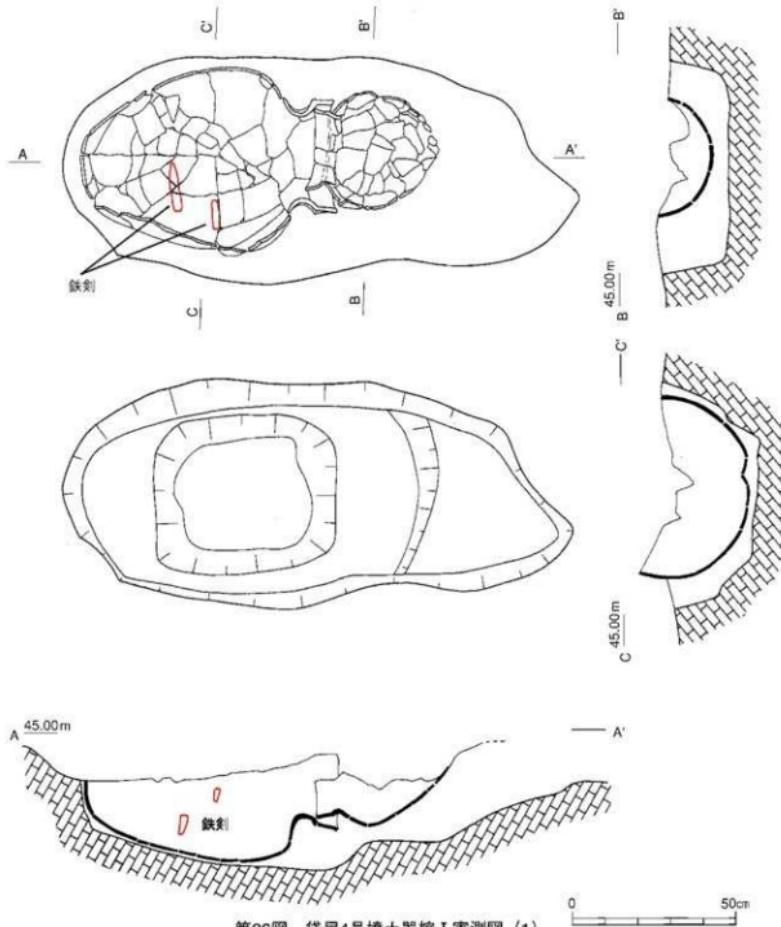
土器棺Tは、主体部の北東約2.5mの墳頂部より検出されたものである。

土器棺を埋納した土壙は、検出面で北東方向に160cm、北西方向に50~70cm、深さ20~30cmを測り、不整形な楕円状を呈す。主軸方位はN-43°-Eを測る。

土器棺は、大小二つの複合口縁の壺（南西側が大壺、北東側が小壺）が互いの口縁部を合わせる形で横位に置かれている。この二つの壺は胴部が壊れ、盛土と共に壺内に落ち込んでいる状態であったが、大壺からは橙茶色の砂質土が底（壺胴部）から厚さ15cm程度検出された。この砂質土は、調査区付近では見られないものであり、人為的に入れられたものと考えられる。遺物は、大壺内の砂質土中から鉄剣が2つに折れた状態で出土している。なお、小壺内からは砂質土及び遺物は検出されていない。また、大壺には口縁部内面にまんべんなく黒色物が塗られていることが確認された。この黒色物は漆と思われ、壺内に死者が埋納されていたとすれば、当時の埋葬法に関わる宗教的な彩色が強いものとも考えられる。

1（第27図）は上器棺Iの小壺である。肩部から底部にかけては器肉が薄く、接合は不可能であったが、出土した状態で器高約37cm、胴部径約35cmを測る。口径は29.6cmを測る。外面の調整は、口縁部、頸部共に横ナデで頸部以下はハケメである。また、肩部には連続する斜行刺突文を施している。内面の調整は、口縁部は横ナデで、頸部はヘラミガキ、これより下はヘラケズリである。口縁部の立ち上がりはやや外傾し、端部は面をなす形状をしている。口縁部外面の稜は水平方向に突出している。

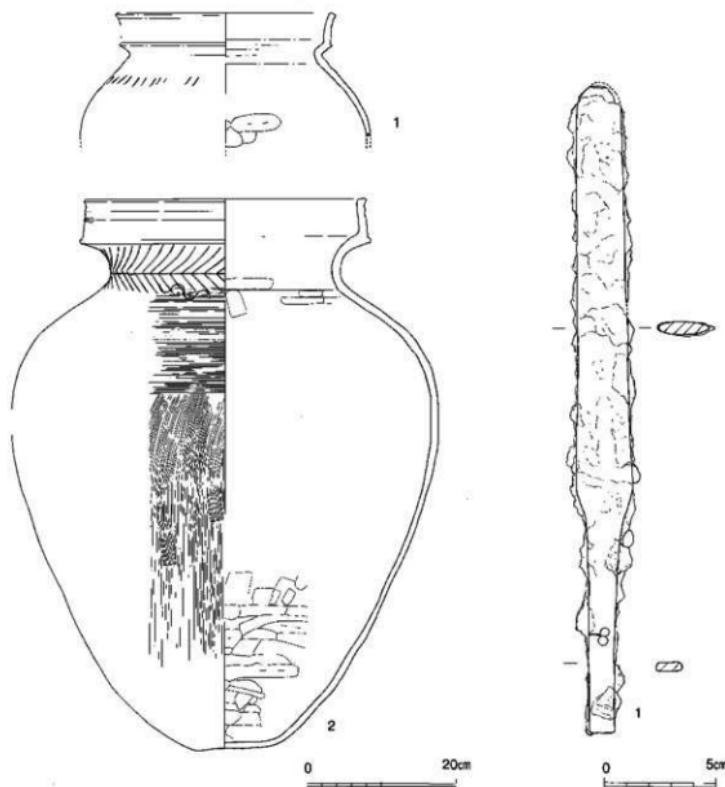
2(第27図)は上器棺Iの大壺である。この壺は調査区外に流れ落ちた為か胴部の1/2程度は欠損している。法量は口径37.4cm、器高73.9cm、胴部径56.9cmを測る。外面の調整は、口縁部、頸部は共に横ナデで、肩部は横方向のハケメ、これより下にかけては斜め及び縦方向のハケメである。また、口縁部には五つ連続する竹管文が、頸部には有軸羽状文が施されている。内面の調整は、口縁部、頸部共に横ナデで、頸部下からはヘラケズリである。口縁部の器内は厚く、立ち上がりはやや内傾している。口縁端部は面をなし、口縁部外面の稜は水平方向に顯著に突出する形状を呈す。底部は、角が丸みを帯びている平底である。



第26図 袋戸4号埴土器棺 I 実測図 (1)

1、2は共に草田7期頃相当、古墳時代前期のものと考えられる⁽¹⁾。

第28図は大壺内の砂質土中から出土した鉄剣である。切先がやや欠損しているがほぼ完形である。法量は残存長28.8cm、茎部長10.8cm、茎部幅1.1~2.4cm、剣身長18cm、剣身幅2~2.5cmを測る。剣身長から短剣と考える⁽²⁾。剣身の断面は鎌が見られず薄い菱形を呈している。剣身幅は切先に向けて徐々に細くなる。莖部は内湾状に浅く切れ込んでおり、莖部は莖尻に向かってやや細くなる形状を呈す。莖部の目釘穴は二つ見られ、再度打ち直されたものと考えられる。



第27図 袋房4号墳土器館Ⅱ実測図(2)

第28図 鉄剣実測図

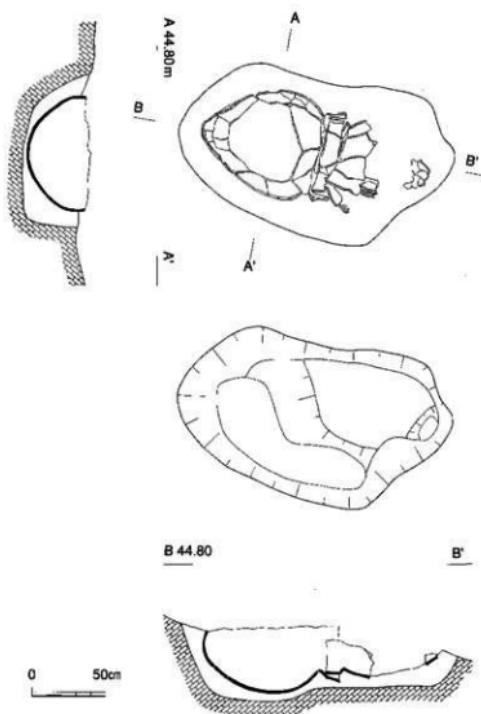
上器棺Ⅱ（第29図）

土器棺Ⅱは、主体部の北東約9mの墳丘の緩斜面より検出されたものである。

土器棺を埋納した上蓋は、検出面で北東方向に90cm、北西方向に40~50cm、深さ10~20cmを測り、不整形な楕円状を呈す。主軸方位はN-61°-Eを測る。

この上器棺も土器棺Ⅰと同様大小二つの複合口縁の壺（南西側が大壺、北東側が小壺）が互いの口縁部を合わせる形で横位に置かれている。これらの壺も上面の胴部が壊れ、土と共に壺内に落ち込んでいる。また、この土器棺からは遺物は出土していない。

1（第30図）は土器棺Ⅱの小壺である。胴部などは欠損し、肩部、底部については器内が薄く非常にもろかった為接合可能部分は口縁部のみであった。法量は口径24cmを測り、その他部分は不明である。口縁部外面、内面は共に横ナデで、胴部外面はハケメ、胴部内面はヘラケズリを施している。また、施文は見られなかった。口縁部の立ち上がりはやや外傾し端部は面をなす。口縁部外面の稜は水平方向に突出している。



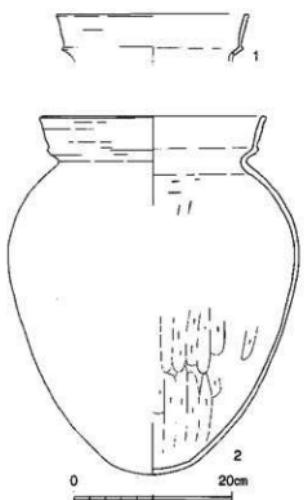
第29図 袋戻4号墳土器棺Ⅱ実測図（1）

2（第30図）は土器棺Ⅱの大壺である。この壺はほぼ完形である。法量は口径28.7cm、器高45.5cm、胴部径36.2cmを測る。口縁部、頸部は外面、内面共に横ナデで、頸部以下は内面はヘラケズリを施すが、外面の調整は風化の為不明である。また、施文は見られない。口縁部の立ち上がりはやや外傾し、端部は面をなす。口縁部外面の稜は水平方向に突出している。底部は丸底に近い平底である。

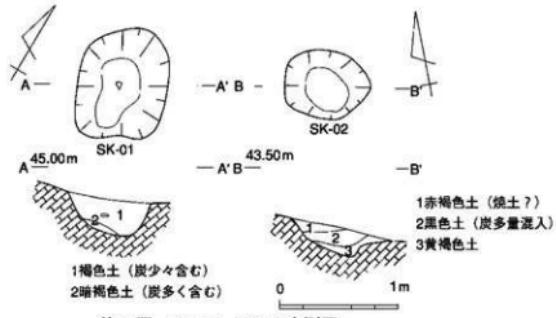
1、2は共に草田7期頃相当、古墳時代前期のものである²⁰。

上壙（第31図SK-01、SK-02）

SK-01は、主体部の東約6mの墳丘の緩斜面より検出されたものである。上面径70~90cm、深さ30cmを測り、平面形は不整形な凸形を呈す。壁面は傾斜して掘り込まれていた。また、底面は東側にやや傾斜し



第30図 袋尻4号墳土器棺Ⅱ実測図(2)



第31図 SK-01、SK-02実測図

ている。埋土中の褐色土及び暗褐色土からは、炭化物が確認されている。なお、この褐色土中からは土師器片が一片出土している。

SK-02は、主体部の東約12mの墳丘の斜面より検出されたものである。上面径60~70cm、深さ14cmを測り、平面形は不整形な円形を呈す。SK-01と同じく壁面は傾斜して掘り込まれている。また、底面は東側に傾斜している。埋土上の第2層黒色土からは、炭化物が確認された。なお、この土壤からの遺物は検出されていない。

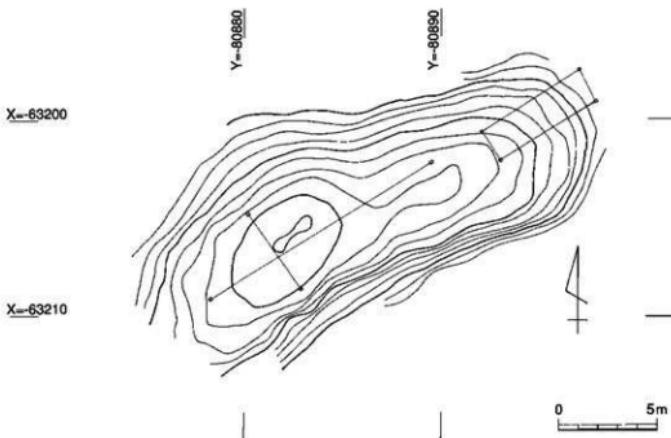
- 註1 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会 1992年
 註2 前掲註1と同じ
 註3 池淵俊一「鉄剣武器に関する一考察」「古代文化研究第一号」島根県古代文化センター 1993年

5. 袋尻5号墳

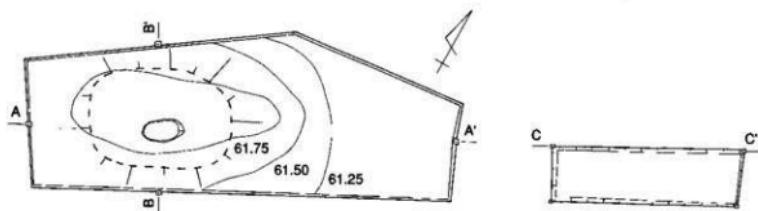
本遺跡群東側、標高60~63mの東向きの尾根筋上に位置し、調査前の測量により一辺11mの古墳と考えられていた。墳形については不明である。調査は、本墳が位置する尾根筋に並行と直交に合わせて畔を設定し、調査を行った。

墳丘（第33図）

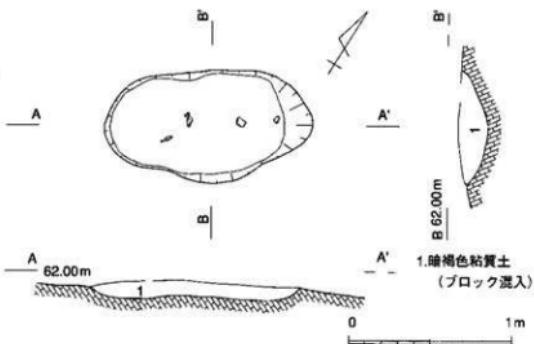
盛上は多量のブロックを含んでおり地山を加工したものと使用したものと考えられる。また、旧表上が確認されなかったことから2号墳と同様で、地山面まで掘削してそこから盛土をして墳丘を構築したものと推定される。



第32図 袋尻5号墳調査前地形測量図

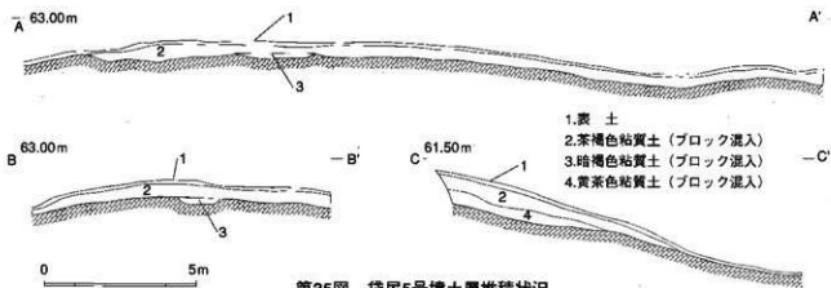


第33図 袋尻5号墳調査成果図



第34図 袋尻5号墳主体部実測図

第36図 袋尻5号墳出土
遺物実測図 (S-1/3)



第35図 袋尻5号墳土層堆積状況

主体部（第34図）

墳頂部や東側の地山面において、長さ127cm、幅70cm、深さ19cmを測る楕円形状のプランを検出された。埋土には暗褐色粘質土（ブロック混入）が堆積していた。遺物として土師器細片が出土している。本墳の築造時期については出土遺物から2号墳とほぼ同時期の古墳時代前期頃と考えられる。また、周溝は検出されず、盛土もかなり流出しているため、墳丘範囲については不明である。

出土遺物（第36図）

1は主体部の埋土、暗褐色粘質土（ブロック混入）中より出土した土師器の口縁である。細片のため復元は不可能であったが、時期は草田7期（註）の頃のものと考えられる。

（註）「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会 1992年

6. 袋尻6号墳

本遺跡群北側、標高49～53mに位置する。調査は本墳が位置する尾根筋上に並行と直交方向に畔を設定し、実施した。調査前の地形測量において一辺約23mを測る方墳と推定されたが調査の結果、半径約11mを測る円墳と考えられた。また、墳裾から須恵器と土師器細片が出土したが、古墳の築造年代を表わすものとの確証は得られなかった。(第38図)

墳丘 (第41図)

墳丘の築成方法は、旧表土が確認されなかつことと盛土(茶褐色粘質土)内にブロックが含まれていることから、地山を加工して盛土を施したものと思われる。また、墳丘の北西方向(谷側)の比高差がおよそ3.6mあり、南東方向に比べて造りをより丁寧にしたものと考えられる。

主体部 (第39図)

主体部は地表面において確認され、規模は東西長210cm、南北長75cm、深さ最大32cmを測る長方形である。南側の一部は崩壊していた。西側の幅が東側に比べておよそ2倍広く、おそらく西側に頭位を向けて埋葬されたものと考えられる。埋土は主に軟質の茶・黄色粘質土が堆積していた。埋葬方法は木棺直葬と考えられる。

その他の遺構 (第40図)

6号墳では土壙3基、溝状遺構1条が検出された。土壙(SK-01)は主体部北側において、(SK-02)、(SK-03)は本墳西側で検出された。また、溝状遺構(SD-01)はSK-02,03に近い墳丘西側で検出された。

SK-01

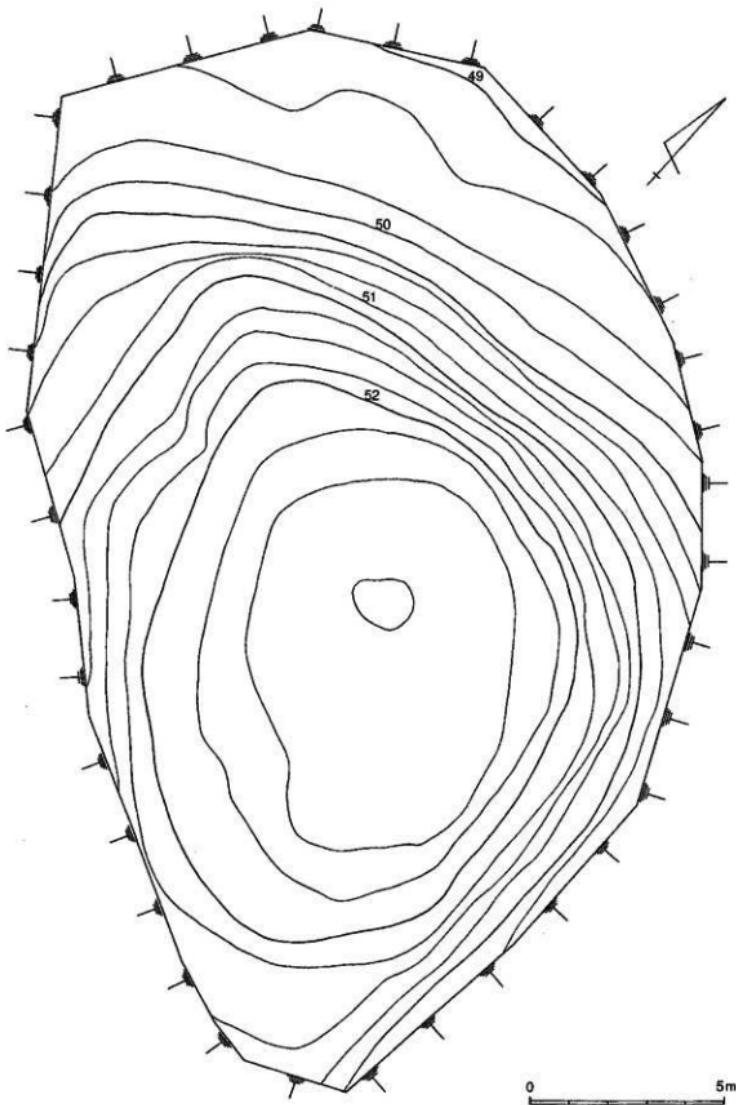
長径58cm、短径47cm、深さ7cmを測る。埋土は黑色粘質土で多量の炭を含み、若干の焼土も確認された。遺物は出土していない。

SK-02

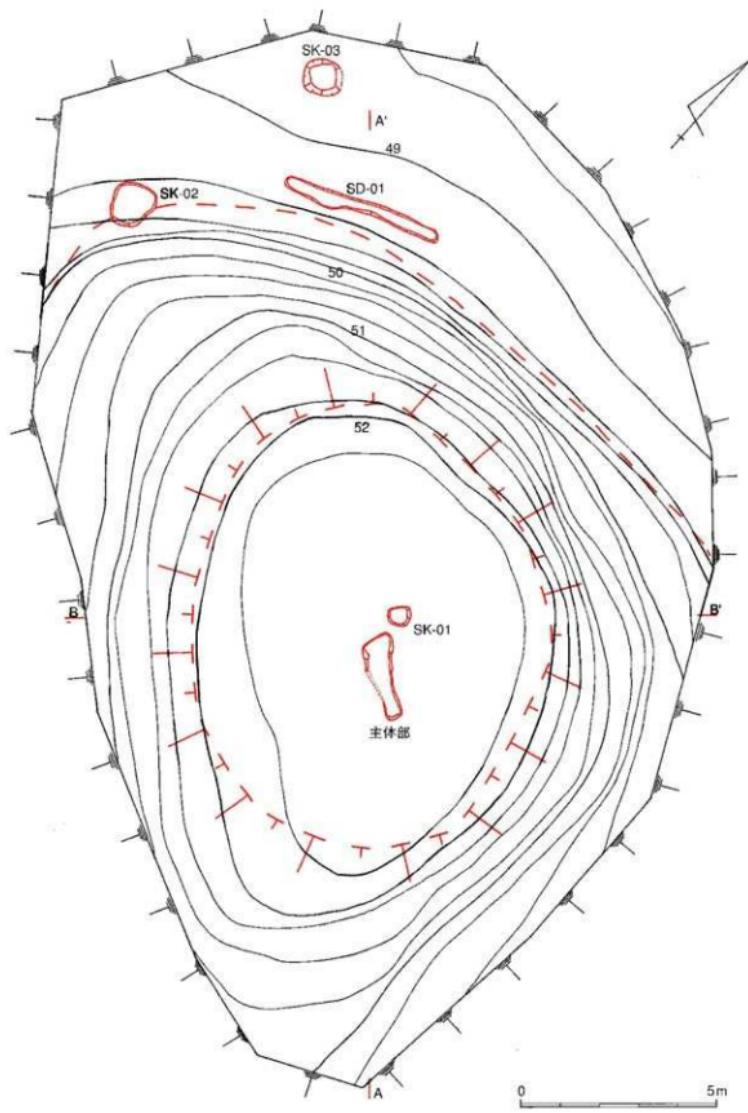
長軸107cm、短軸53cm、深さ38cmを測る。やや不整形な形をしており、埋土には炭を含む。遺物は出土しなかつた。

SK-03

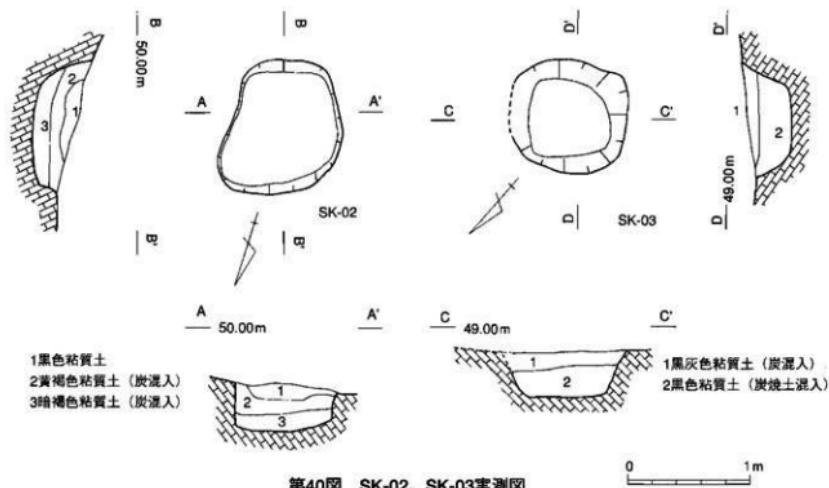
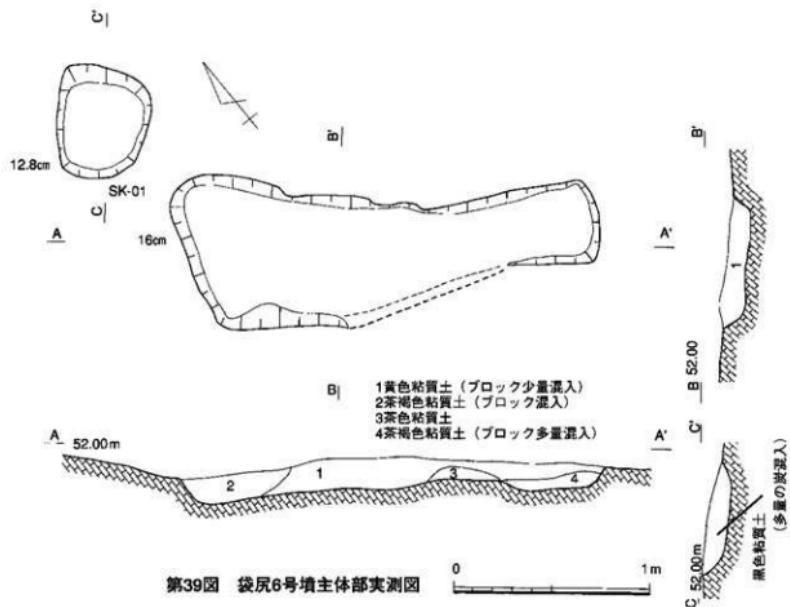
直径90cm、深さ37cmを測る。円形を呈しており、埋土に炭・焼土を含む。遺物は出土しなかつた。



第37図 袋尻6号墳調査前地形測量図



第38図 袋尻6号墳調査成果図

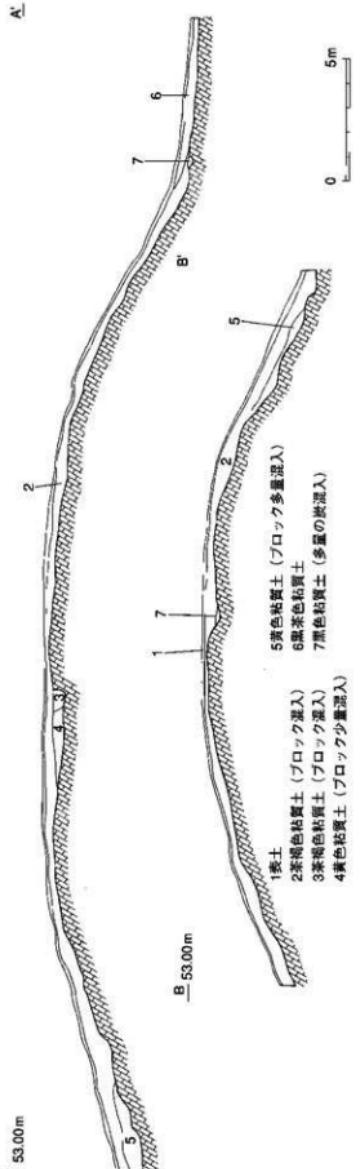


SD-01

長さ4.2m、最大幅58cm、深さ最大9cmを測る。埋土には黒色粘質土が堆積していた。遺物は土師器細片が出土した。この溝状遺構は、規模が小さしたことから、本墳の周溝とは考えにくい。

出土遺物（第42図）

6号墳では東側墳裾から須恵器が出土した。底部外面は回転ヘラ削りを施している。体部はほぼ全体が残存するが口縁部はなく、一部が接合出来たのみであった。また、変形が著しいため正確には分からぬが、出雲3期頃のものと考えられる。



第42図 袋戸6号墳出土遺物実測図
(S=1:3)

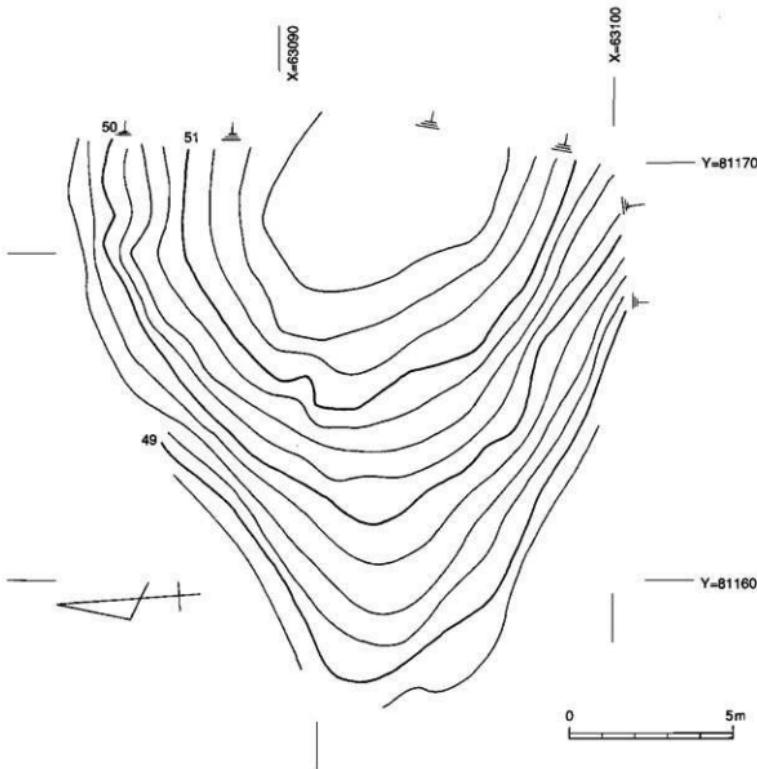
7. 袋尻7号墳

7号墳は本遺跡群北側、標高49~52mに位置する。7号墳の南側に6号墳、西側には8号墳が存在している。調査前の地形測量においては南北約13mを測る古墳と考えられていた。調査は残存する西側墳丘に土層観察用の畔を設定して実施した。

墳丘 (第44図)

墳丘は東側半分を削平されており、築造当初の墳丘構造を留めていない。墳裾から周溝が検出されなかつたために墳丘規模は明確ではなかった。調査の結果、約12mを測る方墳と考えられた。

墳丘の築造方法は周溝を設げず、地山を利用して墳丘基盤を造り盛土として地山のブロック土を

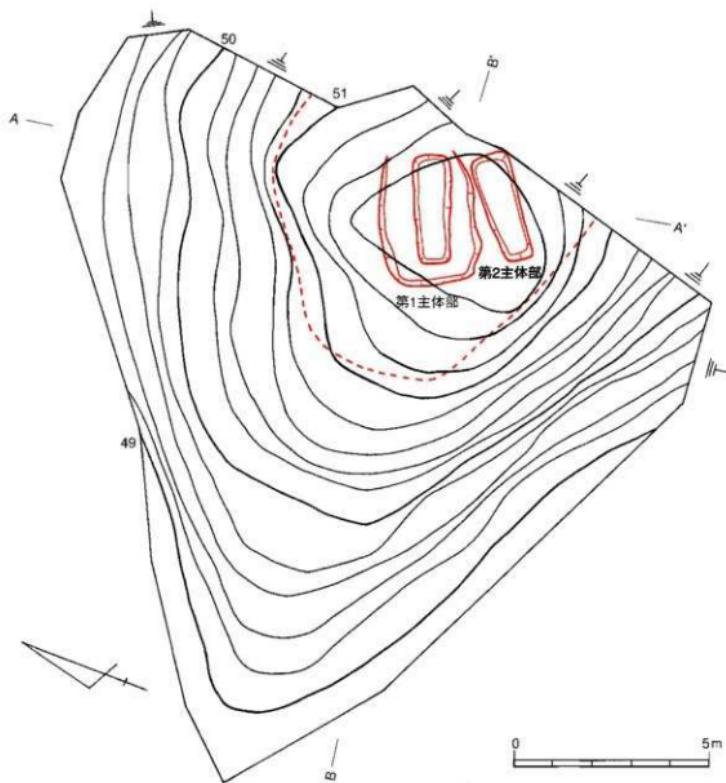


第43図 袋尻7号墳調査前地形測量図

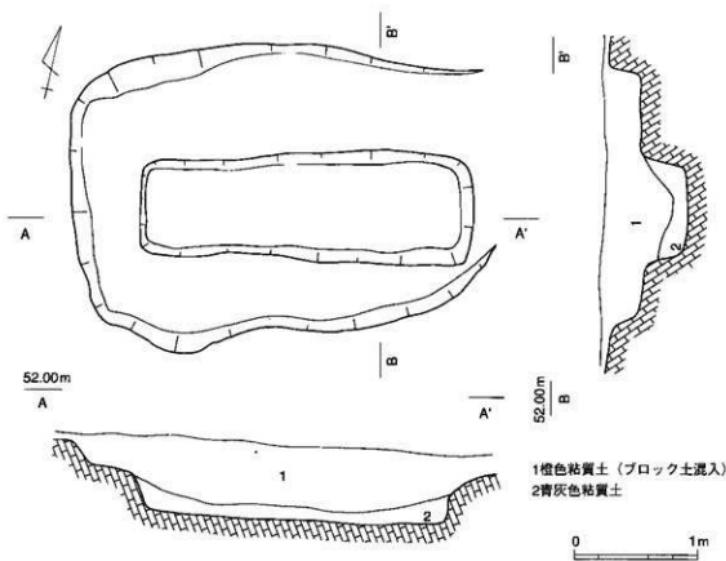
利用したものと思われる。墳頂部では表土以下約20cmで地山のブロック土面に達し、地山面より主体部を検出した。また、周溝は認められなかった。

主 体 部

墳頂部において表土から約20cm掘り下げた段階で、主体部を2基確認し、北側を第1主体部、南側を第2主体部と呼ぶことにした。



第44図 袋戸7号墳調査成果図



第45図 袋戻7号墳第1主体部実測図

第1主体部（第45図）

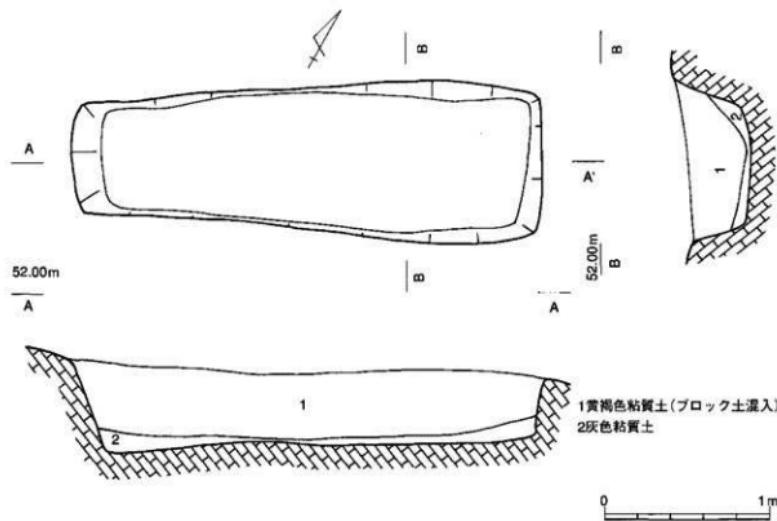
第1主体部は表土除去後約20cm掘り下げたところで検出した。長さ約340cm、最大幅約240cm、深さ40cmを測る。草塙の幅は、東側が広く、頭部は東向きだったと推定される。

表土を除去した段階で、地山と同じブロック土が混入した橙色粘質土を確認した。墓壙内底面には、橙色粘質土の下に青灰色粘質土が10~20cmの厚さで堆積していた。灰白色粘質土は、横断面がU字形の堆積をしており、おそらく木棺を埋葬した際の粘土床であったと推定される。墓壙中から遺物は出土しなかった。

第2主体部（第46図）

第2主体部は表土除去後約10cm掘り下げたところで検出した。長さ280cm、最大幅100cm、深さ40cmを測る。こちらも墓壙の東側の方が幅広であることから、同じく頭部は東向きだったと推定される。

第1主体部と第2主体部の関係は、土層の堆積状況から第1主体部の覆土から切り込んでいることが窺えるため、第1主体部の後に第2主体部を造ったものと考えられる。また、墓壙中にはブロック土の混入した黄・橙褐色土が堆積しており、墓壙底面には、第1主体部と同じように青灰色粘質土が堆積していた。横断面でみるとU字形に堆積しており、第1主体部と同様に粘土床であった可能性がある。墓壙中からは、遺物は発見されなかったが、墳頂部表土下より土師器の壺片が出土した。これ



第46図 袋尻7号墳第2主体部実測図

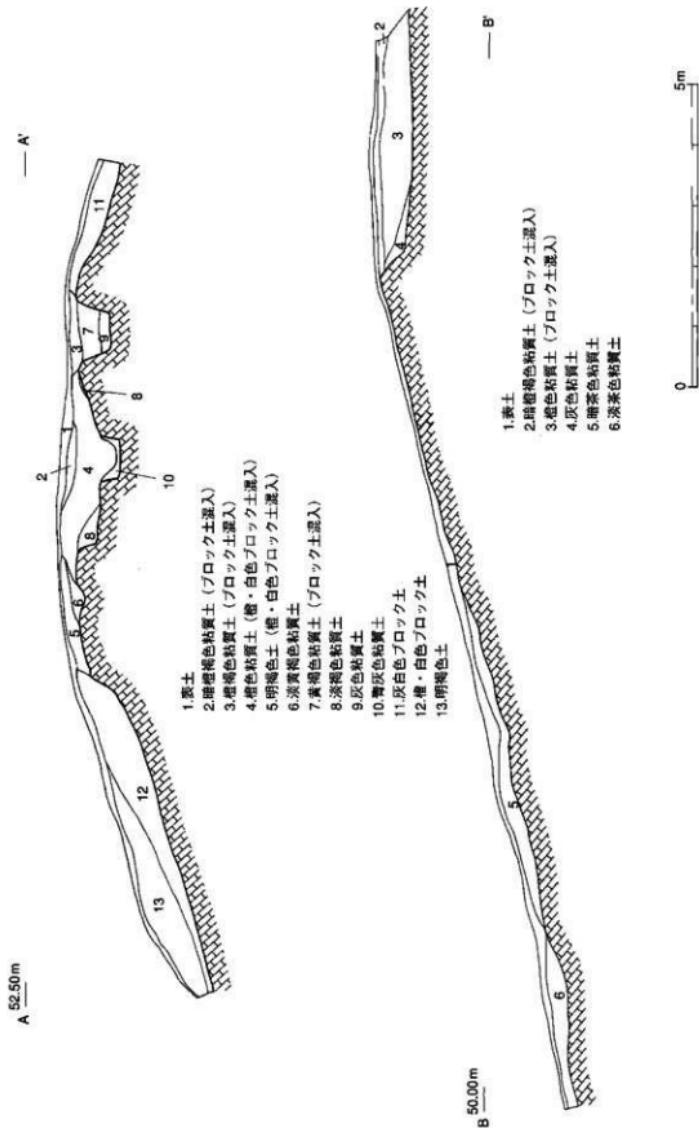
が第2主体部の直上に位置することから第2主体部の埋葬に
関連するものと考えられる。

出土遺物（第47図）

第2主体部の直上、表土下より出土した十師器壺の頸部
片である。綾杉状の沈線を施している。古墳時代前期頃の
ものと思われる。



第47図 袋尻7号墳出土遺物実測図
(S=1:3)



第48図 袋尻7号填土層堆積状況

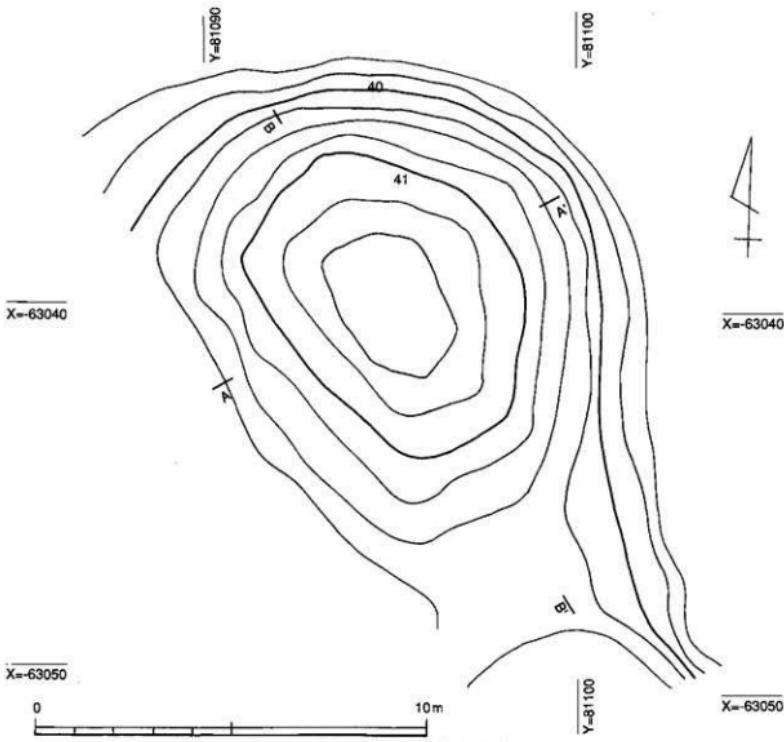
8. 袋尻8号墳

8号墳は本遺跡群の北側に位置し、尾根伝いの東側には7号墳、苔沢池の西側には4号墳がある。調査前の地形測量で標高40~41m、径約14mの円墳と思われたため、墳頂部を中心の調査を進めた。北側と南側の一部はすでに削平されていたために墳丘の状態を完全に把握することができなかったが、主体部と思われる土壠と墳頂部から大型土器が計3個出土した。

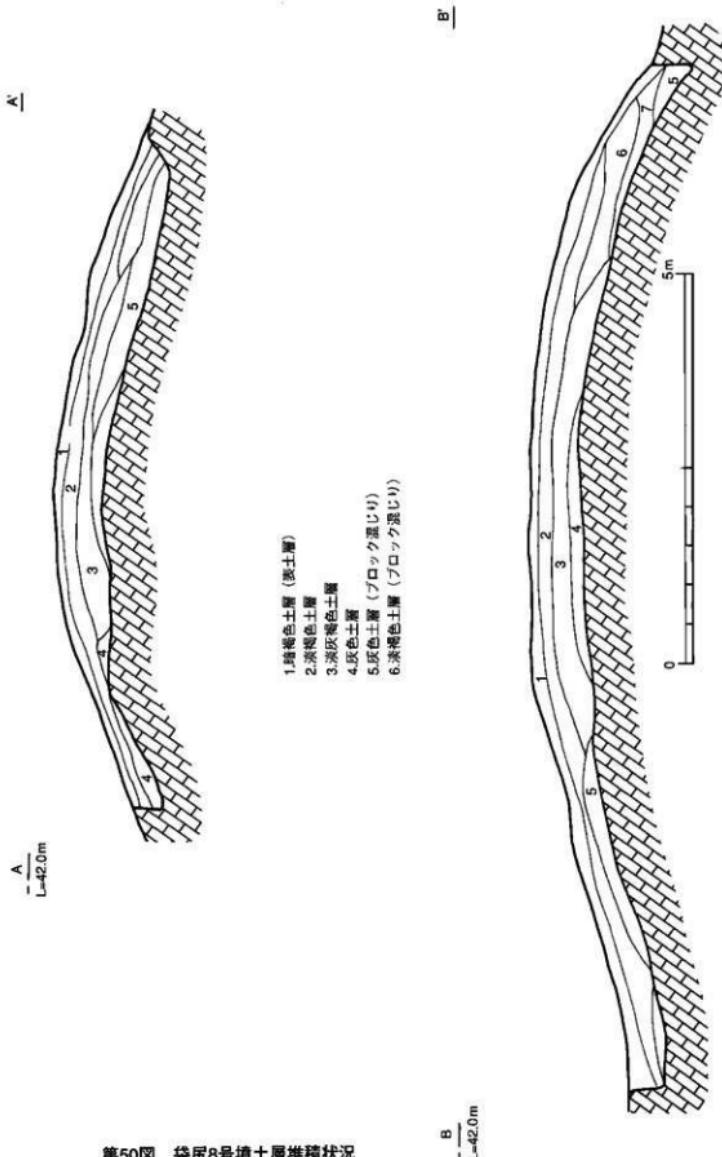
＜墳丘について＞（第49図）

調査の結果、上端径約6m下端径約14mを測る円墳であることが確認された。墳丘は尾根上の地形に約60cm前後の盛土をして墳丘を形成していた。旧表土はなかったが、盛土は地山を削った土が盛られていると思われる（第50図）。地山直上は主体部西側の灰色土を削った土を約数cm~30cm前後盛り、その後、墳丘基盤を造成する際に削った土を盛ったものと思われる。

周溝などの外部施設は確認されなかった。

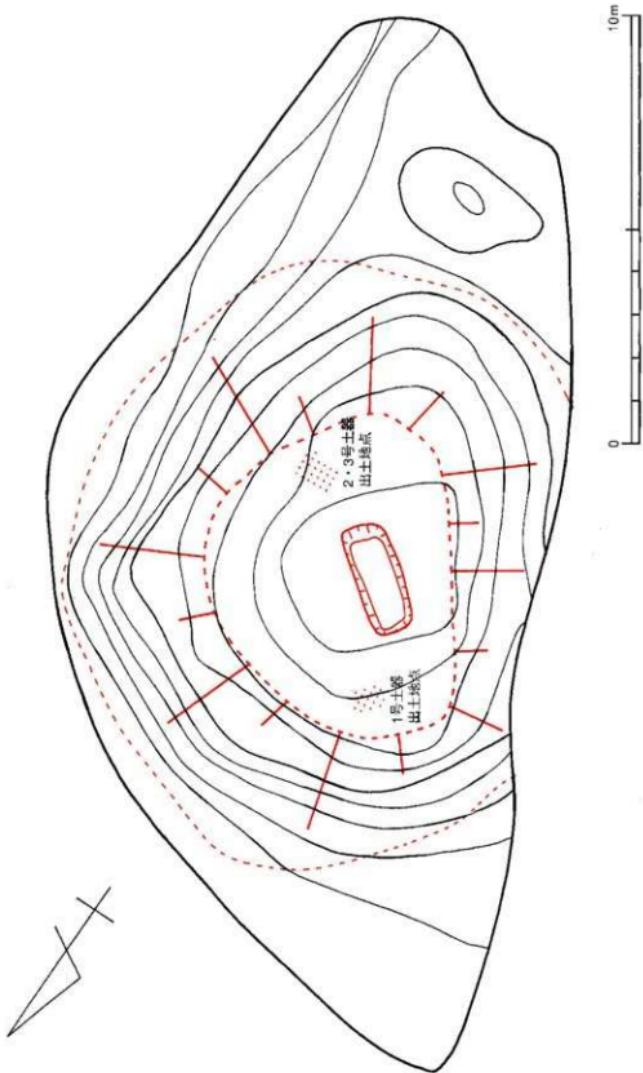


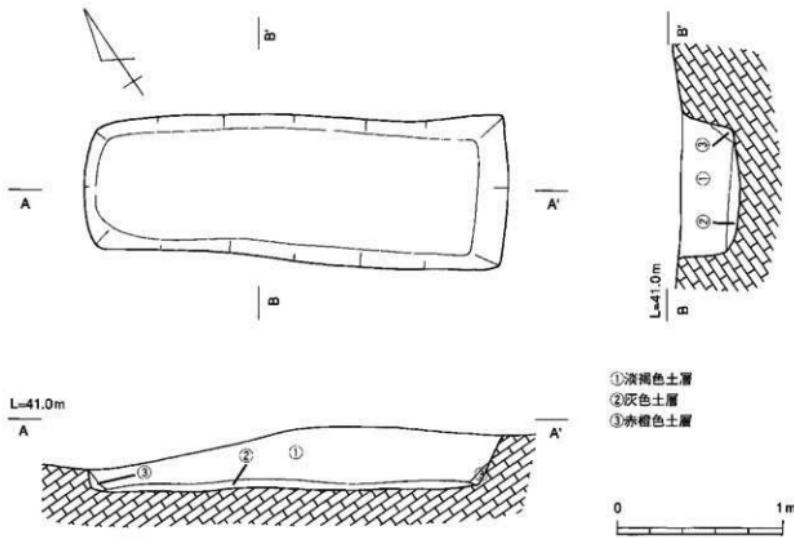
第49図 袋尻8号墳調査前地形測量図



第50図 袋尻8号填土層堆積状況

第51図 袋尻8号墳調査成果図





第52図 主体部実測図

<主体部について>（第52図、図版19）

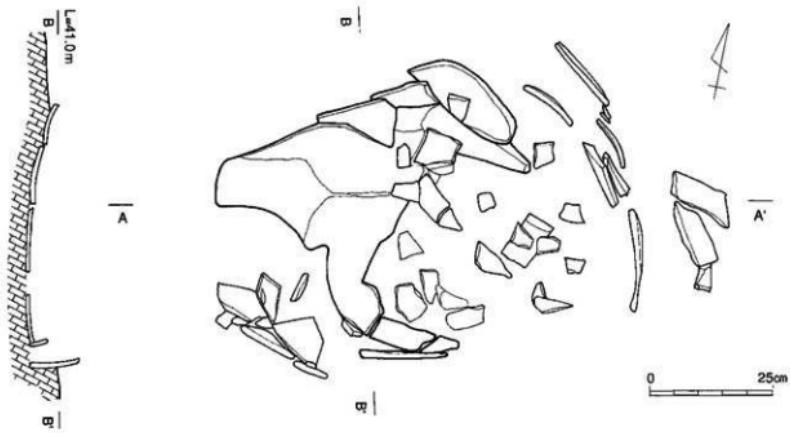
主体部は墳丘の中央から南西側より地山を掘り込む形で検出された。墓壙の平面形は隅丸長方形、断面形が逆台形を呈し、上面は長さ257cm、幅80~90cm、底面は長さ223cm、幅60~70cm、深さ約40cmを測り、主体部の中心軸はN-55°-Wである。壁はやや外側に開き気味に立ち上がっているが、墓壙底面の壁際の土層から壁の上面が崩れたものと考えられる。墓壙底面の中央でわずかに窪みが見られたが、その上にほぼ全面にわたって灰色粘土質上が厚さ約6cm程度、平坦になるように敷き詰められていた。そのため木棺を直に床に置いたのではなく粘土床の上に置いたと思われる。棺材や釘などの木棺の痕跡は発見できなかったが、床面が平坦であることから削竹形木棺ではなく箱形木棺が使用されたと考えられる。副葬品は全く出土しなかったため、主体部についての詳細な時期は不明である。

<墳頂部出土上の上器について>（第53・54図、図版20）

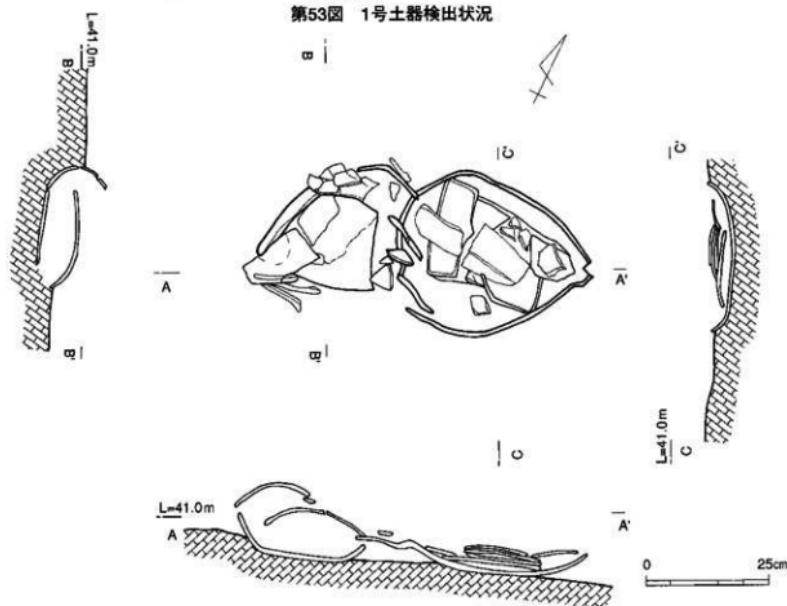
墳頂部から主体部の両側から大型土器が出土した。主体部の北西側（1号土器）は単独で、南東側（2・3号土器）は2個出土した。

1号土器（第53図）は主体部から北西に約2mの所から約85cm四方の範囲で出土した。土器は横倒しの状態で出土し、その中心軸はW-8°-Sで口縁部は北東側を向いていた。横倒しになった上器の底の部分は（脚部）水平が保たれていたが、中からは遺物は出土しなかった。

2・3号（第54図）土器は主体部の南東約1mの所から100×50cmの範囲で出土した。双方とも横倒しで、口縁部を合わせた「合口」の状態で出土した。中心軸はN-58°-Eであり、2号土器の口縁



第53図 1号土器検出状況



第54図 2・3号土器検出状況

部は欠損しているが北西に、3号上器は北東に向いている。3号上器の口縁は故意に打ち欠かされて、3号土器自体が2号土器の蓋の役目をしていた。2号上器から3号上器に向かって傾斜しているが、双方の土器の中から遺物は出土しなかった。

＜遺物について＞

1号土器は墳頂部の主体部北西側から出土した大型の壺形土器で（第55図、図版66）、口径20cm、口縁部の厚さ約1cm、胴部の厚さは1.5cmを測る。胴部下からは出土したが接合・復元はできなかった。口縁部はやや内側に内傾する単純口縁で、頸部には突帯が付いている。胎土は粗く1ミリ以上の砂粒を含み、内外面は風化のためかざらざらしている。突帯の下には2段に羽状文が施されている。

このように頸部に突帯が付く土器の出土は県内では珍しく、松江市の柴尾3号墳の墳頂部から出土した壺⁽¹⁾や鹿島町の草出遺跡のSD-03から出土した装飾壺⁽²⁾など数例である。これらは鳥取県東部地域で盛行するタイプと類似する。

2号土器は墳頂部の主体部南東側から3号土器とともに出土した大型の壺形土器で（第56-1図、図版66）、口径は30.5cm、厚さ約1cm、胴部の最大径は38.3cm、厚さ0.5cmを測る。口縁部は複合口縁で、稜は水平に突出しており胴部はやや肩の張った感があり、調整は内外面ともヨコナデが施され、頸部外面はハケ状工具の調整の後ヨコナデが施されている。胴部外面はタテナデの後にヨコナデを、胴部上面には波状文を施し、内面はケズリによって調整されている。胎土は1mm以下の石英や長石などの砂粒をわずかに含んでいるが緻密で、焼成は良好である。

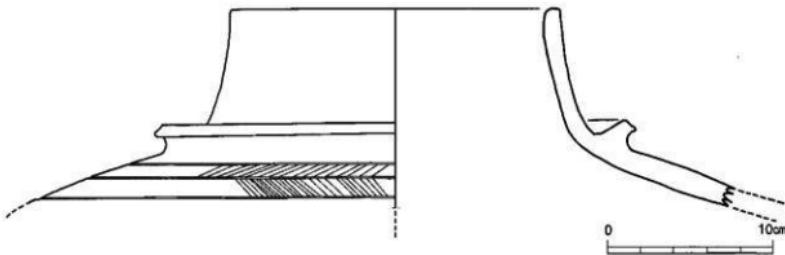
草田7期の特徴を持ち、古墳時代前期のものと思われる。

3号土器（第56-2図）は口縁を故意に打ち欠いて2号土器の蓋の役目をしていた。そのため口縁部ではなく口径はわからないが胴部の最大径は35cm、厚さ約1cm、底径8cmを測る。胴部上面に沈線文を施し、内外面ともハケ状工具による調整の跡が見られる。底部は丸底に近い平底である。

＜小結＞

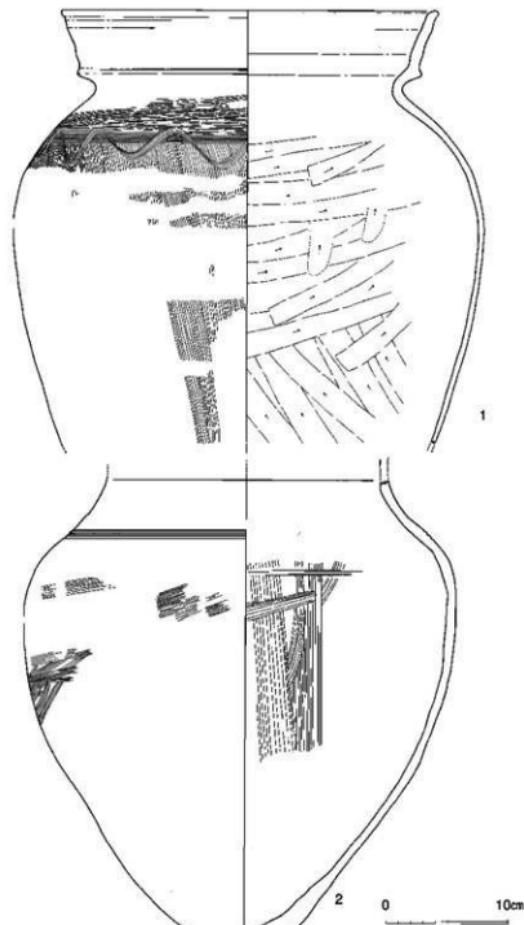
8号墳では墳頂部から検出状況が異なる大型土器が2ヵ所から出土した。つまり単独で出土した1号土器と、複数で「合口」で出土した2・3号土器である。本遺跡群では4号墳の墳頂部から出土しており、他の遺跡の出土例と比較しながら8号墳の特徴を考察してみた。

まず墳頂部出土の大形土器の性格については埋葬施設としての“土器棺”と埋葬施設への“供献土器”的2種類に大別される⁽³⁾。8号墳の2・3号土器の場合、①—墳頂部から出土—横倒しの状態—



第55図 袋戻8号墳出土遺物実測図（1号土器）

複数出土一タイプは埋葬施設であると考えられる。「合口」には2種類あり、8号墳の2・3号土器のように口縁部と頸部を合わせるタイプは出土例として米子市の陰田60号墳の上体部3から出土した大型の壺形土器があげられ、小堀墓と考えられている⁽⁴⁾。もう1つは口縁部どうしを合わせるタイプで4号墳や奥方12号墳出土の大型の壺形土器などがあげられる。しかし奥方12号墳の場合2号土器の口縁部は1号土器の中に落ちていたため4号墳と同じであるとは断定はできない⁽⁵⁾。



第56図 袋尻8号墳出土遺物実測図 (2・3号土器)

これらが本当に埋葬施設であったかどうかは人骨が出土しなかったため明確には断言できない。しかし4号墳の土器棺Ⅰの場合は横倒しの土器の底（胴部）に人為了に砂質土を敷き副葬品と思われる鉄剣が出土した。また土器の口縁部内面には漆と思われる黒色物が施されていることから意図的に埋葬施設として使用していた可能性が高い。また口縁部どうしを合わせるタイプと口縁部と頸部と合わせるタイプの差違は埋葬する人に大きさによって異なるとも考えられる。つまり4号墳の土器棺Ⅰの場合土壤が160cmに対して、8号墳の2・3号土器や陰田60号墳は80cm前後とやや小さい。そのため4号墳は小児用で、8号墳や陰田60号墳は幼児用と推測される。

次に8号墳の1号土器の場合は②—墳頂部から出土—横倒しの状態—単独出土—タイプは蓋の役目する土器がなく、埋葬施設とは断定しがたい。同様の出土例として東出雲町の大木椎現山5号墳が上げられる¹⁰⁾。この1号土器は鳥取県東部に盛行するタイプと類似することから鳥取県東部地域と関わった人が主体部に埋葬されていると考えられる。

今後、主体部と大型土器との関係や埋葬順位や地域的特色などを含めて検討課題が多い。

[註]

- (1)『柴尾遺跡発掘調査報告書（I）』財団法人 松江市教育文化振興事業団 1994年
- (2)『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会 1992年
- (3)「墳丘出土の大型土器」「山陰考古学の諸問題」1986年
- (4)「陰田遺跡群」鳥取県教育文化財团 1996年
- (5)「奥才古墳群」鹿島町教育委員会 1985年
- (6)「大木椎現山古墳群」東出雲町教育委員会 1979年

9. 袋尻A遺跡

袋尻A遺跡は、本遺跡群北側の標高16~23mの北向き斜面上で、大久保池の南側の土手に位置する。そのため遺跡の北側の一部は近年まで溜め池として利用されている。また、周知の遺跡の大久保遺跡（遺物散布地）の一部でもある。調査は池の周辺の斜面を対象とし、表土除去後、各土層を掘り下げながら調査を行った。

層序（第59図）

調査区内の基本層序は、大まかに表土以下、黒茶色粘質土、橙褐色粘質土、黒色粘質土、やや黄色を帯びた地山となっている。また、北側の池に近づく程、土色は濁り、水分を多く含んだ土層が見られた。遺物の多くは南側から池に向かって流れ込む自然流路中から出土した。自然流路内には主に黑色粘質土、茶色粘質土が堆積していた。

遺構（第60図）

調査区西側緩斜面において掘立柱建物跡が1棟検出された。遺構は掘立柱建物1棟のみであったが、その東側には自然にできたと考えられる流路が確認され、遺物としては弥生土器が出土している。

SB-01

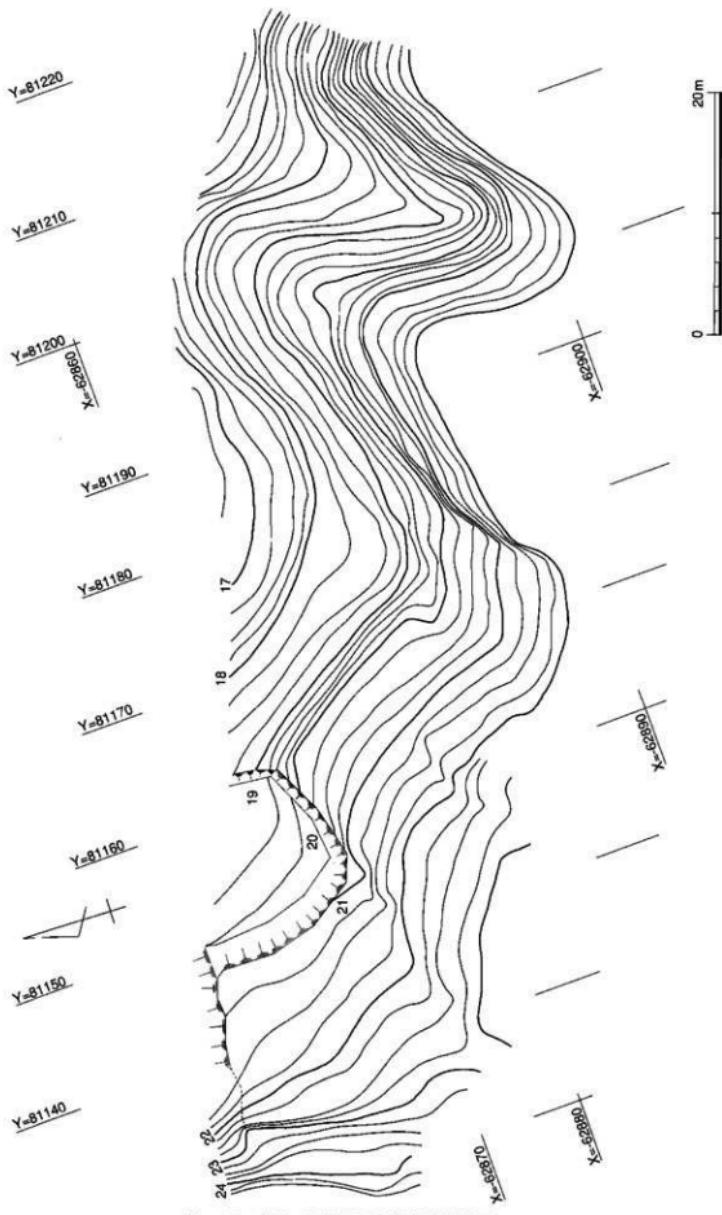
調査区西側の緩斜面において、表土除去後精査した段階で柱穴を8個確認した。標高はおよそ23mで、調査区内においては最も高い所に位置する。規模は1間×3間の掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は桁行き1.8~2.0m、梁行3.0mである。柱穴の平面はいずれも楕円形を呈しており、検出面の規模は上端で直径0.8~1.0m、深さ0.3~0.8mを測る。いずれの柱穴も堆積土は黒色粘質土であった。西側柱穴列と東側柱穴列では穴の掘り込み方向が異なっている。西側は東西方向に長く、東側は南北方向に長い。これは地山の傾斜に合わせるために掘り込む方向を変えたためか、あるいは柱を立てる際の手順として意図的に方向を変えて穴を穿ったものとも考えられる。また、2つの柱穴からは柱を支えるための石が確認された。その他には掘立柱建物跡に伴う遺物は出土していない。

遺物（第61図~64図）

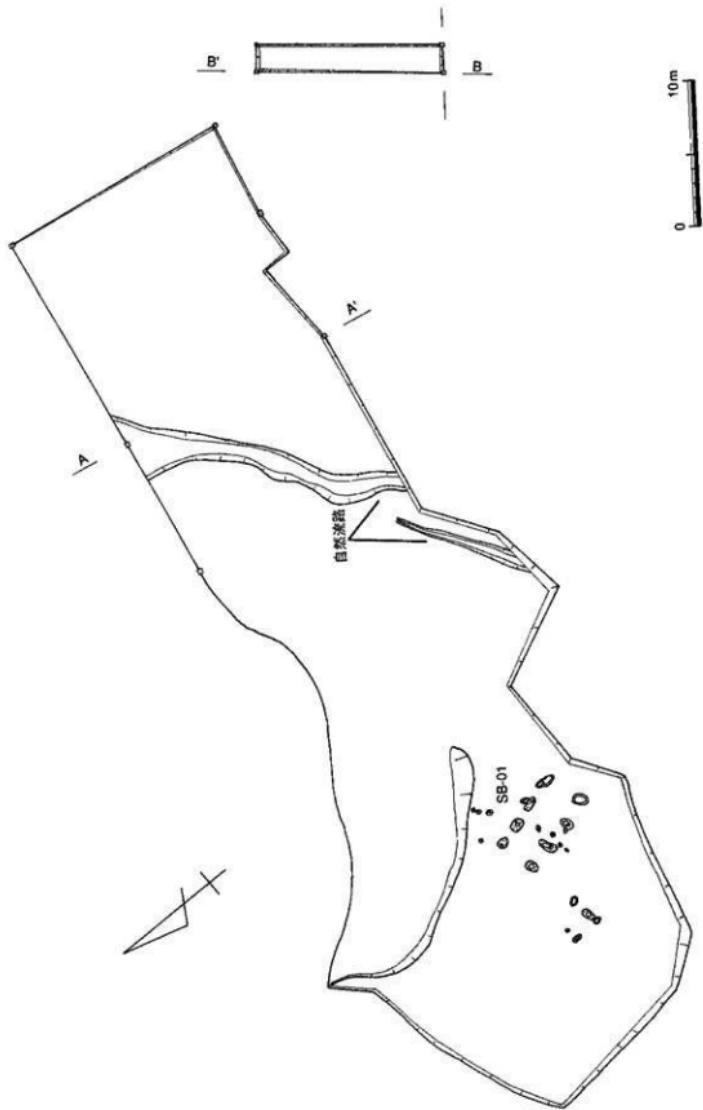
遺物は主に調査区東側の自然流路から弥生時代中期から後期にかけての甕・壺・高坏・底部などが出土地している。この流路はA遺跡南側の調査区域外の斜面から流れ込んでおり、調査区南側には大久保古墳群及びその他に関連する遺構が存在する可能性があると思われる。

壺・甕類（第61図）

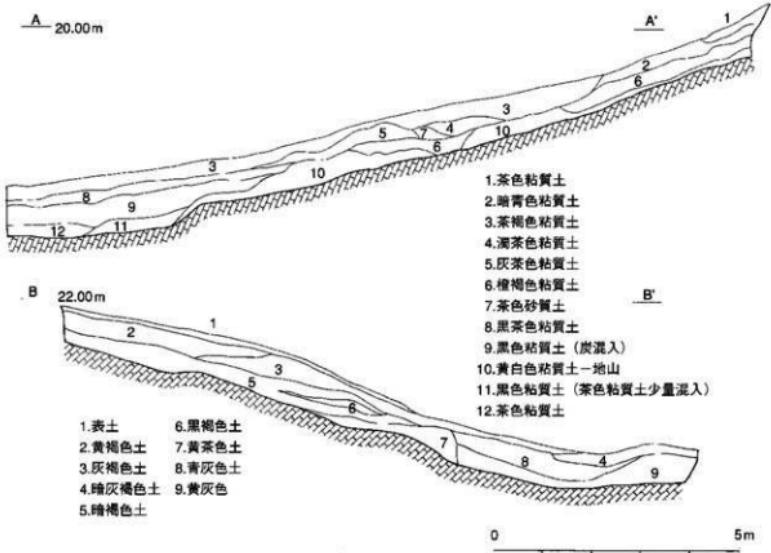
1~6は「くの字」に屈曲する口縁をもつ甕である。
1は「く」の字状に屈曲した頸部に粘土を貼り付け刻目を施したもので、焼成は良好である。
2は同じように頸部が屈曲するが、口縁端部は上下に拡張され、3条の沈線をもつ。頸部には工具による圧痕文帯が廻る。



第57図 袋尻A号遺跡調査前地形測量図



第58図 袋尻A号遺跡調査成果図



第59図 袋戸A号遺跡土層堆積状況

3は頭部に圧痕文帯を施しているが、口縁部には沈線は確認されなかった。

4はやや摩滅しているが、頭部には工具による圧痕文帯が残っている。

5は4条の沈線を施した口縁の端部外間に工具による刻み目が施される。頭部には圧痕文帯が残っている。

6は口縁外面に2条の沈線と、その上に刻み目が施されている。肩部には羽状文が彫る。調整は内外面共にハケメである。

7は壺である。頭部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部は平坦面をもつ。平坦面には4条の凹線を施している。頭部には2条の圧痕文帯が残っている。

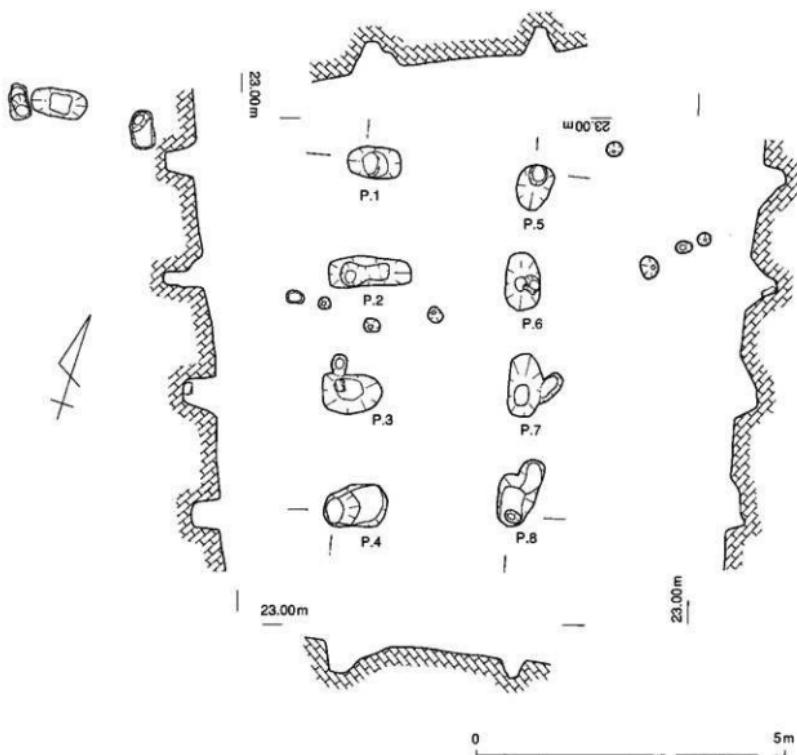
8は頭部がまっすぐに立ち上がり、口縁部が大きく外反する大形壺である。口唇部は上下に肥大し、内面に4条、外面に1条の沈線を施す。肩部はやだれ気味で、2条の連続刺突文があり、頭部には3条の刺突列点文を施している。内外・外面共にハケメ調整である。

9は壺又は壺の肩部である。2段7条の櫛描平行線文と交差に綾糸状線文が3段残っている。内面の調整はヘラ削りとハケメが見られる。ヘラ削りの後にハケメを施したものと思われる。

高坏（第62図）

10~16は高坏である。

10は内傾する口縁に4条の凹線文を持つ高坏である。筒部には櫛状工具による5条の直線文が施される。内面にはヘラ削りが見られる。



第60図 袋尻A号遺跡SB-01実測図

11は内傾する口縁に5条の凹線文をもつ高坏の坏部である。口縁外面には凹線文の上から刺突列点文が2列施されている。外面はヘラミガキで調整され、接合部分には円盤が充填されている。

12は筒部で、多条の櫛描き直線文と3条の刺突列点文が施される。やや器壁が厚く、内面にはしづり痕が見られる。

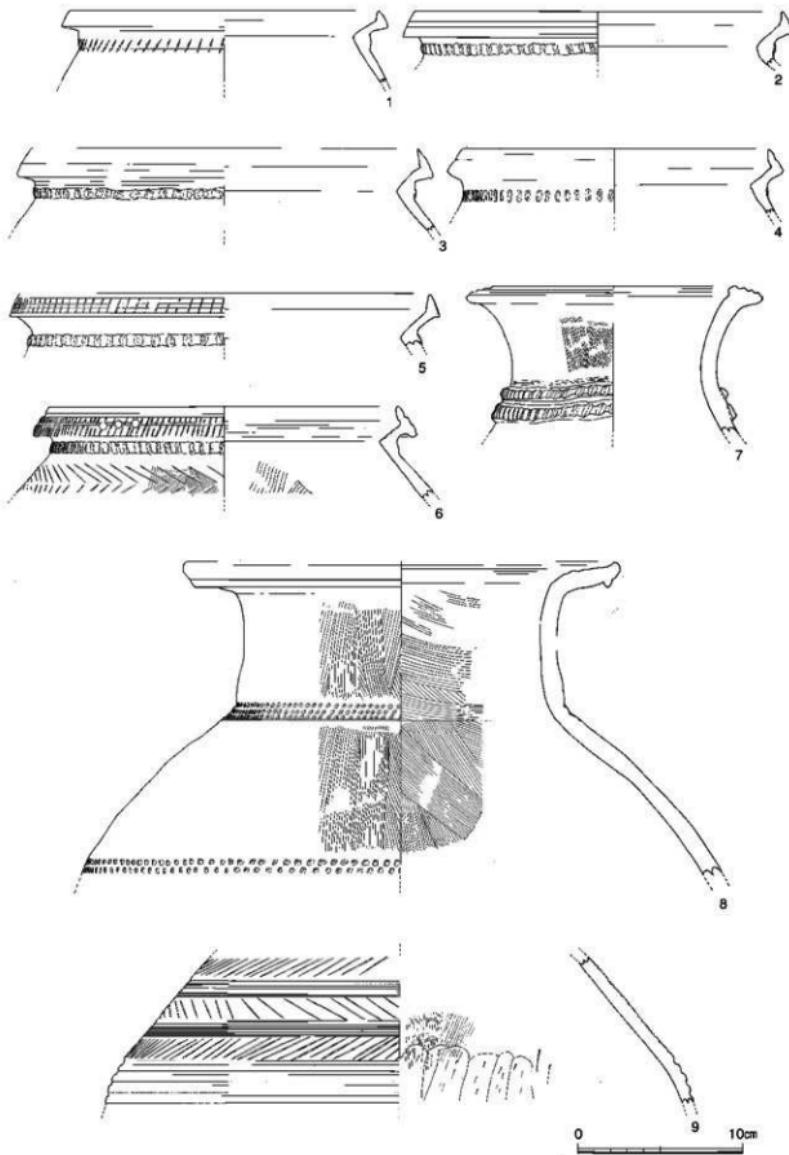
13は筒部で、外面に6条の凹線文とハケメを施す。14は風化のため調整は不明であるが、内面にヘラ削りを施している。

15、16は脚部片である。15は「ハ」の字状に開き、脚端部は段をしてやや上方にのびる。外面に凹線1条が施されている。16は脚端部に2条の凹線を施す。

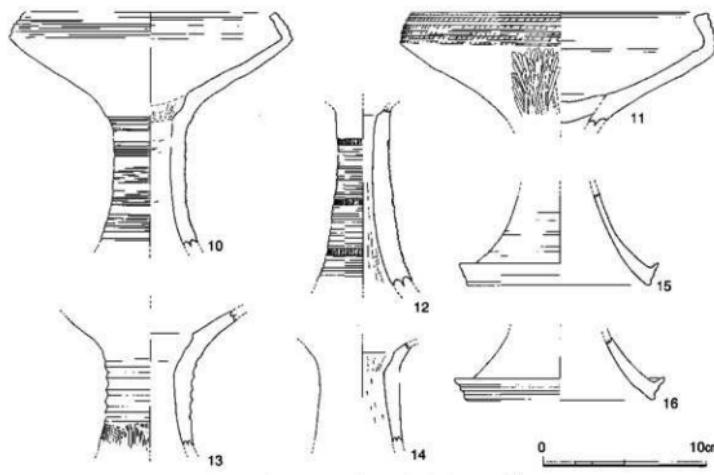
底部（第63図）

17～27は底部片である。

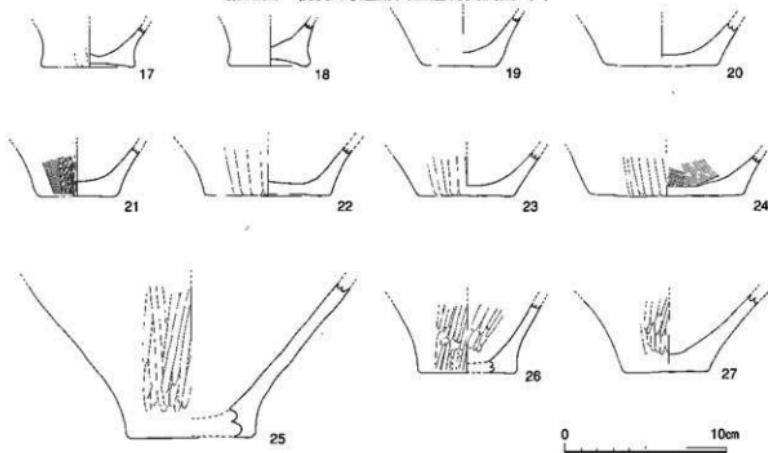
17、18はやや上げ底気味の底部である。24は内面にハケメを施すが、全体として調整は外面ヘラ



第61図 袋尻A号遺跡出土遺物実測図 (1)



第62図 袋尻A号遺跡出土遺物実測図(2)

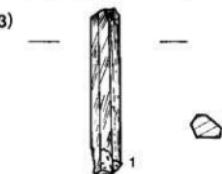


第63図 袋尻A号遺跡出土遺物実測図(3)

ミガキ、内面ナデを施すものが多い。

石製品(第64図)

28は瑪瑙の管玉の未成品である。両端は欠損しており、残存長で3.4cmを測る。



第64図 袋尻A号遺跡出土遺物実測図(4)
(S=1:1)

10. 袋尻B遺跡

袋尻B遺跡は本遺跡群中央、標高33~46mの北向き緩斜面に位置する。この箇所は周囲を山に囲まれており、北側には苔沢池がある。また、東に6号墳、西には横穴墓群が存在する。調査は調査区の尾根筋に対して10m方眼のグリッドを設定して一区画ごとに行った。調査の結果、竪穴式住居跡7棟(SI-01~07)、土坑3基(SK-01~04)、溝状遺構3条(SD-01~03)を検出した。検出した住居跡は標高34~40mの範囲に分布している。

表上下の土層堆積状況は褐色土・茶色土を主としており、遺物包含層は暗褐色土・黒色土である。以前は水田として利用されていたことから段状の地形を呈しており、後世擾乱を受けた箇所も見られた。

SI-01 (第67図)

調査区内の南側、標高の一番高い所で検出された竪穴住居跡である。地山を掘り込んで造られたもので、北側及び東側は削平されていた。平面形は残存部分から隅丸方形と思われる。床面の規模は残存長で東西軸4.2m、南北軸1.3mを測る。壁高は南壁で最大25cmを測り、南壁から西壁一部にかけて幅14~43cm、深さ2~9cmの周溝が埋っている。床面はやや傾斜しており、貼り床は検出できなかった。床面からは柱穴(P1~P3)3個、中央ピット(P4)を確認した。柱穴は上縁径16~25cm、深さ13cmを測る。ピット1からピット2・ピット3までの間隔は2.9mを測る。中央ピットは不整形で、長軸72cm、短軸70cm、深さ26cmを測る。遺物としては南側周溝より土師器壺の口縁部と高坏が出士している。

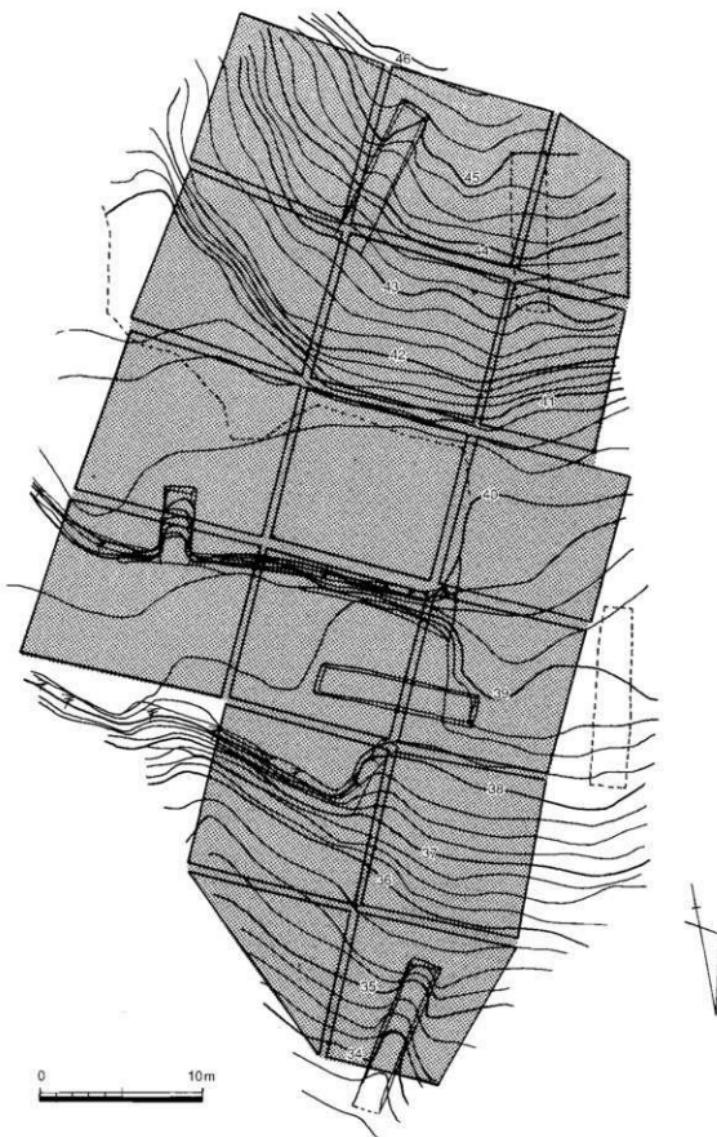
SI-01出土遺物 (第68図)

壺形土器 1は「く」の字に屈曲する口縁をもつ土師器壺の破片である。調整は外面にハケメ、内面に横方向のヘラ削りと口縁付近にハケメを施す。

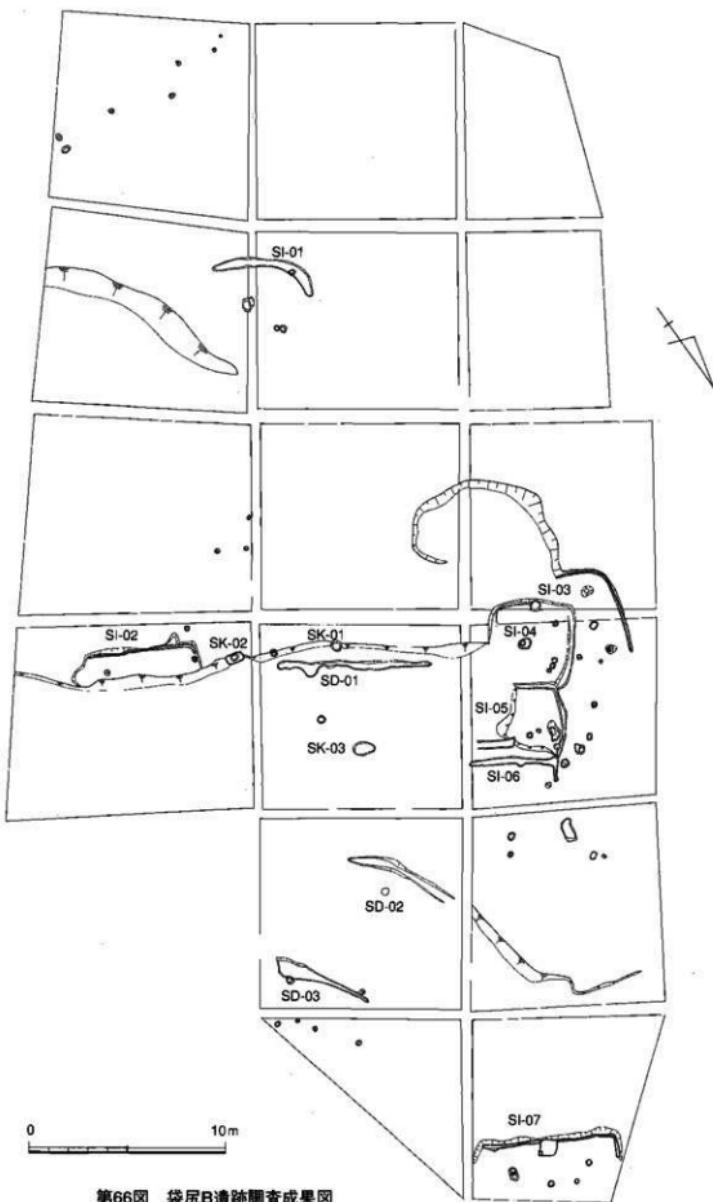
高 坏 2は壺底部の破片である。脚筒部との接合方法は円盤充填法による。風化がひどく、調整は不明である。

SI-02 (第68図)

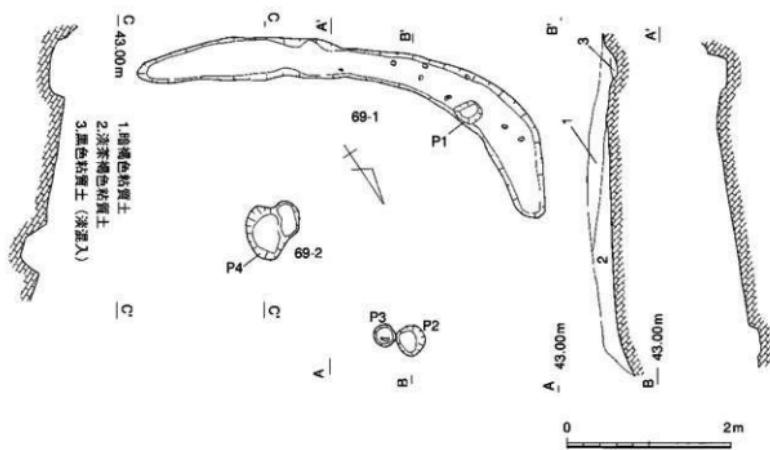
調査区東側より検出された竪穴式住居跡である。北側半分以上が削平されている。平面形は残存部分から方形と思われる。床面規模は残存長で東西軸5.3m、南北軸1.5mを測る。壁高は、南壁で最大24cmを測り、南壁から西壁一部にかけて幅5~10cm、深さ6cmの周溝が壁沿いに埋っている。床面はほぼ水平で、貼り床は検出できなかった。床面から柱穴(P1・P2)2個を確認し、柱穴は上縁径23~26cm、深さ13~24cm、間隔は4.5mを測る。遺物として南側周溝内より土師器高坏が出士している。



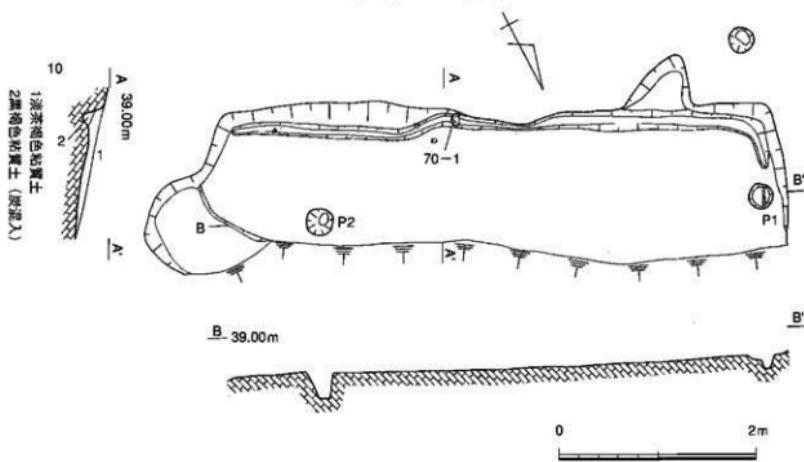
第65図 袋尻B遺跡調査前地形測量図



第66図 袋尻B遺跡調査成果図



第67図 SI-01実測図



第68図 SI-02実測図

SI-02出土遺物（第70図）

高環 高環環部である。外面にはハケメを施した後ナデている。外底には脚部との接合部分に刺突がなされている。

SI-03（第72図）

調査区西側より検出された竪穴住居跡である。地山を掘り込んで造られ、東側は一部削平を受け

ており、北側はSI-04によって切られていた。平面形は残存部分から隅丸方形と思われる。床面規模は残存長で東西軸1.8m、南北軸4.2mを測る。壁高は、南壁で最大38cmを測り、南壁から西壁にかけて幅7cm、深さ8cmを測る周溝が廻っている。床面はほぼ水平で、床面から多量の炭・焼土が確認されたことから焼失した可能性がある。床面からは柱穴(P1～P5)を5個確認した。上縁径27～60cm、深さ23～56cmを測る。上柱穴はピット1・ピット3・ピット5で、間隔は2.7～3.0mを測る。

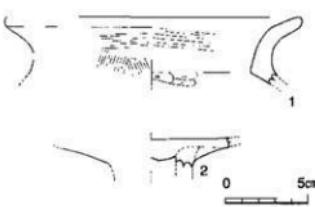
SI-04 (第72図)

SI-03と切りあって検出された竪穴住居跡である。SI-03の北側を削って掘り込まれており、床面の高さはSI-03より約20cm低く位置する。東側は一部削平されている。平面形は残存部分から方形と思われる。床面規模は残存長で東西軸4.5m、南北軸4.25mを測る。壁高は南壁で最大26cmを測り、南壁から東壁及び西壁にかけて幅8～22cm、深さ4～16cmを測る周溝が廻っている。床面はほぼ水平で貼り床を検出した。茶色粘質土を貼り付けて床面を平らに固めている。床面からは柱穴(P6～P9)4個、中央ピット(P10)1個を検出した。柱穴は上縁20～60cm、深さ27～49cmを測る。P6～P9の間隔は1.8～2.35mを測る。中央ピットは円形で長軸70cm、短軸60cm、深さ44cmを測り、黒色粘質土が堆積していた。

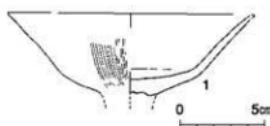
ピット中からは土師器片が、床面より土師器低脚壺等が出土している。

SI-04出土遺物 (第71図)

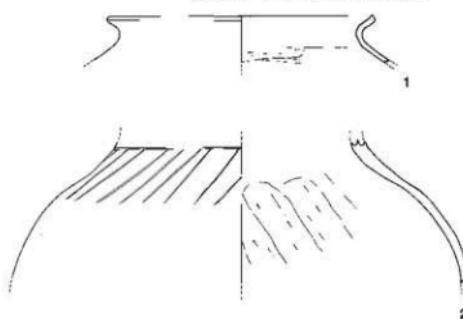
SI-04からは甕と低脚壺、楕形土器が出土した。1～3はピット10内より出土したものである。



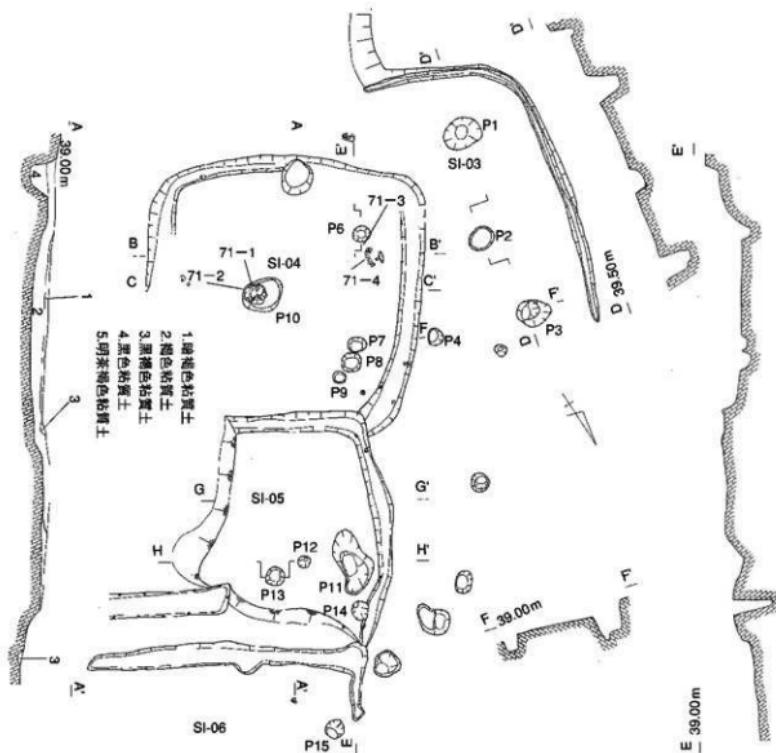
第69図 SI-01出土遺物実測図



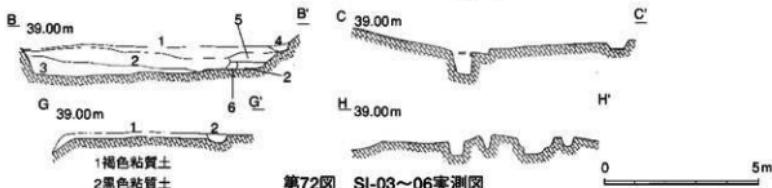
第70図 SI-02出土遺物実測図



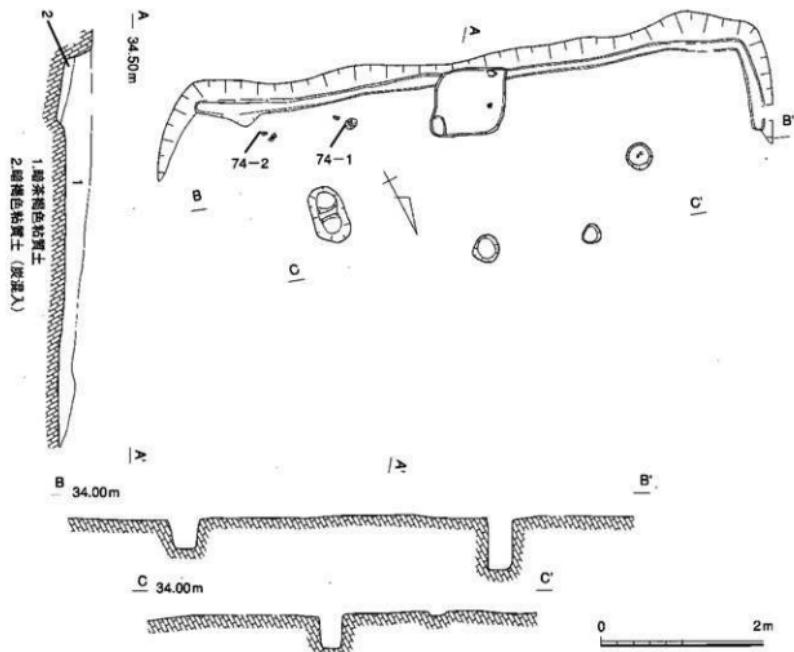
第71図 SI-04出土遺物実測図



1. 暗褐色粘質土（炭混入）
 2. 褐色粘質土
 3. 明茶褐色粘質土
 4. 黑色粘質土（炭混入）
 5. 炭褐色粘質土
 6. 明褐色粘質土



第72図 SI-03~06 実測図



第73図 SI-07実測図

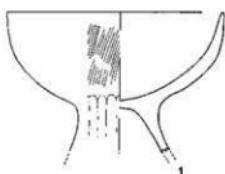
壺（1～2）

1は上師器壺の口縁部である。単純口縁で、端部は平坦面をもつ。内面調整はヘラ削りである。

2は土師器壺の肩部である。肩部から頸部にかけて綾杉文が廻っている。内面調整はヘラ削りである。

3は土師器低脚壺である。端部は欠損しているが、形態から時期は草田7期頃のものと思われる。

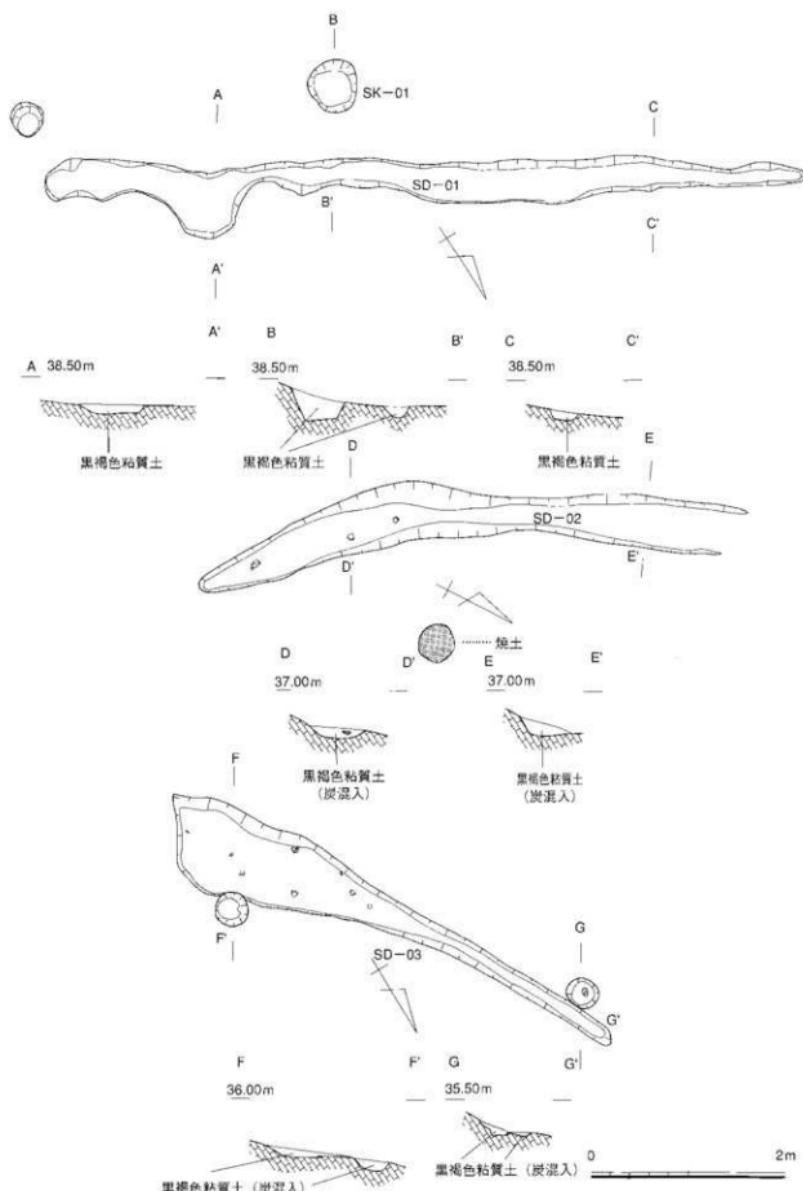
4は瓶形土器である。口縁下に突帯が付き、その3cm程下に差し込み接合された把手が横方向に付いている。調整は外側は不明だが、内面ヘラ削りである。



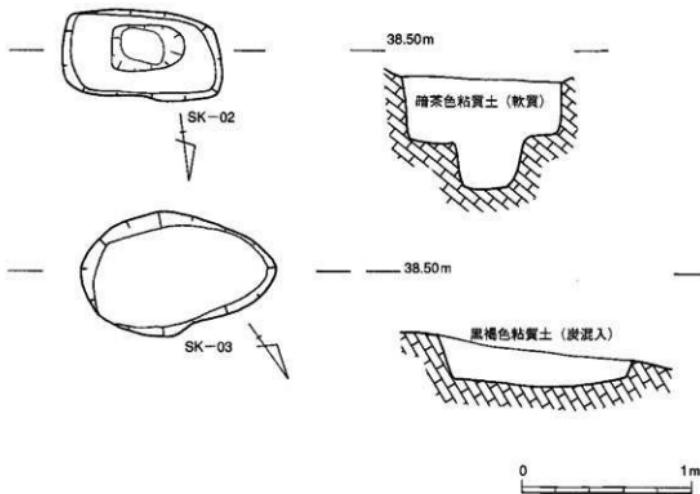
SI-05（第72図）

SI-04の北側で検出された竪穴住居跡である。床面の高さはSI-04とほぼ同じ高さに位置する。東側は削平されている。平面形は残存部分から方形と思われる。床面規模は残存長で東西軸6.5m、南北軸

第74図 SI-07出土遺物実測図



第75図 SK-01、SD-01~03実測図



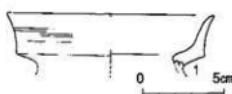
第76図 SK-02、03実測図

4.85mで、壁高は南壁で最大20cmを測る。南壁から西壁にかけては幅10~20cm、深さ15cmを測る周溝が廻っている。床面はほぼ水平であるが、貼り床は検出できなかった。床面からは柱穴(P11~P13)3個、焼土を検出した。柱穴は上縁20~25cm、深さ23~25cmである。遺物として西側周溝より土師器細片が出土している。

SI-06 (第72図)

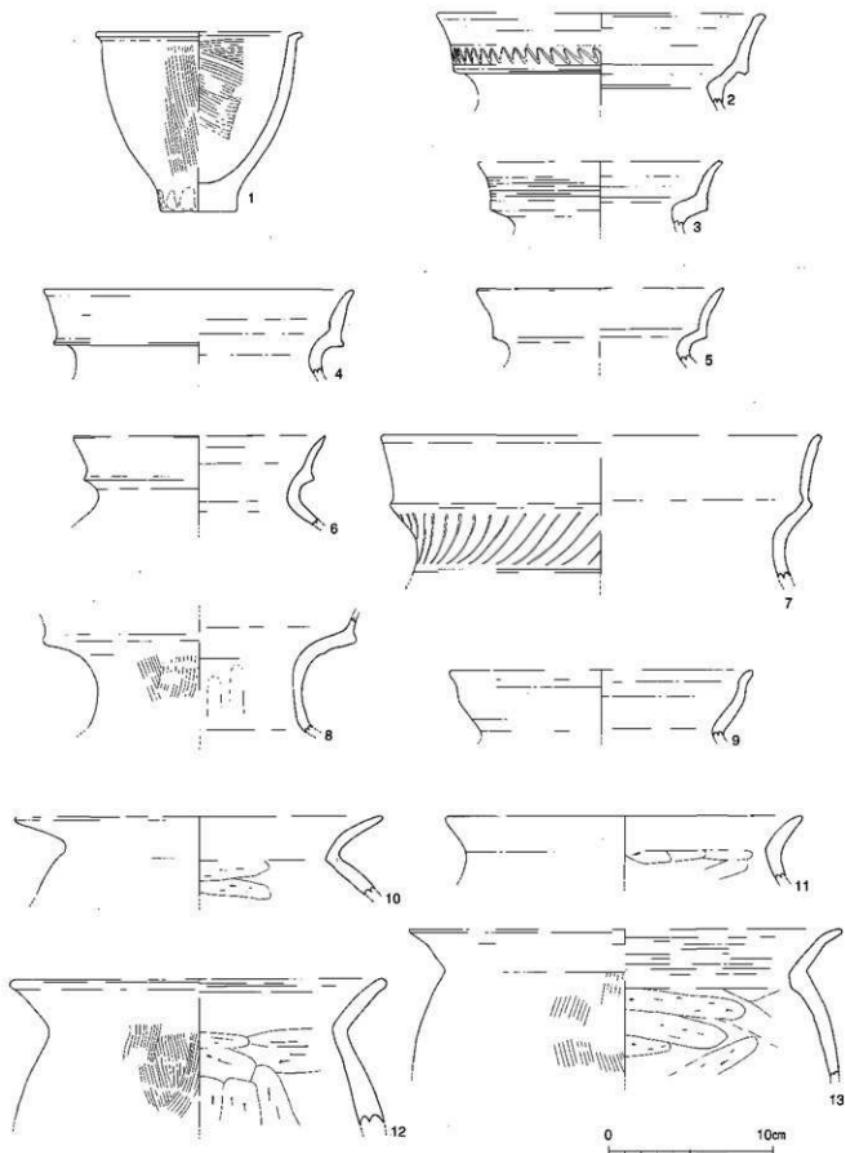
SI-05北側で検出された竪穴住居跡である。上面がかなり削られており、ほぼ床面で確認された。壁は南側及び西側で一部残っており、平面形は残存部分から方形と考えられる。床面規模は残存長で、東西軸4.55m、南北軸1.25mを測る。壁高は南壁で最大10cmを測り、壁際に沿って幅16~40cm、深さ8~15cmを測る周溝が廻っている。床面はやや傾斜している。貼り床は検出できず、床面からは柱穴(P14)1個が確認された。柱穴は上縁30cm、深さ60cmを測る。実測は不可能であったが、遺物として床面より土師器と思われる土器片が出土している。

SI-07 (第73図)

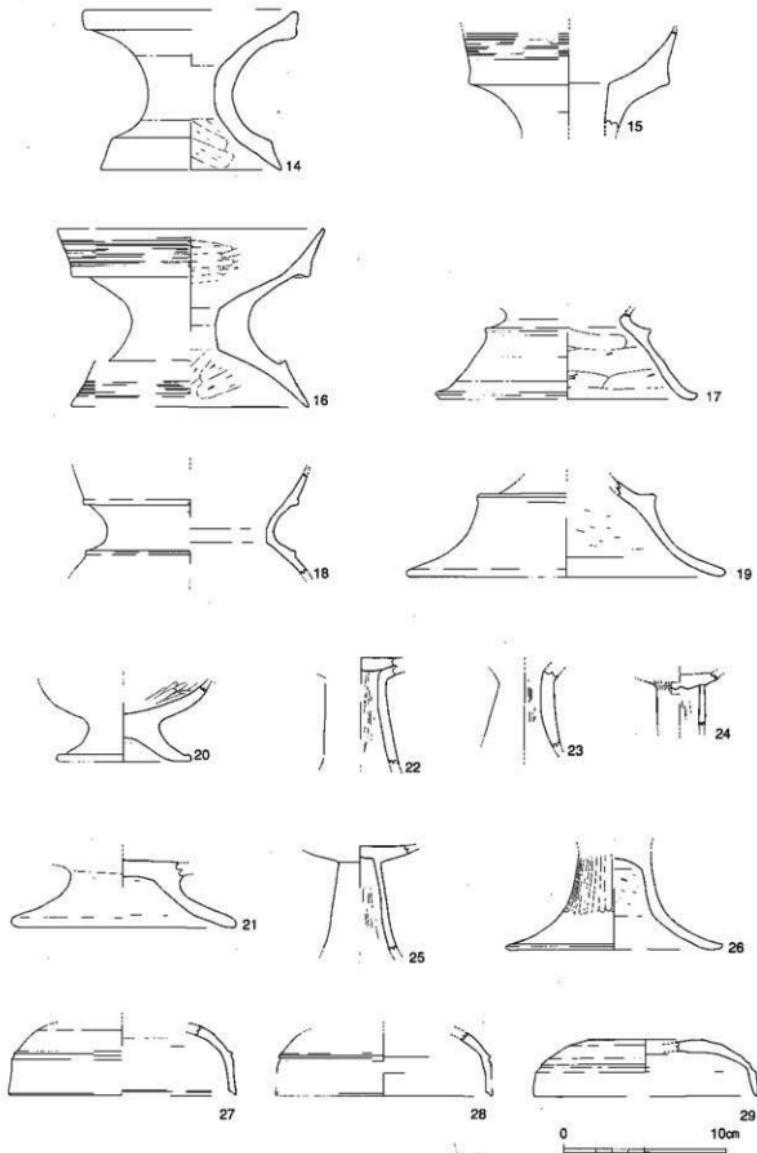


第77図 SD-02出土遺物実測図

調査区北側より検出された竪穴住居跡である。地山を掘り込んで造られており、床面はほぼ水平である。平面形は残存状況から方形と思われる。床面規模は残存長で東西軸6.85m、南北軸約1.5mを測る。斜面の上方を加工して平坦な床面を作り出したものと思われる。壁高は南壁で最大46cmを測り、南



第78図 袋尻B遺跡出土遺物実測図 (1)



第79図 袋尻B遺跡出土遺物実測図 (2)

壁から西壁の一部にかけて幅7~14cm、深さ11cmを測る周溝が廻っている。また、床面より柱穴(P1~P4)4個が確認された。柱穴は上縁部25~35cm、深さ16~62cmを測る。主柱穴はP2~P4で間隔は2.0~2.2mを測る。遺物として床面より土師器高环、須恵器环身等が出土している。

SI-07出土遺物（第74図）

高环 壕底部が腕形を呈し、丸味をもって立ち上がり、外面に稜をもたないものである。調整は外面にハケメ、脚部外面にはヘラミガキを施している。

坏 須恵器の环身である。口縁は比較的垂直に立ち上がり、口縁端部に段を行するものである。

SD-01（第75図）

SK-01より40cm内側で検出された溝状遺構である。全長7.8m、幅9~54cm、深さ30cmの柱穴を1個確認した。土壌内の埋土は黒褐色粘質土で、遺物として土器細片が出土している。

SD-02（第75図）

SK-03より4.7m北側で検出された溝状遺構で、全長5.7m、幅20~97cm、深さ2~8cmを測る。北側に円形径36cmの範囲で焼土を検出した。埋土は黒褐色粘質土（炭混入）で、遺物は弥生土器片が出士している。

SD-02出土遺物（第77図）

1は複合口縁をもつ甕である。外面に工具による櫛描線文が施されている。時期は草田3期頃のものと思われる。

SD-03（第75図）

SD-02より5.0m北側で検出された溝状遺構である。全長5.16m、幅20~97cm、深さ2~8cmを測る。付近から径25cm、深さ13~18cmを測る柱穴が2個確認されている。埋土は黒褐色粘質土（炭混入）で、遺物として土器細片が出土している。

SK-01（第75図）

SI-02西側1.3mより検出された方形のプランの土坑である。地山を掘り込んで造られており、一段掘りの構造をしている。規模は上面で長辺92cm、短辺51cm、深さ85cmを測る。土坑内には軟質の暗褐色粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

SK-02（第76図）

SK-01より4.4m西側で検出された隅丸方形プランの土坑である。地山を掘り込んで造られている。規模は上面で長辺55cm、短辺50cm、深さ34cmを測る。土坑内には軟質の褐色粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

SK-03（第76図）

SK-02より4.7m北側で検出された楕円形プランの土坑である。褐色粘質土層面より掘り込んで造られており、規模は上面で長辺115cm、短辺73cm、深さ21cmを測る。土壌内には黒褐色粘質土（炭混入）が堆積していた。遺物は出土しなかった。

B遺跡出土遺物（第図78～第79図）

甕・壺類（1～13）

1は平底の甕である。内外面がハケメ調整で、口縁部の端部は短く、外反する。

2～6は複合口縁の甕である。2は口縁外面に波状文を施している。

3は口縁外面に平行沈線を施している。

4～6は口縁端部がやや先細になっている。

7は口縁端部が平坦になり、頭部は綾杉状の沈線を施している。草田7期頃のものと考えられる。

8は複合口縁の壺である。調整は外面がハケメ、内面がヘラ削り、ナデである。

9は複合口縁がややだれて稜線がはっきりしない。

10～13は口縁が「く」の字に曲がる単純口縁をもつ甕である。10は胴部の張り出しが口縁以上になるが、11～13は口縁よりやや張り出す程度に止まる程度のものである。

器台（14～19）

14～19は鼓形器台である。

14は器受部の端部が鋭さを欠き、稜の突出も少ない。15、16に比べて古い時期のものと考えられる。

15、16は器受部と脚台部が複合口縁状になり、櫛描文を施す。草田2期頃のものと思われる。

17～19は筒部が太くなり、器受部と脚台部は拡張される。草田6期頃のものと思われる。

低脚坏・高坏（20～26）

20、21は低脚坏の脚部である。脚裾部は広がり、端部は丸くなる。

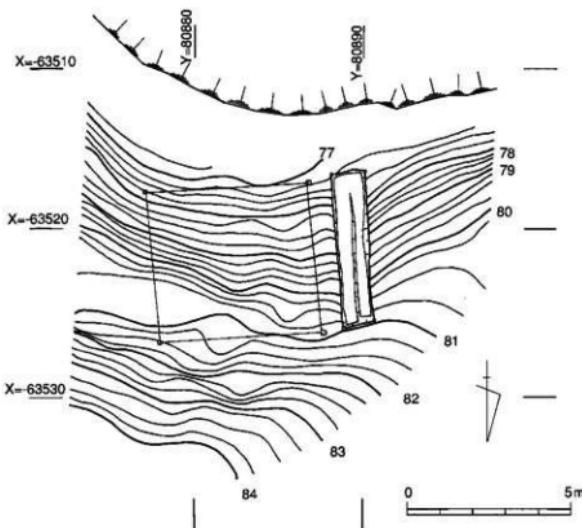
21～26は高坏の脚部である。内面には絞り痕が見られる。

須恵器（27～29）

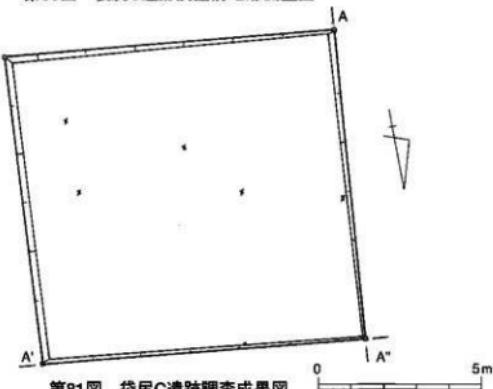
27～29は須恵器の蓋である。27、28は口縁端部に段をもつ。破片のため明瞭回転ヘラ削りは確認できないが、出雲II期頃のものと考えられる。

11. 袋尻C遺跡

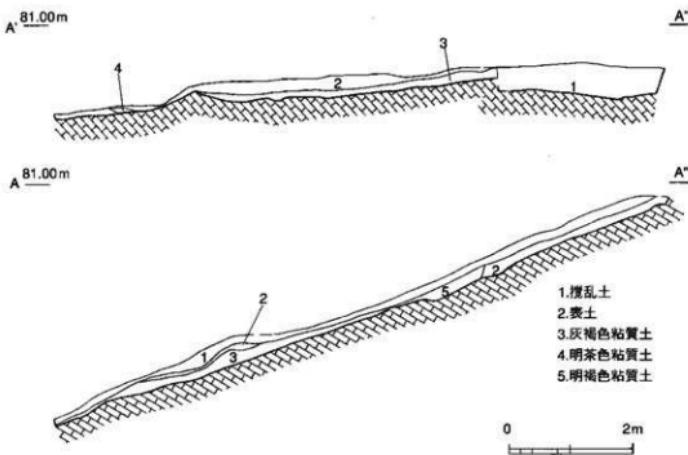
袋尻C遺跡は標高76~85mの北向き斜面上に位置し、北側半分は削平されて元の地形を留めていない。試掘調査において土師器細片が出土しており、本調査では残存する斜面に調査区を設定し、調査を行った。



第80図 袋尻C遺跡調査前地形測量図



第81図 袋尻C遺跡調査成果図



第82図 袋尻C遺跡土層堆積状況

層序 (第82図)

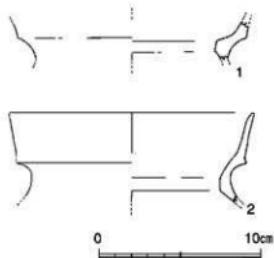
表土以下、褐色粘質土及び茶色粘質土が堆積しており、遺物は褐色粘質土を中心に出土している。また、遺構は検出されなかった。

遺物について (第83図)

遺物は数点出土したが、細片が多く、実測できたものは2点である。いづれも弥生土器甕の口縁部である。

1は複合口縁をもつ甕の頸部である。口縁端部は欠損しているが、形態から弥生時代後期末頃のものと考えられる。

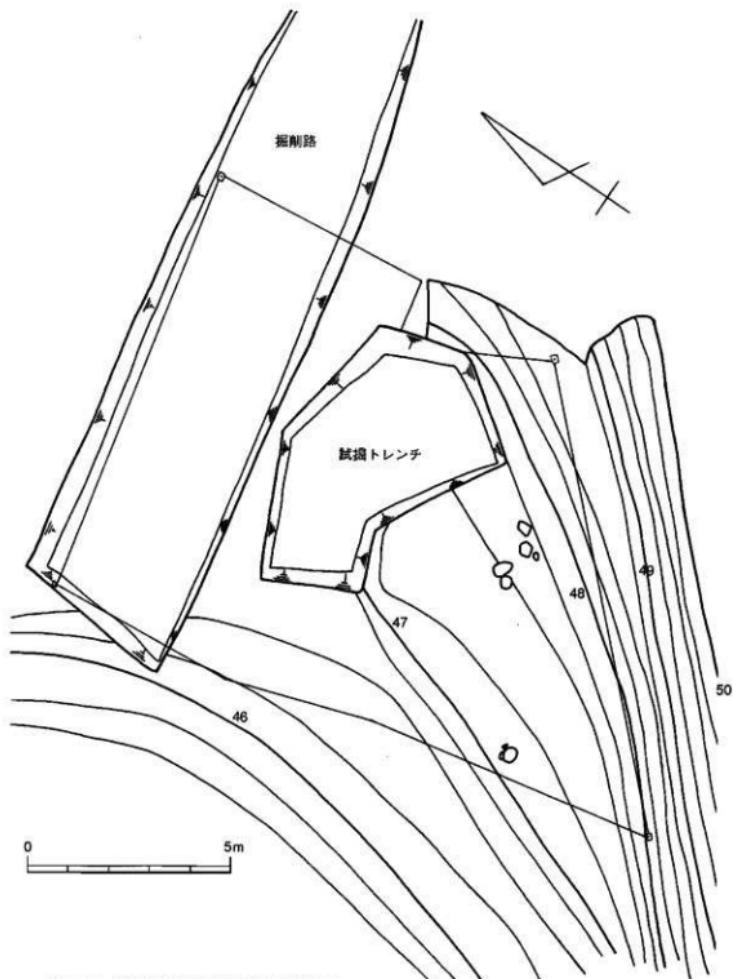
2は複合口縁が端部にかけて薄く伸びるものである。弥生時代後期末頃のものと考えられる。調整は風化により不明である。



第83図 袋尻C遺跡出土遺物実測図

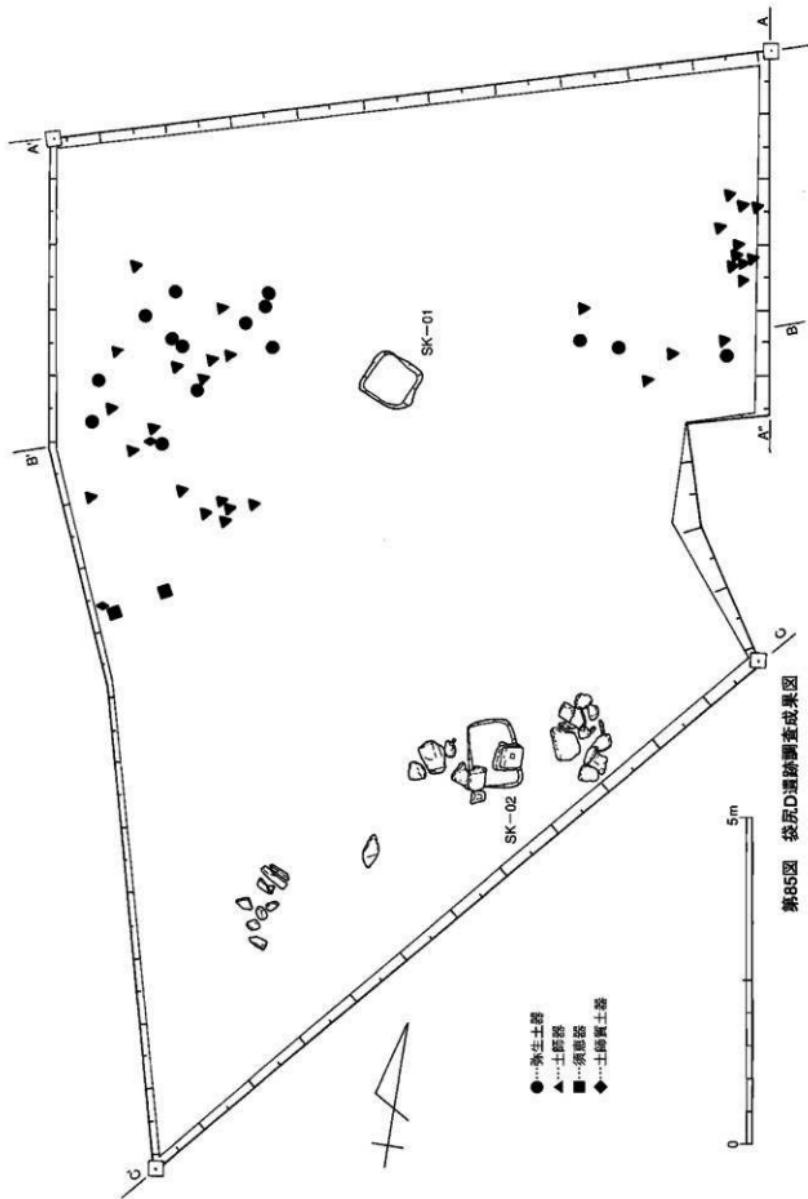
12. 袋尻D遺跡

袋尻E遺跡は本遺跡群南西側、標高46~50mに位置する。周囲一帯は東向きの谷状緩斜面で竹林に覆われていた。試掘調査の結果、黒色粘質土層より弥生土器が出土し、緩斜面に調査区を設定して調査を行った。



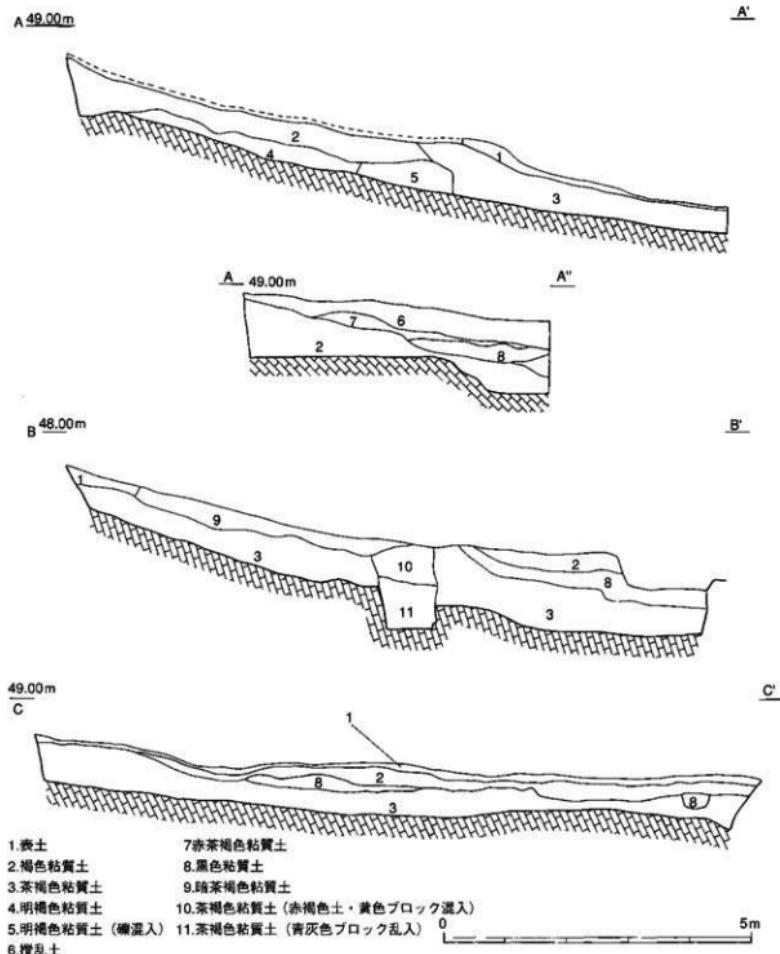
第84図 袋尻D遺跡調査前地形測量図

第85図 桜原D遺跡調査成果図



層序(第86図)

土層堆積状況は大まかに、表土以下、褐色粘質土層、黒色粘質土層、暗茶褐色粘質土層が堆積し、疊混じりの茶褐色粘質土層が一部混入している。遺物包含層は主に黒色粘質土層、暗茶褐色粘質土層であった。



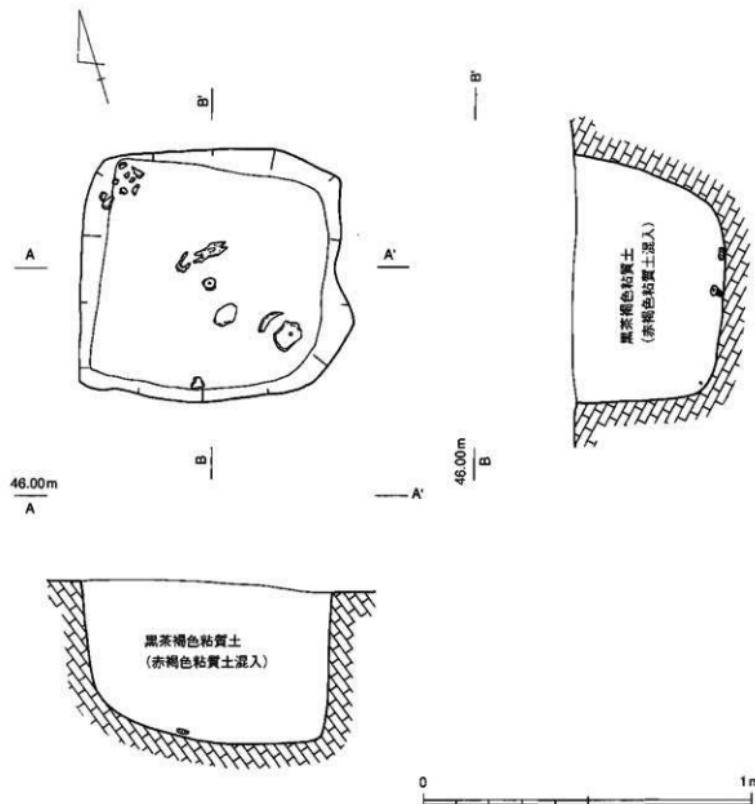
第86図 袋尻D遺跡土層堆積状況

遺構（第85図）

調査区中央と南側から墓壙が2穴（SX-01、SX-02）検出された。調査区の南側には五輪塔が散在しており、SX-02はその直下に位置している。

SX-01（第87図）

SX-01は調査区のほぼ中央で検出された。茶褐色粘質土面から掘り込まれており、辺約70cmの正方形平面プランを呈す。上端下端共にほぼ正方形で深さは最大140cm程度である。内部には軟質の茶褐色粘質土（青・黄ブロック土混入）が堆積しており、ハサミ1丁、土師質土器2点、寛永通寶5枚、木質付着の鉄釘2本が出土した。



第87図 SX-01実測図

SX-01出土遺物（第88図1～7）

1～3は無釉で素焼きの土師質土器である。回転糸切りの底部はいづれも焼成前に穿孔されている。口径は9cm前後、底径は5cm前後を測る。

4は寛永通宝である。合計5枚出土した。鋳着がひどく、外側のものでしか判断できないが5枚とも寛文8年（1668）以降に鑄造された「新寛永」と呼ばれるものと考えられる。

5、6は木質の付着した鉄釘である。鉄釘の断面は四角を呈する。棺に使用されていたものであろう。木質は各々釘の頭部側と先端部側の2箇所に付着している。釘の頭部側の木質は木目が横方向にはしり、釘先端部側の木質は木目が釘と同じ縦方向になっている。

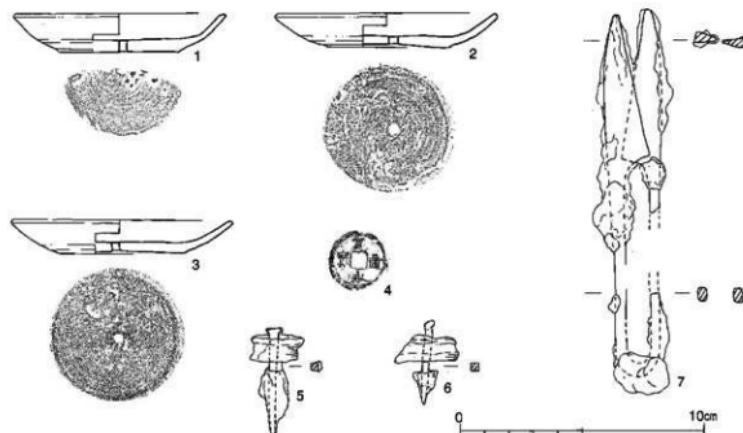
7はハサミである。残存長15.8cmを測る。

SX-02（第89図）

SX-02は調査区南側において褐色粘質土層より確認され、縦95cm、横70cm、最大深さ80cmの平面方形プランを呈する。内部には黒茶褐色粘質土（赤茶褐色粘質土混入）と軟質の黒茶褐色粘質土が堆積しており、鉄釘が38本出土した。墓壙の底面はほぼ水平であった。

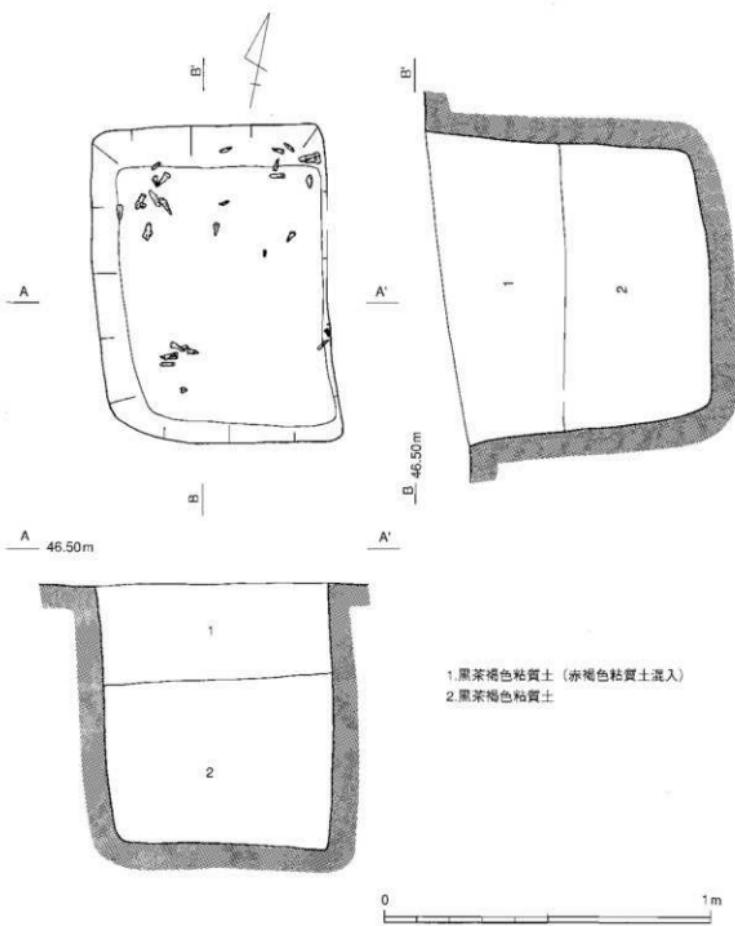
SX-02出土遺物（第90図）

鉄釘は38本出土し、残存長で6.9cmを測るもののが最長であった。全ての釘に木質が付着しており、大きく2種類に分けることができる。横方向に木目のはしる木質が頭部側に付着し、先端側には釘と同じ縦方向に木目がはしっているものと、先端側に付着した木質の木目が横方向にはしっているもの



第88図 SX-01出土遺物実測図

である。前者がほとんどであるが、2、24、30、38などは先端側の横方向の木目がはしつっている。使用箇所による相違であると考えられるが、中でも2、37、38は約90度に曲がっている。



第89図 SX-02実測図

その他の遺物（第91～92図）

甕 (91図)

1～9は複合口縁を有する甕の口縁部である。

1は口縁がやや外反して、端部は薄く尖り気味になるものである。調整は風化のため不明である。

2は口径が1とほぼ同じであるが、口縁部が1ほど外反しないものである。

3・4は器壁が厚く、口縁端部には平坦面をもつものである。4は3に比べてやや外傾する。

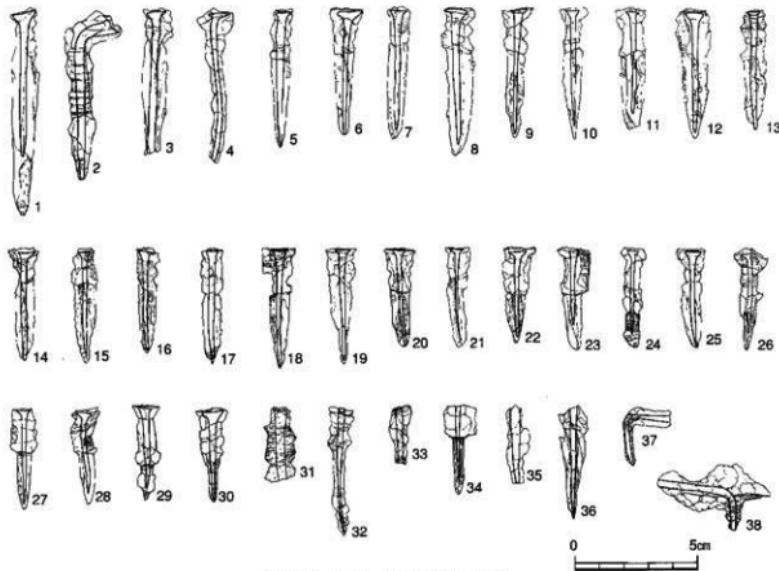
5・6は複合口縁がだれて、稜線がはっきりしないものである。口縁端部はやや丸くなる。6には内面にヘラ削りがみられる。

7は器壁が厚く口縁部に稜線がみられない。口縁部外面には平行櫛書き文がみられる。

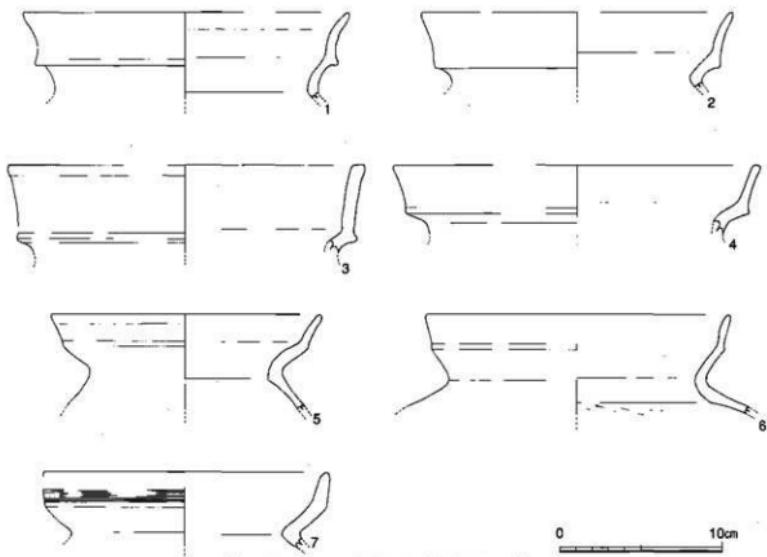
土師質上器 (第92図 8～14)

上師質土器は口縁部が内湾する浅いものである。SX-01より出土したものと同じ形態である。回転糸切りの底部に穿孔してあるもの（8、9）と、そうでないもの（10～14）がある。穿孔してあるものは焼成前に穴を穿たれている。

穿孔してある土師質土器はSX-01で出土したものも含めて5枚出土した。穿孔のサイズも3mm～4mmで口径、底径、器高ともほぼ同様の形態であった。これらと同じような上師質土器が布志名才の神遺跡等でも出土している。



第90図 SX-02出土遺物実測図



第91図 袋尻D遺跡出土遺物実測図（1）

陶磁器（第92図 15～17）

D遺跡からは肥前系の磁器碗が2点、陶胎染付の碗が1点出土している。

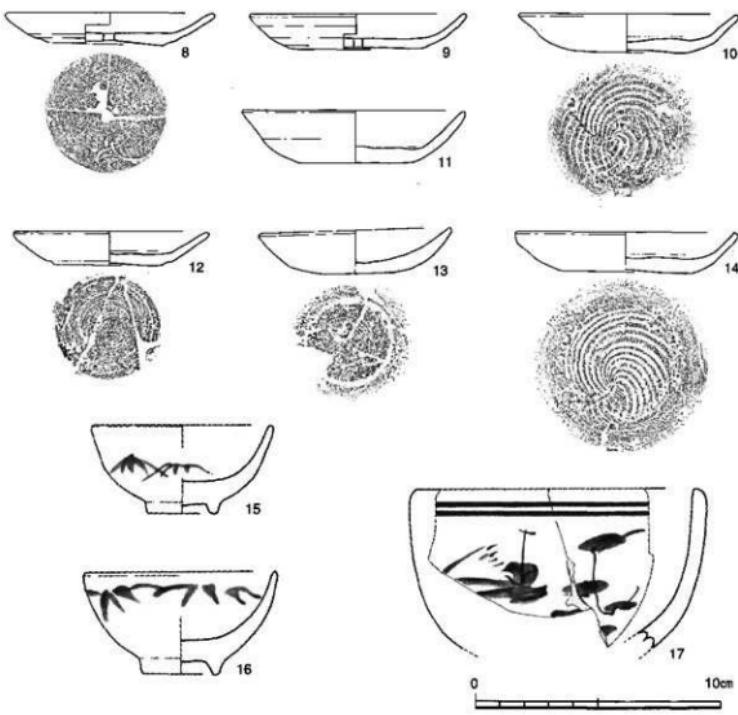
15・16は染付台付碗である。口径7.2cmと7.8cmでほぼ同じ形態である。共に外面に竹籠の文様が施され、高台下部は無釉である。

17は外面に松原と船を施した陶胎染付の碗である。淡灰色の釉がかかる。出土した陶磁器はおよそ17世紀後半頃のものと考えられる。

参考文献

大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブリー55 ニューサイエンス社 1989年

佐賀県立九州陶磁文化館「国内出土の肥前陶磁」展図録 1984年



第92図 袋尻D遺跡出土遺物実測図（2）

13. 袋尻E遺跡

袋尻E遺跡は、本遺跡群南東側、標高70～78mの東向き斜面上に位置する。試掘調査で土師器片が検出されたため、斜面に調査区を設定し、調査を行った。(第93図)

層序 (第98図)

土層堆積状況は主に表土以下、褐色粘質土層、赤茶褐色粘質土層が堆積し、西側においては褐色粘質土層の下に茶色粘質土層が確認された。

遺構 (第95,97図)

検出された遺構は竪穴住居跡1棟 (SI-01)、土壙3基 (SK-01,02,03)、溝状遺構1条 (SD-01) である。(第94図)

SI-01 (第95図)

調査区西側において検出された竪穴住居跡である。赤茶褐色粘質土層上面より掘り込んで造られており、平面形は残存状況から隅丸方形と思われる。床面規模は、残存長で南北軸4.3m、東西軸2.3m、壁高は西壁で最大約35cmを測る。周溝は検出されなかった。床面はほぼ水平であり、柱穴2個が検出された。柱穴は上縁25～75cm、深さ24～55cmを測る。

SI-01出土遺物 (第96図)

SI-01からは弥生土器が出土している。

1は口縁端部を上下に拡張し、直立気味に立ち上がり、外面には平行沈線を施すものである。内面へラ削りである。

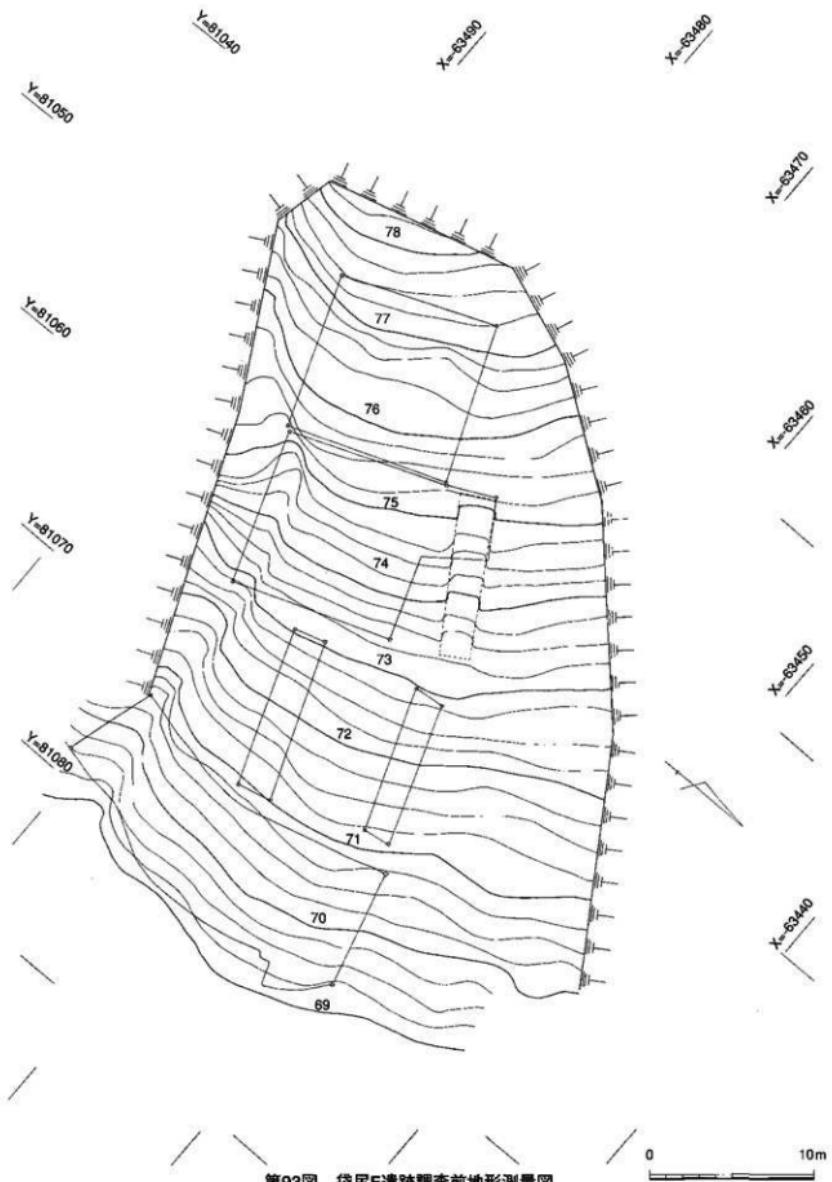
2は口縁が外傾する複合口縁の壺である。口縁部外面には平行沈線文を施している。

SK-01 (第95図)

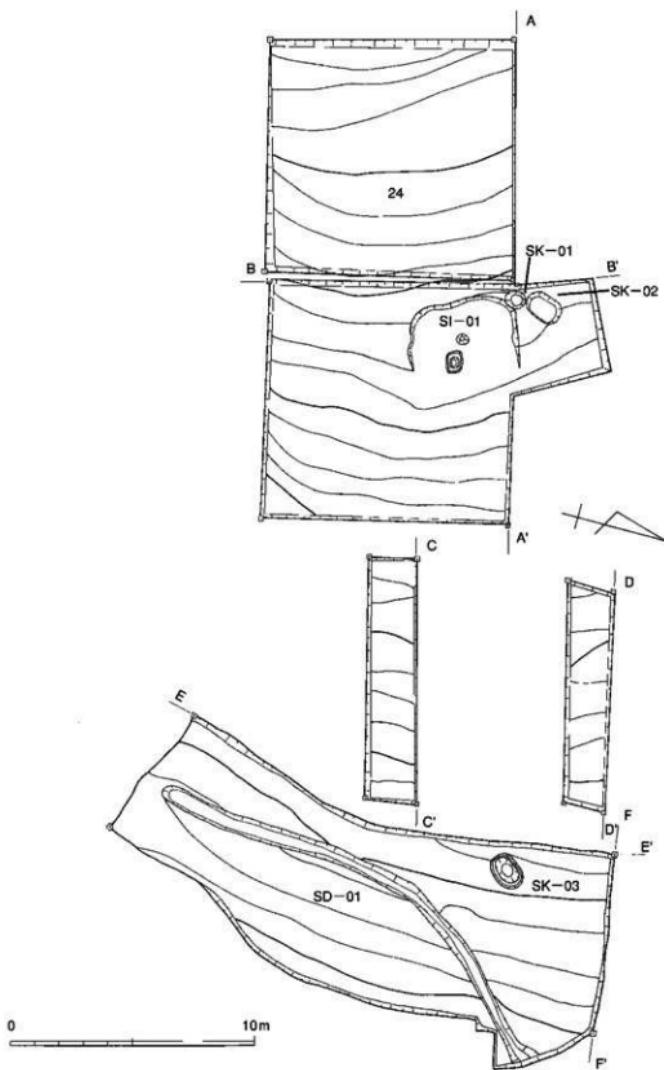
SI-01の北壁を切りあって検出された土壙である。平面は円形で上面径70cm、深さ50cmを測り、土壙内には上部に焦土を含む黒色粘質土層、下部に炭の層がそれぞれ堆積しており、黒色粘質土中より土師器細片が出土している。赤茶色粘質土上層の茶褐色粘質土面から掘り込まれていることから、SI-01より後に造られたものと思われる。

SK-02 (第95図)

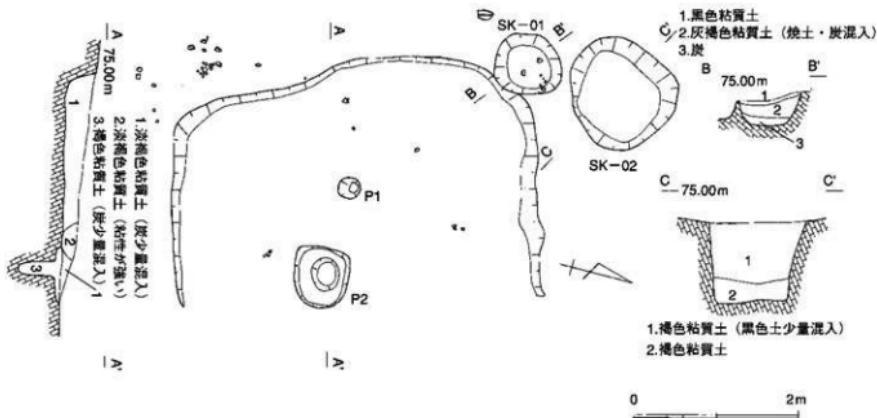
SK-01の北側に隣接して検出された方形プランの土壙である。上面で長辺123cm、短辺120cm、深さ154cmを測る。赤茶褐色粘質土面から掘り込まれており、土壙内には褐色粘質土(黒色粘質土混入)が堆積していた。遺物は出土しなかった。用途については不明である。



第93図 袋尻E遺跡調査前地形測量図



第94図 袋尻E遺跡調査成果図



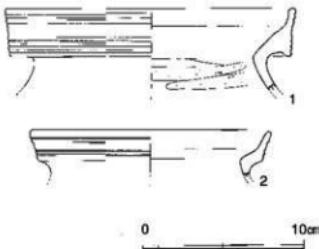
第95図 SI-01実測図

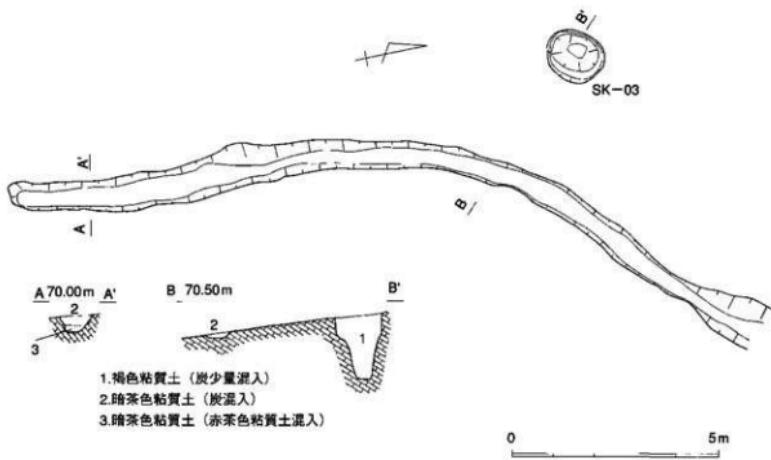
SK-03 (第97図)

本調査区東側において検出された椭円形プランの土壤である。上面で長辺143cm、短辺123cm、深さ162cmを測る。赤茶褐色粘質土より二段に掘り込まれている。土壤内には褐色粘質土(炭混入)が堆積していた。遺物は出土しなかった。

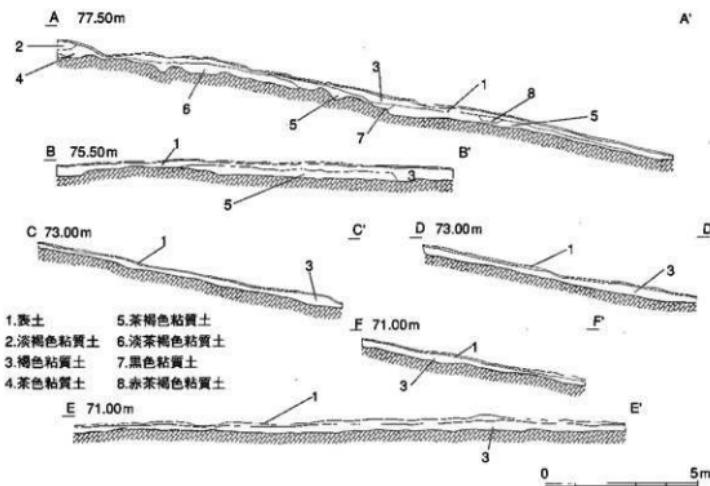
SD-01 (第97図)

調査区東側において検出された溝状遺構である。南北長18.5m、幅40~114cm、深さ14~40cmを測る。赤茶褐色粘質土面より掘り込まれており、暗茶色粘質土(炭混入)が堆積していた。遺物は弥生土器、上師器の細片がそれぞれ出土している。





第97図 SD-01、SK-03実測図



第98図 袋戻E遺跡出土層堆積状況

14. 袋尻F遺跡

袋尻F遺跡は本遺跡群北側、標高28~33mの南東向きの斜面に位置する。平成7年度の試掘調査の結果、表土直下の黒色土より古式土師器の破片が確認されたため、試掘トレンチ付近に調査区約250m²を設定し調査を実施した。また、これより北東側の斜面についてはトレンチ調査を行ったが、遺構及び遺物は認められなかったことから調査区から除外した。

遺跡の概要

調査の結果、遺構は検出されなかったが縄文土器片、須恵器片を含む弥生土器を中心とする遺物包含層を確認した。これら遺物包含層は、表土下第1層の黒色土、第2層の黄茶褐色土であり第3層以下の層は無遺物層である。(第100図)

また、遺物包含層の土層の堆積状況や遺物が調査区の低いレベルから多数出土していることなどからこれら遺物は踏査によって確認されている調査区の上部(西方)の平坦地より流れ込んできたと思われ、ここに何らかの遺構が存在するものと推測される。なお、この平坦地は開発工事区域外であり発掘調査は行われていない為、詳細は不明である。

出土遺物

1. 縄文土器 (第101図)

縄文土器は第2層の黄茶褐色土から1片出土している。

1は晩期の深鉢の口縁部で、口縁端部外面に刻目突帯文を施すものである。

2. 弥生土器 (第101図2~第102図27)

本調査区での出土遺物は弥生土器が大半であり60数点を数えるが、摩滅した小破片が多く、そのうち実測可能なものは以下の27点であった。また、これらはすべて後期と考えられるものである。

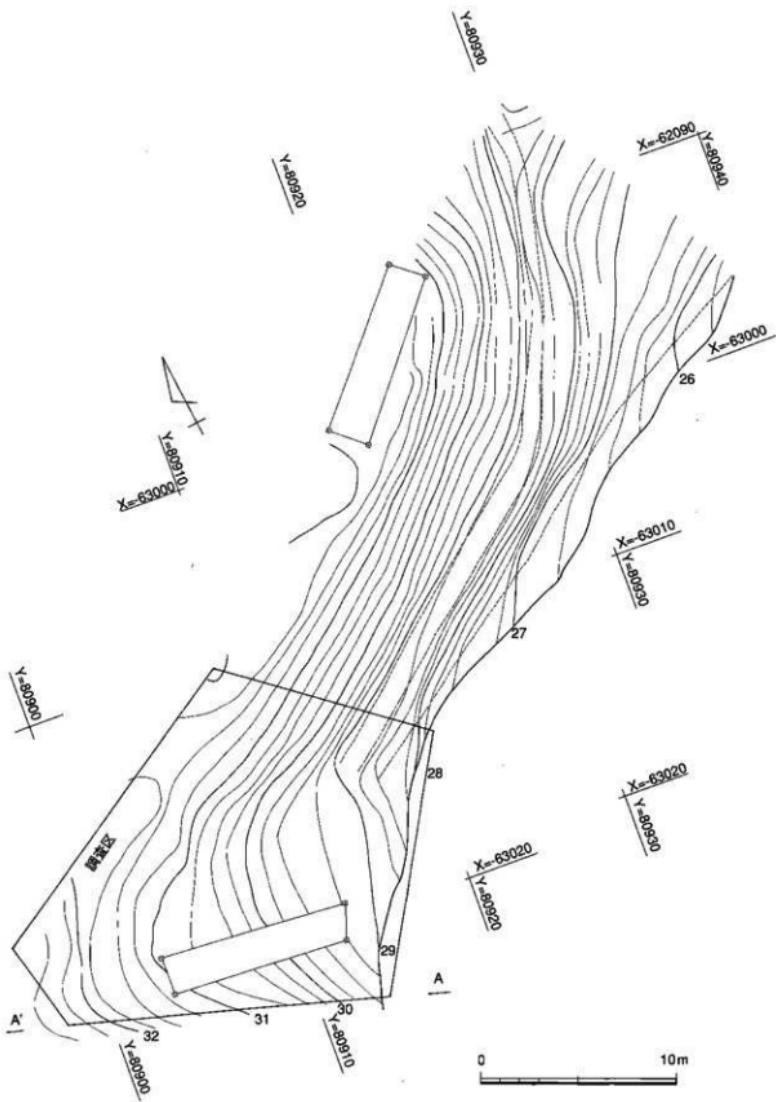
甕 (第101図2~14)

2~8はいずれも複合口縁で、口縁外面に貝殻腹縁の櫛状工具による平行線文を施すもので、草田3期頃に相当するものと考えられる。

2は口縁内面に横ナデでを施すものである。口縁部は比較的短く、口縁部のプロポーションはこの時期にしてはやや古い印象を感じさせるものである。

3は口縁内面は横ナデで、内面屈曲部下までヘラケズリを施すものである。

4. 5. 6. 7. 8は口縁内面は横ナデで、内面屈曲部下までヘラケズリを施し、口縁部は外方に開くものである。中でも4. 5. 6は口縁端部がさらに外方に屈曲する。また、8は口縁部が厚く、内面屈曲部に鋭い稜をもつものである。



第99図 袋尻F遺跡調査前地形測量図

9. 10は複合口縁で、口縁外面のカーブは貝殻腹縁の使用によると思われるもので、草田4期頃に相当するものと考えられる。口縁内面は横ナデ、内面屈曲部下まではヘラケズリで口縁外面に波状文を施す。10においては、口縁部外面の稜の上面にヘラによる平行沈線文が施されている。

11~14は複合口縁で、口縁外面の成形は貝殻腹縁を使用しなくなり、口縁部外面の稜は水平方向に突出している。草田5期頃に相当するものと考えられる。

11は口縁部の内面、外面共に風化が著しく調整はわからない。

12. 13. 14は口縁部の内面、外面共に横ナデ、内面屈曲部下までヘラケズリで口縁外面にいずれも波状文を施すものである。

鼓形器台（第102図 15~20）

15. 16. 17は鼓形器台の器受部であり、内面はヘラミガキで外面の施文には貝殻腹縁によると思われる平行線文を施すもので、草田3期頃に相当するものと考えられる。

18. 19は鼓形器台の器受部で、18は外面は横ナデを施すが内面は風化のため調整はわからない。

19は器受部内面、外面共に風化のため調整は不明である。

20は鼓形器台の脚部であり、外面は横ナデで内面はていねいなヘラケズリを施す。

18. 19. 20については器受部外面に施文などはみられず、草田4期~5期頃に相当するものと考えられる。

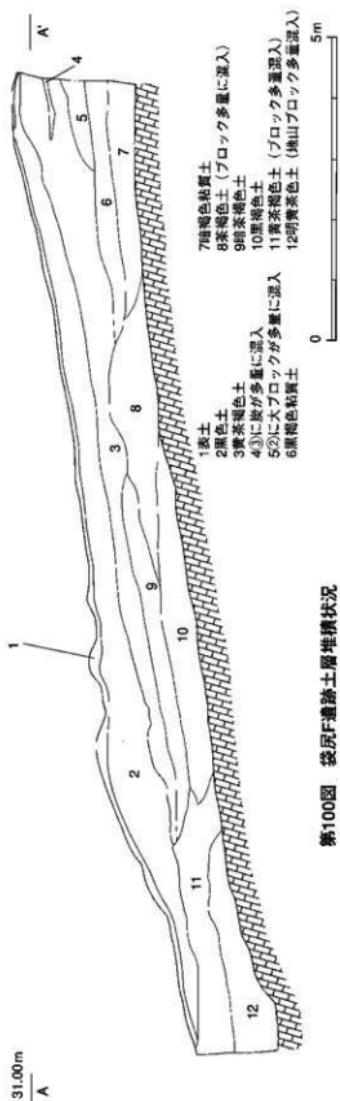
その他の土器（第102図 21~27）

21. 22はミニチュア土器の鉢形の底部と思われるものである。

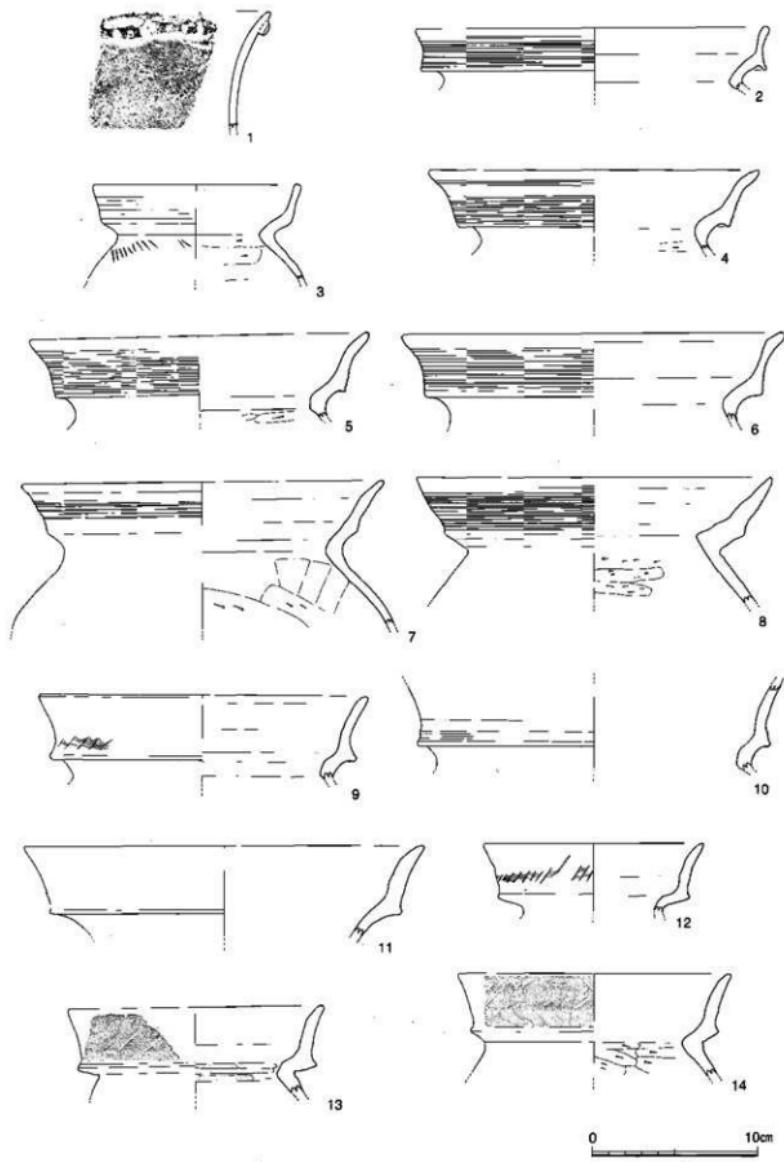
21は手捏ねによるものであり、22は外面にヘラミガキ、内面にナデを施すもので、比較的ていねいな作りである。

23. 25は甕か壺の底部と思われるもので平坦面をもつものである。

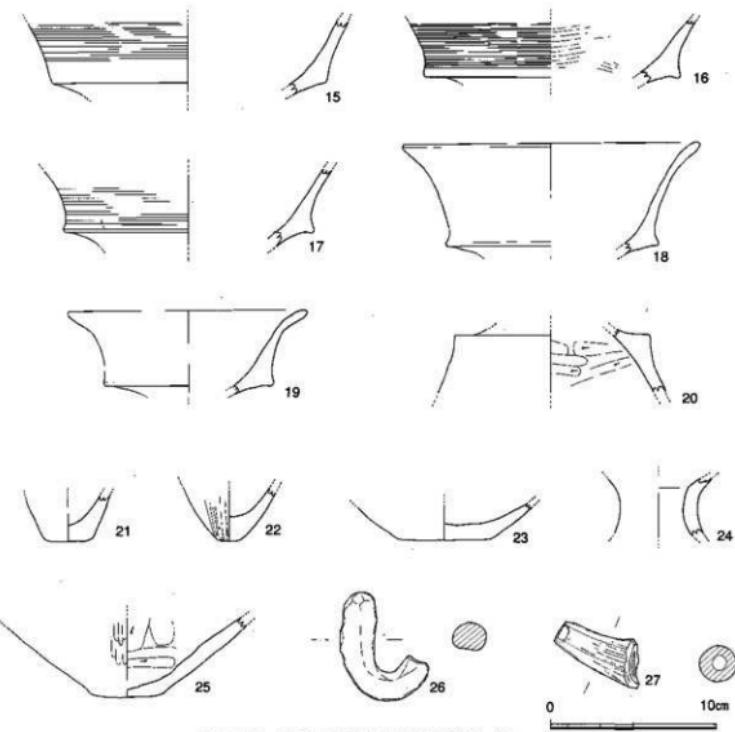
23は風化が著しく調整は不明だが、25は外面にヘ



第100図 袋戸F遺跡土層堆積状況



第101図 袋尻F遺跡出土遺物実測図(1)



第102図 袋房F遺跡出土遺物実測図（2）

ラミガキ、内面にヘラケズリを施す。

24は高環の脚柱部である。調整は風化が著しく不明である。

26は把手と思われるもので、27の注口土器の一部とも考えられる。断面は平円形で面取り痕がみられる。調整は風化のためわからない。

27は注口上器の注口部分の破片であり、外面はていねいなヘラミガキが施されている。

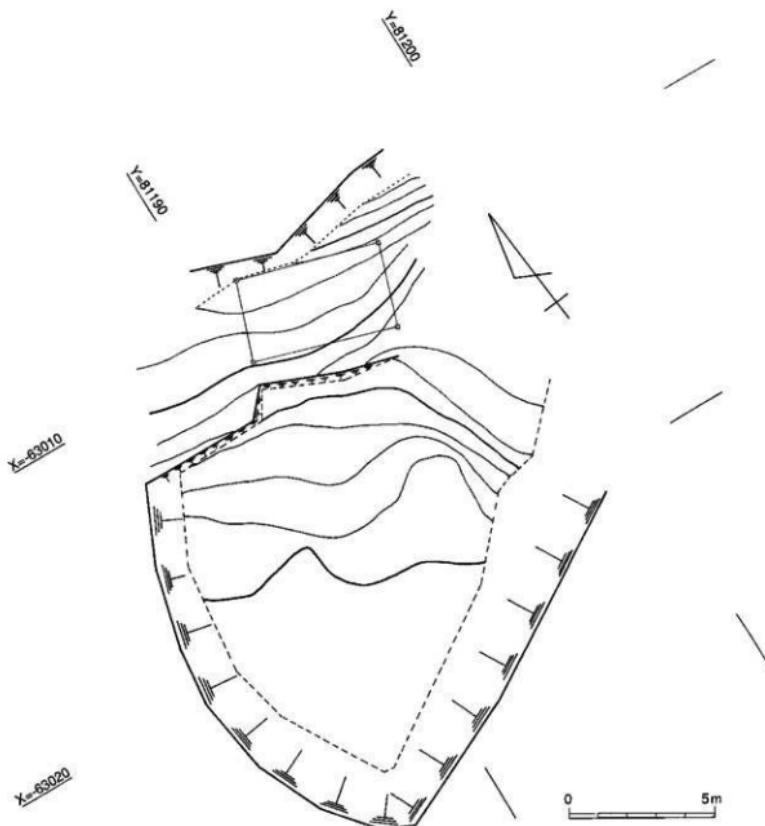
以上21～27の上器は確定的なことは言えないが、他の出土上器が弥生後期後半であることから同じ時期のものだろうと推測される。

※土器の編年に関しては以下によるものとする

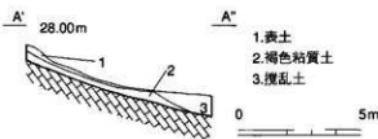
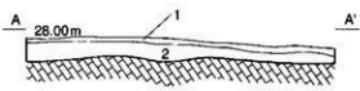
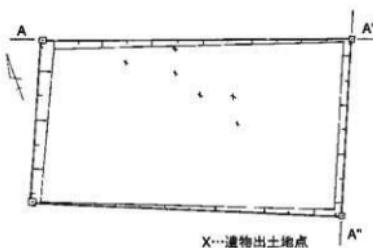
「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会 1992年

15. 袋尻G遺跡

袋尻G遺跡は本遺跡群北側、標高25~28mの南向き斜面上に位置する。既に本調査区では南側を中心に削平が進んでおり、一部では地山が露出していた。試掘調査においては須恵器細片が出上している。調査は残存する平坦な地形に調査区を設定して実施した。(第103図)



第103図 袋尻G遺跡調査前地形測量図



第104図 袋尻G遺跡調査成果図及び土層堆積状況

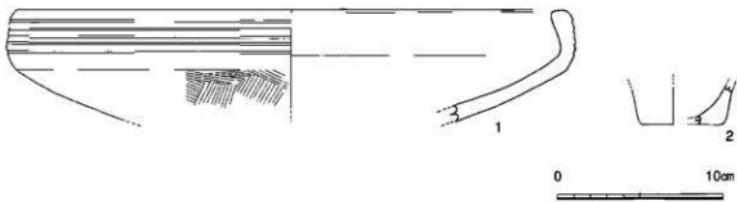
層序 (第104図)

土層堆積状況は表土以下より、厚さ10~32cmの褐色粘質土が堆積しており、褐色粘質土下より黄色粘質土（地山）が検出された。遺物包含層は褐色粘質土であった。

出土遺物 (第105図)

1は高环の坏部である。破片のため口径は推定であるが33cmと大きめのものである。口縁は内傾し、外面に5条の凹線文を施すものである。外面調整はハケメである。

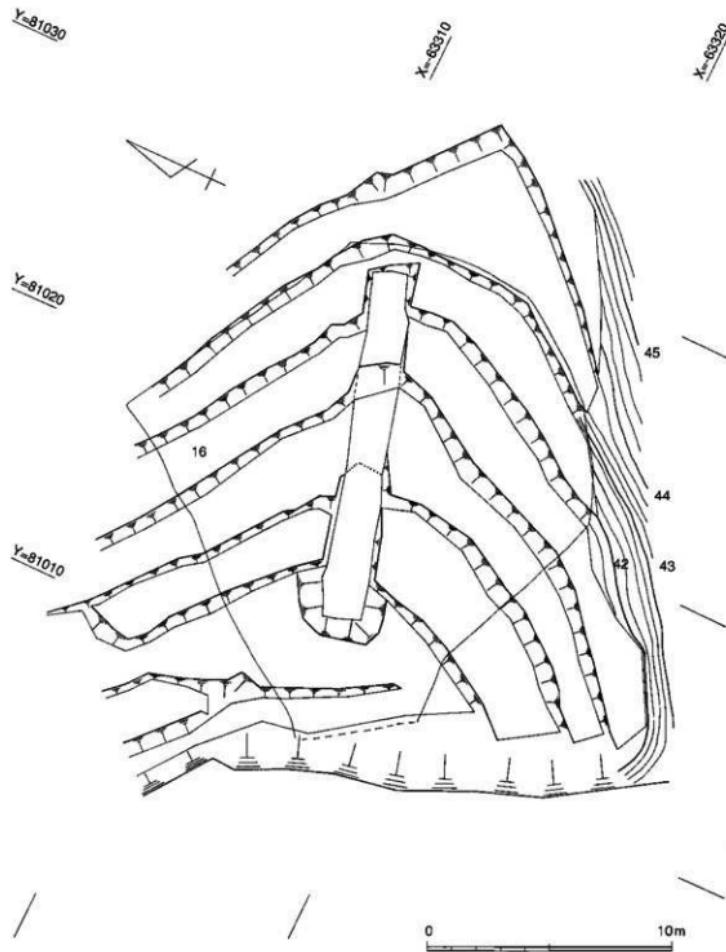
2は底部である。内外面共に調整は不明である。



第105図 袋尻G遺跡出土遺物実測図

16. 袋尻H遺跡

本遺跡群中央部よりやや東側、標高42~45mの内向き斜面上に位置する。H遺跡の北側には袋尻6号墳が隣接している。そのため、6号墳との関係が注目されたが、H遺跡は工事中に発見されたもの



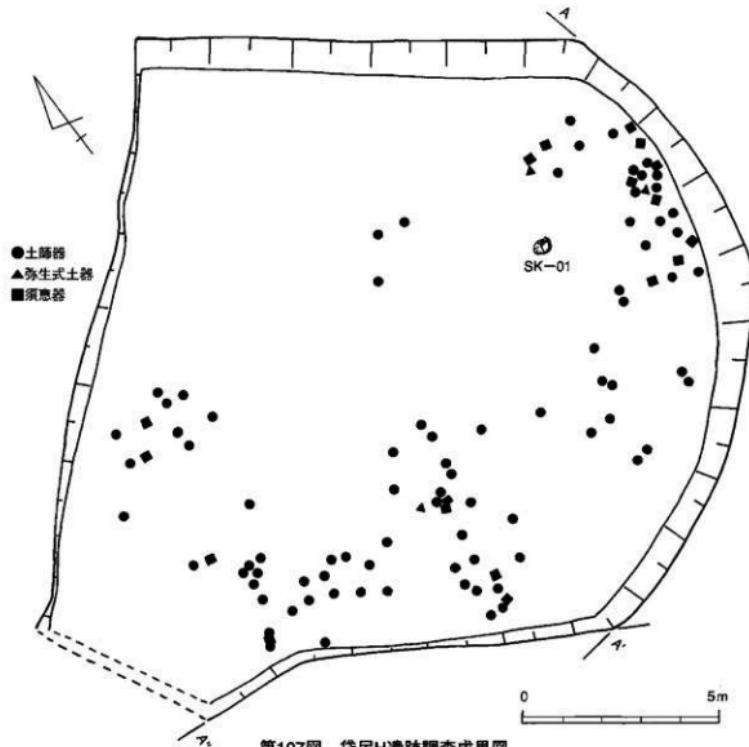
第106図 袋尻H跡調査前地形測量図

で重機による削平を受けていたため、元の地形を留めていない。

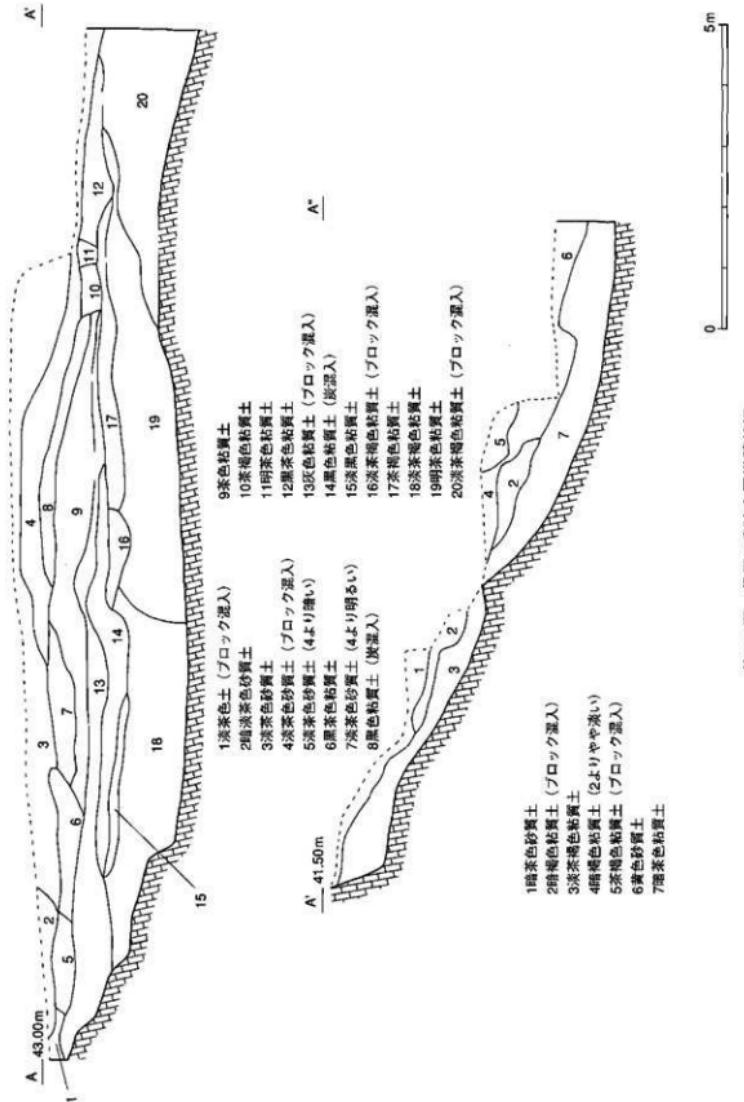
試掘調査を行った結果、弥生土器及び須恵器が検出されたことから斜面に沿った形で調査範囲を設定して調査を実施した。

層序（第108図）

北側は岩盤面が既に露出していたが、北側を除いては最大約130cmの遺物包含層が見られた。包含層は淡茶色粘質土層と黒色粘質土層であった。標高の高い東側斜面から西に向かって流れ込むような堆積が見られた。遺物は調査区の東と南において多く出土した。

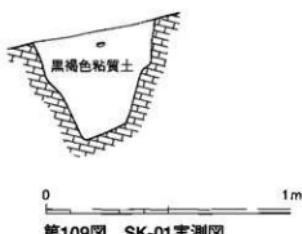
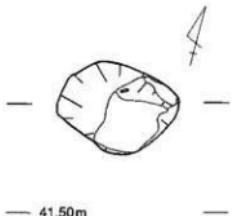


第107図 袋尻H遺跡調査成果図



第108図 埋戻H邊境土層堆積状況

遺構



第109図 SK-01実測図

SK-01 (第109図)

調査区東側より土坑が1基検出された。不整形な梢円形で、上面で長軸50cm、短軸37cm、深さ43cmを測る。黒色粘質土層が堆積していた。黒色粘質土からは実測は不可能であったが土師器細片が1片出土した。

出土遺物 (第110図～113図)

甕類 (1～18)

1は複合口縁の弥生土器甕で、肩部に櫛描線文をもつ。口縁はやや外反し、端部は先細りとなる。

2は複合口縁の弥生土器甕で、1と同じく肩部に櫛描線文をもつ。口縁外面には波状文が施される。口縁端部は先細りとなる。内面調整はへ

ラ削り・ナデである。

3・4は複合口縁の弥生土器甕口縁部である。3は口縁部の稜がやや下向きであるが、4は水平に近い。

5は口縁端部に平坦面をもつ複合口縁の十師器甕である。時期は草田7期頃のものと考えられる。口径は推定で31.5cmである。

6～18は単純口縁をもつ土師器甕である。

甕は大きく分けると、口頭部が「く」の字状に屈曲し、胴部が張り出すもの（6～15）と、胴部の張り出しが弱いもの（18）、あるいは口縁以下になるもの（16.17）がある。調整は、内面頭部以下にヘラ削りを施すものが多く見られる。

18は、胴部の張り出しが強くなく、内面には頭部以下にヘラ削りが、外面は頭部以下にハケメが見られる。底部がやや上げ底気味になっている。

19は瓶である。口径25cmを測り、内面ヘラ削り、外面にハケメを施す。

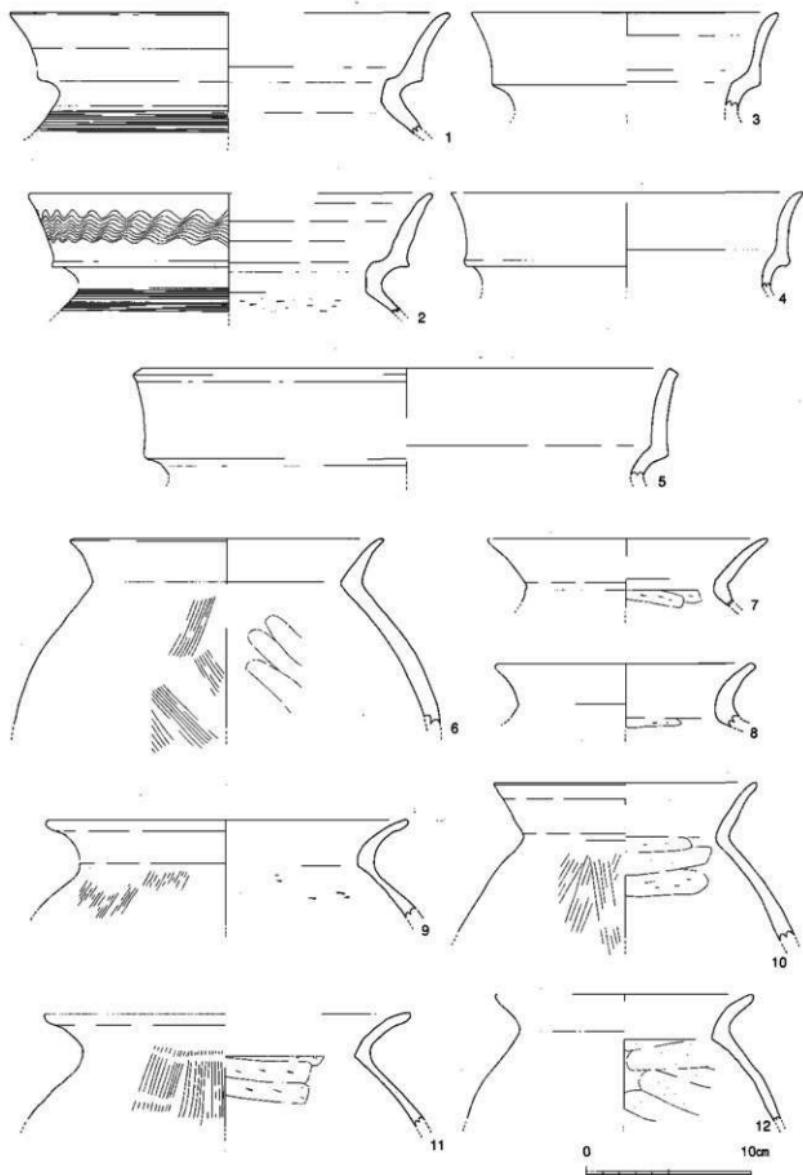
低脚甕 (20～23)

21は土師器低脚甕である。口縁は内湾し、脚端部は緩やかに「ハ」の字状に広がる。底径は8.0cmを測る。

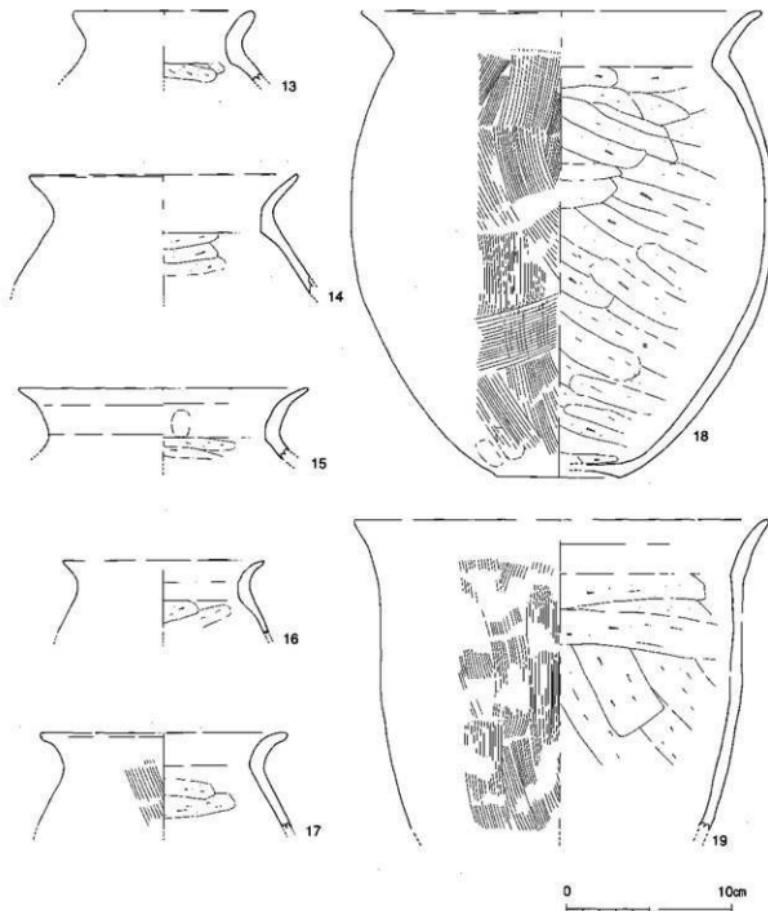
23は土師器低脚甕である。底径8.4cmを測る。

24は瓶の把手である。

25は小形丸底壺である。内面に指頭圧痕が残っている。



第110図 袋戸H遺跡出土遺物実測図 (1)



第111図 袋尻H遺跡出土遺物実測図（2）

須恵器（第113図）

坏（26~34）

26・27・28・29・30は坏蓋である。何れも口径が14cm前後を測る大形の坏蓋である。時期は出雲2期頃であろうと思われる。

26は口径14.2cmを測る。口縁は立ち上がりが垂直に近く、稜は水平方向に突出する。口唇部には段を有し、天井部外面は回転ヘラ削りである。

27は口径13.8cmを測る。口縁は立ち上がりが垂直に近く、稜は水平方向に突出する。口唇部には段を有し、天井部外面は回転ヘラ削りである。

28は口縁部は欠損しているが、外面調整回転ヘラ削りであり、肩部の稜は水平に突出する。

29は口径13.9cmを測る。口縁は立ち上がりが垂直に近く、稜は水平方向に突出する。口唇部には段を有し、天井部外面は回転ヘラ削りである。

30は口径13.5cmを測る。ほぼ完形に近く復元された。口縁は立ち上がりが垂直に近く、稜は鋭い。口唇部には段を行する。

31・32・33・34は坏身である。

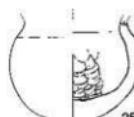
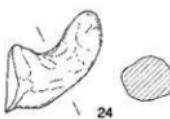
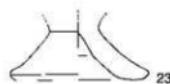
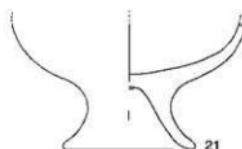
31は口径12.0cm、受部径14.3cmを測る。口縁がやや内傾し口唇部に段を行する。

32は口径10.2cm、受部径13.2cmを測る。口縁部はやや長く、口唇部に段を有する。

33、34は口縁端部を欠損している。調整は外面回転ヘラ削りである。

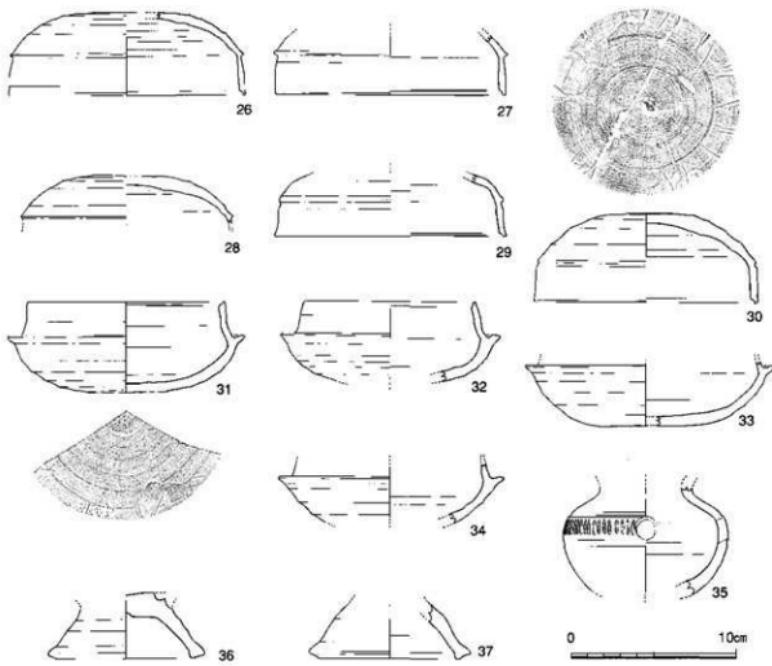
35は壺である。肩部には2条の凹線の間に貝殻条痕が施され、直径1.4cmの穴が穿たれている。

36、37は「ハ」の字状に広がる脚部で、端部はやや外に開き、ゆるい凹面をもつ。



0 10cm

第112図 袋尻H遺跡出土遺物実測図（3）



第113図 袋尻H遺跡出土遺物実測図(4)

17. 袋尻I遺跡

袋尻I遺跡は、本遺跡群北側、標高16~23mの北向き斜面に位置する。北側には斜面を挟んで袋尻A遺跡が存在し、南側にはG遺跡が存在する。試掘では暗褐色粘質土の平面プランが確認され、土器細片が数点出土していた。

調査は、既に露出していた黒色土面を精査すると共に表土以下を掘り下げて行った。その結果、溝状遺構（SD-01.02）を2条検出した。（第115図）

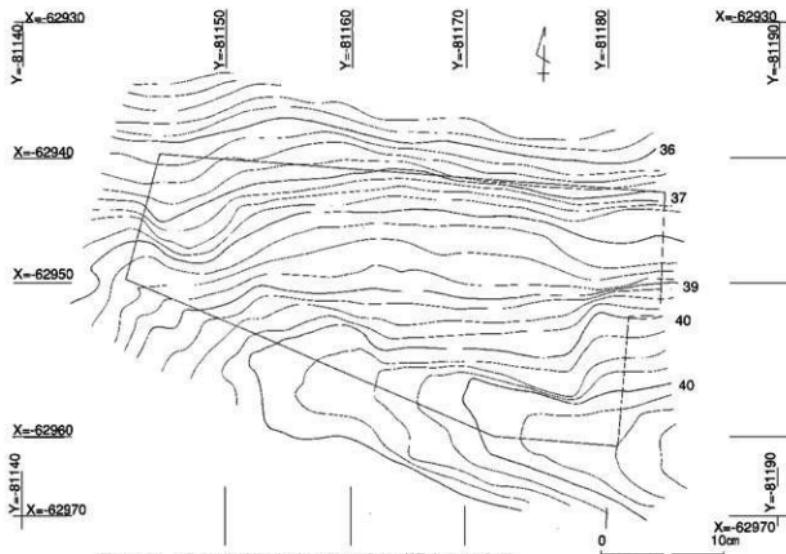
層序（第116図）

調査区内には既に暗褐色粘質土がところどころ確認されていたが、おおまかに表土以下の土層堆積状況は、褐色粘質土層、茶色粘質土層、黄褐色粘質土層である。遺物包含層は茶褐色粘質土層で、石器と弥生土器が出土した。

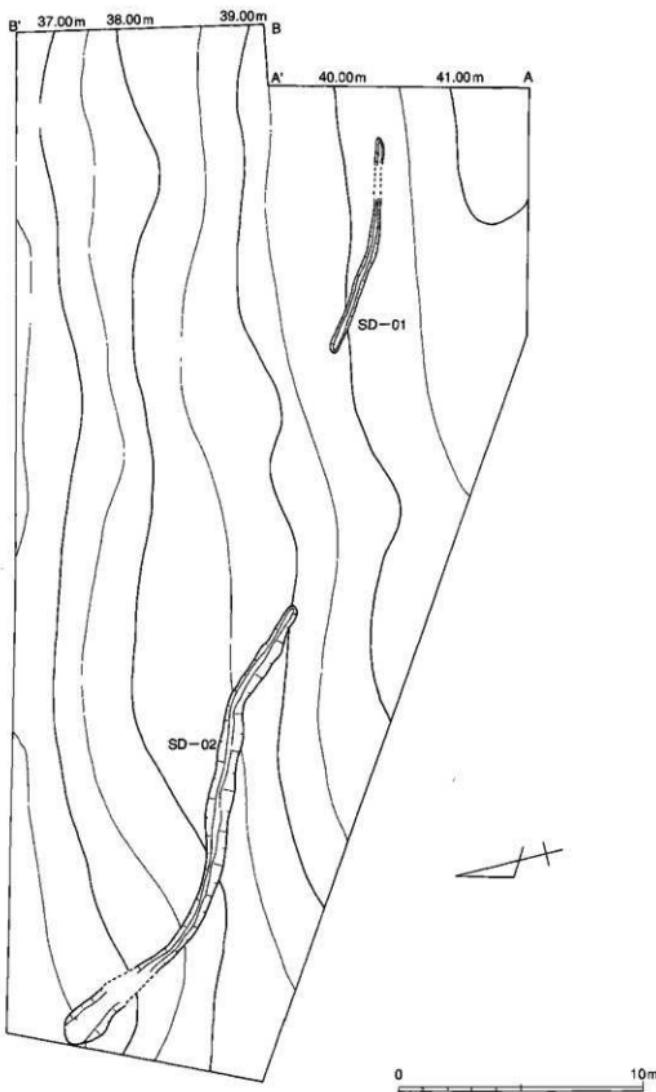
遺構（第117図）

SD-01

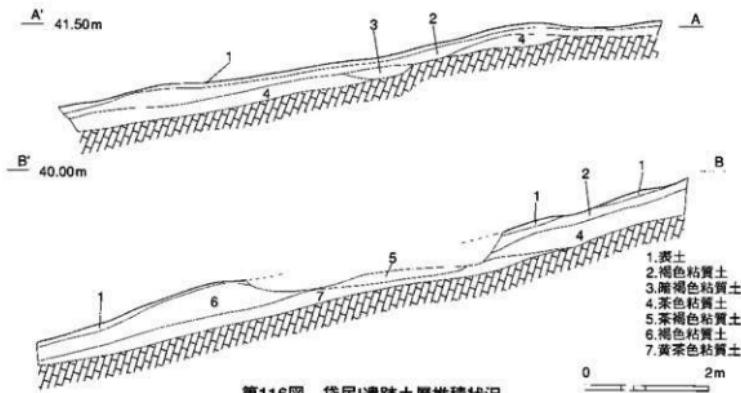
茶色粘質土上で検出し、長さ9m、深さ15cmを測る。溝中には暗褐色粘質土が堆積していた。遺物は上器細片が1片出土している。



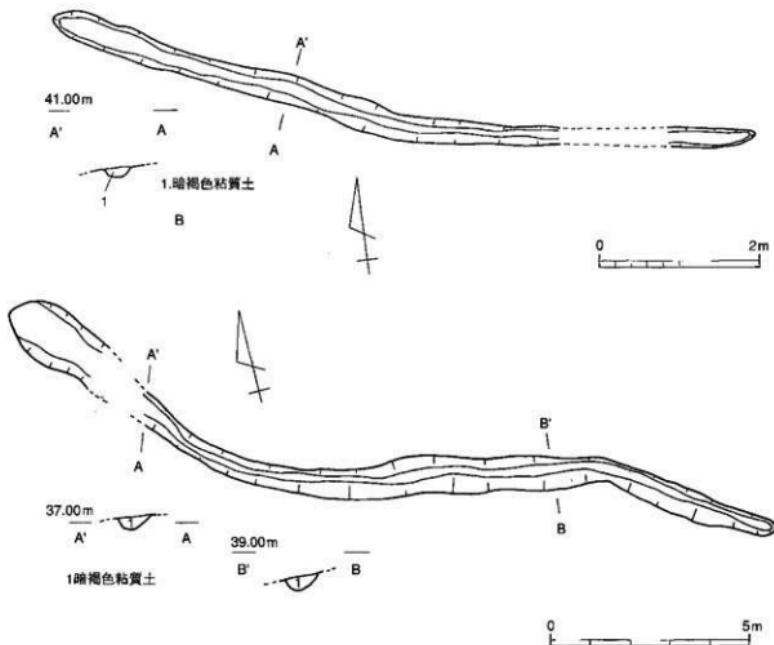
第114図 袋尻I遺跡調査前地形測量及び調査区設定図



第115図 袋尻遺跡調査成果図



第116図 袋尻I遺跡土層堆積状況



第117図 袋尻I遺跡SD-01、SD-02実測図

SD-02

橙褐色粘質土上にて検出した。長さ約20m、最大40cmを測り、S字に蛇行する形であった。

出土遺物（第118.119図）

石器（第118図）

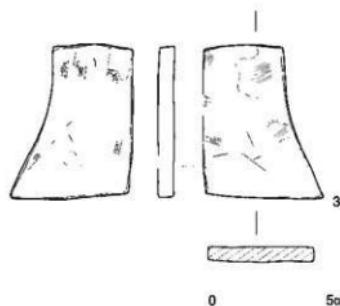
1は茶色粘質土層中より出土した尖頭器である。先端と頭部は欠損している。石材は流紋岩である。

2は黒曜石のスクレイバーである。

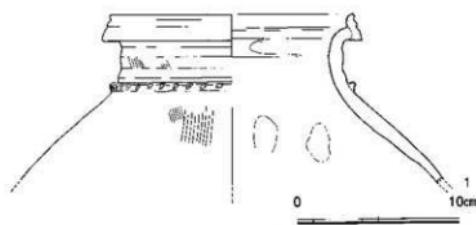
3は石材が流紋岩系の砥石である。長さ6.2cm、厚さ0.7cmを測る。

壺（119図）

やや内傾する2条の凹線をもつ複合口縁の壺である。頸部には刻目文がつく貼付け突帯をもつ。調整は外面ハケメ、内面は指頭圧痕が確認できる。



第118図 袋尻I遺跡出土遺物実測図（1）



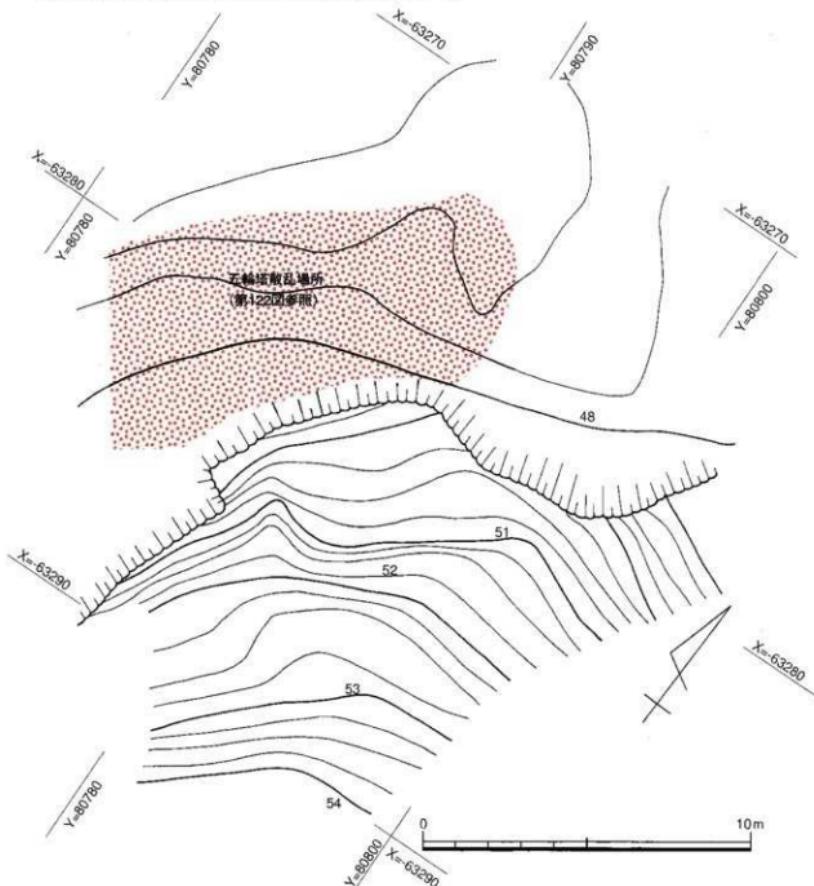
第119図 袋尻I遺跡出土遺物実測図（2）

18. 袋尻古墓群

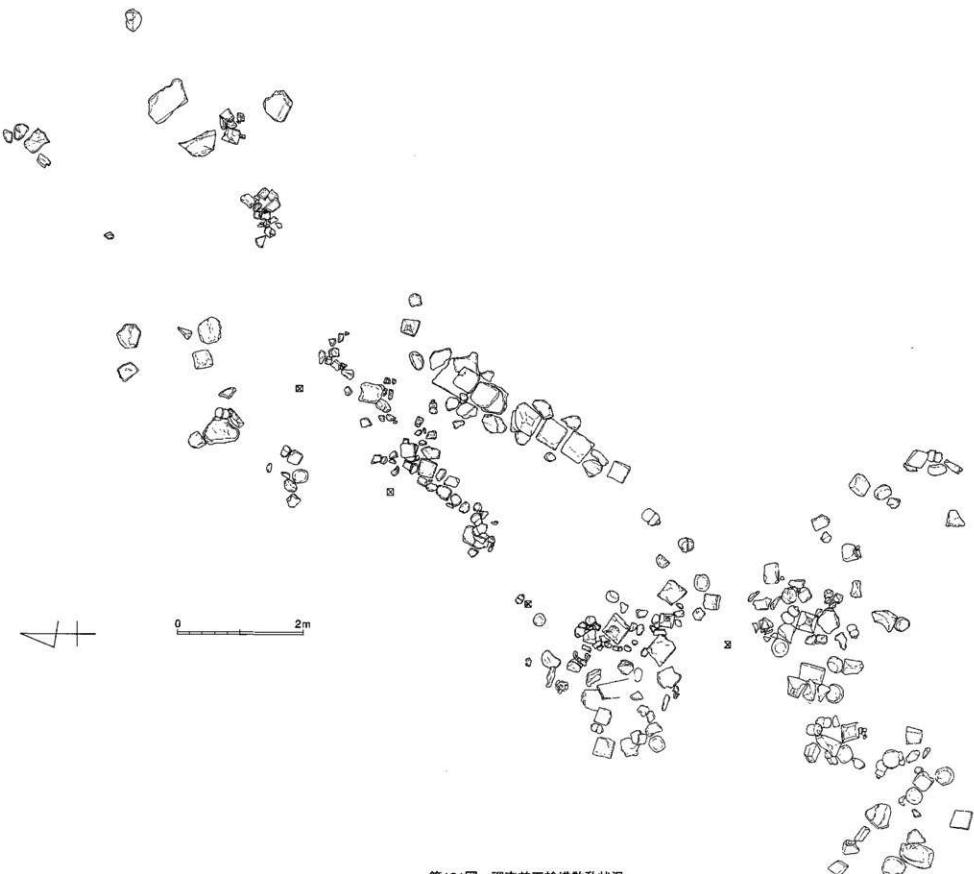
<調査の概要>

袋尻古墓群は本遺跡群の中央西端、眼下に忌部川を望む丘陵に位置する。この古墓群は造成工事の際に掘削途中で発見されたため、調査前すでに五輪塔が散乱した状態であった（第121図、図版39）。そのため五輪塔がどの位置に建てられていたのか、どういう地形であったのか正確に把握できなかったが、丘陵頂上と中腹に平坦地がありそれに土塙が確認され、丘陵斜面から小横穴も確認された。

また五輪塔を置くための基壇状遺構も確認されている。



第120図 袋尻古墓群調査前地形測量図



第121図 調査前五輪塔散乱状況

<遺構>

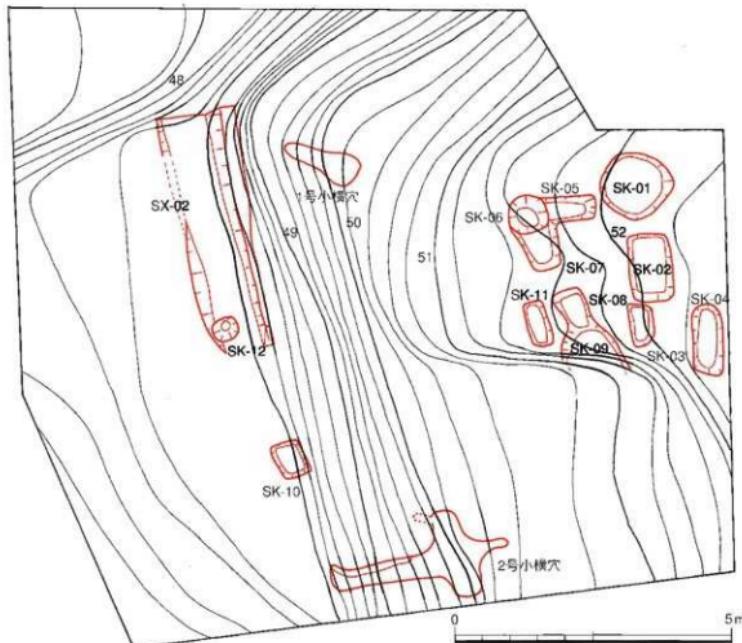
1. SX-01 (第123図、図版40)

頂上部の平坦地から検出された集石遺構で、表面が露出した状態で五輪塔の火輪・水輪・地輪、台石と思われる石が出土した。出土した五輪塔の石の周辺から土師質土器の細片や銭貨（洪武通寶）が出土した（図版41）。土師質土器は軟質で摩滅がひどく形状がわかるものはなかった。

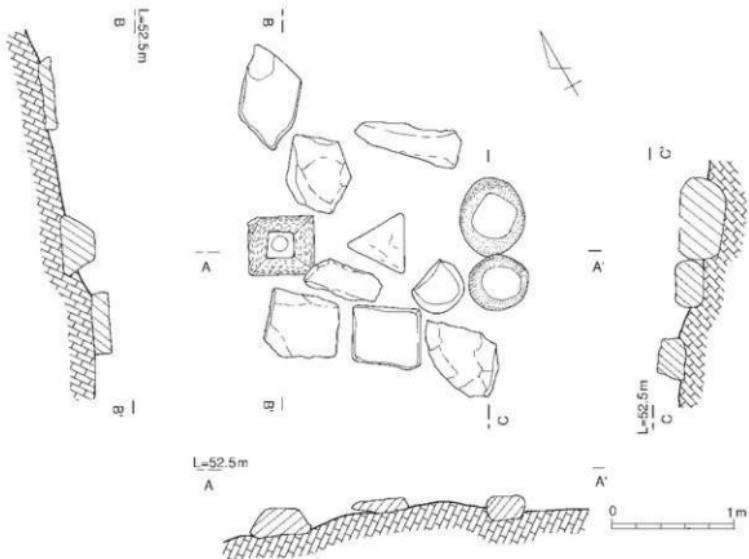
この場所に五輪塔が建立されていたのが崩れたのか、あるいは廃棄のためにここに集められたのかは不明である。また地下にSK-08が検出されたが、おそらくは関係がないものと思われる。

2. SX-02 (第124図、図版42)

中腹の平坦地から検出された遺構で、調査前には西向きで五輪塔の台石と地輪が9体並んでいた。調査の結果五輪塔を設置するための基壇状遺構が検出された。東西約458cm、南北約150cmのテラスをつくり五輪塔を窓く場所に幅約10~30cm、深さ約10cm程度掘り窓め、約10cm~30cm程度台石の上面がテラスとほぼ同じ高さになるように盛土をしていた。遺物は出土せず、南側から焼土塙SK-12が検出されたが（図版43）、前後関係など詳細については不明である。1号小横穴と隣接するため何らかの関係があると考えられる。



第122図 袋尻古墓群調査成果図

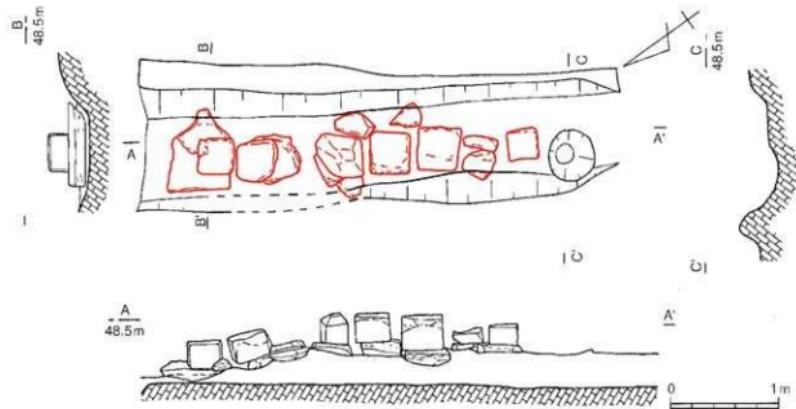


第123図 SX-01実測図

3. 土墳群（第125・126図、図版43）

①SK-01（第126-1図）

頂上部の平坦地の北東から検出され、平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で壁はほとんど垂直に立ち上がる。出土遺物は検出面の上面から約20cm前後の石が出土した。



第124図 SX-02実測図

②SK-02 (第126-2図)

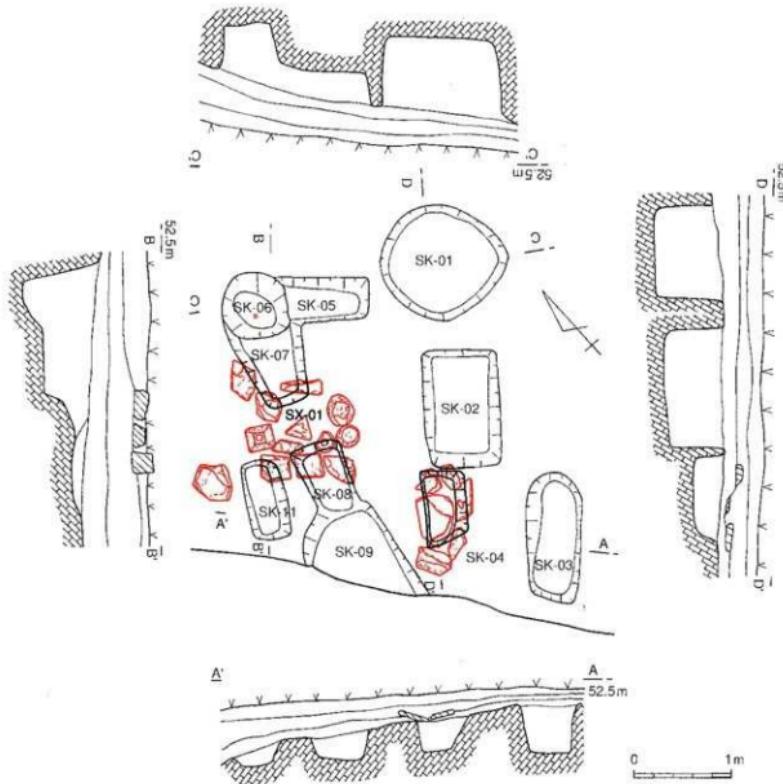
SK-01のすぐ北東隣から検出された。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で壁はやや外に開き気味に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

③SK-03 (第126-3図)

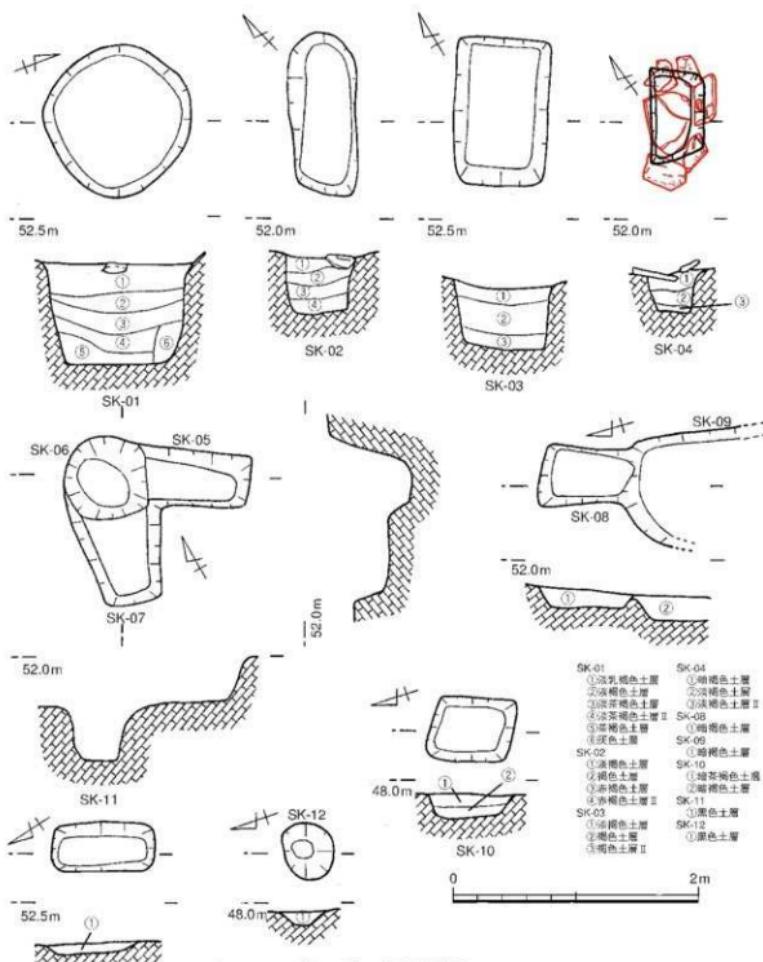
SK-02の南側から検出され、平面形は不整橢円形、断面形は逆台形を呈し、底面はやや傾いているものの平坦に近い。壁はやや外側に開き気味に立ち上がっている。土層から壁が崩れたと思われ、築成当時は垂直に近い状態であったと考えられる。出土遺物は検出面上面から約30cm前後の石が出土し、覆土1層から土師質土器が出土したが、石の性格や土壤の時期など詳細については不明である。

④SK-04 (第126-4)

SK-03の東側から検出され、平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から約40~100cm前後の石が数点出土した。出土した石は平らな石のほか



第125図 袋尻古墓群頂上部遺構配置図



第126図 土壌実測図

ノミの加工痕と思われる痕跡をもつ石もあり、台石もしくは墓標石に使用したと考えられる。石以外には遺物は覆上3層から土師質土器の破片が出土した。また北東隣から焼土が確認され、中に人骨と思われる破片が散乱していた。

⑤SK-05・06・07 (第126-5図)

SK-01の西側から検出されたが切りっているため正確な規模については不明である。

SK-05・07は平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

る。SK-06は平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物が出土しなかったため前後関係については不明である。

⑥SK-08（第126-6図）

SK-03の西側から検出され、平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で壁は外に向かってやや開き気味に立ち上がる。遺物は出土せず、共伴する遺構はないがSK-07との間から焼土が検出された。

⑦SK-09（第126-7図）

SK-08の南側から検出され、形状や規模は南側半分割平されているため正確にはわからないが不整角円形を呈するものと思われる。出土遺物はなく、SK-08と一部共伴しているが前後関係など詳細については不明である。

⑧SK-10（第126-8図）

中腹の平坦地から検出され、平面形は隅丸長方形、断面は逆台形を呈し、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。土壇内からは出土遺物はなかったが、検出面の周辺から土師質土器が出土した（図版41）。

⑨SK-11（第126-9図）

頂上部の平坦地から検出された焼土壇で、SK-08の東側に位置する。平面形は隅丸長方形で、断面は逆台形を呈し、底面は平坦で壁は外に向かって立ち上がる。土壇内は黒色土の一括土層で非常に細かい骨片や炭化物が含んでいたことから、火葬するための土壇と考えられる。

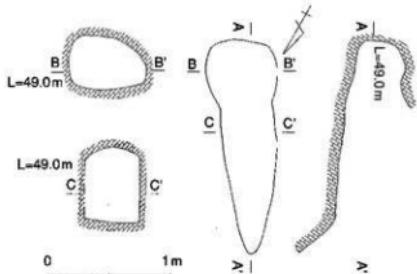
⑩SK-12（第126-10図）

中腹から検出された焼土壇で、SK-10の北側に位置しSK-02と共に伴する。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で壁は外に向かって立ち上がる。SK-11同様、土壇内は黒色土の一括土層で非常に細かい骨片や炭化物が含んでいたことから火葬するための土壇と考えられる。SK-02とどのような関係があるか、また前後関係は不明である。

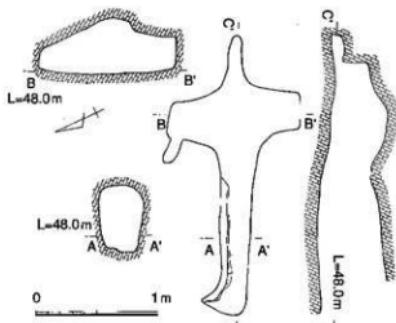
SK-11・12以外にも焼土は確認されたが、底が浅いもののが多かった。これらの土壇群からは副葬品は出土しなかったが、形状から墓壇として使用されたものがあったと思われる。また頂上の平坦面からこれだけ土壇が密集していたことから周辺にも多くの土壇があったと推測される。

表1 袋尻古墓群土壇一覧表

No.	出土地点	形状	規 模 (cm)			出 土 遺 物	共伴遺構	備 考
			上 面	底 面	深 さ			
SK-01	頂上部	円形	130	80	80	石1点		
SK-02	頂上部	方形	122~76	100~56	40			
SK-03	頂上部	方形	122~56	114~36	50	石1点、土師質土器1点		
SK-04	頂上部	方形	76~44	68~34	44			
SK-05	頂上部	方形	84~44	74~24	34	石1点、土師質土器1点	SK-06・07	
SK-06	頂上部	円形	68	50	34		SK-05・06	
SK-07	頂上部	方形	72~48	64~30	30		SK-05・06	
SK-08	頂上部	方形	80~40	66~28	30		焼 土	
SK-09	頂上部	?	?	?	32		SK-08	
SK-10	中腹部	方形	64~46	56~40	20			
SK-11	頂上部	方形	84~40	74~20	14	炭化物・骨		
SK-12	中腹部	円形	48	16	40	炭化物・骨		



第127図 1号小横穴実測図



第128図 2号小横穴実測図

4. 小横穴 (第127・128図)

丘陵斜面から検出されたもので北側を1号小横穴、南側を2号小横穴とした。

① 1号小横穴 (第127図)

SX-02のやや東側の後ろから表上掘削中に検出された。羨道部は長さ約90cm、幅約45cm、高さ55cm、玄室部は幅62cm、奥行き52cm、高さ44cmを測る。底面は玄室から羨道部にかけて傾いている。出土遺物はなくSX-02と関係があると思われる。

② 2号小横穴 (第128図)

2号小横穴は1号小横穴の南約7.5mから検出され、入口は調査前すでに露出していた。羨道部は長さ約257cm、幅約80cm、高さ90cmを測る。羨道部の北側の壁際には長さ約100cm、幅6cmのテラスがある。玄室部は幅約220cm、奥行き100cm、高さは92cmを測り平面は長方形で床面は平坦である。北側と東側にわずかに掘り進まれた穴が見られた。遺物は出土せず共伴する遺構もなかった。

<遺物について>

1. 銭貨 (第129-1図)

SX-01から出土した「洪武通寶」で、初鋲は1368年、中国明代の貨幣である。⁽¹⁾

2. 土師質土器 (第129-2~5図)

出土したほとんどが摩滅した細片で、図下復元できたものは4点であった。2~4は中腹の平坦地から出土したもので、底部外面には回転糸切りによる切り離しの痕跡が見られる。5はSK-04の覆土3層から出土した。これも底部外面に回転糸切りにより切り離しの痕跡が見られる。

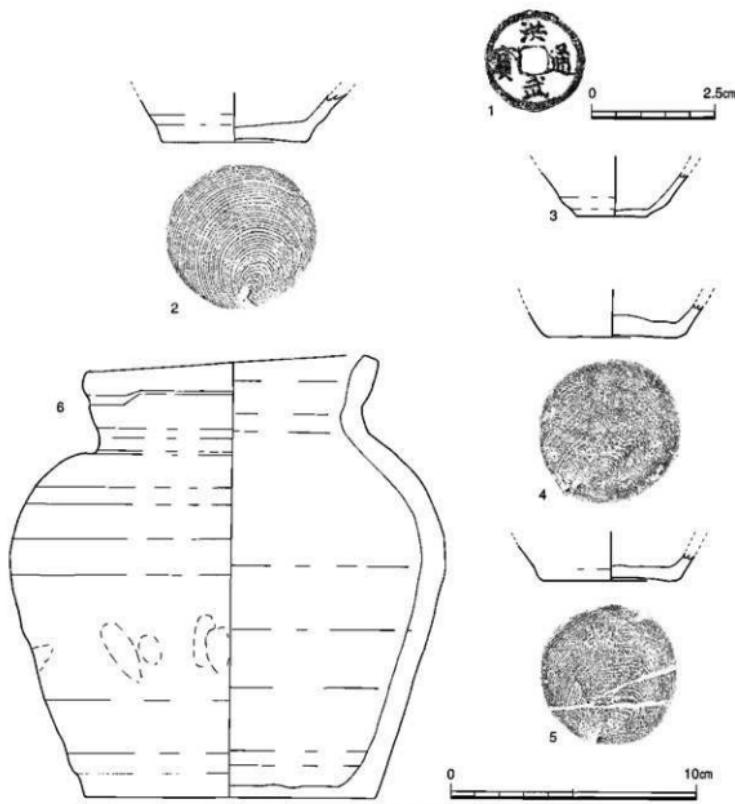
3. 骨蔵器 (第129-6図、図版70)

中腹の平坦地から出土した壺で、色調は暗赤褐色で胎土は粗く小礫が多く含まれる。おそらくは備前焼を模造した在地系の焼締陶器と考えられ、産地などは不明だが形状から室町時代のものと思われる⁽²⁾。壺の中から人間の左顎と思われる骨が入っており⁽³⁾、火葬後に納骨したものと思われる。

4. 五輪塔 (第130~132図、図版70)

すべて組み合わせ式の五輪塔で、138点（空風輪32点、火輪18点、水輪33点、地輪35点、台石13点、不明7点）出土した。セット関係は不明だが、30体以上の五輪塔があったと思われる。

① 空風輪 (第131・132図、図版70)

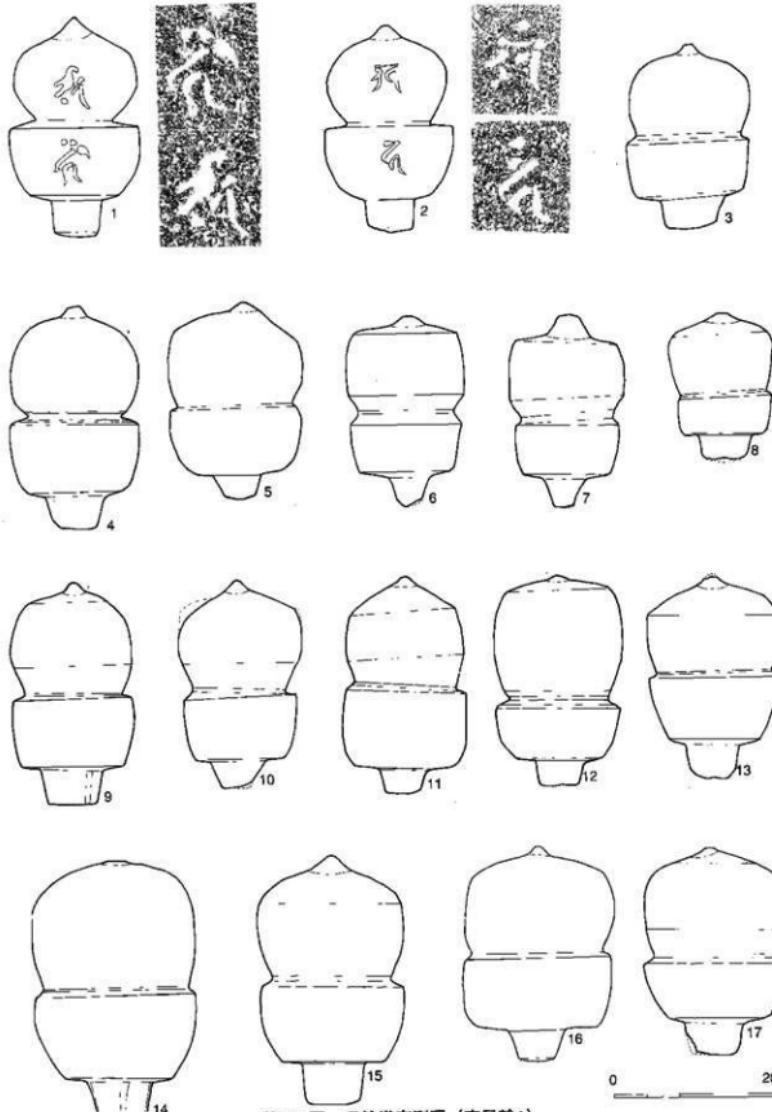


第129図 袋戻古墓群出土遺物実測図

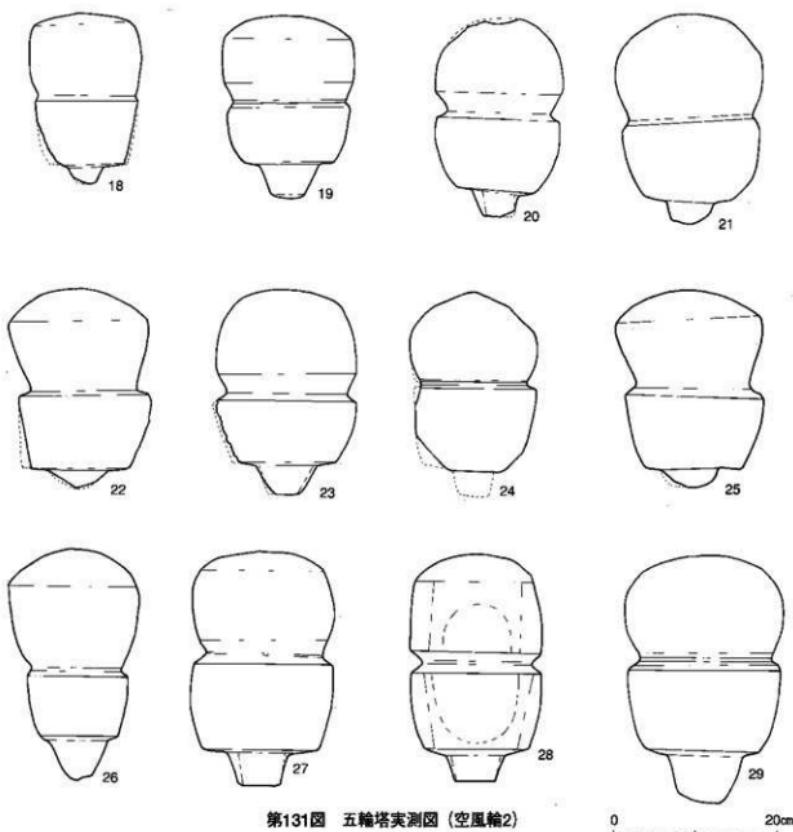
空風輪は頂上突起のあるもの（第130図）、ないもの（第131図）に分類した。1・2は宝珠と受花の形、くびれも明確であり梵字が空輪（読み：キヤ）と風輪（読み：カ）に刻まれている。それ以外は形が崩れており、受花の形は若干残るが宝珠の形は崩れているものが多い。頂上突起のないものも同様であり、基本的な形のものは見あたらない。

②火輪（第132—1～3図）

出土した火輪は形態の差があまりなく軒先の反り返りがわずかである。1は幅21cm、高さ12.8cm、軒の厚さは2～5cm、上部は10×9cmを測る。ぼぞ穴は円形で直径4.5～6cm、深さ4.5cmを測る。2は幅23.6cm、高さ11.4cm、軒の厚さは4～5cm、上部は9×9.5cmを測る。ぼぞ穴は上面直径は8cm、底面は4×5.3cm、深さ5cmを測る。3は幅25cm、高さ14.5cm、軒の厚さは1.5～3.7cmを測る。上部は欠損しているため規模はわからないが、ぼぞ穴は直径5～7.6cm、深さ3cmを測る。



第130図 五輪塔実測図（空風輪1）



第131図 五輪塔実測図（空風輪2）

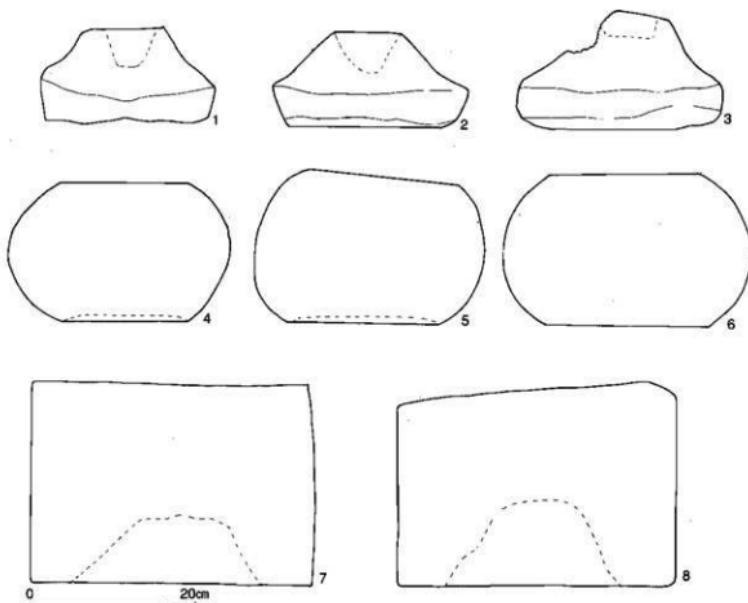
0 20cm

③水輪（第132—4・5・6図）

出土した水輪の特徴は胴の部分が張る太鼓形で、上下面を平坦かやや掘り窪めていることである。4は上面幅15.5cm、下面幅15cm、最大幅26.9cm、高さ16cmを測り、下面是約0.8cm掘り窪めている。5は上面幅17.7cm、下面幅18.4cm、最大幅27.5cm、高さ18.8cmを測り、下面是約0.8cm掘り窪めている。6は上面幅17cm、下面幅18.3cm、最大幅30cm、高さ14.8cmを測る。下面の窪みはなかった。

④地輪（第132—7・8）

出土した地輪の特徴は形態が立方体もしくは底面を掘り窪めていることである。SX-02から出土した地輪は掘り窪めた底面に上を入れて安定を保っていた。1は一辺が34~36cm、高さが25cmを測る。底部の掘り込みは平面形が方形で測り断面形が台形を呈する。掘り込み上面は10×8cm、下面是20×22cm、深さ10cmを測る。2は一辺が34.2~36cm、高さ24.6cmを測る。底部の掘り込みは平面形は方形で断面が台形を呈する。掘り込み上面は12×11cm、下面是22×19.4cm、深さ10cmを測る。



第132図 五輪塔実測図（火輪・水輪・地輪）

表2 袋尻古墓群出土の突風輪一覧表

No.	材質	法 長(cm)	くびれ 幅(cm)	くびれ深 さ(cm)	輪径 (内丸・外丸) cm	輪厚 (内丸・外丸) cm	輪存度	特徴	
								輪大長	空軸径
1	花崗岩	26.5	14.9	15.6	8.9	6.2	1.67:1:1.75	円柱形	ほぼ完形
2	花崗岩	25.0	14.5	15.6	10.0	6.0	1.45:1:1.56	円柱形	完形
3	花崗岩	21.3	14.7	14.9	12.6	7.8	1.17:1:1.18	円柱形	完形
4	花崗岩	26.9	15.5	15.8	11.0	7.3	1.41:1:1.44	円柱形	完形
5	花崗岩	28.9	16.2	15.2	13.9	5.7	1.17:1:1.09	円錐形	ほぼ完形
6	花崗岩	23.1	14.3	13.5	11.5	4.8	1.24:1:1.17	円錐形	完形
7	花崗岩	23.2	13.8	12.5	11.1	5.1	1.24:1:1.13	円錐形	ほぼ完形
8	花崗岩	17.8	13.2	11.2	10.6	6.4	1.25:1:1.06	円柱形	一部欠損
9	花崗岩	26.8	14.8	14.8	11.8	7.6	1.25:1:1.25	円柱形	完形
10	花崗岩	25.1	14.9	13.6	11.1	6.6	1.34:1:1.23	多角柱形?	一部欠損
11	花崗岩	26.1	14.3	15.1	12.4	6.5	1.15:1:1.22	円柱形	完形
12	花崗岩	25.4	15.5	15.0	11.7	5.9	1.32:1:1.28	円柱形	完形
13	花崗岩	24.4	15.8	15.7	14.0	6.5	1.13:1:1.12	円柱形	一部欠損
14	麻灰岩	31.4	19.7	19.6	17.8	8.1	1.11:1:1.11	四角柱形	完形
15	花崗岩	30.0	17.4	17.4	14.3	7.6	1.22:1:1.22	円柱形	完形
16	花崗岩	24.8	18.1	18.0	15.8	7.0	1.15:1:1.18	円柱形	一部欠損
17	花崗岩	30.0	16.6	17.2	14.5	7.2	1.14:1:1.19	円柱形	一部欠損
18	砂岩	20.6	13.4	12.6	11.9	4.2	1.13:1:1.06	円錐形	一部欠損
19	花崗岩	22.1	15.9	14.7	13.4	7.2	1.19:1:1.10	円錐形	完形
20	凝灰岩	24.9	15.3	14.8	12.4	5.8	1.23:1:1.19	四角柱形	一部欠損
21	砂岩	25.4	17.9	16.7	15.0	5.9	1.19:1:1.11	円錐形	完形
22	砂岩	24.0	17.1	15.7	13.0	7.2	1.32:1:1.19	四角柱形	一部欠損
23	凝灰岩	24.8	16.8	16.7	14.3	7.4	1.17:1:1.17	四角柱形	一部欠損
24	花崗岩	22.7	15.5	14.2	12.7	7	1.22:1:1.12	不規則形	半分欠損
25	砂岩	23.9	17.5	16.8	14.0	7.0	1.25:1:1.20	円錐形or漏斗形	?
26	砂岩	27.8	15.7	12.3	10.9	7.3	1.44:1:1.13	?	光
27	麻灰岩	28.2	16.1	16.1	13.8	8.1	1.17:1:1.17	四角柱形	一部欠損
28	砂岩	28.4	16.0	16.0	13.2	7.1	1.21:1:1.21	四角柱形	一部欠損
29	砂岩	27.7	16.8	16.6	13.9	7.6	1.25:1:1.25	円錐形	完形

<まとめ>

周辺地域の人達の話によると忌部川沿いに寺院があり、古墓群はその裏山に位置することになるため、この古墓群は寺院境内墓地ではなく村落近郊の集合墓地であったと考えられる。この古墓群は埋葬する場所と石塔の建てる場所が異なる“両墓制”であり、埋葬場所が頂上部で脇墓が中腹部と想定できる。両墓制は①両墓遠隔型墓制②両墓隣接型墓制③両墓混在型墓制に分類され⁽⁴⁾、この古墓群は②に相当すると思われる。

埋葬場所と考えられる土壇群は円形と隅丸方形に大別され、副葬品は出土しなかったが墓壇として使用された可能性が高い。土壇の大きさからSK-01～03は木棺が使用されたと考えられ、SK-01では早桶座棺が想定される。それ以外は木棺を使わず直葬であったと思われる。また隅丸方形の土壇は臥葬であったと思われる⁽⁵⁾。深さに関しては検出時の値のため、実際はもう少し深かった可能性がある。

SX-01のように土師質土器と錢貨が出土する例は“地鎮め”に関する説があり、この場合土壇に埋納されている場合が多い。SX-01のように表面にから検出される“地鎮め”的例はあまりないが、ここでは土地使用や死者の靈魂は右塔に留まっているという考え⁽⁶⁾から五輪塔の移動の際の靈魂祭祀、靈魂供養の儀礼・儀式に使用されたと思われる。

本遺跡で発見された小横穴は県内ではあまり報告例がなく、北陸地方⁽⁷⁾や静岡県⁽⁸⁾など確認されている例は墳窓墓や竪墓・やぐらとして報告されている。やぐらは五輪塔や骨壺を置く場合が多く、本古墓群の場合、五輪塔や骨壺がないためやぐらであると断定できないが、1号小横穴はSX-02と関連する埋葬施設ではないかと思われる。また古代の横穴を再利用した例も報告されており、2号小横穴はこれに相当すると思われる。

この古墓群の時期に関しては遺物が少なく明確な時期はわからないが、出土した錢貨から14C後半を上限として考えられる。また火葬と土葬が混在し寺院境内墓地に移行する以前の段階、つまり江戸初期の寺壇制度が確立するまでの時期と推測される。

以上のように興味深い中世墓ではあり調査前の破壊や調査の不手際など残念な点もあるが、今後この地域での中世から近世にかけての集落研究にとって資料になるかも知れない。

[註]

- (1)『考古学ライブラリー45 出土渡米録』坂詰秀一編 ニューサイエンス社 1986年
- (2)広島県立美術館の村上勇氏の御教授による
- (3)奈良国立文化財研究所の松井章氏の御教授による
- (4)「伯耆の両墓制」「因幡・伯耆の民俗学研究一神・鬼・墓一」坂田友宏 米子今井書店 1995年
- (5)「発掘事例に見る多摩丘陵の墓制」「江戸遺跡研究会第9回大会 江戸時代の墓と葬制
〔発表要旨〕」長佐古真也 江戸遺跡研究会 1996年
- (6)「地鎮め」の諸相」「関西近世考古学研究 Ⅲ」嶋谷和彦 関西近世考古学研究会 1992年
- (7)「民俗資料にあらわれた墓地」「日本古代文化の研究 墓地」十井卓治 株式会社社会思想社 1975年
- (8)「第7回北陸中世土器研究会 中世北陸の寺院と墓地」北陸中世土器研究会 1994年
- (9)「静岡県考古学会シンポジウム 静岡県における中世墓」 静岡県考古学会 1997年

18. 袋尻横穴墓群

袋尻横穴墓群は、本遺跡群中央にある袋尻B遺跡から約100mほど西方の丘陵の斜面上に存在する。この丘陵は、住居跡が検出されたB遺跡の東方・西方・南方の三方を取り囲むようにして派生している丘陵の一部である。横穴墓は山頂よりおよそ10m下の標高64~66mに位置している。周囲には北側に平成5年度に調査を行った苔沢谷横穴墓群が存在していた。また、1号横穴墓からは東にB遺跡と6号墳を見渡すことが出来る。

当初、横穴墓は1穴は確認されていたが、調査の結果、合計3穴の横穴墓が存在していることが分かった。そこで、丘陵の北側から1号横穴墓、2号横穴墓、3号横穴墓と呼ぶこととした。1号横穴墓は東側に開口し、2号横穴墓と3号横穴墓は5m程離れて共に南側に開口している。

① 1号横穴墓

位 置（第133図）

1号横穴墓は標高65~66mの丘陵東側斜面に開口する横穴墓で、山頂からはおよそ10m下に位置する。前方には古墳時代の住居跡が検出されたB遺跡を臨む。2号横穴墓と3号横穴墓が隣接するのに対して1号横穴墓は単独で存在する。

墓 道（第134図）

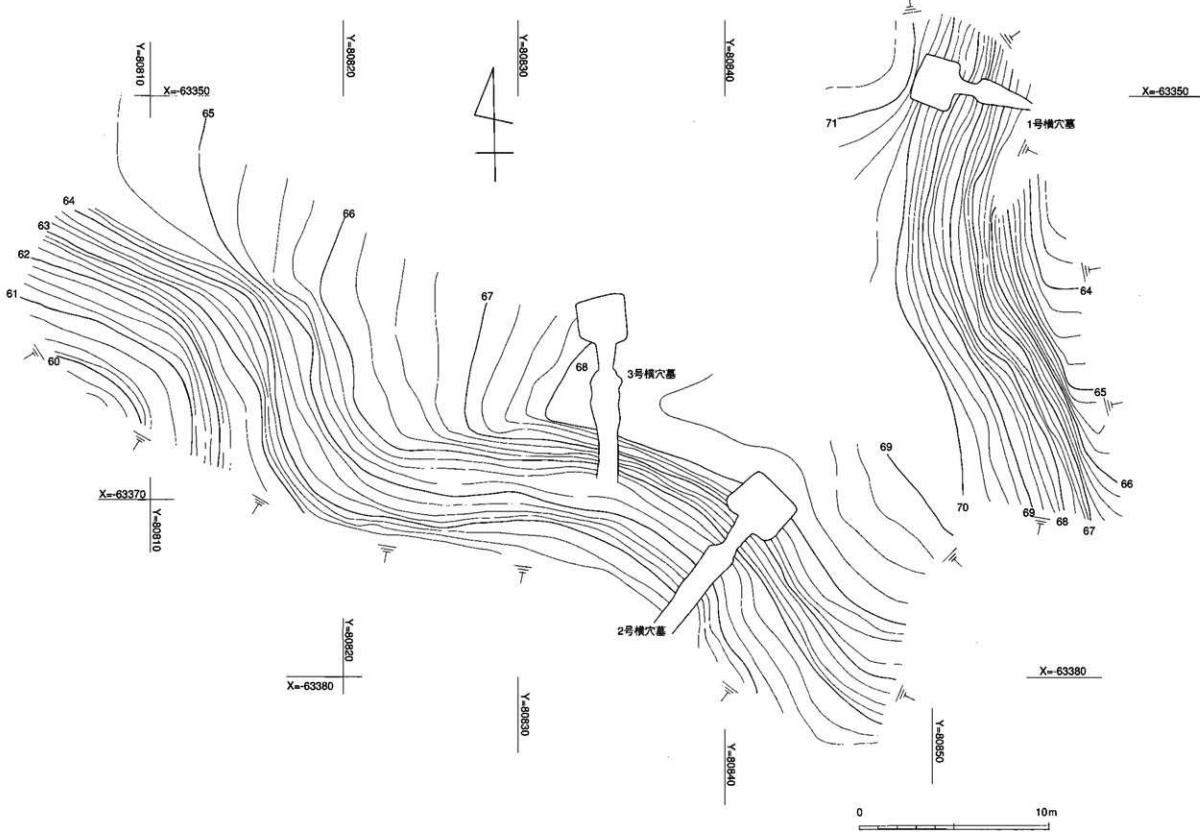
主軸はN-68°-Wにとる。地山の斜面を掘り込んで構築しており、墓道前方にむかって下方に傾斜している。墓道の床面は残存長が2.7m、玄門付近の幅1.3m、前端部で0.4mと玄門に近づく程幅が広がり、三角形に近い形を呈している。

玄門（第134図）

狭道を持たず、玄門のみで玄室と墓道を繋いでいる形態である。縦横断面の形は共に玄室側がやや広がる長方形状を呈している。長さは最大長110cm、幅63~85cm、天井部までの高さ約100~110cmを測る。床面の中央には縦に排水溝が設けてある。排水溝は上端約25cm、下端約10cm、深さ約5cmである。

玄室（第134、135図）

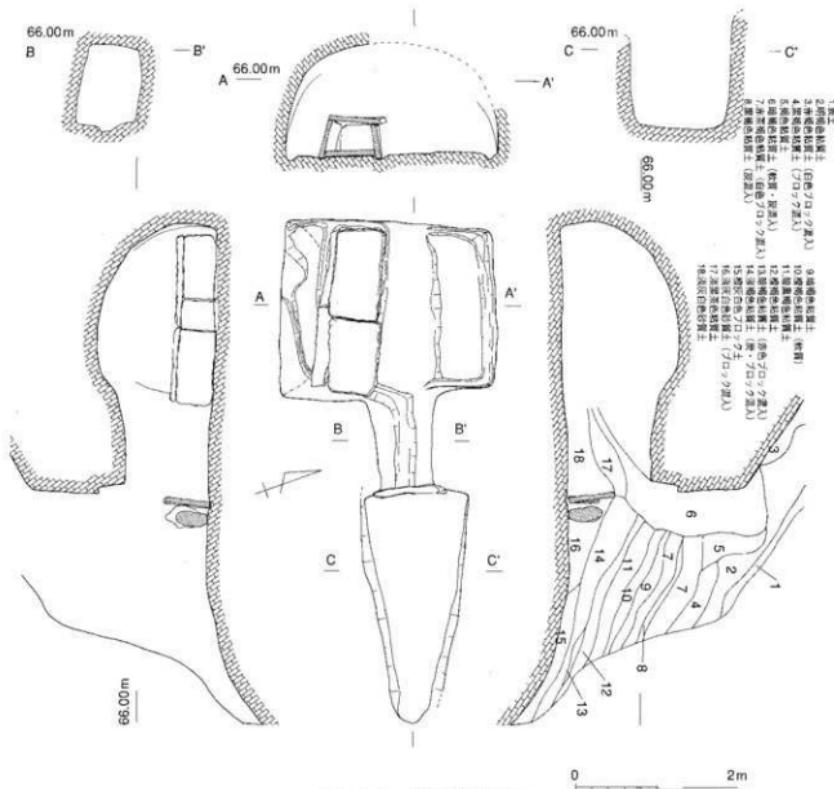
玄室は床面での規模が奥行き2.2m、幅が前壁側で2.60m、奥壁側で2.50mを測り、ほぼ正方形を呈す。天井の一部は崩れ落ちていたが、高さは最高部で約140cmを測る。玄室の立正面は縦断面、横断面共に丸く仕上げられている。天井から左右の壁に向かっては円刃状のノミ痕が確認された。四隅の床面からは界線が伸び、天井に近づくほど薄れ、丸天井になる。玄門より向かって右側には地山を削り出して作った屍床があり、右壁に沿って溝が穿たれている。玄室左側には箱式石棺が置かれており、石棺を除去すると床石の四方に沿って溝が穿たれていた。幅は10~20cm、深さ約5~10cmを測り、そのまま玄門の溝へとつながっていた。



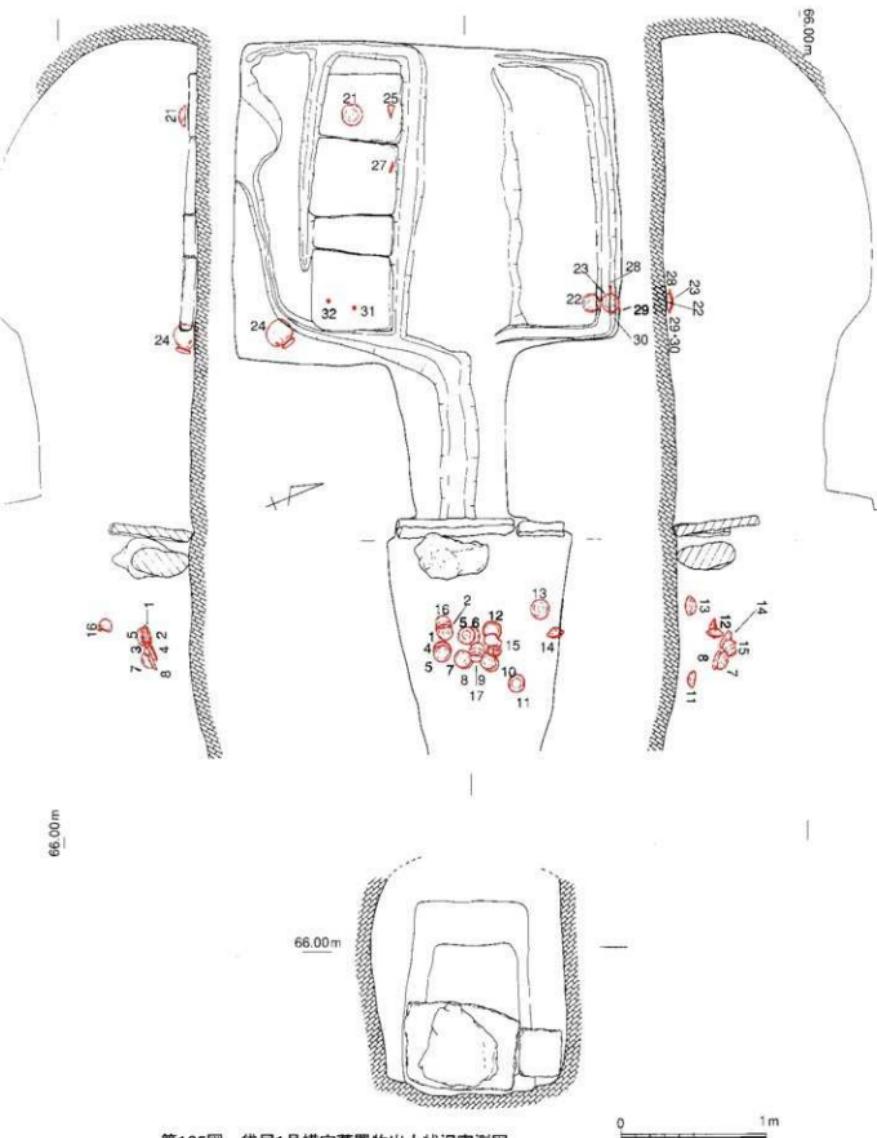
第133図 袋戻横穴群調査前地形測量及び配置図

閉塞施設（第135図）

玄門の前面に大小2枚の板状の白色凝灰岩と未加工の砂岩を組み合わせた閉塞施設が検出された。玄門正面の白色凝灰岩は縦が約60cm、横80cmで、その右側には30cm四方のやや小さい白色凝灰岩が並んでいる。2枚の白色凝灰岩は共に厚さが7~8cmを測り、後述する石棺と同じ石材で、ノミ痕が認められる。未加工の砂岩は高さ約50cm、最大幅55cm、厚さ30cmで、白色凝灰岩の手前で検出された。これは地山直上で検出され、白色凝灰岩を支える為のものと考えられるが、一方で玄門の高さがおよそ1.0mで白色凝灰岩だけでは長さが足りないため、これらの石材のみで閉塞を完了したものとは考えにくい。おそらく白色凝灰岩と砂岩の間に板状の閉塞材を挟んで閉塞したものと推定される。



第134図 1号横穴墓実測図



第135図 袋尻1号横穴墓置物出土状況実測図

石棺（第134、135図）

石棺は、蓋石2枚、側石は玄室中央側に3枚、左壁側に2枚、床石4枚と前後的小口の合計13枚で構成されていた。石材は閉塞石と同じ白色凝灰岩で、工具による丁寧な加工痕が観察出来た。（第156図）石棺の長さは内法で170cm、幅は約60cm、高さおよそ40cmを測る。

土層堆積状況（第134図）



第136図 1号横穴墓出土人骨実測図

墓道部は多量の土砂が堆積していた。

しかし、一部削平を受けていたため、調査前の段階では第9層の暗褐色粘質土が須恵器片と共に一部露出しており、横穴墓の存在を印していた。床面上には多量の須恵器片を包含する橙灰白色ブロック土（第15層）、淡灰白色砂質土（第16層）が堆積しており、その上層に完形の須恵器を包含する淡茶色粘質土（炭・ブロック土混入、第14層）が堆積していた。さらに上層には、炭や須恵器片を包含する暗黒褐色粘質土（第11層）、暗褐色粘質土（第9層）が堆積していた。遺物や炭の包含状況から考えると、完形の壺を包含する第14層の上層にある遺物包含層においては、祭祀として土器の破碎や、炭を生じるなんらかの行為と共に埋められたものと推定される。

玄室内には軟質の暗褐色粘質土（第6層）が流入していた。これはおそらく閉塞材の腐朽による流入土だと思われる。また、玄室内には天井の崩落が見られ、玄門より内部については正確な分層が出来なかった。

遺物出土状況（第135図）

墓道

墓道からは須恵器の壺の蓋が7個と身が7個の合計14個、高壺が1個、短頭壺が3個出土した。壺は第14層から出土し、身の上に蓋をかぶせて、共に口縁を下に向けた状態で確認された。これらの壺は玄門に向かって横2列に並んでおり、意

図的に何らかの意味をもって配置されたものと考えられる。また、淡灰白色砂質土層から出土した須恵器片を接合した結果、大形甕が1個復元された。

玄室

玄室には石棺が置かれており、石棺には人骨が2体埋葬されていた。石棺内には刀子が1個、耳環が2個出土した。その他、玄室右側には壺身・蓋が1個ずつと、鉄錆が3本出土した。石棺の左壁側には提瓶が1個出土した。玄室右側には屍床があり壺以外の遺物はなかったが、ここに人が埋葬されていた可能性がある。

人骨について(第136図)

石棺内には2体の人骨が埋葬されていた。2体ともに残存状況は良好であった。石棺内の玄室中央よりの人骨を1号人骨、玄室左壁側の人骨を2号人骨とした。人骨は互いに頭部を逆に向けて仰向けの状態で検出された。1号人骨は顎付近に鉄錆があり、左手付近には刀子が置かれていた。2号人骨は頭蓋骨の両脇に耳環が対で検出され、右足首に壺身が伏せた状態で置かれていた。胸の辺りは骨が多少動かされた形跡が認められた。また、特筆すべき点として、2号人骨の頭蓋骨が上を向くのではなく足下を向いていることから、頭部を改めて置き直した可能性が大きいことが挙げられる。そして人骨鑑定の結果、2号人骨の顎付近にはベンガラが付着していた。これは1号人骨には見られない点である。

出土遺物(第137図～141図)

1～24は墓道、玄室から出土した須恵器である。時期は出雲4期頃のものと考えられる。

1～20は墓道部から出土した須恵器である。1～14は壺で、伏せた身の上に蓋を被せた状態で出土したものである。この内、11～14は崩れて下に落ちたものと考えられるが、おそらく元は1～10と同じ様に置かれていたものと考える。

1は外面天井部が回転ヘラ削りの蓋で、天井部と口縁部の境は2条の凹線による隆帯で表現されている。やや軟質的印象を受ける。

2は、1の蓋の下にあった身である。3分の1程度自然釉がかかっている。

3は蓋で、器高が3.1cmとやや小さいものである。外面の回転ヘラ削りがよく見えるものである。

4は、3の下になっていた身である。外面底部中央にはヘラの跡が残り、少し雑な回転ヘラ削りである。5、7は天井部と口縁部の境に1条の凹線をもつ蓋である。5は1.2cm程の幅でヘラ削りの跡が確認される。

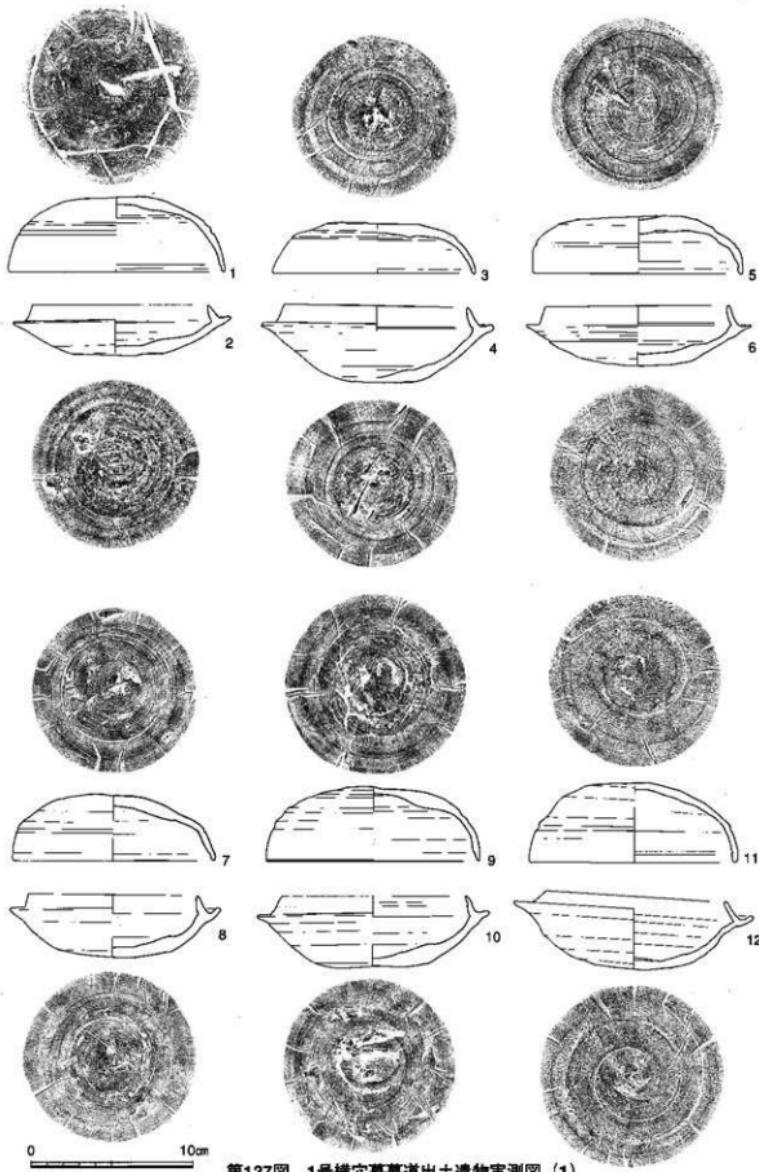
6、8は各々5、7の下になっていた身である。底部外面には回転ヘラ削りが施され、共にほぼ完形である。

9はやや雑な回転ヘラ削りを施す蓋である。墓道出土の壺蓋の中では最も端部が細いものである。

10は9の下から出土した身である。底部のヘラ削りがよく残るものである。

11、13の蓋は他の壺よりも低い位置で検出されたが、検出状況からおそらく12、13の身と併せて置かれたものと考えられる。

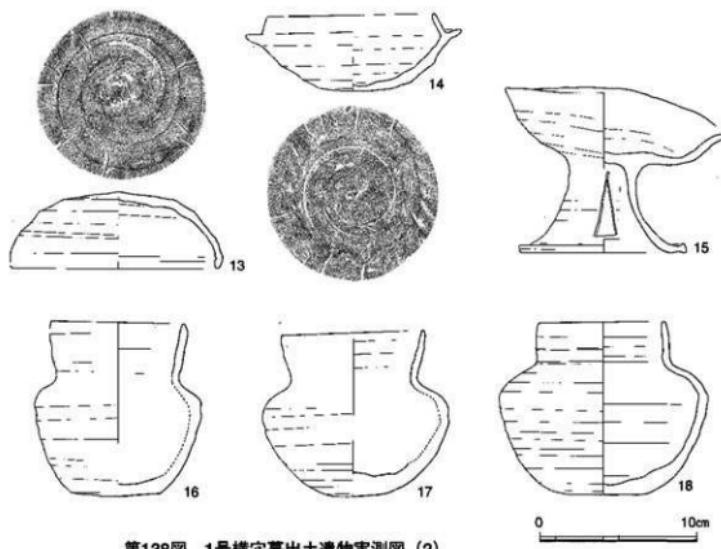
15は口縁部が一部欠損している低脚無蓋高壺で、口径14.1cm、底径10.7cmを測る。脚部には3方向に三角形の透かし孔が一段ある。脚端部の平坦面は明瞭であるが、壺部に段や沈線はない。



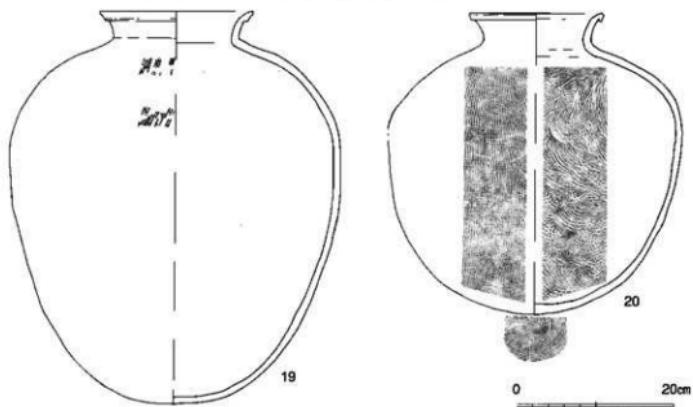
第137図 1号横穴墓墓道出土遺物実測図(1)

16～18は短頸壺である。16は、底部が平底で回転ヘラ削りを施している。17は底部丸底で外面は回転ヘラ削りである。18は破片を接合した結果、ほぼ完形に復元された大甕である。

19は、淡灰白色砂質土層中から出土した破片を接合した結果復元された大甕である。口径19.4cm、器高50.6cmを測る。色調は淡灰白色で、焼成不良の為か軟質である。外面は叩き目、内面は当て具



第138図 1号横穴墓出土遺物実測図(2)



第139図 1号横穴墓道出土遺物実測図(3)

痕がある。

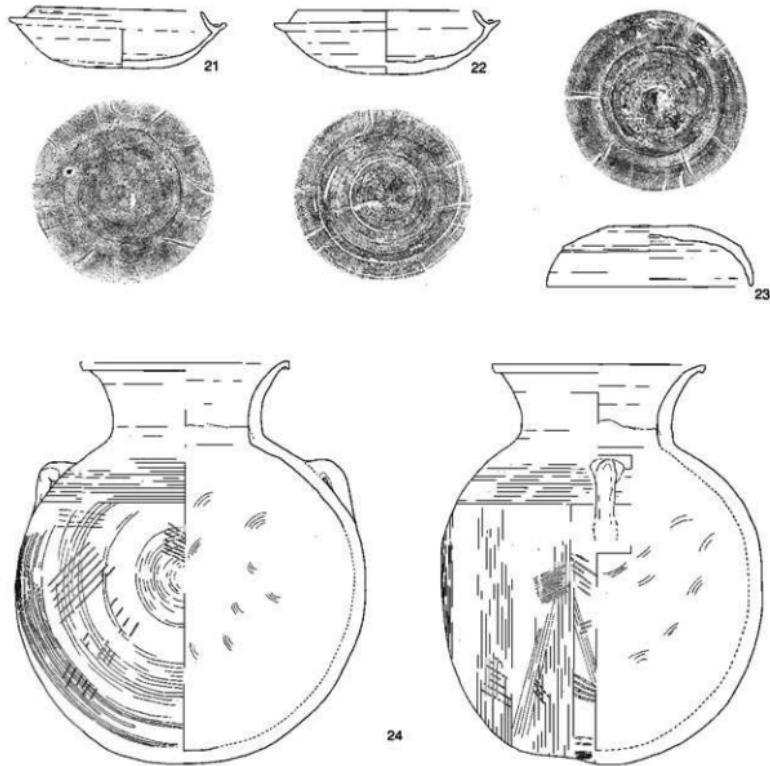
20は暗褐色粘質土層中から出土した甕である。破片を接合した結果、およそ半分が復元できた。口径は16.8cm、器高38.7cmを測る。焼成は良好で底部外面にはカキメが施されている。

21~24は玄室内から出土した須恵器である。

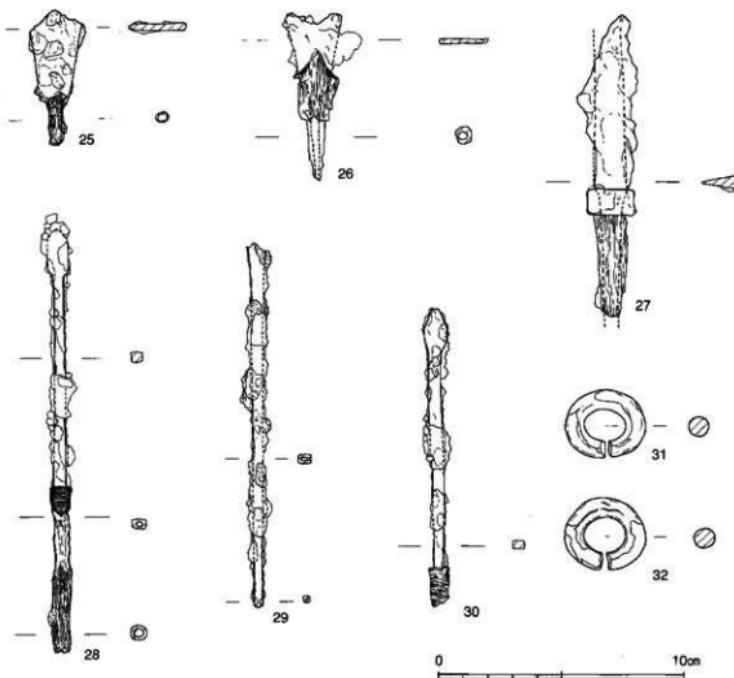
21は石棺内から出土した壺身で、2号人骨の右足首に被せた状態で検出された。外面は回転ヘラ削りで、口縁の一部を欠損している。

22、23は玄室内右側の屍床、玄門よりにセットで置かれていた蓋と身である。蓋は口縁部と天井部の境に沈線をもち、隆帶を表現している。

24は石棺と左側壁の間から出土した提瓶である。焼成は良好で、外面は叩き目とカキ目で調整されている。口縁は一部欠損している。



第140図 1号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)



第141図 1号横穴墓玄室内出土遺物実測図 (2)

25~32は玄室内出土の鉄製品である。

25、26は石棺内から出土した鉄鎌である。25は原位置が不明であったが、26は1号人骨の頸付近で確認された。25は鎌身長3.8cm、鎌身幅2.2cm、残存長5.5cmを測る。鎌身形態は平面形で圭頭式で鎌身関部はおそらく斜関だと思われる。範被部には木質が残っている。26は鎌身長が2.8cm、鎌身幅2.2cm、残存長6.9cmを測る。鎌身形態は方頭式に近いが、鋒がやや「V」字状に切れ込んでいるものである。範被部には鹿角が見られる。

27は刀子である。1号人骨の左腕付近より出土した。刀身長はおよそ7.1cm、元幅1.3cmである。X線ではっきり形はでなかったがおそらく両闊タイプのものと考えられる。また、約1cmのはばき金具が残っている。

28~30は長頭式の鉄鎌である。玄室内右側出土の环蓋の下から出土したものである。28は残存長17.4cmで、範被部には固定するための樹皮が巻き付けられている。30は残存長12.3cmで、同じように範被部には樹皮が残存している。

31、32は2号人骨の頭蓋骨両脇で出土した耳環である。縁青が全体に付着していることから共に青銅を芯にして金鍍金がされていると思われる。

参考文献

『苔沢谷横穴群』 財団法人松江市教育文化振興事業団 1994年

『奥山遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1988年

原 喜久子「島根県における古墳時代の鉄鎌について」『島根県考古学会誌 第10集』

島根考古学会 1993年

②2号横穴墓

位置（第133図）

2号横穴墓は本遺跡群の西側、山頂標高75mの独立丘陵の南西側斜面に開口する横穴墓で、標高は64~65mを測る。同じ独立丘陵の東側斜面には1号横穴墓が存在し、北西には隣接して3号横穴墓の存在が確認されている。また、今回の調査により北西では袋戸2号墳、袋戸古墓群が確認されている。

墓道（第142、143図）

主軸はN-48°-Eを測り、ほぼ北東方向にとる。地山の斜面を加工して造られており、床面は前方（南西）に向かって下方に傾斜している。規模は、床面で長さ5.5m、玄門側の幅1.4m、前端の幅1mを測り、幅は玄門側に向かって若干広がる形状を呈している。遺物は、右奥壁（玄門側右奥）付近から須恵器の壺身（3）1点、高杯（4）1点、提瓶（6）1点が、これより前端方向に1.3mと2mの地点からは壺身（2）、壺蓋（1）が1点ずつ出土している。また、壺蓋、高杯、提瓶等が出土した右奥壁と平行する形で、左奥壁付近より甕（5）1点が出土している。これらの土器は埋葬の際に供獻されたものと考えられる。

小横穴（第142、143図）

墓道の奥壁付近左壁より、小横穴が1穴検出された。この小横穴は、墓道床面から約50cm上方に穿たれている。規模は、開口部幅30cm、高さ34cm、開口部から室内にかけての幅13cm、長さ40cm、室内幅約40cm、長さ約130cmを測る。形状は、開口部から室内にかけてはややくびれる部分があり、室内は細長い楕円形を呈している。遺物等は、この小横穴内からは検出されていない。また、前述の墓道左奥壁付近で出土している甕（5）は、小横穴の前方に位置し、検出レベルも近いことからこの小横穴に供獻されたものとも考えられる。

この小横穴の性格については不明であるが、検出された位置などから2号横穴墓に付随するものと考えられる。

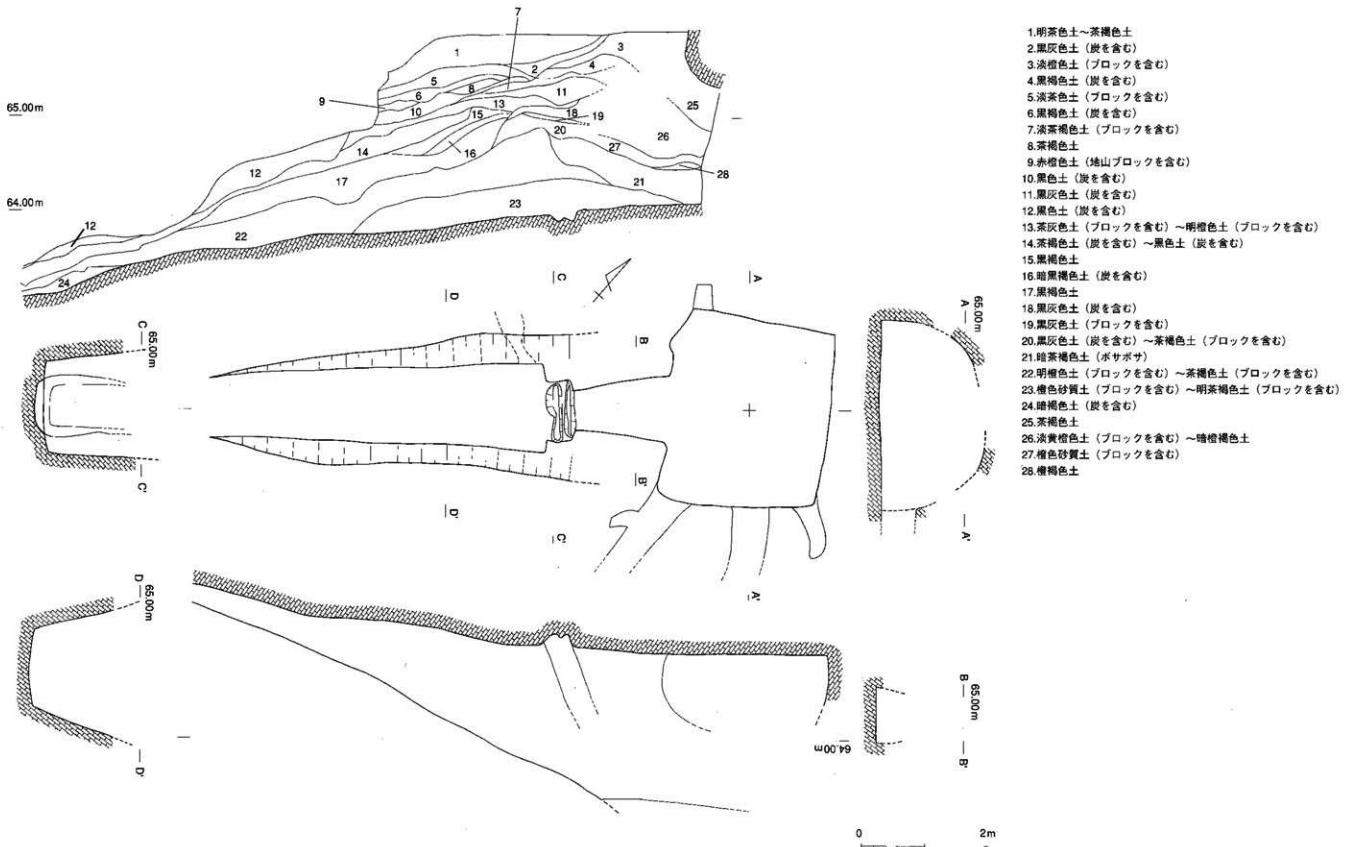
玄門（第142図）

羨道を持たず、玄門のみで玄室と墓道を繋いでいる形態である。幅は、墓道側で0.6m、玄室側で1mを測り、玄室に向かって徐々に広くなる形状を呈す。長さは、1.5mを測るが高さは天井部が崩落していたため不明である。床面は、排水溝などはみられないが墓道方向に向かって緩やかに下方傾斜している。遺物等については検出されていない。

玄室（第142、143図）

主軸はN-52°-Eを測り、ほぼ北東方向にとる。墓道の主軸よりやや東方向に傾いている。床面での規模は、奥行2.2~2.5m、玄門側幅2.9m、奥壁側幅2.7mを測る。高さは、天井部の大半が崩落していること、また作業上の安全面を考え一部故意に落としたことから最高部は不明だが、確認でき得る最高箇所で1.6mを測る。平面形は、横が広い長方形に近い形状を呈している。立面形は、左壁及び天井部の残存箇所から1号墓と同じ丸天井のタイプと考えられる。

屍床は、玄室の左壁側1/3に須恵器の大甕を割った破片によって作られた須恵器床が検出された。



第142図 2号横穴実測図



第143図 2号横穴墓遺物出土状況図

この須恵器床は、須恵器片の敷き方が粗密なことや、玄室床面から浮いた状態の破片が多く認められること、また破片の表裏の規則性が認められないことなどから、追葬時や後に述べる後世による搅乱等などで動かされている可能性が高い。遺物は、須恵器床上もしくはこの付近で、須恵器の提瓶（26、27）2点、坏蓋（7～12）6点、坏身（15～19）5点、短頸壺（24）1点、鉄鎌（30、31）2点、大刀（29）1点が検出されている。前述のとおりこれらの土器等も動かされている可能性は高いと思われる。

玄室右側には、須恵器床や床面の加工などの明らかな屍床は確認されなかったが、須恵器の坏蓋（13、14）2点、坏身（20～22）3点、短頸壺（23）1点や耳環（33、34）が2点検出されたことなどから、この付近にも埋葬されていたものと考えられる。

追葬については、玄室内の状況から判断すると、玄室左右側の屍床の違いなどから少なくとも1回は追葬されたものと思われる。

この他、玄室壁に後世に穿たれた穴が4穴確認されている。左壁では、玄門側の隅辺りに1穴穿たれている。規模は、幅30cm、高さ25cm、長さ40cmである。右壁においては、奥壁と玄門側の隅に1穴ずつまた、これらのはぼ中間（右壁中央辺り）に1穴確認された。それぞれの規模は、奥壁の隅の穴が幅30～50cm、高さ90cm、長さ約70cm、玄門側の隅の穴が幅40～60cm、高さ90cm、長さ1.3m以上、右壁中央の穴が幅50～60cm、高さ110cm、長さ130cm以上を測る。これら右壁に穿たれている穴は、いずれも玄門方向に向かって掘られていることが認められる。また、右壁中央の穴からは、10世紀頃の土師質土器の坏（25）が穴の開口部から奥へ70cmほどの場所で検出されている。

このような玄室内に穿たれる穴は、松江市では菅沢谷横穴群^①や中竹矢遺跡^②で確認されているが用途、目的など性格はわかっていない。

閉塞施設（第142図）

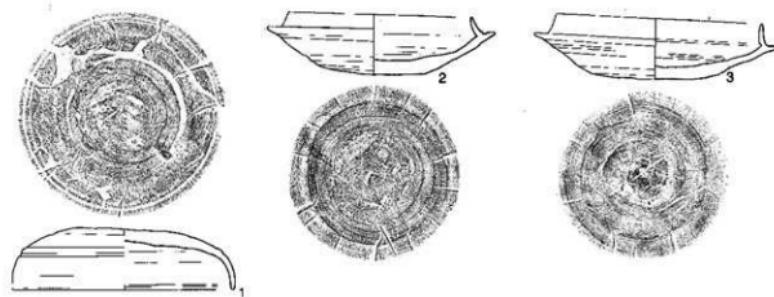
玄門前部の床面に、閉塞材の痕跡と思われる2条の溝状の掘り込みを検出した。幅は玄門側よりそれぞれ10～20cm、12～22cmを測り、深さは共に約15cmを測る。閉塞材は、この溝状の掘り込み痕や閉塞部周辺から石材が検出されていないことなどから、入口全体を覆う木板等の板状の閉塞材にて閉塞されていたものと考えられる。掘り込みが2条存在する点は、初葬時に2重の閉塞材を設けていたのかもしれない。また、追葬等をおこなった後閉塞する際に新しく掘り直し閉塞されたとも考えられる。

土層堆積状況（第142図）

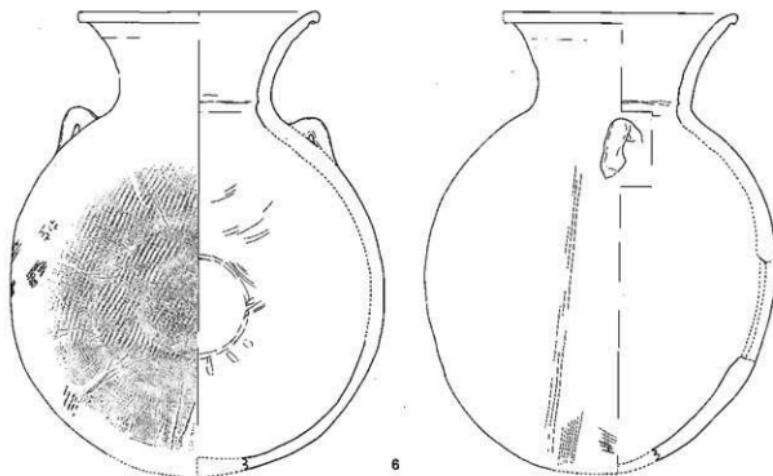
墓道から玄室にかけての土層を観察すると不自然な堆積をしている所がいくつかみられる。第22層の閉塞施設付近と、第18、19、20層の墓道玄門側付近は、自然の堆積によるものとは考えにくく、人為的なものなのかもしれない。これらのことと含めて土層の検討をしたが、不明な点が多く、追葬や後世による進入を土層で判断するには到らなかった。

出土遺物（第144～149）

この横穴墓で検出されている須恵器は大谷編年の出雲4期頃と考えられるものである。



0 10cm



0 20cm

第144図 2号横穴墓墓道出土遺物実測図

墓道出土遺物（第144図）

1は、須恵器の坏蓋で口縁部の一部が欠損している。焼成はあまり良くない。天井部と口縁部の境は、2条の凹線を施すことによってできる隆帯で表現されている。調整は、天井部外面に回転ヘラケズリ、内外口縁部付近は回転ナデ、天井部内面に多方向の静止ナデを施している。2は、須恵器の坏身で、立ち上がりはやや内傾している。この土器も口縁部と受部の一部が欠損している。底部外面は回転ヘラケズリで、底部内面には一定方向の静止ナデが施されている。3は、須恵器の坏身である。たちあがりは、やや上方に向かっている。底部外面は回転ヘラケズリで、底部内面は多方向の静止ナデが施されている。また、底部の頂点には（X）状のヘラ記号が施されていた。4は、須恵器の高坏である。坏部外面と脚部外面にそれぞれ1条の沈線が施され、脚部は三角形透かしが二方に穿たれている。5は、須恵器の瓦泉である。口縁部が欠損しているため口径、器高は不明である。円孔部の一部と口縁部は欠損している。調整は、胴部外面より上部は回転ナデ、下部は回転ヘラケズリである。頸部外面はヘラによる沈線を境に上部に櫛描波状文、下部にカキメを施している。また、肩部外面には上部にカキメ、下部に連続刺突文が施されている。底部は座わりのよい平底である。6は、須恵器の提瓶である。把手は輪状で体部はほぼ球形を呈している。また、口縁部の一部に欠損箇所が認められる。調整は、口縁部外面から肩部外面辺りまでが回転ナデ、これより下部はタタキの後カキメを施している。

玄室内出土遺物（第145～149図）

（第145図）

7～12は、玄室左側から出土している須恵器の坏蓋である。

7は、天井部と口縁部の境は、凹状の沈線によって表現されている。焼成はあまり良くない。調整は、天井部外面に回転ヘラケズリ、口縁部は内外共に回転ナデ、天井部内面に多方向の静止ナデが施されている。8、9、10、12は、口縁部が一部欠損しているものである。また、天井部と口縁部の境は、2条の凹線を施すことによってできる隆帯で表現されている。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。11は、1/2程度欠損している。この坏蓋も天井部と口縁部の境は隆帯によって表現されるタイプである。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、ヘラ起こしの痕跡がよくみえるものである。

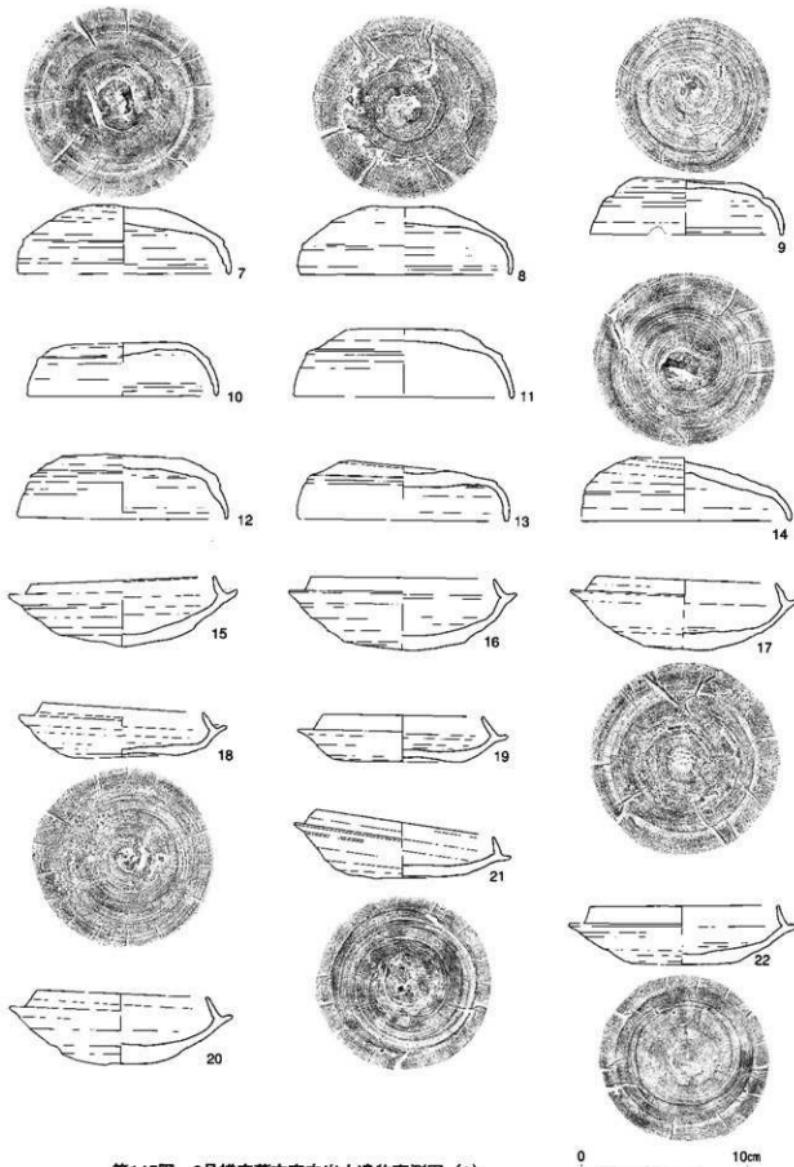
13、14は玄室の右側より検出された須恵器の坏蓋である。これらの坏蓋も口縁部の一部が欠損している。また、天井部と口縁部の境は、隆帯によって表現されている。

15～19は玄室の左側より検出された須恵器の坏身である。

15の底部は回転ヘラケズリの後その跡をナデ消したような滑らかさを呈するものである。16は、外面の回転ヘラケズリによる稜が比較的よくみえるものである。底部内面は多方向の静止ナデを施す。17は、他の坏身比べ受部辺りの器肉はやや薄い形状を呈す。底部外面には回転ヘラケズリを施す。18は、口縁部の一部は欠損しており、底部外面は回転ヘラケズリの後、軽いナデを施す。また、底部内面は多方向の静止ナデである。19は、玄室内で検出された坏身の中でもっとも小ぶりなものである。外面の受部から底部にかけての1/4程度に自然釉が見られる。底部外面は回転ヘラケズリで、底部内面は多方向の静止ナデが施されている。

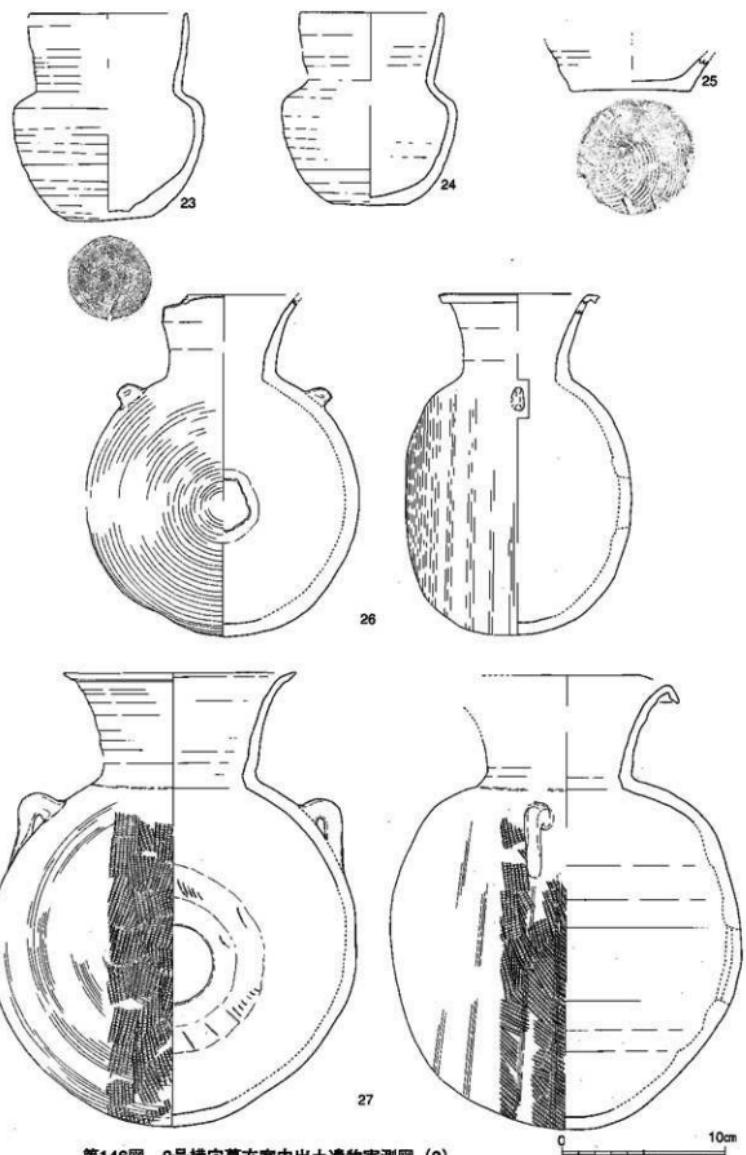
20、21、22は玄室の右側より検出された須恵器の坏身である。

20は、口縁部の一部が欠損しており、立ち上がりの内外には鈍い稜が入る。また、底部外面には自然釉が認められ、回転ヘラケズリを施す。21は、立ち上がりの内外に稜がみられる。身として置い



第145図 2号横穴墓玄室内出土遺物実測図 (1)

0 10cm



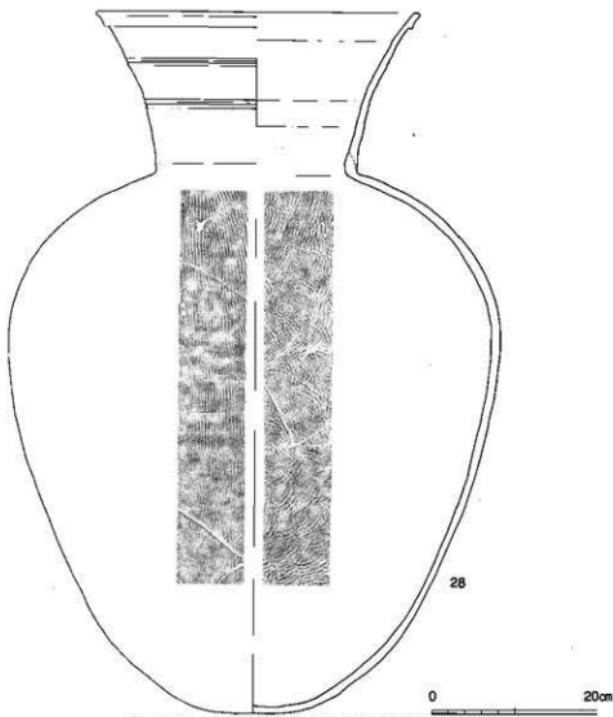
第146図 2号横穴墓玄室内出土遺物実測図 (2)

た場合片側に傾く形状をなし、他の壺身と比べ少々雑な作りである。底部外面は回転ヘラケズリを施す。22は、横長にかなり歪んだ形状をしている。図化した横方向で、口径11.2cm、受怪部13.7cm、器高3.6cm、縦方向で、口径8.6cm、受怪部12.2cmを測る。立ち上がりは、やや上方に向かう形状を呈す。底部外面は回転ヘラケズリを施している。

(第146図)

24、26、27は玄室の左側から、23は玄室の右側から検出された須恵器類である。また、25は玄室内に穿たれていた後世の穴から検出された土師質土器の壺である。

23、24は、短頸壺である。23は、底部には(×)状のヘラ記号が記されている。調整は、底部から体部外面中程のやや下辺りまで回転ヘラケズリ、その他は回転ナデを施している。24は、焼成による軟質の箇所が外面内面共に1/2程度みられる。調整は、底部外面から体部下方1/3までが回転ヘラケズリ、その他は回転ナデを施す。また、底部はしっかりと削られ、座わりのよい平坦面が作られている。25は、土師質土器の壺である。口縁部が欠損していたため口径、器高共に不明である。



第147図 2号横穴墓玄室内出土遺物実測図 (3)

底部外面は回転糸切り痕がみられ、口縁部内面外面、底部内面は回転ナデを施す。焼成は良好である。

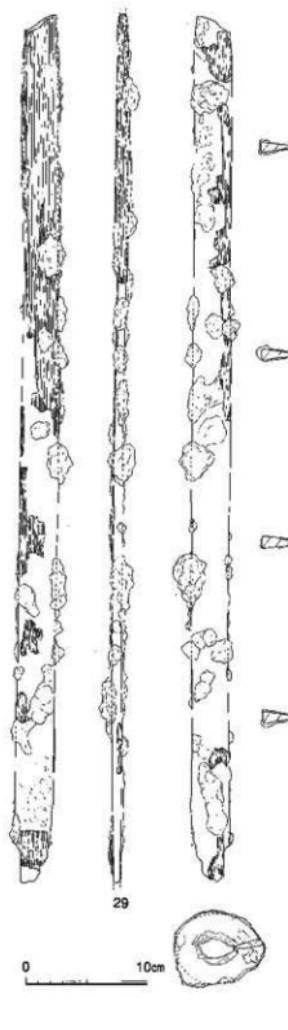
26、27は、提瓶である。26の口縁部は一部を残し欠損している。把手（耳）はいわゆるボタン状と言われているもので隙間ではなく、非実用的なものである。調整は、体部外面にカキメ、その他は回転ナデを施す。27の口縁部は、 $1/3$ 程度欠損している。把手は、輪状把手と言われているものである。口頸基部には口頸部と体部を接合した痕跡が残っている。調整は、口頸部外面に回転ナデ、体部外面にカキメと一部叩き、口頸部内面、体部内面に回転ナデを施している。また、体部内面には一部當て具痕が残っている。

(第147図)

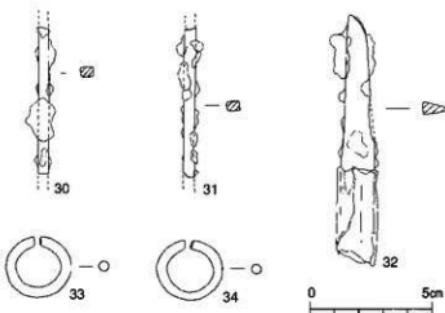
28は、玄室左側で検出された須恵器床を接合し、復元した大甕である。口径39.1cm、器高85.1cmを測る。口頸部は長めで大きく外方に開き、肩は若干張る形状をしている。この大甕はほぼ完形まで復元できている。調整は、口頸部内外共に回転ナデ、体部外面にタタキを施す。体部内面には當て具痕が残っている。また、口頸部外面には2条の凹線が2ヶ所施されている。

(第148図)

29は、玄室左側の須恵器床上から検出した大刀である。切先、茎部は欠損している。現状での法量は、全長



第148図 2号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図(1)



第149図 2号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図(2)

71.3cm、最大幅3.2cm、最大厚1.0cm、茎幅1.8cmを測る。茎部の形状は、鋸化が著しく不明である。鍔は、短径約6cm、長径約7cm、厚さ0.5cmの楕円形を呈している。刀身は、直線状であり反りはみられない。刀身には鞘と思われる木質が付着しており、埋葬時には鞘に納めてあったことがうかがわれる。

(第149図)

30、31は、玄室左側の須恵器床付近から検出された鉄錆の頸部である。断面は四角形を呈し、残存長はいずれも6cmを測る。この両端は欠損しているため詳細は不明である。32は、29の大刀の近くから検出された刀子であり、ほぼ兎形である。残存長10.3cm、刀身長6.4cm、刃幅1.8cmを測る。茎部から関部には柄と思われる鹿角がみられる。関の形状については、鹿角が差し込んであるため、確認することができなかった。33、34は玄室右側から検出された耳環である。両者の法量はほぼ同じであることから、1対をなすものと思われる。金装、銀装どちらなのは不明であるが、全体的に青緑色を呈していることから銅を含有する金属に金、あるいは銀箔を貼り付けていたものと考えられる。

参考文献

註1「菅沢谷横穴群」松江市教育委員会 財團法人 松江市教育文化振興事業団 1994年

註2「埋蔵文化財発掘調査報告書X（中竹矢遺跡）」島根県教育委員会 1992年

須恵器の編年について

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』 島根考古学会 1994年

③3号横穴墓

位置（第133図）

3号墓は本遺跡群の西側、山頂標高75mの単独丘陵の南西側斜面に開口する横穴墓で、標高64～65mを測る。同じ単独丘陵の東側斜面には1号墓が、南東には隣接して2号墓が存在している。

墓道（第150図）

主軸はN—2°—Eを測り、ほぼ北方向にとる。地山の斜面を加工して造られている。床面は、閉塞部付近に12cm程度の段があり、閉塞部から前方に約2.5の地点から50cm程の間には強い傾斜が設けられている。床面の形状は閉塞部から約2.5mまでは緩やかな傾斜を呈し、その後前述の強い傾斜を経て傾斜は若干強めに変換している。規模は、床面で残存長4.7m、玄門側の幅1.35m、床面の傾斜変換地点付近の幅約8m、残存の先端幅約8mを測り、幅は、傾斜変換地点まではほぼ同じで、それ以降玄門側に向かっては若干広がる形状を呈している。

遺物は、閉塞部付近の段上及び緩傾斜間から、須恵器の环身片と短頸壺片が数点床面よりやや浮いた状態で検出されている。

玄門（第150図）

羨道を持たず、玄門のみで玄室と墓道を繋いでいる形態である。規模は、長さ130cm、墓道側幅55cm、玄室側幅80cm、高さ95cmを測り、玄室に向かって徐々に広くなる形状を呈す。床面は、排水溝などはみられないが、墓道方向に向かって緩やかに下方に傾斜している。両壁面からはノミ痕が鮮明に確認することができる。

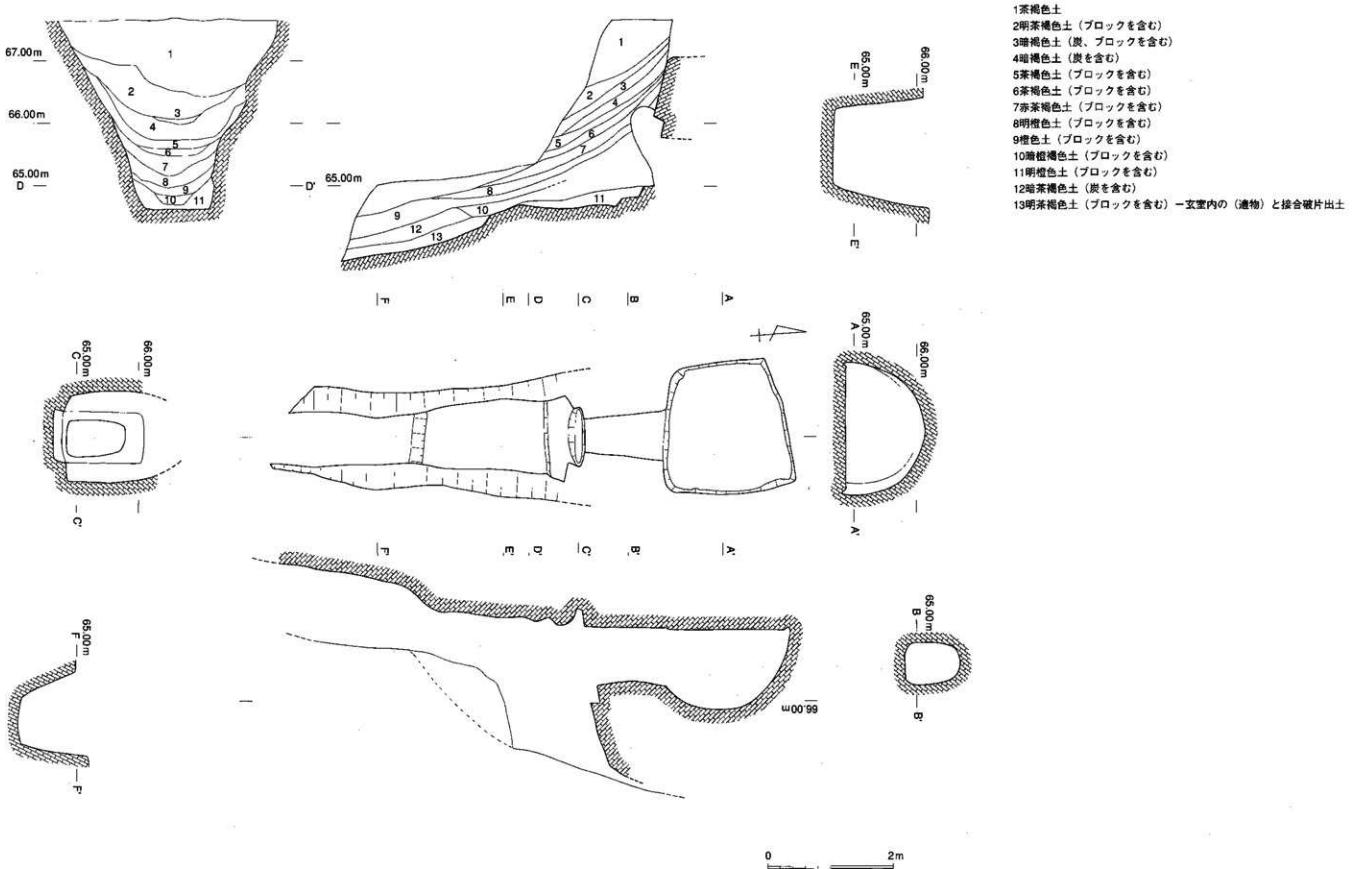
遺物は、閉塞部から80cmの地点から須恵器片が1点検出されている。

玄室（第150、151図）

主軸はN—2°—Wを測り、ほぼ北方向にとる。墓道の主軸より若干西方向に振るがほぼ同軸方向である。床面での規模は、左壁側奥行1.4m、右壁側奥行2.0m、玄門側幅1.9m、奥壁側幅2.0m、最高部1.25mを測る。平面形は、左壁側の奥行は短いがほぼ正方形に近い形態を呈している。また、奥壁の二隅の界線は天井部に近づくにつれ薄れ、玄門側の二隅は界線みられない。形状としてはテント形を意識して造られた丸天井のタイプと考えられる。床面は、玄室内の四方を一周する形で溝が設けられている。

屍床は、玄室の奥側に5～25cmの繊を敷き詰めた砾床が、その手前、玄室中央に須恵器の大甕を割った破片によって作られた須恵器床が検出された。砾床に使用されていた砾は、表裏平坦なものでこの袋屍遺跡調査区付近ではみられないものであり、ある程度離れた場所から持ち込んできたものと思われる。また、須恵器床に使用されていた破片は一個体の大甕に復元された。砾床、須恵器床は共に動かされた形跡はみえず、（須恵器床に到っては、3片を除く他すべての破片が表（外面）を上にして敷かれている。）これら屍床がつくられた当時の状態をそのまま留めているものと思われる。また、これらの屍床が作られた順位は、砾床の砾の上に須恵器床に使用された破片が乗っていることが認められたため、奥の砾床から作られていることが確認された。

玄門側の空間（須恵器床手前）は砾床、須恵器床のような明らかな屍床は作られていないが、後



第150図 3号横穴墓実測図

述のとおり屍床として使用されている。

玄室内出土遺物、人骨（第151図1～14）

玄室内では、磔床、須恵器床で1体ずつ（1号人骨、2号人骨）また、2号人骨に脚部が乗るような形で1体（3号人骨）が埋葬されていた。1、2号人骨の保存状態は良好であったが、3号人骨は磔床や須恵器床などの屍床が作られていないためか保存状態は悪く、脚部、腕部、歯などを残すのみであった。

1号人骨は頭部を右（東）に置き、須恵器の坏蓋2点（1、2）を左右に枕とするような形で伸展仰臥位で埋葬されている。壯年の女性と推定されている。また、この人骨の頭蓋骨からは、前頭部から頭頂部にかけてベンガラと思われる赤色顔料の付着が認められ、頭蓋骨が置き直されていることも確認されている^⑩。また、奥壁と右壁の隅から提瓶（10）が、頭蓋骨右下からは、耳環が1点（14）検出されている。腰の辺りには須恵器の坏身が左右に1点ずつ（4、5）底部を上にして置かれていた。この左の坏身（4）は1号人骨に供獻されている他の土器（1、2、3）との配置関係がくずれている様にも見えることから、この坏身は動かされている可能性もある。また、これら2点の坏蓋、2点の坏身は、左右逆になる形で互いにセット関係になり得ることが確認された。すなわち（1）と（4）、（2）と（5）が1セットである。また、この（1）と（4）の外面頂部からはベンガラと思われる赤色顔料が検出されている。特に（1）は、（X）にも見え得る形で付着している。この様な（X）状にも見え得る赤色顔料の付着は、松江市の筆ノ尾横穴群第4号穴でも検出されている^⑪。（1）が同様の赤色顔料が付着していた頭蓋骨の下にあったことから、頭蓋骨に塗られた顔料が（1）に流れたとも考えられるが、人为的に（X）を意識して塗られたとすれば、この出雲地方での発見は貴重な資料になり得るものである。

2号人骨は、1号人骨と正反対に頭部を左（西）に置き、須恵器の坏蓋（3）と坏身（6）を枕にする形で伸展仰臥位で埋葬されている。（坏身は底部を上にして置かれている）壯年後半～熟年前半の男性と推定されている。この人骨の頭蓋骨も置き直された形跡が認められている。なお、この頭蓋骨などからの赤色顔料の付着は確認されていない。1号人骨に伴う坏蓋、坏身がセット関係になるものに対しこの坏蓋（3）、坏身（6）は単独のものである。また、大腿骨の付根右下付近からは刀子が一点（13）検出されている。

3号人骨は、2号人骨と正反対に1号人骨と同様に頭を左（東）に置いて伸展仰臥位で埋葬されていたと思われる。人骨の下腿は玄室左玄門側付近より検出されているが、その他残存する骨部から3号人骨は、何らかのために2号人骨に脚部の一部を乗せる形で動かされている。また、下腿部以外は白骨化する以前の位置を現在まで保っているものと思われ、3号人骨が埋葬されてから比較的早い時間に動かされたものと推定される。また、その理由、目的等については、3号人骨埋葬後、儀式的なものを玄室内で行おうとし、玄室側右壁付近あるいは玄室入口付近の空間が必要であったとも考えられる。いずれも詳細はわからないが、3号人骨埋葬後玄室内に何らかの理由で当時の人に入ったのは明らかである。

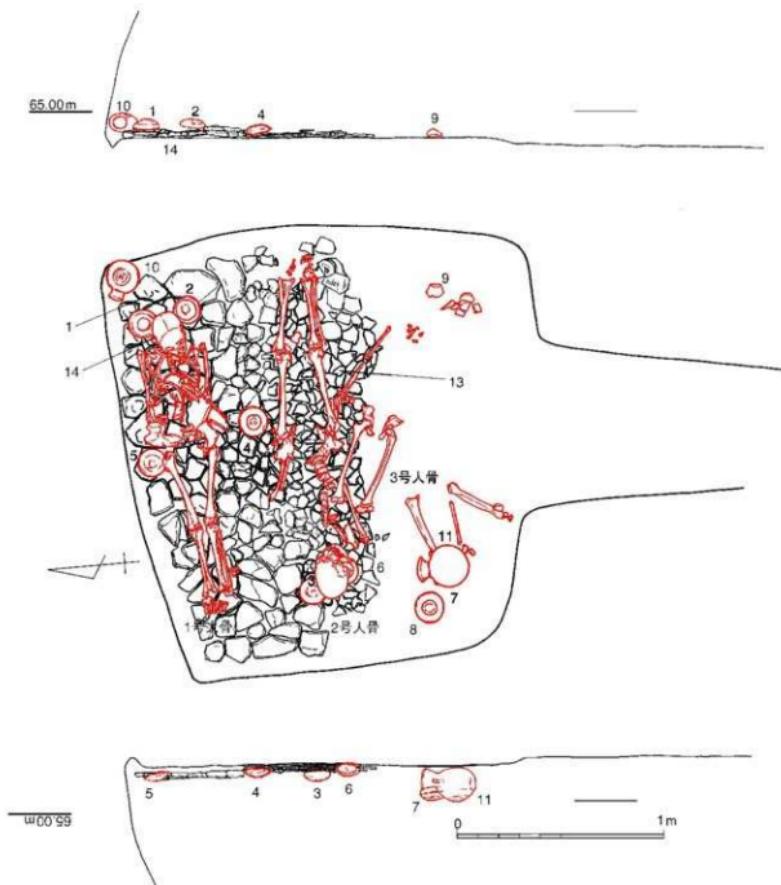
埋葬順位は、各屍床の作られた順位から1、2、3号人骨の順で埋葬されたものと考えられる。その他の遺物は、玄門側右付近で短頸壺（9）が壊れた状態で検出されている。その場所から3号人骨に伴うものとも思われる。玄門側左付近では坏蓋（7）、坏身（8）がセットになった状態で、また、提瓶（11）が3号人骨の下脚部の上に倒れている状態で検出されている。

閉塞施設（第150図）

玄門前部の床面から幅10~25cm、深さ22cmの溝状の掘り込みを検出した。この溝状の掘り込みは閉塞材の痕跡であると思われ、閉塞部付近や墓道の堆積土中などからの石材は検出されなかったことから2号穴同様、木板等の板状の閉塞材にて閉塞されていたものと考えられる。

土層堆積状況（第150図）

墓道から玄室にかけての土層を観察すると人為的なものによる堆積の箇所が認められる。第12、



第151図 袋戸3号横穴墓玄室内遺物出土状況実測図

13層は閉塞部から約3mの所より人為的に切られた形跡が認められ、一定時に当時堆積していたこれらの土層とそれ以上を排除し玄室に進入したものと考えられる。これは最終の横穴進入時と考えられ、それ以前の進入回数は不明である。なお、第9、10層は進入後埋められた土層と思われ、第1~8層はその後自然堆積したものである。

出土遺物（第152~155図）

1~12、15、16は大谷編年出雲4期に相当するものである。

（第152図）

1~10は、いずれも玄室内から出土している須恵器である。1は、1号人骨の右の枕に使用されていた壊蓋である。天井部外面にはベンガラと思われる赤色顔料が（×）状になり得る形で付着している。天井部外面は回転ヘラケズリを施している。2は、1と同様1号人骨の左の枕に使用されていた壊蓋である。口縁部に一部欠損箇所が認められる。また、この壊蓋の赤色顔料の付着はみられない。天井部外面は回転ヘラケズリを施している。3は、2号人骨の左の枕に使用されていた壊蓋である。1、2と比べると口径は大きく、口縁部の立ち上がりは上方に向かっている。形態は、やや古め的印象を受けるが他と同じ出雲4期に相当するものと思われる。4は、1号人骨の左の腰辺りで検出された壊身である。底部外面には1と同様に赤色顔料の付着が認められる。また、口縁部の一部には欠損箇所が認められる。底部外面は回転ヘラケズリを施している。5は、1号人骨の右の腰辺りで検出された壊身である。左にやや傾く座わりをするものである。この壊身の赤色顔料の付着はみられない。底部外面は回転ヘラケズリを施している。6は、2号人骨の右の枕に使用されていた壊身である。4、5と比べると口径は大きく、器高はやや低い形状を呈す。底部外面は回転ヘラケズリを施している。

以上の壊蓋、壊身では各セット関係が成り立つことが確認された。同じ赤色顔料が付着する1、4と2、5がセットである。なお、3と6についてはセットにはならないと判断している。

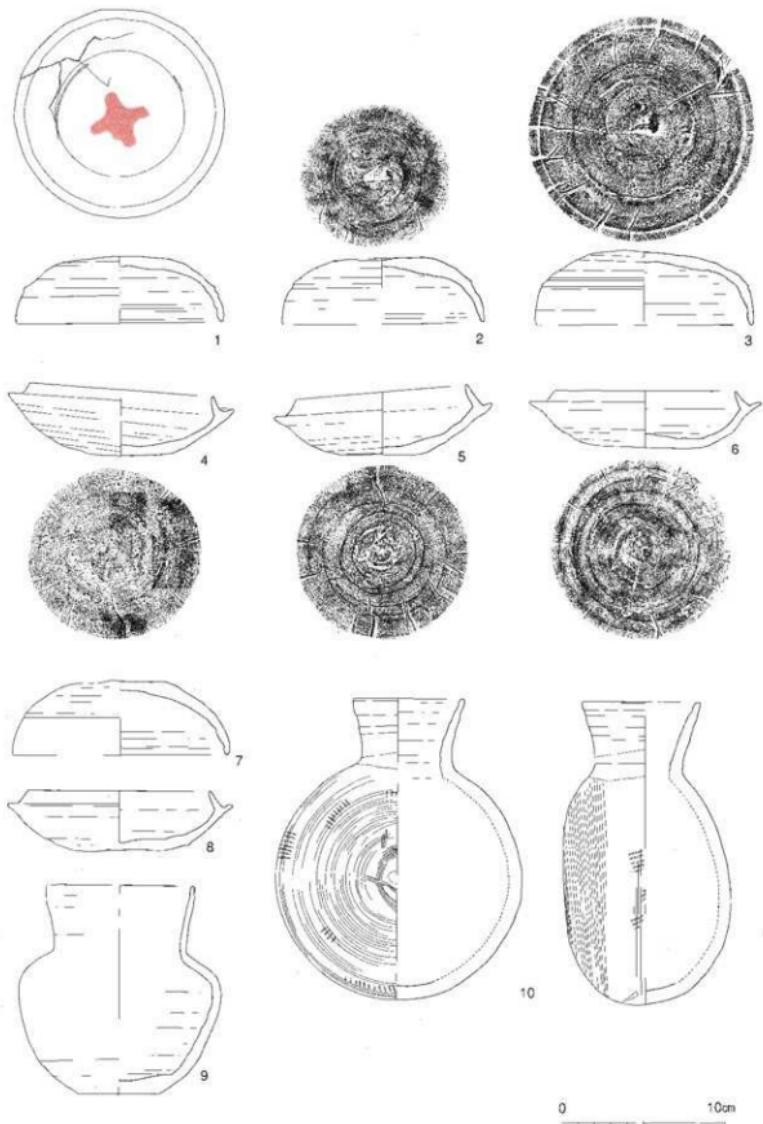
7と8は、玄門側壁と左壁の隅辺りにセットで置かれていた壊蓋と壊身である。7は、口径が玄室内で検出された壊蓋の中で最大を測るものである。また、口縁部の一部は欠損している。天井部外面は回転ヘラケズリを施す。8は、受部が玄室内で検出された壊身の中で最大を測るものである。底部外面は回転ヘラケズリを施す。9は、玄門側壁と右壁の隅辺りで検出された底部付近の破片と、墓道から検出した口縁部付近の破片が接合された短頭甌である。体部1/3程度下は回転ヘラケズリを施し、底部はしっかりとした平坦面を作っている。10は、1号人骨の頭蓋骨右付近、奥壁と右壁の隅から検出された提瓶である。把手はみられず、口縁端部は一部欠損している。胴部の背面はやや扁平で、口縁部に対し体部の軸は斜めにとっている。体部外面の両面にはカキメが施されている。

（第153図）

11は、玄室左壁と玄門側壁の隅辺りで3号人骨の下腿部の上に倒れた形で検出された須恵器の提瓶である。右壁側の横からは、7、8が検出されている。口縁部の一部は欠損している。把手は輪状把手と言われるもので、口縁端部は薄手の二重口縁である。体部はタタキの後カキメが施されている。12は、玄室内で検出された須恵器床を接合し、復元した大甌である。口径23.8cm、器高52.0cmを測る。口縁部は大きく外傾し、端部は二重口縁を作っている。肩は張り、体部は球形を呈す。この大甌はほぼ完形まで復元できている。

（第154図）

13は、2号人骨の大脚骨右側から検出された刀子であり、切先は欠損している。茎部から闘部には

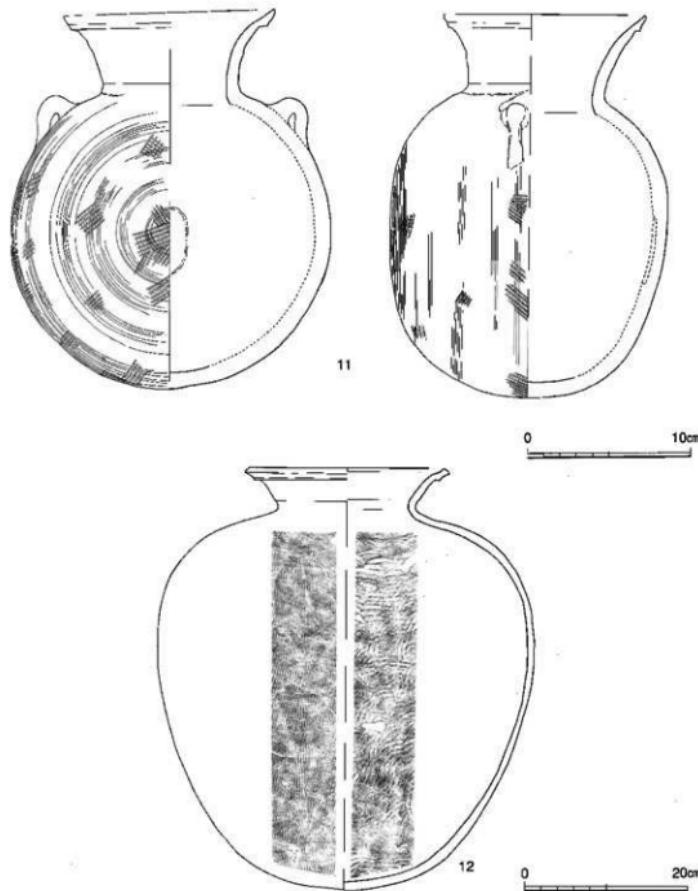


第152図 3号横穴墓玄室内出土遺物実測図 (1)

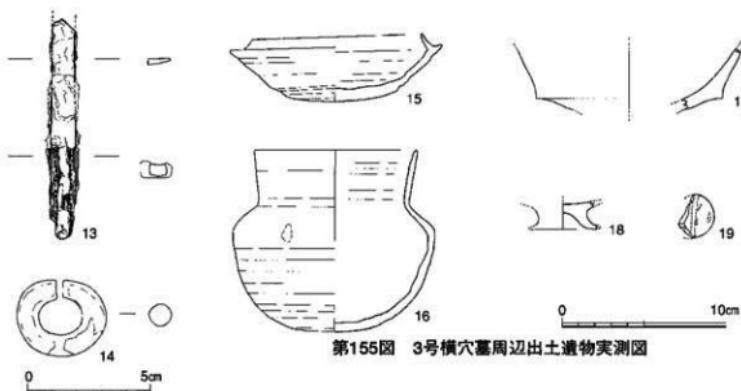
柄と思われる鹿角がみられ、関部は両関である。14は、1号人骨の頭蓋骨右側から検出された耳環である。厚さは0.9cmを測る。金色が確認できる箇所がみられたことから、金装の耳環である。

(第155図)

15は、墓道から検出された須恵器片を接合した壺身である。底部外面に回転ヘラケズリを施している。16~19は、この横穴墓付近から検出された遺物である。16は、須恵器片を接合した短頸壺である。肩部には指痕がみられる。体部外面中央下辺りから回転ヘラケズリを施し、底部は平坦面を呈



第153図 3号横穴墓玄室内出土遺物実測図（2）



第155図 3号横穴墓周辺出土遺物実測図

第154図 3号横穴墓玄室内出土
鉄製品実測図

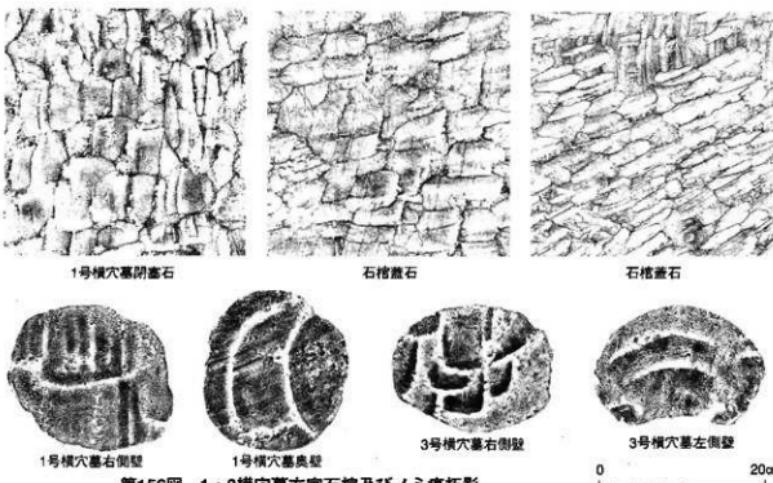
しない。17は、鼓形器台の器受部である。調整は、風化が著しく不明である。18は、低脚壺の脚部である。この土器も風化が著しいため調整は不明である。19は、土玉（丸玉）である。1／2程度は欠損しており、調整は風化のため不明である。

註1 烏取大学医学部 井上貴央教授よりご教示頂いた。

註2 「筆ノ尾横穴群発掘調査報告書」財団法人 松江市教育文化振興事業団 1995年

須恵器の編年について

大谷児二「出雲地域の須恵器の偏年と地域色」「島根考古学会誌 第11集」島根考古学会 1994年



第156図 1・3横穴墓玄室石棺及びノミ痕拓影

④考 察

袋尻横穴墓群は、合計3穴確認され、調査を行った。3穴は丘陵のほぼ同じ標高に穿たれた横穴墓で、位置も比較的近くに存在していた。出土遺物などから考えると、それぞれ6世紀後半頃に使用されていたものと考えられる。

3穴の共通点としては同丘陵にほぼ同じ時期に使用されていたであろうこと、そして比較的短期間のうちに追葬が行われていたことが挙げられる。玄室は3穴とも丸穴井と考えられた。しかしながら、埋葬形態や出土遺物などはそれぞれがバリエーションに富んだ横穴墓であった。

1号横穴墓は白色凝灰岩を使用した閉塞部をもち、玄室内に組み合わせ石棺をもつ埋葬形態で、残存状況の良好な人骨2体が出土した。2号人骨は頭部を置き直された形跡があり、頭蓋骨にベンガラが付着していた。1号人骨にはベンガラの付着がなく、頭部も置き直された形跡はないと考えられた。附録で井上教授に考察して頂いたが、おそらく先葬した2号人骨に次いで1号人骨を追葬したものと考えられる。石棺の石材は白色凝灰岩で、隣接していた菅沢谷横穴群のC-5号穴でも同じ形態、石材のものが検出されている。周辺の横穴では弥陀原横穴群でも白色凝灰岩の石棺が検出されている。石の産地は玉湯町方面と考えられ、忌部川流域における石材の採用について、当時の需給、政治的関係を知る上で貴重な資料となるものであろう。

2号横穴墓は天井が崩落していたため人骨は確認されなかったが、須恵器床が検出され、遺物として須恵器の壺の他、大刀や耳環などが出土した。遺物のなかには（×）状のヘラ記号が記されているものがある。

3号横穴墓は人骨3体が出土している。2体は残存状況が良好で1号横穴墓と同じように頭蓋骨を置き直していた。この内、1号人骨の頭蓋骨の下から赤色顔料の付着した壺が出土している。この壺は（×）あるいは（+）状に見えるもので、赤色顔料の付着した須恵器は筆ノ尾横穴群第4号穴でも確認されている。また、忌部川流域の弥陀原横穴でもベンガラが付着した壺蓋が出上している。この須恵器が、人骨のベンガラが流れ付着したものでないとするなら、副葬あるいは祭祀に関して靈が浮遊するのを封じる為等、埋葬の場において呪術的な意味合いが考えられ、意図的に埋納されているとも考えられる。このような例は県内でも少なく、貴重な資料となるものである。

また、残存状況の良好であった1号横穴墓と3号横穴墓については玄室内の工具痕の拓本を探り、掲載した。円刃状の工具による削痕がみられ、3号横穴墓には一部に半刃状の加工痕が見られる。

袋尻横穴墓群は3穴の調査であったが、周辺の横穴墓の形態や遺物、石材等、相互の関係を明らかにしていくことが今後の課題だと思われる。

<参考文献>

- 「松江・弥陀原横穴群」「島根県埋蔵文化財発掘調査報告書」 第XVII 1991年
- 「横穴墓築造に伴う掘削技法」「島根県考古学会誌第12集」 島根考古学会 1995年
- 「菅沢谷横穴群」 松江市教育委員会 財團法人 松江市教育文化振興事業団 1995年
- 「筆ノ尾横穴群発掘調査報告書」 松江市教育委員会 財團法人 松江市教育文化振興事業団 1995年
- 古川 登「顔料あるいは塗料による彩色記号のある須恵器について」「岐阜史学 89号」 1995
- 勝部 昭「十印のある土器」「古代学研究」第94号 古代学研究会 1980年

第Ⅳ章 小 結

袋尻遺跡群は弥生時代から近世にかけての複合遺跡であった。弥生時代中期頃から近世にかけての遺物が出土し、遺構としては竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡1棟、古墳8基、近世墓2基、横穴墓3穴、古墓群が検出された。

古墳は4号墳、7号墳、8号墳など前期古墳が確認された。今まで忌部川流域は前期古墳が未確認であり、特に合わせ口の土器棺が出土した4号墳、8号墳の発見は大きな成果であったと思われる。また、袋尻B遺跡では谷状地形の緩斜面に古墳時代前期頃の竪穴住居跡が検出された。このような住居跡や古墳の立地状況から考えると、古墳時代前期頃にこの背沢池がある谷を中心とする周辺地域にはかなりの勢力をもつ人々の生活の営みがあった可能性が強いと思われる。

また、袋尻横穴墓群においては玄室内部の残存状態が比較的良好、好資料を得ることができた。横穴墓は3穴ともに6世紀後半頃のものと考えられる。

袋尻1号横穴墓からは白色凝灰岩で造られた組み合わせ石棺が検出されたが、この石材や石棺の形態は弥陀原1号横穴墓や菅沢谷C-5号横穴墓のそれにたいへん酷似するものであり、注目される。石材は玉湯町地内のものである可能性が強く、乃白地域での石材の需給関係や政治的な関係を考える上で貴重な資料になると思われる。また、石棺内から2体分の人骨が出土しているが、頭蓋骨を置き直した形跡が見られ、埋葬状況をよく残しているものである。

また、3号横穴墓からも人骨が出土した。これも残存状況がよく、3体出土した人骨の内2体は頭蓋骨が置き直されていたものである。この2体は奥の1号人骨が疊床の上で、2号人骨が須恵器床の上で検出されている。1号人骨の下からは赤色顔料が付着した須恵器蓋が出土しており、隱岐の東笠根1号墳、松江市内の筆ノ尾横穴群などでも赤色顔料の付着した須恵器が確認されている。今回の調査でより注目されるのは赤色顔料が「X」状に付着しており、もし仮にこれが人為的に彩色されたものであれば出雲地方の古墳時代後期の葬法を解明する上で貴重な資料となるものと考える。

横穴墓は3穴のみであったが、おそらく隣接する菅沢谷横穴群と密接な関係があったと思われる。また、近年調査された松本3号横穴墓なども出雲4期の横穴墓であり、今後周辺の遺跡との関わりを検討し、位置付けをする必要があるものと思われる。

調査の結果、乃白地域で新たな遺跡が発見されたが、今後は弥生時代中期から後期の墳墓群として有名な友田遺跡、古墳時代前期の袋尻遺跡群、古墳時代中期の長砂古墳群、後期の袋尻横穴墓群、奈良時代の古代道が検出された松本古墳群等の性格、分布状況を検討していくば乃白地域の各時代の変遷を解明していく手がかりとなると思われる。

袋戸遺跡群出土遺物観察一覧表（土器）

遺物番号	測定番号	遺跡名	出土場所	基準種	法寸 (cm)	手当の特徴	地土・構成・色調	備考
第 9 団 1	58	1 号墳	現在東側 SD-02 内	壺形 环身	口径: 11.2	調整: 外面 回転へら削り、 横ナデ	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰白色	
第 10 団 1	58	2 号墳	2 区墳丘 盛土内	土師器 壺	口径: 22.2	調整: 横ナデ	粘土: 1mm 大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 青灰白色	
第 10 団 2	58	2 号墳	主体部内	土師器 低脚杯形器		調整: 内面 横ナデ	粘土: 1~2mm 大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶色	
第 10 団 3	58	2 号墳	SD-01	土師器 更細部		調整: 外面 横ナデ	粘土: 1~2mm 大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶色	
第 10 団 4	58	2 号墳	SD-01 小型壺	土師器 壺	口径: 9.6	調整: 内面 ヘラ削り	粘土: 1~2mm 大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡茶色	
第 10 団 5	58	2 号墳	3 区 SK-02	土師器 壺形部	口径: 14.8	調整: 内面 ヘラ削り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色	
第 10 団 6	58	2 号墳	SX-01 坪	土師質土器 坪	口径: 5.8	調整: 横ナデ 底部 回転糸切り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 10 団 7	58	2 号墳	SX-01 坪	土師質土器 坪	底径: 5.8	調整: 横ナデ 底部 回転糸切り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 10 団 8	58	2 号墳	SX-01 坪	土師質土器 坪	口径: 12.7 底径: 8.8	調整: 横ナデ 底部 回転糸切り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 10 団 9	58	2 号墳	SX-01 坪	土師質土器 坪	口径: 5.8	調整: 横ナデ 底部 回転糸切り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 21 団 1	58	3 号墳	主体部西側 盛土下	土師器 小形丸壺	口径: 12.7	調整: 内面 ヘラ削りの後横ナデ	粘土: 1mm 以上の砂粒を含む 焼成: やや不良 色調: 淡褐色	
第 21 団 2	58	3 号墳	北側張替 盛土下	土師質土器 坪	口径: 8.1 底径: 4.0 高さ: 1.2	調整: 横ナデ 底部 回転糸切り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 黄茶色	口縁部下に 沈縫
第 21 団 3	58	3 号墳	北側張替 盛土下	土師質土器 坪	口径: 8.1 底径: 3.6 高さ: 1.9	調整: 横ナデ 底部 回転糸切り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 黄茶色	口縁部下に 沈縫
第 21 団 4	58	3 号墳	北側張替 盛土下	土師質土器 坪	口径: 4.3 底径: 3.5 高さ: 1.2	調整: 横ナデ 底部 回転糸切り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 黄茶色	口縁部下に 沈縫
第 21 团 5	58	3 号墳	北側張替 盛土下	土師質土器 坪	口径: 9.3 底径: 5.0 高さ: 1.5	調整: 横ナデ 底部 回転糸切り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 黄茶色	口縁部下に 沈縫
第 27 団 1	59	4 号墳	墳頂部 地山面	土師器 壺	口径: 29.8	調整: 外面 ハケと横ナデ 内面 ヘラ削りと横ナデ 頭部外周 連續削突文 頭部内面 ヘラ削り	粘土: 1mm 以上の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 明黄色	土器種 I 平底
第 27 団 2	59	4 号墳	墳頂部 地山面	土師器 壺	口径: 37.4 底径: 73.9 側壁厚: 36.9	調整: 外面 ハケと横ナデ 内面 ヘラ削りと横ナデ 頭部外周 竹籠削突文 頭部内面 竹状文、竹籠削突文	粘土: 1mm 以上の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 明黄色	土器種 II 平底
第 30 団 1	59	4 号墳	墳頂部 東北斜面 地山面	土師器 壺口縁部	口径: 24.0	調整: 外面 ハケと横ナデ 内面 ヘラ削りと横ナデ	粘土: 1mm 大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	土器種 II
第 30 団 2	59	4 号墳	墳頂部 東北斜面 地山面	土師器 壺	口径: 28.7 底径: 45.5 側壁厚: 36.2	調整: 外面 横ナデ 内面 ヘラ削りと横ナデ	粘土: 1mm 以上の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	土器種 II 平底
第 36 団	59	5 号墳	墳頂部 第 2 塚内	土師器 壺口縁部		調整: 横ナデ	粘土: 1mm 以下の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 茶色	
第 42 団	59	6 号墳	東側張替 盛土	土師器 壺	口径: 9.6 底径: 5.1 側壁厚: 12.7	調整: 横ナデ 底部外周 開転へら削り	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色	
第 47 団	59	7 号墳	墳頂部盛土下 第 2 主体部 盛土上	土師器 更細部	直径: 12.8	調整: 横ナデ 外周 線文	粘土: 1mm 大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 55 団	60	8 号墳	墳頂部 越山面	土師器 壺口縁部	口径: 20.0	調整: 明灰文 底部外周 安帝	粘土: 1mm 以上の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	1 号土器
第 56 団 1	60	8 号墳	墳頂部 地山面	土師器 壺	口径: 30.6 底径: 43.8	調整: 外面 ハケと横ナデ 内面 ヘラ削り	粘土: 1mm 以上の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	2 号土器
第 56 団 2	60	8 号墳	墳頂部 地山面	土師器 壺	側壁厚: 35.0 底径: 4.0	調整: ハケメ	粘土: 1mm 以下の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	3 号土器
第 61 団 1	60	A 造跡	2 区	再生土器 壺口縁部	口径: 18.8	調整: 横ナデ 頭部外周 竹筋文等	粘土: 2~4mm 大の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	4 号土器

発掘番号	測量番号	遺跡名	出土 土地点	厚 量	法 量 (cm)	手 法 の 特 徴	胎 土・ 陶 成・ 色 調	備考
第 61図 2	60	A遺跡	2区～3区 弥生土器 変口縁部	口径:22.4	調査:ナデ 口縫部外面 3条の沈縫文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:茶褐色		
第 61図 3	60	A遺跡	1区～2区 弥生土器 変口縁部	口径:23.0	調査:ナデ 口縫部外面 厚底文帯	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:茶褐色		
第 61図 4	60	A遺跡	1区～2区 弥生土器 変口縁部	口径:18.6	調査:ナデ 縫部外面 厚底文帯	胎土:良 焼成:良好 色調:茶褐色		
第 61図 5	60	A遺跡	2区～3区 弥生土器 変口縁部	口径:25.0	調査:ナデ 口縫部外面 3条の沈縫文と 縫部外面 厚底文帯	胎土: 焼成: 色調:		
第 61図 6	60	A遺跡	2区 弥生土器 変口縁部	口径:21.2	調査:ナデとハケ 口縫部外面 2条の沈縫文と 縫部外面 3条の内側洋文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:褐色		
第 61図 7	61	A遺跡	2区 弥生土器 変口縁部	口径:14.5	調査:ナデとハケ 内面 ナデ	胎土:1～2mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:外縫 暗褐色 内縫 茶褐色		
第 61図 8	61	A遺跡	1区～2区 弥生土器 變	口径:28.2	調査:ハケ 口縫部外面 1条の沈縫文 口縫部内面 4条の沈縫文 縫部外面 3条の内側洋文	胎土:良 焼成:良好 色調:茶褐色		
第 61図 9	61	A遺跡	1区～2区 弥生土器 茎部		調査:ナデ ハケとヘラ削り 外縫 3段の斜状弦文と 子の下に4条の間縫文	胎土:1mm以下の大砂粒を含む 焼成:不良(鉛灰) 色調:暗褐色		
第 62図10	61	A遺跡	2区 高坏	口径:15.0	調査:ナデ 脚部内面へ削り 口縫部外面 4条の沈縫文 縫部外面 5段の内側洋文	胎土:1～2mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:波状茶色		
第 62図11	61	A遺跡	2区 高坏脚部	口径:18.0	調査:ナデ、外縫 ヘラ削り 口縫部外面 5条の沈縫文と 2段の内側洋文	胎土:1～2mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:波状茶色		
第 62図12	61	A遺跡	2区～3区 弥生土器 高坏脚部		調査:ナデ 脚部 内面 3段の斜状弦文と ヒゲの内側洋文	胎土: 焼成: 色調:		
第 62図13	61	A遺跡	2区 西側サブ トレンチ内		調査:ナデ ナデとハケ 内面 ナデとハラ削り 縫部外面 5条の沈縫文	胎土:1mm以下の大砂粒を含む 焼成:普通 色調:波状茶色		
第 62図14	61	A遺跡	1区～2区 弥生土器 高坏脚部		調査:茶化により不明	胎土:1mm以下の大砂粒を含む 焼成:不良(鉛灰) 色調:波状褐色		
第 62図15	62	A遺跡	2区 弥生土器 高坏脚部	底径:11.2	調査:茶化により不明 脚部外面 凹縫文 縫部外面 1条の沈縫文	胎土:1mm以下の大砂粒を含む 焼成:良好 色調:茶色		
第 62図16	62	A遺跡	2区 弥生土器 高坏脚部	底径:11.3	調査:茶化により不明 脚部外面 2条の凹縫文	胎土:1～2mmの大砂粒を含む 焼成: 色調:茶色		
第 63図17	62	A遺跡	2区 弥生土器 底部	底径:5.8	調査:ナデ、外縫 厚底正直	胎土:1～2mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:波状褐色～茶褐色	上げ蒸氣味	
第 63図18	62	A遺跡	2区 弥生土器 底部	底径:4.8	調査:		上げ蒸氣味	
第 63図19	62	A遺跡	2区 弥生土器 底部	底径:4.5	調査:茶化により不明		平底	
第 63図20	62	A遺跡	1区～2区 弥生土器 底部	底径:7.0	調査:外縫 不明、内面 ナデ			
第 63図21	62	A遺跡	2区 弥生土器 底部	底径:4.8	調査:外縫 ハケと、内面 ナデ	胎土:2mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:茶褐色～暗褐色	平底	
第 63図22	62	A遺跡	1区～2区 弥生土器 底部	底径:7.8	調査:外縫 ヘラ削き、内面 ナデ	胎土:良 焼成:良好 色調:暗褐色～暗灰色	平底	
第 63図23	62	A遺跡	2区 弥生土器 底部	底径:6.0	調査:外縫 ヘラ削き、内面 ナデ	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:暗褐色～暗褐色	平底	
第 63図24	62	A遺跡	1区～2区 弥生土器 底部	底径:9.5	調査:外縫 ヘラ削き 内面 ハケ	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成: 色調:茶色	平底	
第 63図25	62	A遺跡	2区～3区 弥生土器 底部	底径:8.0	調査:外縫 ヘラ削き、内面 不明	胎土:1mm以下の大砂粒を含む 焼成:良好 色調:茶色～淡茶色	平底	
第 63図26	62	A遺跡	1区～2区 弥生土器 底部	底径:6.0	調査:外縫 ヘラ削き 内面 ハラ削き	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:褐色	平底	
第 63図27		A遺跡	2区 弥生土器 底部	底径:5.2	調査:外縫 ヘラ削き、内面 不明	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡茶色	平底	

測量番号	測量番号	測量名	出土地点	標高	生長(cm)	手土の特徴	地土・構成・色調	備考
第 69 図 1	62	B道跡	S-2区 Si-01内 透水土層内	弥生土器 窓口部	口径: 18.0	調査: 外面 横ナデとハケメ 内面 横ナデとヘラ削り	地土: 1mm以下の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 69 図 2	62	B道跡	S-2区 Si-01内 透水土層内	弥生土器 高环接合部		調査:	地土: 2mm以上の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 70 図	62	B道跡	D-3区 Si-02内 透水	土器器 高环坏部	口径: 14.2	調査: 外面 ハケメ	地土: 2~3mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 71 図 1	62	B道跡	D-3区 Si-04 P-10内	土器器 窓口部	口径: 16.0	調査: 外面 横ナデ 内面 横ナデとヘラ削り	地土: 1mm以下の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 71 図 2	62	B道跡	D-3区 Si-04 P-10内	土器器 窓口部		調査: 外面 横ナデ 内面 ヘラ削り 背面外側 滲出文	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 71 図 3	62	B道跡	D-3区 Si-04	土器器 低脚坏		調査:	地土: 1mm以下の砂粒を含む 焼成: 不良(収容) 色調: 淡褐色	
第 71 図 4	62	B道跡	D-3区 Si-04	土器器 低脚坏手把部		調査: 内面 ヘラ削り	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 74 図 1	63	B道跡	D-1区 高环坏部	土器器	口径: 13.3	調査: 外面 ハケメとヘラ磨き 内面 ナデ	地土: 1mm以下の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色~赤褐色	
第 74 図 2	63	B道跡	F-3区 崩壊部 崩壊	弥生土器 窓口部	口径: 9.7 標高: 5.1 受容部: 11.6	調査: 四輪ナデ 窓部外側 滲出ヘラ削り	地土: 表 焼成: 良好 色調: 淡褐色~灰色	
第 77 図		B道跡	E-2区 SD-2区内	弥生土器 窓口部	口径: 12.6	調査: 横ナデ	地土: 1mm以上の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 1	63	B道跡	E-2区 褐色粘土 土層内	弥生土器 窓口部	口径: 12.5 標高: 11.1 底面: 4.6	調査: ハケメ 口端部及び窓面 ナデ 窓部外側 滲出斑痕	地土: 2mm以下の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色~淡褐色	
第 78 図 2	63	B道跡	E-2区 褐色粘土 土層内	弥生土器 窓口部	口径: 20.0	調査: 横ナデ 口端部外側 渗出文	地土: 1~3mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 3	63	B道跡	E-2区	弥生土器 窓口部	口径: 14.8	調査: 横ナデ 口端部外側 平行沈積文	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色~淡褐色	
第 78 図 4	63	B道跡	E-2区	弥生土器 窓口部	口径: 18.8	調査: 横ナデ	地土: 1~3mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 5	63	B道跡	E-2区 褐色粘土 土層内	弥生土器 窓口部	口径: 15.0	調査: 横ナデ	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 6	63	B道跡	E-2区 褐色粘土 土層内	弥生土器 窓口部	口径: 15.3	調査:	地土: 1mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 7	63	B道跡	D-3区 地山直上(褐色 粘土層内)	弥生土器 窓口部	口径: 26.6	調査: 横ナデ 窓部外側 羽状文	地土: 1mm以上の砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 8	63	B道跡	A-1区 褐色粘土層内	土器器 窓口部		調査: 外面 横ナデとハケメ 内面 横ナデとヘラ削り	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 9	63	B道跡	F-3区 褐色粘土層内	弥生土器 窓口部	口径: 18.5	調査: 横ナデ	地土: 3~5mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 10	63	B道跡	F-3区 褐色粘土層内	弥生土器 窓口部	口径: 22.4	調査: 横ナデ 窓部内面 ヘラ削り	地土: 1mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 11	63	B道跡	F-3区 褐色粘土層内	弥生土器 窓口部	口径: 21.8	調査: 横ナデ 窓部内面 ヘラ削り	地土: 1mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 12	63	B道跡	F-3区 褐色粘土 土層内	弥生土器 窓口部	口径: 22.5	調査: 外面 横ナデとハケメ 内面 横ナデとヘラ削り	地土: 1mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 78 図 13	63	B道跡	E-2区 褐色粘土層内	弥生土器 窓口部	口径: 28.4	調査: 外面 横ナデとハケメ 内面 横ナデとヘラ削り	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 79 図 14	64	B道跡	E-2区	弥生土器 舷形器合 合部	受容部径: 13.3 高さ: 4.9 部分部径: 11.0	調査: 外面 横ナデ 内面 横ナデとヘラ削り	地土: 2~3mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 79 図 15	64	B道跡	F-2区 褐色粘土 土層内	弥生土器 舷形器合 合部	受容部径: 13.0 高さ: 4.9 部分部径: 11.0	調査: 受容部外側 滲出文	地土: 1mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 79 図 16	64	B道跡	E-2区 褐色粘土 土層内	弥生土器 舷形器合 合部	受容部径: 16.0 高さ: 11.0 部分部径: 14.4 部分部高: 1.0	調査: 外面 横ナデ 内面 横ナデとヘラ削り 背面外側 滲出文	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 79 図 17	64	B道跡	D-3区 褐色粘土 土層内	弥生土器 舷形器合 合部	受容部径: 16.0 高さ: 11.0	調査: 外面 横ナデ 内面 ヘラ削り	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	
第 79 図 18	64	B道跡	E-2区 褐色粘土 土層内	弥生土器 舷形器合 合部		調査:	地土: 1~2mmの砂粒を含む 焼成: 良好 色調: 淡褐色	

地図番号	測量番号	測量名	出土地点	地 墓	高 度 (cm)	手 法 の 特 徴	砂 土・礫 土・色 虹	備考
第 79図19	64	B遺跡	F-2区 褐色土層内	弥生土器 鉢形腰台 鉢	底高:19.5	調査・外観 検ナデ	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡黄色	
第 79図20	64	B遺跡	C-2区 褐色粘質 土層内	弥生土器 低脚杯	底高:8.2	調査・検ナデ 坪部内面 ヘラ磨き	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:暗茶色～茶色	
第 79図21	64	B遺跡	E-2区 褐色粘質 土層内	弥生土器 高脚脚部		調査:	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:暗茶色～茶色	
第 79図22	64	B遺跡	D-3区 褐色土層内	弥生土器 高脚脚部		調査・検ナデ	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:黄茶色	
第 79図23	64	B遺跡	A-1区 褐色土層内	弥生土器 高脚脚部		調査・検ナデとハケメ	砂土:2mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 79図24	64	B遺跡	D-3区 褐色粘質 土層内	弥生土器 低脚脚部	底高:13.6	調査・検ナデ 坪部内面 ヘラ磨き	砂土:2mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色～黑色	
第 79図25	64	B遺跡	D-3区 褐色土層内	弥生土器 高脚脚部		調査・外観 検ナデ	砂土:1~2mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:黄茶色	
第 79図26	64	B遺跡	E-2区 褐色粘質 土層内	弥生土器 高脚脚部	底高:12.4	調査・外観 検ナデとヘラ磨き 内面 検ナデとヘラ削り	砂土:2~3mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 79図27	64	B遺跡	F-3区 黑色粘質 土層内	須恵器 坪盤	口径:12.8	調査・検ナデ 天外部外側 回転ヘラ削り	砂土:砂 焼成:良好 色調:灰色	
第 79図28	64	B遺跡	F-3区 褐色土層内	須恵器 坪盤	口径:13.1	調査・検ナデ	砂土:砂 焼成:良好 色調:灰色	
第 79図29	64	B遺跡	B-1区 褐色粘質 土層内	須恵器 坪盤	口径:13.6 底高:2.5	調査・検ナデ 天外部外側 回転ヘラ削り	砂土:2mm下の砂粒を含む 焼成:良好 色調:褐色～青灰色	
第 80図 1	65	C遺跡	褐色粘質 土層内	土器		調査:	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:黄茶色	
第 80図 2	65	C遺跡	褐色粘質 土層内	土器 裏口縁部	口径:15.0	調査・検ナデ	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:普通 色調:淡褐色	
第 80図 1	65	C遺跡	SX-01内	土器質土器 坪	口径:8.8 底高:1.5 底幅:4.9	調査・検ナデ 底部外周 直線糸切り 底幅:小孔(直径3.5mm)	砂土:砂 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 80図 2	65	D遺跡	1区 SX-01内	土器質土器 坪	口径:8.1 底高:1.3 底幅:5.0	調査・検ナデ 底部外周 直線糸切り 底幅:小孔(直径3.5mm)	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 80図 3	65	D遺跡	1区 SX-01内	土器質土器 坪	口径:8.1 底高:1.3 底幅:5.2	調査・検ナデ 底部外周 直線糸切り 底幅:小孔(直径3.0mm)	砂土:2~3mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 91図 1	65	D遺跡	1区	土器質 裏口縁部	口径:20.0	調査・外観 検ナデ	砂土:2~3mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:褐色	
第 91図 2	65	D遺跡	1区 褐色粘質 土層内	土器質 裏口縁部	口径:19.0	調査・検ナデ	砂土:2~3mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 91図 3	65	D遺跡	1区	土器質 裏口縁部	口径:21.8	調査・検ナデ	砂土:砂 焼成:良好 色調:褐色	
第 91図 4	65	D遺跡	1区	土器質 裏口縁部	口径:22.4	調査・検ナデ	砂土:2~3mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 91図 5	65	D遺跡	1区 墨茶褐色 土層内	土器質 裏口縁部	口径:16.4	調査・検ナデ	砂土:2~5mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:褐色	
第 91図 6	65	D遺跡	1区 墨茶褐色粘質 土層内	土器質 裏口縁部	口径:18.8	調査・内面 検ナデとヘラ削り	砂土:1~2mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:褐色	
第 91図 7	65	D遺跡	1区 褐色粘質 土層内	土器質 裏口縁部	口径:18.8	調査・検ナデ 底部外周 平行沈縫文	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:褐色	
第 92図 8	66	D遺跡	1区 土	土器質土器 坪	口径:6.6 底高:1.3 底幅:4.8	調査・検ナデ 底部外周 直線糸切り 底幅:小孔(直径4.0mm)	砂土:砂 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 92図 9	66	D遺跡	1区 褐色粘質 土層内	土器質土器 坪	口径:8.9 底高:1.5 底幅:4.9	調査・検ナデ 底部外周 直線糸切り 底幅:小孔(直径3.5mm)	砂土:砂 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 92図 10	66	D遺跡	1区 褐色粘質 土層内	土器質土器 坪	口径:8.9 底高:1.8 底幅:4.0	調査・検ナデ 底部外周 直線糸切り	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色	
第 92図 11	66	D遺跡	1区 褐色粘質 土層内	土器質土器 坪	口径:9.1 底高:1.2 底幅:4.8	調査・検ナデ 底部外周 直線糸切り?	砂土:1~2mm大の砂粒を含む 焼成:普通(やや軟質) 色調:褐色	
第 92図 12	66	D遺跡	1区	土器質土器 坪	口径:8.0 底高:1.4 底幅:4.4	調査・検ナデ 底部外周 直線糸切り	砂土:1mm大の砂粒を含む 焼成:良好 色調:淡褐色	灯明風

地図番号	剖面番号	道路名	出土地点	層号	高さ(cm)	手土の特徴	胎土・焼成・色調	馬牛
第92図13	66	D道跡	1区 排水内	土師質土器 坪	口径:7.9 高さ:1.8 底部外縁 四転糸切り	調査:横ナデ 底部外縁 四転糸切り	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰青色～暗褐色	灯明瓦
第92図14	66	D道跡	茶褐色土層内	土師質土器 坪	口径:8.0 高さ:1.8 底部外縁 四転糸切り	調査:横ナデ 底部外縁 四転糸切り	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰青色～暗褐色	
第92図15	66	D道跡	茶褐色粘質 土層内	柴付 合付窓	口径:7.2 高さ:3.7 底部外縁 四転糸切り	調査: 外面 竹條の施文	胎土:密 焼成:良好 色調:	猪鼻 青灰白色 高台下部 猪鼻
第92図16	66	D道跡	茶褐色土層内	柴付 合付窓	口径:7.8 高さ:4.2 底部外縁 四転糸切り	調査: 外面 竹條の施文	胎土:密 焼成:良好 色調:	猪鼻 青灰白色 高台下部 猪鼻
第92図17	66	D道跡	試験トレンチ内	柴付 窓	口径:11.2	調査: 外面 施文(松原、船)	胎土:密 焼成:良好 色調:	猪鼻 茶色 内外側 細見入
第96図1	66	E道跡	SI-01内	再生土器 窓口跡部	口径:18.8	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縁部外縁 平行沈継文	胎土:1~2mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色～暗褐色	
第96図2	66	E道跡		再生土器 窓口跡部	口径:14.7	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縁部外縁 平行沈継文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:黑色～青灰色	
第101図1	66	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:1.8	調査: 口縫端外縁 第1目突帯文	胎土:1~3mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:黄赤色～青灰色	
第101図2	66	F道跡	1区	再生土器 窓口跡部	口径:2.12	調査:横ナデ 口縫部外縁 平行沈継文	胎土:1mm以下の砂粒を含む 焼成:良好 色調:	
第101図3	66	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:12.4	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縫部外縁 平行沈継文 尾端外縁 施文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:普通 色調:赤褐色茶色	
第101図4	66	F道跡		再生土器 窓口跡部	口径:18.9	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縫部外縁 平行沈継文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:黑色～青褐色	
第101図5	66	F道跡		再生土器 窓口跡部	口径:20.4	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縫部外縁 平行沈継文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:系色～白青色	
第101図6	66	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:23.2	調査:横ナデ 口縫部外縁 平行沈継文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:普通 色調:灰褐色～明褐色	
第101図7	67	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:21.8	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縫部外縁 平行沈継文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:明褐茶色	
第101図8	66	F道跡	中央堆	再生土器 窓口跡部	口径:21.4	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縫部外縁 平行沈継文	胎土:2~3mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:米色	
第101図9	66	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:18.6	調査:横ナデ 口縫部外縁 波状文	胎土:1mm以下の砂粒を含む 焼成:良好 色調:明褐茶色	
第101図10	66	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:21.3	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色～青褐色	
第101図11	66	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:24.2	調査:	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:深褐茶色	
第101図12	66	F道跡	黑色土層内	再生土器 窓口跡部	口径:13.2	調査:横ナデ 口縫部外縁 波状文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色～明褐茶褐色	
第101図13	66	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:15.4	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縫部外縁 波状文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:	
第101図14	66	F道跡	黑色土層内	再生土器 窓口跡部	口径:15.4	調査:外面 横ナデ 内面 横ナデとへラ削り 口縫部外縁 波状文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色	
第102図15	67	F道跡	斜坡 黑色土層内	再生土器 窓口跡部	口径:17.8	調査:外面 横ナデ 内面 へう巻き 窓受部外縁 平行沈継文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:白灰青色	
第102図16	67	F道跡	斜坡 黑色土層内	再生土器 窓口跡部	口径:15.4	調査:外面 横ナデ 内面 へう巻き 窓受部外縁 平行沈継文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:白灰青色	
第102図17	67	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓口跡部	口径:15.4	調査:外面 横ナデ 内面 へう巻き 窓受部外縁 平行沈継文	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:白灰青色	
第102図18	67	F道跡	黑色土層内	再生土器 窓口跡部	口径:17.8	調査:外面 横ナデ 内面 へう巻き	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:白灰青色	
第102図19	67	F道跡	黑色土層内	再生土器 窓口跡部	口径:14.4	調査:	胎土:1~2mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:深褐茶色	
第102図20	67	F道跡	中央堆	再生土器 窓口跡部	口径:17.8	調査:外面 横ナデ 内面 へう巻き	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:明褐茶色	
第102図21	67	F道跡	黄茶褐色 土層内	再生土器 窓部	底径:3.0	調査:横ナデ	胎土:1mmの大砂粒を含む 焼成:良好 色調:灰褐色～明褐茶色	ミニチュア土器 (手握ね)

地図番号	田原番号	測量名	出土地点	層 面	生 墓 (cm)	手 法 の 特 徴	紺 土・塊成・色 調	備 注
第102図22	67	F道跡	黄茶褐色 土層内	赤生土層 志部	底径:1.1	調査:外面 ヘラ削き 内面 指ナデ	紺土:1mm以上の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	ミニチュア土器
第102図23	67	F道跡	試掘L-1シテ南 赤生土層 黒色土層内	底径:5.1			紺土:1~2mmの大砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	
第102図24	67	F道跡	黑色土層内	赤生土層 高坏跡柱部			紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:良好 色調:黄茶色	
第102図25	67	F道跡	黄茶褐色 土層内	底径:4.5	調査:外面 ヘラ削き 内面 ヘラ削り	紺土:1mm以上の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色～薄茶褐色		
第102図26	67	F道跡	黄茶褐色 土層内	赤生土層 江口土層?			紺土:1mm以上の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	
第102図27	67	F道跡	黑色土層内	赤生土層 江口土層 江口部		調査:外面 ヘラ削き	紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	
第105図 1	67	G道跡	褐色粘土 土層内	土堀部 高坏跡部	口径:33.0	調査:外面 ハケツ 内面 ナデ 口径部外縁 5条の平行沈縫文	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	
第105図 2	67	G道跡	摺土内	土堀部 尾部	底径:4.8	調査:	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	平底
第110図 1	67	H道跡	5段目	土堀部 裏口跡部	口径:26.5	調査:外縁 平行沈縫文	紺土:3mm以下の大砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色～薄茶褐色	
第110図 2	67	H道跡		土堀部 裏口跡部	口径:16.4	調査:外縁 平行沈縫文	紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	
第110図 3	67	H道跡		土堀部 裏口跡部	口径:24.2	調査:外面 硬ナデ 内面 硬ナデとヘラ削り 口径部外縁 波状紋 肩部外縁 平行沈縫文	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:良好 色調:赤茶色	
第110図 4	67	H道跡	茶褐色粘土 土層内	土堀部 裏口跡部	口径:21.2	調査:	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:不良 色調:茶褐色～褐色	
第110図 5	67	H道跡		土堀部 裏口跡部	口径:31.7	調査:	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	
第110図 6	67	H道跡	3段目 褐色粘土 土層内	土堀部 裏口跡部	口径:18.0	調査:外面 硬ナデとハケツ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:不良 色調:茶褐色～褐色	
第110図 7	67	H道跡	4段目 褐色粘土 土層内	土堀部 裏口跡部	口径:16.9	調査:外面 硬ナデ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:不良 色調:褐色～茶褐色	
第110図 8	67	H道跡	5段目 褐色粘土 土層内	土堀部 裏口跡部	口径:15.6	調査:外面 硬ナデとヘラ削り 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:2mm以上の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色～褐色	
第110図 9	67	H道跡	1段目 黄褐色粘土 土層内	土堀部 裏口跡部	口径:21.9	調査:外面 硬ナデとハケツ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	
第110図10	68	H道跡	褐色粘土 土層内	土堀部 裏口跡部	口径:15.9	調査:外面 硬ナデとハケツ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:普通 色調:茶褐色	
第110図11	68	H道跡	地山面上	土堀部 裏口跡部	口径:22.0	調査:外面 硬ナデとハケツ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:良好 色調:褐色	
第110図12	68	H道跡		土堀部 裏口跡部	口径:15.6	調査:内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色～黒茶色	
第111図13	68	H道跡	5段目 褐色粘土 土層内	小堀口跡部	口径:11.0	調査:外面 硬ナデ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:2mm以上の砂粒を含む 塊成:普通 色調:茶褐色～褐色	
第111図14	68	H道跡	3段目 褐色粘土 土層内	土堀部 裏口跡部	口径:16.3	調査:外面 硬ナデ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1~2mmの大砂粒を含む 塊成:普通 色調:茶褐色	
第111図15	68	H道跡	褐褐色粘土 土層内	土堀部 裏口跡部	口径:17.5	調査:外面 硬ナデ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:不良 色調:暗茶色	
第111図16	68	H道跡		小堀口跡部	口径:12.2	調査:外面 硬ナデ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色～褐色	
第111図17	68	H道跡	Lレンテ跡	土堀部 裏口跡部	口径:15.0	調査:外面 硬ナデとハケツ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色～褐色	
第111図18	68	H道跡	地山面上	土堀部 裏	口径:24.0 底径:7.4 壁高:25.5	調査:外面 硬ナデとハケツ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	上底
第111図19	68	H道跡	3段目 褐色土層内	土堀部 裏	口径:25.0	調査:外面 硬ナデとハケツ 内面 硬ナデとヘラ削り	紺土:1mmの大砂粒を含む 塊成:良好 色調:黃白色	
第112図20	69	H道跡	Lレンテ跡	土堀部 高坏跡部	口径:16.2	調査:	紺土:1mm以下の砂粒を含む 塊成:良好 色調:茶褐色	

標 本 号	削 除 号	遺 墓 名	出 土 地 点	重 量	高 度 (cm)	手 法 の 特 徴	地 手・施 層・色 装	備 考
第112回21	69	H遺跡	黒色粘質 土層内	土器部 低脚杯	底径: 6.0	調査:	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色	
第112回22	69	H遺跡	淡茶褐色粘質 土層内	土器部 低脚杯		調査:	地手: 1mmの大砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色	
第112回23	69	H遺跡	黒色粘質 土層内	土器部 低脚杯	底径: 6.4	調査:	地手: 1mmの大砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色	
第112回24	69	H遺跡	黒色粘質 土層内	土器部 低脚杯		調査: 指ナデ	地手: 1mmの大砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色	把手
第112回25	69	H遺跡	淡褐色粘質 土層内	土器部 小形丸底盤		調査: 外面 ナデ 内面 指オサエとへラ削り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶色	
第113回26	69	H遺跡	赤茶褐色粘質 土層内	須恵器 灰壺	口径: 14.2 器高: 5.2	調査: 楕ナデ 天井部外側 回転へラ削り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第113回27	69	H遺跡	黒色粘質 土層内	須恵器 灰壺	口径: 13.8	調査: 楕ナデ	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色~灰色	
第113回28	69	H遺跡	1段トレンチ 褐色粘質 土層内	須恵器 灰壺		調査: 楕ナデ 天井部外側 回転へラ削り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 白褐色	
第113回29	69	H遺跡	3段目 黒色土層下	須恵器 灰壺	口径: 13.9	調査: 楕ナデ 天井部外側 回転へラ削り	地手: 1~2mmの大砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色	
第113回30	69	H遺跡	淡茶褐色粘質 土層内	須恵器 灰壺	口径: 13.5 器高: 5.5	調査: 楕ナデ 天井部外側 回転へラ削り 天井部内側 指ナデ	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶色	
第113回31	69	H遺跡	褐色粘質 土層内	須恵器 灰壺	口径: 12.0 器高: 5.5	調査: 楕ナデ 底部外側 回転へラ削り 底部内側 指ナデ	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 灰色	
第113回32	69	H遺跡	漆土内	須恵器 灰壺	口径: 10.2	調査: 楕ナデ 底部外側 回転へラ削り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 白褐色	
第113回33	69	H遺跡	黒色粘質 土層内	須恵器 灰壺		調査: 楕ナデ 底部外側 回転へラ削り 底部内側 指ナデ	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第113回34	69	H遺跡	漆土内	須恵器 灰壺		調査: 楕ナデ 底部外側 回転へラ削り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色	
第113回35	69	H遺跡	茶色粘質 土層内	須恵器 ハソウ		調査: 楕ナデ 肩部外側 2条の辺縫とその 間に裏剥削跡	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第113回36	69	H遺跡	淡茶褐色粘質 土層内	須恵器 脚部	底径: 8.0	調査: 楕ナデ	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色~淡褐色	
第113回37	69	H遺跡	2段トレンチ 褐色粘質 土層内	須恵器 脚部	底径: 8.2	調査: 楕ナデ	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第116回	69	I遺跡	A-O段 茶褐色粘質 土層内	弥生土器 縦口鋸形	口径: 15.0	調査: 外面 楕ナデとハケメ 内面 楕ナデとへラ削り 底部外側 底部又寄	地手: 1mmの大砂粒を含む 地層: 普通 色装: 明茶褐色	
第120回 2		古墓	T-3 南側斜溝区 墓土内	土師質土器 灰壺	底径: 6.0	調査: 楕ナデ 底部外側 回転糸切り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第120回 3		古墓	黑色土層内	土師質土器 灰壺	底径: 6.7	調査: 楕ナデ 底部外側 回転糸切り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第120回 4		古墓	黑色土層内	土師質土器 灰壺	底径: 7.8	調査: 楕ナデ 底部外側 回転糸切り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第120回 5		古墓	黑色土層内	土師質土器 灰壺	底径: 5.4	調査: 楕ナデ 底部外側 回転糸切り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第120回 6	70	古墓			口径: 10.8 底径: 11.8 器高: 17.9	調査: 楕ナデ 底部外側 回転糸切り	地手: 1mm以下の砂粒を含む 地層: 平底	
第137回 1	71	1号穴	墓道	須恵器 灰壺	口径: 13.3 器高: 4.7	調査: 楕ナデ 天井部外側 回転へラ削り 天井部内側 指ナデ	地手: 1~2mmの大砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色	
第137回 2	71	1号穴	墓道	須恵器 灰壺	口径: 10.7 器高: 3.2	調査: 楕ナデ 底部外側 回転へラ削り 底部内側 指ナデ	地手: 1mmの大砂粒を含む 地層: 普通 色装: 茶褐色~茶褐色	
第137回 3	71	1号穴	墓道	須恵器 灰壺	口径: 12.4 器高: 3.1	調査: 楕ナデ 天井部外側 回転へラ削り 天井部内側 指ナデ	地手: 1~2mmの大砂粒を含む 地層: 良好 色装: 淡褐色~灰色	
第137回 4	71	1号穴	墓道	須恵器 灰壺	口径: 11.2 器高: 3.8	調査: 楕ナデ 底部外側 回転へラ削り 底部内側 指ナデ	地手: 1~2mmの大砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	
第137回 5	71	1号穴	墓道	須恵器 灰壺	口径: 12.8 器高: 3.8	調査: 楕ナデ 天井部外側 回転へラ削り 天井部内側 指ナデ	地手: 1~2mmの大砂粒を含む 地層: 良好 色装: 茶褐色	

探査番号	層別番号	測地名	出土地点	層	高さ(cm)	手当の特徴	地土・集成・色調	備考
第137回 6	71	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:11.3 壁高:3.8	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り 底部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色~灰褐色	
第137回 7	71	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:12.4 壁高:4.2	網目:横ナメ 天井部外縁 回転ヘラ削り 天井部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	
第137回 8	71	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:10.4 壁高:4.0	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り 底部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	
第137回 9	71	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:13.2 壁高:4.6	網目:横ナメ 天井部外縁 回転ヘラ削り 天井部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:普通 色調:灰白色	
第137回 10	71	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:11.3 壁高:4.8	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り 底部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色	
第137回 11	71	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:12.8 壁高:5.0	網目:横ナメ 天井部外縁 回転ヘラ削り 天井部内縁 指ナメ	地土:1~3mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	
第137回 12	71	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:11.1 壁高:4.5	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り 底部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色~青灰褐色	
第138回 13	72	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:13.0 壁高:4.9	網目:横ナメ 天井部外縁 回転ヘラ削り 天井部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	
第138回 14	72	1号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:10.6 壁高:4.9	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色~青灰褐色	
第138回 15	72	1号穴	基盤 淡茶褐色砂質 土層内	須恵器 坪身	口径:14.1 壁厚:10.7 壁高:10.7	網目:横ナメ 坪部外縁 回転ヘラ削り	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色	
第138回 16	72	1号穴	基盤 淡茶褐色砂質 土層内	須恵器 短縦座	口径:8.6 壁厚:5.7 壁高:11.3	網目:横ナメ 脚部~底部外縁 回転ヘラ削り	地土:1~3mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色	平底
第138回 17	72	1号穴	基盤 淡茶褐色砂質 土層内	須恵器 短縦座	口径:9.0 壁厚:10.8	網目:横ナメ 底部外縁 カキメ 網目~底部外縁 回転ヘラ削り	地土:1~3mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色~灰褐色	丸底
第138回 18	72	1号穴	基盤 淡茶色ブロッブ 土層内	須恵器 短縦座	口径:8.1 壁厚:4.8 壁高:11.1	網目:横ナメ 脚部~底部外縁 回転ヘラ削り	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色~灰褐色	平底
第138回 19	72	1号穴	基盤	須恵器 要	口径:18.4 壁高:5.06	網目:外縁 横ナメと切口目 内縁 横ナメと当て真珠	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:不良 色調:泥灰色~青灰褐色	丸底
第138回 20	72	1号穴	基盤	須恵器 要	口径:16.6 壁厚:3.87	網目:外縁 横ナメと切口目 内縁 横ナメと当て真珠 底部外縁 カキメ	地土:1~3mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色~灰黑色	丸底
第140回 21	73	1号穴	玄室石棺内	須恵器 坪身	口径:10.2 壁厚:3.7	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り 底部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色	
第140回 22	73	1号穴	玄室内	須恵器 坪身	口径:10.6 壁厚:3.9	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り 底部内縁 指ナメ	地土:1~4mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色	
第140回 23	73	1号穴	五重内	須恵器 坪身	口径:12.4 壁厚:3.8	網目:横ナメ 天井部外縁 回転ヘラ削り 天井部内縁 指ナメ	地土:1mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	
第140回 24	73	1号穴	五重内	須恵器 坪版	口径:12.8 壁厚:2.43 カキメ	網目:横ナメ 外縁 横ナメと当て真珠	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	
第144回 1	74	2号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:13.3 壁厚:3.7	網目:横ナメ 天井部外縁 回転ヘラ削り 天井部内縁 指ナメ	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:不良 色調:泥灰色~青灰褐色	
第144回 2	74	2号穴	基盤	須恵器 坪身	口径:11.0 壁厚:3.9	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り 底部内縁 指ナメ	地土:1mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:泥灰色	
第144回 3	74	2号穴	基盤前底部	須恵器 坪身	口径:12.4 壁厚:4.0	網目:横ナメ 底部外縁 回転ヘラ削り 底部内縁 指ナメ	地土:1mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	底部外縁に へら記号
第144回 4	74	2号穴	基盤前底部	須恵器 高坪	口径:15.1 壁厚:11.4 壁高:10.0	網目:横ナメ 外縁 横ナメと当て真珠 底部及び脚部外縁 1号の江継	地土:1~2mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	前面に「四三」 角形透かしを 二方に押す
第144回 5	74	2号穴	基盤前底部	須恵器 ハンツウ	口径:4.9	網目:横ナメ 底部外縁 枝状文とかきメ 底部外縁 カキメと透刻斜文	地土:1mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	平底
第144回 6	74	2号穴	基盤	須恵器 場版	口径:14.5	網目:外縁 横ナメと切口目 カキメ 外縁 横ナメと当て真珠	地土:1mmの大砂粒を含む 集成:普通 色調:泥白色	底面跡(後 集成)
第145回 7	74	2号穴	玄室内	須恵器 坪身	口径:12.6 壁厚:4.1	網目:横ナメ 天井部外縁 回転ヘラ削り 天井部内縁 指ナメ	地土:1mmの大砂粒を含む 集成:良好 色調:灰褐色	

地図番号	開拓番号	道路名	出土地点	標 高	生 長 (cm)	手 法 の 特 徴	砂 土・ 塗 成・ 色 調	備 注
第145図 8	74	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:12.5 標高:4.2	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1~2mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:灰色~淡灰色		
第145図 9	74	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:11.5 標高:3.4	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:灰色		
第145図10	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:11.4 標高:3.3	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:黑色~灰色		
第145図11	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:13.1 標高:4.2	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色		
第145図12	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:12.8 標高:3.9	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:灰色		
第145図13	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:12.6 標高:3.8	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色		
第145図14	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:12.6 標高:3.8	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:黑色		
第145図15	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:11.0 標高:4.3	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色		
第145図16	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:11.0 標高:4.4	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色		
第145図17	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:10.8 標高:4.3	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:淡灰色~淡灰色		
第145図18	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:9.7 標高:3.2	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:淡灰色		
第145図19	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:9.6 標高:3.0	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:黑色~反色		
第145図20	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:10.2 標高:4.6	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:淡灰色		
第145図21	75	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:10.8 標高:4.3	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:不良 色調:淡灰色~暗灰色		
第145図22	76	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:11.2 標高:3.8	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:黑色~反色		
第146図23	76	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:9.5 標高:12.9	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色	平底 底面にヘラ 記号	平底
第146図24	76	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:8.7 標高:12.6	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:黑色~白色		
第146図25	76	2号穴	玄室内 小穀土器 坪	口径:7.2 標高:7.2	調査:横ナデ 底面 回転ヘラ削り	砂土:1mm以下の砂粒を含む 塗成:良好 色調:黑色	上底	
第146図26	76	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:9.9 標高:21.5	調査:外壁 カキメ 内面 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:灰色	底部に突出部 の把手を貼付	
第146図27	76	2号穴	玄室内 須恵器 壺底	口径:14.2 標高:27.9	調査:外壁 横ナデと叩き目 とカキメ 内面 横ナデと当て丸模	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色		
第147図28	77	2号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:38.1 標高:85.1	調査:横ナデ 内面 横ナデと当て丸模 縦模様 2段の平行弦文	砂土:1~2mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色		
第152図 1	78	3号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:12.4 標高:4.1	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:灰色~灰白色	数に使用、天井 部外側に赤色 糊料が十字形 に付着	
第152図 2	78	3号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:12.2 標高:4.1	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色		
第152図 3	78	3号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:13.0 標高:4.5	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色		
第152図 4	78	3号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:13.8 標高:4.5	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:反色	底部外側に赤 色糊料が付着	
第152図 5	78	3号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:13.2 標高:4.3	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:黑色		
第152図 6	78	3号穴	玄室内 須恵器 坪塗	口径:10.9 標高:3.3	調査:横ナデ 天井部外側 回転ヘラ削り 天井部内側 振ナデ	砂土:1mmの砂粒を含む 塗成:良好 色調:灰色~淡灰色		

埋蔵番号	回収番号	遺跡名	出土 地点	層 面	法 線 (cm)	手 法 の 特 徴	鉄土・鐵素・色調	備考
第152回 7	78	3号穴	玄室 内	須恵器 坪塗	口径:14.8 標高:4.5	調査:横ナメ 天井部外壁 回転ヘラ削り 天井部内面 打刃ナメ	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:深灰色～浅灰色	
第152回 8	78	3号穴	玄室 内	須恵器 坪塗	口径:11.1 標高:3.7	調査:横ナメ 底部外壁 回転ヘラ削り 底部内面 打刃ナメ	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:灰白色	
第152回 9	78	3号穴	玄室 内 (底部削片と後壁)	須恵器 坪塗	口径:9.0 標高:1.8	調査:横ナメ 底部外壁 回転ヘラ削り	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:灰白色～浅灰色	
第152回10	78	3号穴	玄室 内	須恵器 坪塗	口径:8.7 標高:1.3	調査:横ナメ 底部外壁 叩き目とカキメ	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:灰白色	把手は無し
第153回11	79	3号穴	玄室 内	須恵器 坪塗	口径:12.8 標高:2.3	調査:横ナメ 体部外壁 叩き目とカキメ	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:灰白色～浅灰色	
第153回12	79	3号穴	玄室 内	須恵器 坪塗	口径:23.8 標高:5.0	調査:外壁 横ナメと叩き目とカキメ	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:深灰色	
第155回15	79	3号穴	3号穴前脚部 及び 周辺	須恵器 坪塗	口径:10.2 標高:4.3	調査:横ナメ 底部外壁 回転ヘラ削り	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:深灰色～浅灰色	
第155回16	79	3号穴 及び 周辺	G-1区	須恵器 坪塗	口径:9.7 標高:1.1	調査:横ナメ 底部外壁 回転ヘラ削り	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:深灰色	
第155回17	79	3号穴 及び 周辺	G-1区	土器部 長持形 腹受部	直径:	調査:	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:深灰色	
第155回18	79	3号穴 及び 周辺	G-1区	土器部 中央グリッド 底	直径:	調査:	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:深灰色	
第155回19	79	3号穴 及び 周辺	G-1区	茶色土層内 土玉 (丸玉)	直徑:2.7	調査:	鉄土:1mmの大砂粒を含む 鉄成:良好 色調:深灰色	

袋 戸 遺 跡 群 出 土 遺 物 観 察 一 覧 表 (石 製 品)

埋蔵番号	回収番号	遺跡名	出土 地点	層 面	法 線 (cm)	手 法 の 特 徴	備考	石 材
第 17回 1	58	2号窓	SX-01	残存長:3.2 残存幅:1.4	両端は大頭、 先端丸刃。			水晶
第 64回28	61	A遺跡	1-2区間 磯崎色土層内	管玉?	残存長:1.0 残存幅:0.6	六角柱に加工、両端は丸頭 先端丸刃。	未完成か?	
第116回 1	69	J遺跡	A-2区	尖端器?	残存長:3.5 残存幅:3.4 厚さ:0.6	先端丸頭部は欠損		武藏岩
第116回 2	69	J遺跡	A-2区 茶色粘土 土層内	スクレイパー	長さ:5.3 幅:3.0 厚さ:1.4	縦長削片の側面を剝離		麻理石
第116回 3	69	J遺跡		砾石	長さ:6.2 幅:5.0 厚さ:0.7			麻理石

袋 戸 遺 跡 群 出 土 遺 物 観 察 一 覧 表 (鐵 製 品)

埋蔵番号	回収番号	遺跡名	出土 地点	層 面	法 線 (cm)	手 法 の 特 徴	備考	
第 25回 1	65	D-3号	SG-1区	鏡刀	残存長:25.0 残存幅:2.5 残存厚:0.6	両刃は六角 先端丸刃。		
第 25回 4	65	D-3号	SG-1区	鏡刀	残存長:4.4 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 5	65	D-3号	SG-1区	鏡刀	残存長:3.4 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 6	65	D-3号	SG-1区	鏡刀	残存長:3.4 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 7	65	D-3号	SG-1区	鏡刀	残存長:15.8 残存幅:0.6	両面が四角形		木質か竹
第 25回 9	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:9.0 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 11	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:9.0 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 12	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:8.5 残存幅:0.4	両面が四角形		木質か竹
第 25回 13	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:5.8 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 14	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:6.0 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 15	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:5.5 残存幅:0.4	両面が四角形		木質か竹
第 25回 16	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:5.0 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 17	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:5.0 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 18	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:5.1 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 19	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:4.6 残存幅:0.2	両面が四角形		木質か竹
第 25回 20	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:4.6 残存幅:0.2	両面が四角形		木質か竹
第 25回 21	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:4.8 残存幅:0.3	両面が四角形		木質か竹
第 25回 22	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:4.8 残存幅:0.2	両面が四角形		木質か竹
第 25回 23	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:4.8 残存幅:0.2	両面が四角形		木質か竹
第 25回 24	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:3.1 残存幅:0.2	両面が四角形		木質か竹
第 25回 25	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:3.5 残存幅:0.2	両面が四角形		木質か竹
第 25回 26	65	D-3号	SG-2区	鏡刀	残存長:4.0 残存幅:0.2	両面が四角形		木質か竹

発見番号	開拓番号	遺物名	出土地點	形 型	長 (cm)	手 法 の 特 質	備 考
第 90-27	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 4.1 横幅: 0.2	前面が四角形	木質が付着
第 90-28	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 3.4 横幅: 0.2	前面が四角形	木質が付着
第 90-29	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 3.4 横幅: 0.2	前面が四角形	木質が付着
第 90-30	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 3.7 横幅: 0.3	前面が四角形	木質が付着
第 90-31	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 3.0 横幅: 0.4	前面が四角形	木質が付着
第 90-32	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 5.3 横幅: 0.3	前面が四角形	木質が付着
第 90-33	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 2.3 横幅: 0.3	前面が四角形	木質が付着
第 90-34	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 3.1 横幅: 0.2	前面が四角形	木質が付着
第 90-35	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 3.0 横幅: 0.4	前面が四角形	木質が付着
第 90-36	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 4.6 横幅: 0.3	前面が四角形	木質が付着
第 90-37	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 3.9 横幅: 0.2	前面が四角形、裏に三面から 削りが付着、裏に崩れが	木質が付着
第 90-38	66	D型刀	SX-02内	直刀	長さ: 4.2 横幅: 0.3	前面が四角形、裏に削れが 付着	木質が付着
第 141-25	73	1号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 5.5 横幅: 0.2	前面は2.7、後面は1.8	木質が付着
第 141-26	73	1号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 6.9 横幅: 0.2	前面は2.7、後面は1.8	木質が付着
第 141-27	73	1号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 12.4 横幅: 1.3	裏面にハサギが残存	木質が付着
第 141-28	73	1号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 12.3 横幅: 1.0		
第 141-29	73	1号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 17.4 横幅: 0.9	正面、裏面は直刀	木質が付着
第 141-30	73	1号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 15.0 横幅: 1.0	前面が四角形	木質が付着
第 141-31	73	1号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 3.3 横幅: 2.8	材質は骨質	
第 141-32	73	1号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 3.3 横幅: 3.0	材質は骨質	
第 148-28	77	2号六文鎌内	大刀	直刀	長さ: 71.3 横幅: 3.2	横刃刀脚(基部: 7.4)	木質が付着
第 148-30	77	2号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 6.0 横幅: 0.5	前面が四角形	
第 148-31	77	2号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 6.0 横幅: 0.5	前面が四角形	
第 148-32	77	2号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 10.3 横幅: 1.5	横刃刀脚?	木質が付着
第 148-33	77	2号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 2.7 横幅: 0.4		
第 148-34	77	2号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 2.8 横幅: 0.4		
第 154-23	79	3号六文鎌内	刀子	直刀	長さ: 9.0 横幅: 1.2	横刃刀脚	木質が付着
第 154-24	79	3号六文鎌内	直刀	直刀	長さ: 3.1 横幅: 0.9		

袋尻横穴墓群から検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座
影岡優子・井上貴央

1. はじめに

本報告は鳥取県松江市袋尻横穴墓群から検出された人骨に関するものである。同横穴墓から人骨発見の報を受け現地に赴き、検出状況を確認した。3墓の横穴墓のうち2墓から人骨が検出されたが、人骨の保存状況は比較的良好であった。人骨の検出状況を確認した後、図面の作製を調査団に依頼した。その後、再び現地に赴き、図面を参照して骨に番号を付しながら骨の取り上げ作業を行った。人骨は鳥取大学医学部に運び、付着していた土砂を取り除く作業を行い、人骨の形態学的特徴を検討した。

2. 1号横穴墓

1) 骨の検出状況

玄室左側には右棺が、玄室右側の前壁寄りには左側頭部から頭蓋底にかけての部分を欠くが、そのほかはほぼ完存している。頭蓋骨の三主径は頭蓋最大長が173mm、頭蓋最大幅が134mm、バジオン・ブレグマ高が135mmで、頭蓋長幅示数は77.5、頭蓋長高示数は78.0、頭蓋幅高示数は100.7となり、頭型はmeso-, hypsi-, akrocran (中・高・狭頭) に属している。

2) 1号人骨

頭蓋骨は全体的に小さく、左側頭部から頭蓋底にかけての部分を欠くが、そのほかはほぼ完存している。頭蓋骨の三主径は頭蓋最大長が173mm、頭蓋最大幅が134mm、バジオン・ブレグマ高が135mmで、頭蓋長幅示数は77.5、頭蓋長高示数は78.0、頭蓋幅高示数は100.7となり、頭型はmeso-, hypsi-, akrocran (中・高・狭頭) に属している。

顔面頭蓋では眼窩部の形態は破損のため、計測することができない。鼻部にわずかに欠損があるが、幅はやや大きいようであり、推定値から鼻示数を求めるとき、52.3になり、chamaerrhin (広鼻) に属している。

前頭部の膨隆は少なく、前頭部はなだらかに頭頂部に移行する。眉弓の突出は著明ではない。眉間はやや突出している。乳様突起は一部に破損があり、全体像はわからないが、大きいようである。三主縫合の閉鎖状況をみると、外板では未閉鎖であるが、内板では一部で癒合が進んでいる。口蓋縫合をみると、切歯縫合は半分程度閉鎖している。正中口蓋縫合の口蓋骨部は未癒合であるが、横口蓋縫合の外側1/3は閉鎖している。

上顎歯は左右の第1、第2大臼歯が残存しているのみである。下顎骨は全体的に小さく、歯牙は左第3大臼歯と右第2小臼歯を除いてすべて残存している。咬耗はほとんど進んでおらず、Martinの1~2度である。第3大臼歯は萌出しているが、右下顎第3大臼歯の根尖部は未完成である。右上顎第2大臼歯には咬合面にカリエスが認められる。歯式は以下に示す通りである。

M 2	M 1	脱	脱	脱	脱	脱	脱	M 1	M 2				
M 3	M 2	M 1	脱	P 1	C 11	I 2	I 1	I 2	C P 1	P 2	M 1	M 2	脱

椎骨は胸椎が1個、腰椎が3個（第3、4、5腰椎）、仙骨が検出されている。椎骨には加齢による変形性脊椎症などの病的変化は認められない。仙骨は第1～第3横線が開存していた。

上肢帶の骨では右の鎖骨の一部と肩甲骨片が検出されている。

主要上肢骨では右側では上腕骨、橈骨、尺骨がそろって検出されているが、左側は上腕骨が検出されているのみで、橈骨と尺骨を欠いている。上腕骨の遠位端は骨化が完了しているが、橈骨の遠位端は未骨化である。

下肢帶の骨では左右の寛骨が検出されている。寛骨は比較的小さく、脆弱で残存している部位も少ないと、大坐骨切痕はやや大きい印象を受ける。

主要下肢骨では大腿骨、脛骨、腓骨が左右ともに検出されている。骨は脆弱であったため、現地で最大長を測定して、左大腿骨41.2cm、右大腿骨41.3cmの値を得た。大腿骨の近位・遠位端とともに骨端は未閉鎖で、脛骨の近位端も骨端が閉鎖を完了したばかりであった。骨端の閉鎖状況から考えると、本人骨の年齢は15～20歳と推定される。大腿の最大長から、Pearson式を用いて身長推定を行うと約157cmと算定された。

頭蓋骨の縫合状態や歯牙の萌出状況、四肢骨の状況などを総合して考えると、本人骨は15～20歳の青年男性の個体であると考えられる。

3) 2号人骨

頭蓋骨は頭頂部を上に頭蓋底部を下にして検出されており、上顎骨と下顎骨は咬合状態で検出されている。本頭蓋骨には部分的に赤色顔料の付着が認められた。顔料の付着部位は下顎骨の下顎枝と筋突起の外側面、右筋突起の内側面、右下顎頭、上顎～頬部である。顔料はその色合いから判断して、ベンガラと思われる。

頭蓋骨は頭蓋底部を欠くのみで、残りの部分はほぼ完存していた。頭蓋骨の三上径は頭蓋最大長が171mm、頭蓋最大幅が127mm、バジオン・ブレグマ高が134mmで、頭蓋長幅示数は74.3、頭蓋長高示数は78.4、頭蓋幅高示数は105.5となり、頭型はdolicho-、hypsi-、akrocran（長・高・狭頭）に属している。

顔面頭蓋の幅径、高径についてみると、中顎幅はそれぞれ96mmで、上顎高は63mmである。従って、ウィルヒョウの上顎示数はそれぞれ、65.6であり、chamaeprosop（低顎）を示している。左右の眼窩高と眼窩幅から眼窩示数を求めるとき、右は90.8、左は91.9となり、いずれもhypsknoch（高眼窩）に属している。外鼻孔は大きく、幅はやや広い。鼻示数は52.7でchamaerrhin（広鼻）に属している。

前頭部は比較的よく膨隆しており、眉間の上方は平坦ないしはややくぼんだ部分がある。眉弓は平坦で、悪く、眉間の突出も少ない。乳様突起は小さい。三主縫合をみると、外板では冠状縫合の側頭部は癒合閉鎖が進んでいるが、矢状縫合や人字縫合は未閉鎖である。内板では冠状縫合はほぼ癒合閉鎖をきたしており、人字縫合でもかなり癒合閉鎖が進んでいる。しかし、矢状縫合は未閉鎖である。矢状縫合の後方と人字縫合には縫合骨が認められた。口蓋縫合を見ると、切歯縫合はほとん

ど消失しているが、正中口蓋縫合、横口蓋縫合外側部はすべて未閉鎖である。

歯牙の咬耗は進んでおり、Martinの2~3度である。左右の上顎第2小臼歯の根尖部には、囊胞が認められた。下顎骨の左第3大臼歯の歯槽は閉鎖途上にある。咬耗度はMartinの1~3度である。歯式は以下の通りである。

脱 脱 脱 脱 脱 CI2 I1 I1 脱 脱 P2 M1 脱 脱
M3 M2 M1 P2 P1 C12 I1 I1 I2 CP1 P2 M1 M2 脱

椎骨は頭蓋骨の下から第1~第7頸椎が検出されている。胸椎と腰椎は散乱した状態で検出されたが、この中には胸椎11個、腰椎2個が含まれていた。仙骨は原位置を保って検出されている。仙骨の第1横線は未閉鎖である。

上肢帶の骨では左右の鎖骨と左右の肩甲骨がほぼ原位置を保って検出されている。

主要上肢骨では左右の上腕骨の一部が検出されているのみである。

下肢帶の骨では左右の寛骨が原位置を保って検出されている。寛骨は全体的に小さく、また、大坐骨切痕は大きいので、女性骨であることは明らかである。寛骨耳状面の下部には妊娠溝が認められ、経産婦であることがうかがえる。

主要下肢骨では左右の大腿骨、左右の脛骨が検出されている。骨は全体的に小さく、単薄である。左大腿骨の骨最大長は37.7cmで、Pearson式を用いて身長推定を行うと約152cmと算定された。

頭蓋骨の縫合状況や骨の形態学的特徴から、本人骨は廿年前半の女性であると推定される

4) 検出人骨から見た埋葬順位と小考察

頭蓋の検出状況に注目すると、玄室側壁寄りの2号人骨は、頭頂部を上に向けて眼窓が足方を向いた状態で検出されている。ところが、玄室中央よりの1号人骨は左側頭部を上に向けた状態で検出されている。伸展仰臥位で埋葬され、自然に朽ちるとすると頭蓋が大きく傾き、2号人骨に認められるような頭位はとりえない。つまり、2号人骨の頭蓋は2号人骨が朽ちて骨化した後、頭蓋部分を人為的に置き直したとみることができる。2号人骨の頭蓋に赤色顔料が付着していた事実はこのことを裏付けるものであり、2号人骨の椎骨の骨配列が乱れていたことも、2号人骨が骨化後、骨が動かされていることを物語っている。

これに対し、1号人骨の頭蓋骨には赤色顔料の付着は認められず、骨配列の乱れも認められなかつた。骨化後、洗骨が行われ、赤色顔料を塗布する方式が当時、一般的であったとすると、1号人骨が骨化する以前に、本横穴墓は繼承者がいなくなってしまったことを物語っているのかもしれない。いずれにせよ、本横穴墓の石棺の人骨は骨の検出状況から判断して、2号人骨が先に埋葬され、1号人骨が最後の埋葬であったものと考えられる。

3. 3号横穴墓

本横穴墓には3体の人骨が埋葬されていた。玄室の奥1/3には櫻床があり、その上からは頭を玄室右側に置き足を玄室左側に向かって伸展仰臥位で埋葬されていた人骨が検出されている（1号人骨）。玄室床の中1/3には須恵器床があり、その上には頭を玄室左側に置き足を玄室右側に向かって伸展仰臥位で埋葬された人骨が検出されている（2号人骨）。玄室の前方1/3の床面には櫻や須恵器片を欠く。

この部分から検出された人骨を3号人骨とする。この人骨は伸展仰臥位で埋葬されたものと思われ、交連状態の骨も認められるが、骨配列が乱れている部分もある。またその一部は2号人骨の上に重なっていた。

1) 1号人骨

骨はほぼ交連状態を保った状態で検出されている。

頭蓋骨は頭頂部を上にして、上・下顎骨は咬合状態で検出されており、骨化後人为的に配置されたものと思われる。

頭蓋骨は右眼窩部の外側と顎面頭蓋の左側を欠くがほぼ完形である。

本頭蓋の前頭部から頭頂部にかけて赤色顔料の付着が認められた。その色調から判断して顔料はベンガラと思われる。

頭蓋骨の三主径は頭蓋最大長が172mm、頭蓋最大幅が133mm、バジョン・ブレグマ高が123mmで、示数を求めるとき頭蓋長幅示数は73.3、頭蓋長高示数は71.5、頭蓋幅高示数は92.5となり、頭型はmeso-, meso-, metriokran (中・中・中頭) に属している。

前頭部はよく膨隆している。眉弓は平坦で、眉間の突出は軽度である。乳様突起は小さい。後面のレリーフは比較的粗造である。後頭部にはインカ骨が認められる。

三上縫合をみると、外板では冠状縫合はやや癒合閉鎖が進んでいるが、矢状縫合と人字縫合は未閉鎖である。内板では一部の縫合で癒合閉鎖をきたしているようである。骨口蓋縫合をみると、切歯縫合は破損があって、正確に縫合の消失状況を把握できないが、外側部では癒合閉鎖して縫合が消失しているようである。正中口蓋縫合の口蓋骨部の後方1/2は癒合閉鎖をきたしており、横口蓋縫合の外側1/3は癒合している。

上頸歯では前歯を欠く。上・下顎ともに、一部の歯牙は遊離歯として検出された。歯牙の咬耗は比較的進んでおり、Martinの1~2度である。歯式は以下に示す通りである。

M 3	M 2	M 1	P 2	P 1	C	脱	破	破	破	脱	M 1	M 2	M 3		
脱	M 2	M 1	P 2	P 1	C	I 2	I 1	I 1	I 2	C	P 1	P 2	M 1	M 2	M 3

椎骨では、第1、第2頸椎のほかに6個の頸椎、2個の胸椎、1個の腰椎、仙骨が検出されている。頸椎は、頭蓋骨の下から交連状態を保って検出されている。仙骨の第1横線は閉鎖したばかりのようである。

上肢帯の骨は、左右の肩甲骨、左右の鎖骨が原位置から検出されている。

主要上肢骨は上腕骨、橈骨、尺骨が左右ともに検出されている。

下肢帯の骨では、左右の寛骨が原位置をとどめている。寛骨は全体的に小さいが、大坐骨切痕は大きく、耳状面の下に妊娠溝が認められる。

主要下肢骨では、大腿骨、脛骨、腓骨が左右ともに検出されている。大腿骨と脛骨は脆弱であったため、取り上げ時に最大長を計測し、左大腿骨38.3cm、右大腿骨38.5cm、左脛骨31.0cm、右脛骨31.3cmの値を得た。これらの計測値からPearson式を用いて身長推定を行うと約153cmと算定された。縫合の閉鎖状況や骨の形態学的特徴から判断して、本人骨は壮年女性であると考えられる。

2) 2号人骨

人骨はほぼ交連状態を保った状態で検出されている。

頬蓋骨は左右の顎骨弓を欠き、顔面頭蓋の左右外側部と鼻部に部分的に破損が認められるが、ほかはほぼ完形である。

頭蓋骨の三上径は頭蓋最大長が193mm、頭蓋最大幅が140mm、バジオン・ブレグマ高が136mmと計測され、示数を求める頭蓋長幅示数は72.5、頭蓋長高示数は70.5、頭蓋幅高示数は97.1となり、頭型はdolicho-、meso-、metriokran（長・中・中頭）に属している。

前頭部の膨隆は軽度で、なだらかに頭頂骨に続いている。眉弓の突出は著明で、眉間も大きく膨隆している。乳様突起はよく発達しており、表面は粗造である。また、項面のレリーフも粗造である。三上縫合をみると、外板では冠状縫合は融合閉鎖をきたしているが、矢状縫合や人字縫合は未閉鎖である。内板ではほぼ融合閉鎖が完了しているようである。口蓋縫合をみると、切歯縫合は消失しており、正中口蓋縫合口蓋付部では融合閉鎖が進んでおり、わずかに縫合が残っているのみである。横口蓋縫合もかなり融合閉鎖が進んでいる。

下顎骨は頑丈で、すべての歯牙が剥離している。歯牙の咬耗はかなり進んでおり、咬耗度はMartinの2~3度である。歯式は次の通りである。

M 3	M 2	M 1	P 2	P 1	脱	脱	I 1	I 2	C P 1	P 2	M 1	M 2	M 3	
M 3	M 2	M 1	P 2	P 1	C	I 2	I 1	I 1	I 2	C P 1	P 2	M 1	M 2	M 3

椎骨は頸椎～胸椎の部分は風化が進んでおり、原形をとどめないものが多い。腰椎は第1～第5腰椎が交連状態で検出されたが、風化が著しく細片化している。

上肢骨の骨では、右肩甲骨と右鎖骨がほぼ原位置から検出されているが、左側は検出されていない。

主要上肢骨は右上腕骨、左右の桡骨、左右の尺骨が検出されているが、脆弱化が著しく、完形のものはない。

下肢骨の骨では、左右の寛骨がほぼ原位置から検出されている。大坐骨切痕は小さく、男性骨であることは明らかである。

主要下肢骨は左右の大腿骨、脛骨、腓骨がすべて原位置から検出されている。膝関節を構成している骨が交連状態で検出されているほか、足根骨、中足骨などの足の骨も原位置から検出されている。

主要四肢骨は近位端または遠位端を欠き、骨最大長の計測は不可能であった。

本人骨は縫合の閉鎖状況や歯牙の咬耗度、骨の形態学的特徴から判断して、壮年後半～熟年前半の男性であると推定される。

3) 3号人骨

頭部を玄室右前方に置き、下肢を2号人骨の頭方に伸ばし、大腿骨の遠位端は2号人骨の右上半身の上に重なるようにして、伸展仰臥位で埋葬されていたと思われる。頭部から大腿骨にかけては骨はほぼ原位置を保っているが、下腿の骨は玄室左前方から検出されており、膝関節の部位で骨配列に不連続性が認められる。また、右脛骨遠位端の上には瓶がのっている。

頭蓋骨は保存状況は極めて悪く、骨片と歯牙が若干残っているのみである。

検出された歯牙には上顎歯では大臼歯2本、小白歯4本、側切歯1本、中切歯2本で、下顎歯では大臼歯6本、小白歯4本、中切歯1本が検出されている。また上顎か下顎か不明の犬歯が3本検出されている。これらの歯牙はあまり咬耗しておらず、Martinの1~2度である。

椎骨、上肢帶の骨は検出されていない。下肢帶の骨では寛骨が左右ともに検出されているが保存状況が悪く、性別は判定不可能である。

上要上肢骨は右側の上腕骨、桡骨、尺骨が検出されているが、左側は検出されていない。

上要下肢骨では左右の人腿骨、左右の脛骨、左右が不明の腓骨が1個検出されている。

大腿骨の近位端と遠位端はともに木骨化である。骨取り上げ時に計測した大腿骨の最大長は右側42.5cm、左側41.5cmであり、これからPearson式を用いて身長を推定すると、約160cmと算定された。本人骨は歯牙の崩壊状況や骨端の閉鎖状況から判断して、15歳前後の個体と思われる。

4) 検出人骨から見た埋葬順位と小考察

3体の人骨が埋葬されており、それぞれの屍床が縫床、須恵器床、上床と異なっていることからみても、それぞれの人骨は埋葬時期が異なるのは明らかである。

1号人骨、2号人骨とともに上・下顎が咬合状態にあり、先に1号墓で考察したように、これらの人骨の頭蓋は骨化後、人為的に動かされ、上下を咬合させて原位置に埋葬したものと考えられる。常識的には、玄室の奥から埋葬していくものと考えられ、1号人骨が最初の埋葬となる。2号人骨の須恵器床が1号人骨の縫床の上に重なっていた事実も、1号人骨の埋葬が2号人骨に先立って行われたことを物語っている。

3号人骨の大脚骨遠位端が2号人骨の胸部に載っていることから考えると、3号人骨の埋葬が最後の埋葬であったことは間違いない。不自然なのは、膝関節で骨配列に不連続が認められる点と、大脚骨遠位端が2号人骨の胸部の上に載るようにして検出されたことである。もともと2号人骨と頭足方向を逆にして平行に埋葬されていた3号人骨が、骨化後動かされたというひとつの解釈がなりたつ。3号人骨の脛骨の部分に瓶が載っていたことや、玄室入口の部分には何も検出されていない空間があるが、3号人骨の骨化後、再び玄室を開いて、何らかの儀式が行われ、その時の供獻物を玄室入口に置く必要性から3号人骨が故意に動かされたと考えると、3号人骨の奇異な配列にも説明がつくかもしない。

4. おわりに

本横穴墓から検出された人骨は、保存が比較的良好で、今後他地域との人類学的な比較検討を行う際に貴重な資料となるものと考えられる。

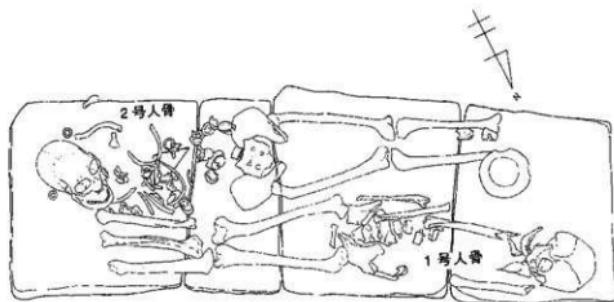
稿を終えるにあたり、財団法人 松江市教育文化振興事業団の関係各位、とりわけ横穴について考古学的な側面から数々の御教示をえた曾田辰雄氏、人骨の取り上げにご協力いただいた落合昭久氏に感謝申し上げる。

図版1

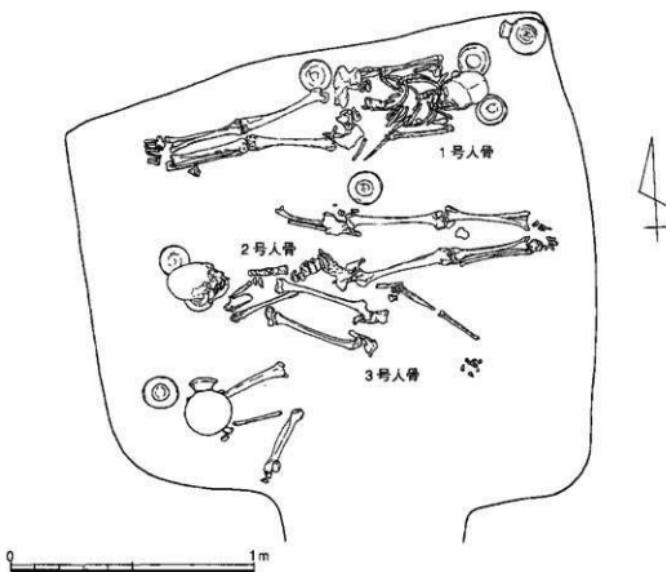
- 1 a ; 頭蓋正面観 (1号横穴墓 1号人骨)
- 1 b ; 頭蓋側面観 (1号横穴墓 1号人骨)
- 1 c ; 頭蓋上面観 (1号横穴墓 1号人骨)
- 2 a ; 頭蓋正面観 (1号横穴墓 2号人骨)
- 2 b ; 頭蓋側面観 (1号横穴墓 2号人骨)
- 2 c ; 頭蓋上面観 (1号横穴墓 2号人骨)

図版2

- 1 a ; 頭蓋正面観 (3号横穴墓 1号人骨)
- 1 b ; 頭蓋側面観 (3号横穴墓 1号人骨)
- 1 c ; 頭蓋上面観 (3号横穴墓 1号人骨)
- 1 d ; インカ骨を有する頭蓋後面観 (3号横穴墓 1号人骨)
- 2 a ; 頭蓋正面観 (3号横穴墓 2号人骨)
- 2 b ; 頭蓋側面観 (3号横穴墓 2号人骨)
- 2 c ; 頭蓋上面観 (3号横穴墓 2号人骨)



袋尻1号横穴墓出土人骨



袋尻3号横穴墓出土人骨

	1号墓		3号墓	
	1号人骨	2号人骨	1号人骨	2号人骨
頭蓋				
1 頭蓋最大長	173	171	172	193
8 頭蓋最大長	134	127	133	140
17 バジオン・ブレグマ高	135	134	123	136
8/1 頭蓋長幅示数	77.5	74.3	77.3	72.5
17/1 頭蓋長高示数	78.0	78.4	71.5	70.5
17/8 頭蓋長高示数	100.7	105.5	92.5	97.1
9 最小前頭幅	90	89	92*	97
10 最大前頭幅	109	108	106*	127
5 頭蓋底長	94	101	94	100
11 兩耳幅	112	120	117	130
12 最大後頭幅		101	108	112
13 乳突幅			94	116*
7 大後頭孔長			31.5	39.5
16 大後頭孔幅			26	30
16/7 大後頭孔示数			82.5	75.9
23 頭蓋水平周		489	495	536
24 橫弧長		285	285	302
25 正中矢状弧長			362	377*
顔面頭蓋				
40 顔長		96		97
43 上顎幅		98		
46 中顎幅		96		
48 上顎高		63		79*
48/46 上顎示数(V)	19	65.6		
50 前眼窩間幅		17		
44 兩眼窩幅		93		
50/44 眼窩間示数		18.3		
51 眼窩幅(右)		38		
眼窩幅(左)		37		
52 眼窩幅(右)		34.5		
眼窩幅(左)		34		
52/51 眼窩示数(右)		90.8		
眼窩示数(左)		91.9		
54 鼻幅	23*	24.5		
55 鼻高	44	46.5	45	47*
54/55 鼻示数	52.3	52.7		
57 鼻骨最小幅	5	5	8*	
60 上頸齒槽長		51		56
61 上頸齒槽幅	60	60		69
61/60 上頸齒槽示数		117.6		123.2
下顎骨				
65 下顎小頭幅		125*	104	
66 下顎角幅			94*	
68 下顎長		104	102	108*
69 オトガイ高	28	30	28	33
70 下顎枝高(右)			58	-
71 下顎枝幅(左)			35	

*は推定値

	左右	1号墓				3号墓			
		1号人骨	2号人骨	1号人骨	2号人骨	3号人骨	右	左	右
上腕骨									
6	中央最小径					59			
7	骨体最小周			52					
橈骨									
3	骨体最小周			33					
4	骨体横径	14.2		13.1	12.4	14.4			
5	骨体矢状径	11.1		8.4	9	11.5			
5/4	骨体断面示数	78.2		64.1	72.6	79.9			
尺骨									
3	骨体最小周	35				37			
11	骨体矢状径	13.4		9.9	12.4				
12	骨体横径	16		14	17				
大腿骨									
1	大腿骨最大長	407	377	379	429*	435			
2	自然位全長	403			430	429			
6	骨体中央矢状径	27	23	24	24	22.4	25.8	27	26.6
7	骨体中央横径	23	22	25	24.5	22.5	23.6	26	23
8	骨体中央周	81		77	77	73	72.5	82	80
9	骨体上横径	27	24			29.6	29.8	32	28
10	骨体上矢状径	22				21.3	20.5	24	22
8/2	骨厚示数	20.1					19.1	18.6	
6/7	骨体中央断面示数	117	0	92	98	107	94.9	99.2	117
10/9	上骨体断面示数	81.5			72	68.8	75	78.6	116
脛骨									
1a	脛骨最大長	338*	336*						
8	中央最大矢状径		26						
8a	榮養孔位最大径		29	27.5	27.6	27.3	26.9	34.3	34.4
9	中央横径	18.3	19						
9a	榮養孔位横径	20	21.4	17.5	16	18.4	19	25.3	27
10	骨体中央周	70*	73						
10a	榮養孔位周	80*	80	72	72	74	73	96	99
10b	骨体最小周	67	66		62	63	81	84	
9/8	中央断面示数		73.1						
9a/8a	榮養孔位断面示数		73.8	63.6	58	67.4	70.6	73.8	78.5

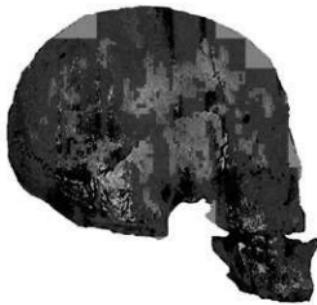
*は推定値



1a



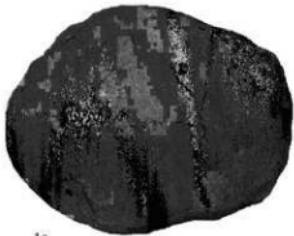
2a



1b



2b

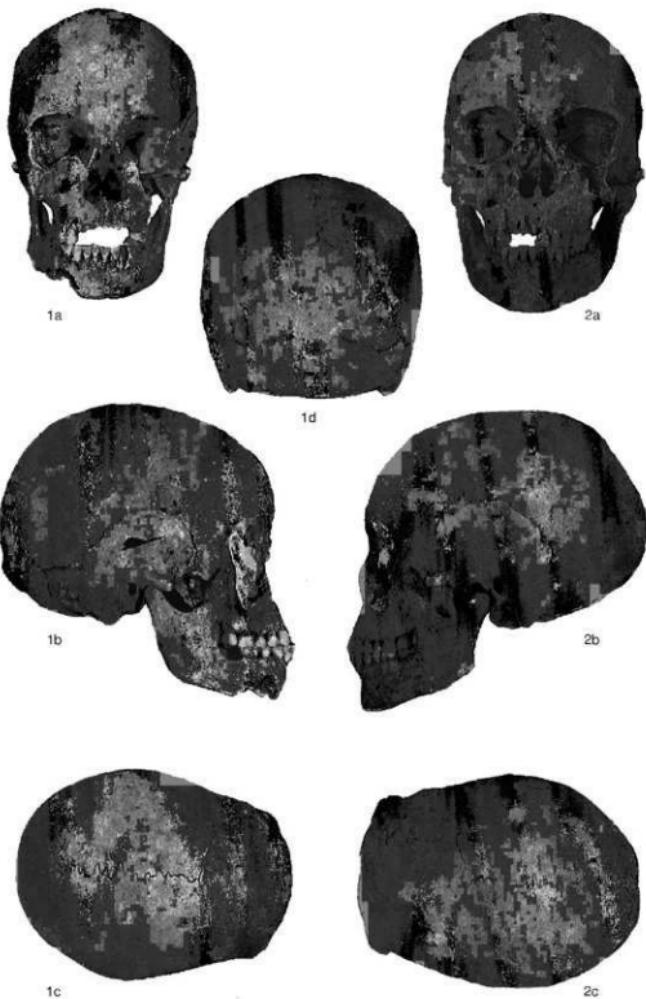


1c



2c

袋房 1 号横穴墓出土人骨



袋壳 3 号横穴墓出土人骨

図 版

図版1 (袋尻1号墳)



石棺検出状況(1)



石棺検出状況(2)



石棺検出状況(3)

図版2 (袋尻1号墳)



石棺蓋石除去後



主体部完掘状況



土層堆積状況

図版3 (袋尻1号墳)



SD-01 完掘状況



SD-02完掘状況



1号墳完掘状況
(南から)

図版4 (袋尻2号墳)



2号墳調査前全景



表土除去後

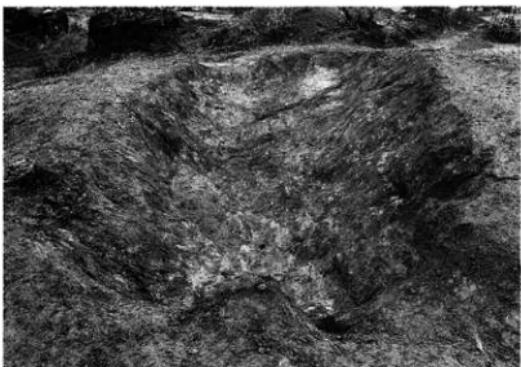


主体部検出状況

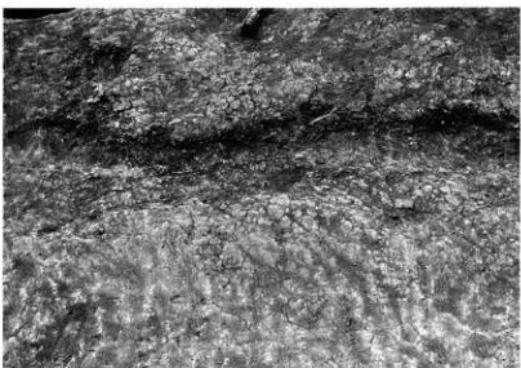
図版5 (袋尻2号墳)



主体部土層堆積状況



主体部完掘状況

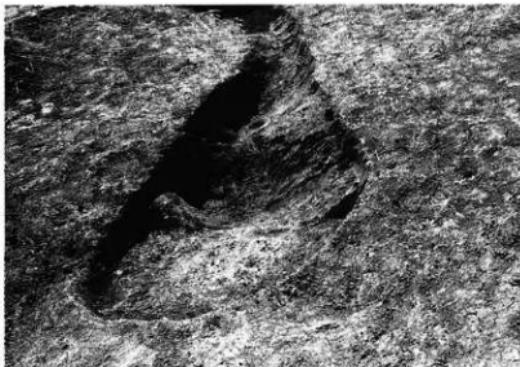


周溝完掘状況

図版6 (袋尻 2号墳)



SD-01、SK-02、03
完掘状況



SD-02完掘状況



SK-02完掘状況

図版7 (袋尻2号墳)



SK-02遺物出土状況



SK-02完掘状況



2号墳調査後全景

図版8 (袋尻 3号墳)



3号墳調査前全景



主体部検出状況



主体部土層堆積状況

図版9（袋戻3号墳）



主体部完掘状況



北側填丘土層堆積状況



3号墳調査後全景

図版10 (袋尻4号墳)



4号墳
調査前全景
(南より)



4号墳
調査後全景
(南より)



4号墳
主体部検出状況
(西より)

図版11 (袋戻 4号墳)



4号墳
主体部検出状況
(北東より)



4号墳
土器棺 I 大壺内
鉄剣出土状況

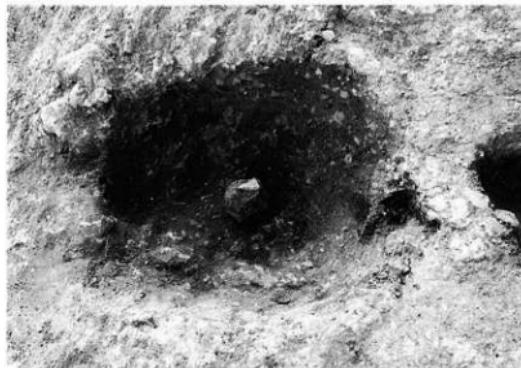


4号墳
土器棺 I 検出状況

図版12 (袋戻 4号墳)



4号墳
土器棺II検出状況



4号墳
土壤(SK-01)
検出状況



4号墳
土壤(SK-02)
検出状況

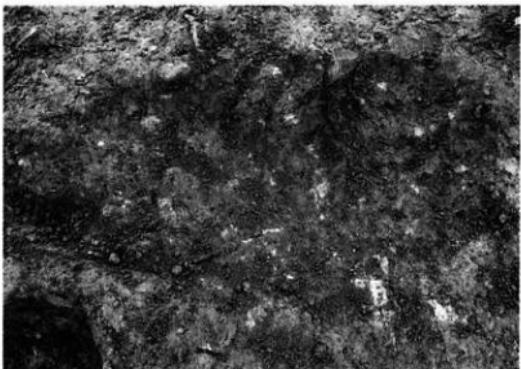
図版13 (袋尻5号墳)



5号墳調査前全景



主体部検出状況



主体部完掘状況

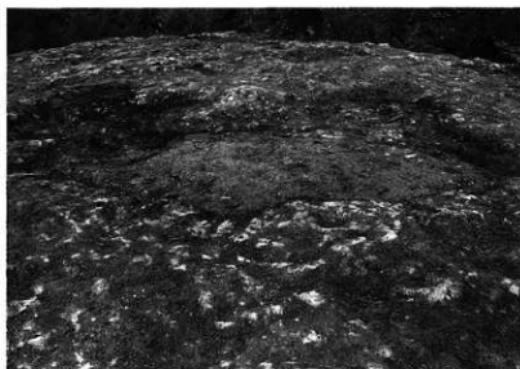
図版14 (袋尻 6号墳)



6号墳調査前全景

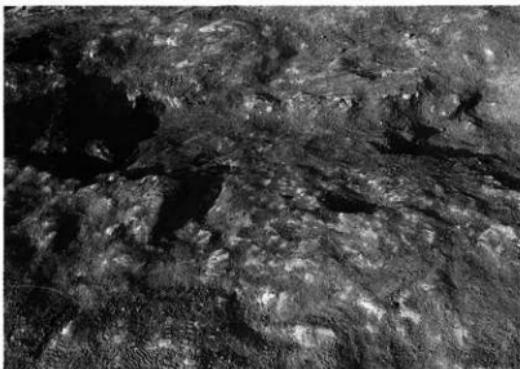


表土除去後



主体部検出状況

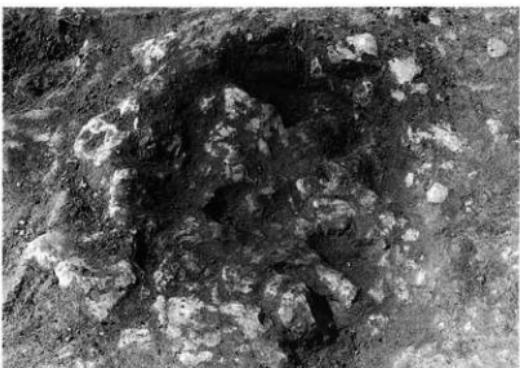
図版15 (袋尻6号墳)



主体部完掘状況



SD-01完掘状況



SK-01完掘状況

図版16 (袋尻6号墳)



SK-02完掘状況



SK-03完掘状況



6号墳調査後全景

図版17 (袋尻7号墳)



7号墳調査前全景



表土除去後



第1主体部
完掘状況

図版18 (袋尻7号墳)



第1主体部土層堆積状況



主体部土層堆積状況
(左・第1主体部)
(右・第2主体部)

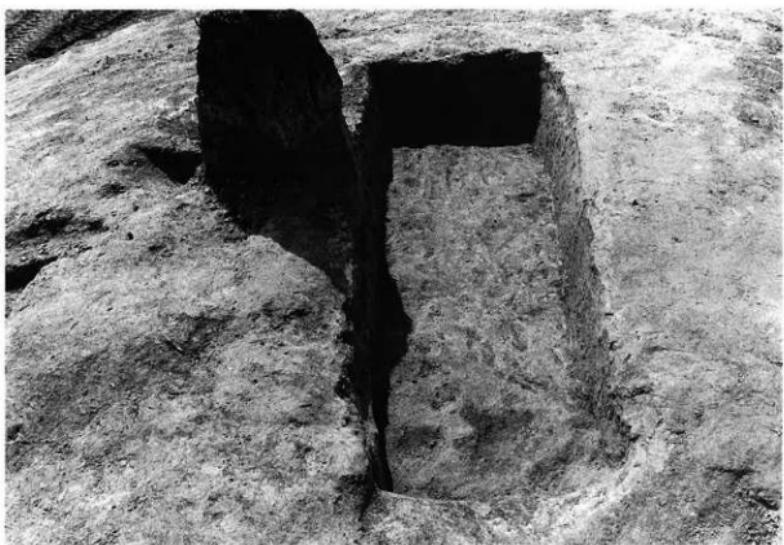


第2主体部完掘状況

図版19（袋尻 8号墳）



8号墳主体部土層堆積状況

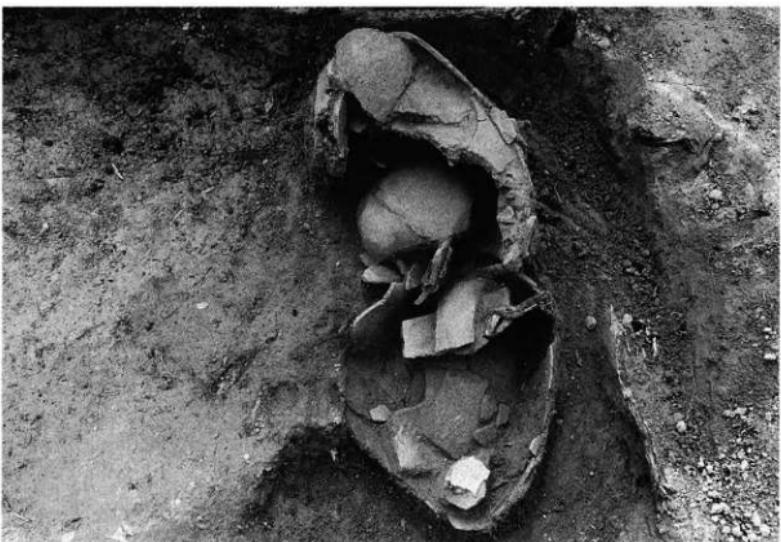


8号墳主体部完掘状況

図版20（袋尻 8号墳）



8号墳1号土器検出状況

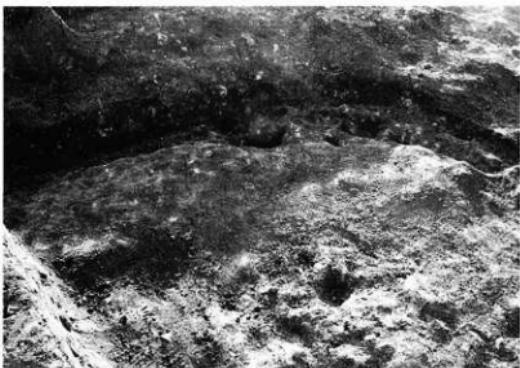


8号墳2・3号土器検出状況

図版21 (袋尻A遺跡)



図版22 (袋尻B遺跡)



B遺跡
SI-01完振状況



土壤土層堆積状況



SI-02完振状況